THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋期大附録號

第廿四年 第十號

(247)

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

國民文庫

國民文庫は歴代文學の精華を拔き、蒐めて三十六册とし、嚴正なる校訂は以て各書の定本たるべく、高雅なる装釘は以て書齋客室の一大美觀たることを期するもの也

本會曩に會員の數を三千名に限りて募集せるに、幸に江湖の賛同を得て、滿員締切後、尙引續き多數の入會希望者あり、册發行の今日、益其數を增加するの盛況を呈せり。然れども豫の宣言の如く、校訂、印刷、製本等に於て、此類のものに殆んど先例なき程の注意を加へんが爲に設備の關係上、定員以外の分は一切拒絶し居たるも、此の如くにして江湖の需要に背くは、固より吾等の素志に悖れる所なり。仍て玆に設備を整へ、更に三千名を限りて募集す。請ふ此好期を逸せざらんことを。



第二回會員募集

●規定書及装釘内容見本　御入用の方は端書にて直接本會へ申込ありたし

●入會締切來る十月廿日限

△略規――全篇三十六册（非賣品にして會員にのみ頒つ）――會期滿二ヶ年――會費毎月金貳圓廿錢但送本料は別に申受く――入會金金二圓（但最終の會費中より控除す）――配本は二ヶ月に三册の割（一册の代價金一圓四十六錢餘に當る）――製本は中村不折装釘意匠菊判總クロース天金紙數平均約八百頁

東京市神田區小川町壹番地（電話本局七百三十二番）（振替口座東京一八五七二番）國民文庫刊行會

（滿員に達するときは期限に拘らず入會を謝絶することあるべし）

取次所　東京東京堂、上田屋、至誠堂、林平、大阪杉本

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新古書籍取次販賣

勉強迅速取次

地方販賣書籍

書籍雜誌類は何等の種類を問はず

地方讀書家諸君の御便利を計り新古に係らず勉強取次仕り候

新本割引

新本は總て定價通りにて郵送料は弊店の負擔と致し候、但し原書及醫書は割引致さず候

古本販賣

古本は價格の不同有之候間一應御照會の上御注文被下度御照會の節は往復端書又は返信用郵劵封入にて願上候

御注文便法

御注文の節は著名、書名、定價、發行所の御記入を願上候

御送金の節は振替口座にて規定の登記料貳錢増にて東京壹七壹七壹番東條書店宛に御拂込被下候はゞ途中盗難、紛失等の恐れ無く至極便利に御座候

東京市神田區南神保町拾五番地
東條書籍店
振替口座東京壹七壹七壹番

赤手空拳以て巨萬の富を積むは實業家也。本年四月東京諸新聞に廣告し百圓以內の少資本にて成功し得べき考案を募集し合計五十餘種を摧拔し之を本書第一版として發行せし、大好評を博し忽略一萬部を盡せり。

實業成功法

一冊送料共金卅四錢切手代用卅八錢

玆に於て去九月中又々新聞廣告を以て如何せば資金五百圓にて大成功を得べきかの懸賞募集を決行し更に之を本書に增補して第十版を發行せり實業界に大成功を得んとせば速に本書を讀まざるべからず。

禮狀來る 本書にて利益を得たりとの禮狀續々來る。これ本書の實際的有益なるを證す。眞に一字千金の良書也。

成功の秘訣

洋裝送料共金廿七錢切手代用三十錢

成功の秘訣は近來稀に見る良書也。教育家、軍人、官吏、學者、實業家、醫士、文士、美術家、音樂家、農業家は必ずこれを熟讀玩味せよ。古今東西の名士大家百餘名の教訓、實話、格言等は能く諸君が各種の志望を達せしむべく、其の道を悟らしむるに充分なり。

小學卒業 立身案內

一冊送料共廿七錢切手代用三十錢

目次

富家の子弟は如何にして立身すべきか▲學資なき者は如何にして成功すべきか▲如何せば小學卒業にて最多くの月俸を得べきか▲小學卒業にて入學の官費學校▲最よき苦學の方法▲少額の學資にて足る有望學校▲試驗及第秘訣▲其他…………

大好評 第十八版發行、本書に記せるものは毎月必ず數種の募集あり故に小學校卒業の者及中學生は勿論、三十歳前後にて官廳、會社、工場等に就職せんとする者も亦速に本書を讀め、

◎發行所 東京神田錦町三丁目 振替東京一六一八番 **學友社**

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

繪本 南總里見八犬傳

▼定價金拾圓特價金七圓(小包料金十六錢)▲

全部製本出來

全四册菊版背皮洋装金文字入箱入美製
紙數約三千五百頁
挿畫六百餘頁

期限中と雖五千部を超過する時は謝絶す
見本は郵税二錢を添へ御申込あれば送附す
御注文の際は本誌廣告による旨御添記下され度候

▼特賣期限明治四十二年十月卅一日▲

東京市本町三 金港堂書籍株式會社 振替八八一五

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

特價販賣

▲申込期限 明治四十二年 十一月十日

▲十二月十日より着金順に送本

故飯田武郷先生著

再版 日本書紀通釋

總クロース製美本 全六冊（本文五冊 索引一冊）

定價拾五圓

紙數 四千百餘頁

特價 一回拂八圓 十一月十日迄に全額拂込み

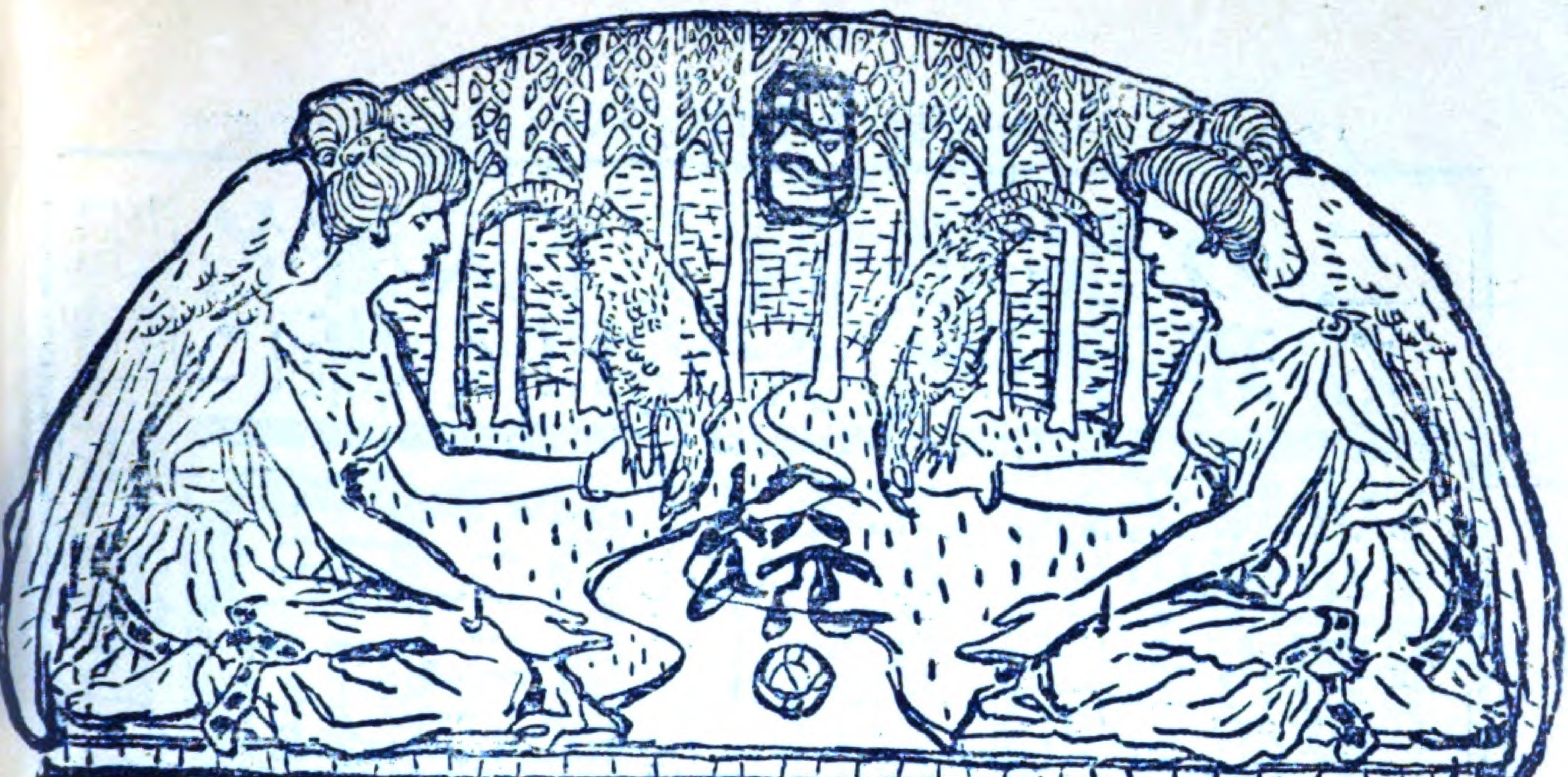
四回號九圓 十月より十二月迄毎月貳圓五拾錢、明年一月壹圓五拾錢拂込、全額拂込の上送本

送料 東京市内八錢、内地七拾貳錢 臺灣、樺太、淸韓壹圓拾錢

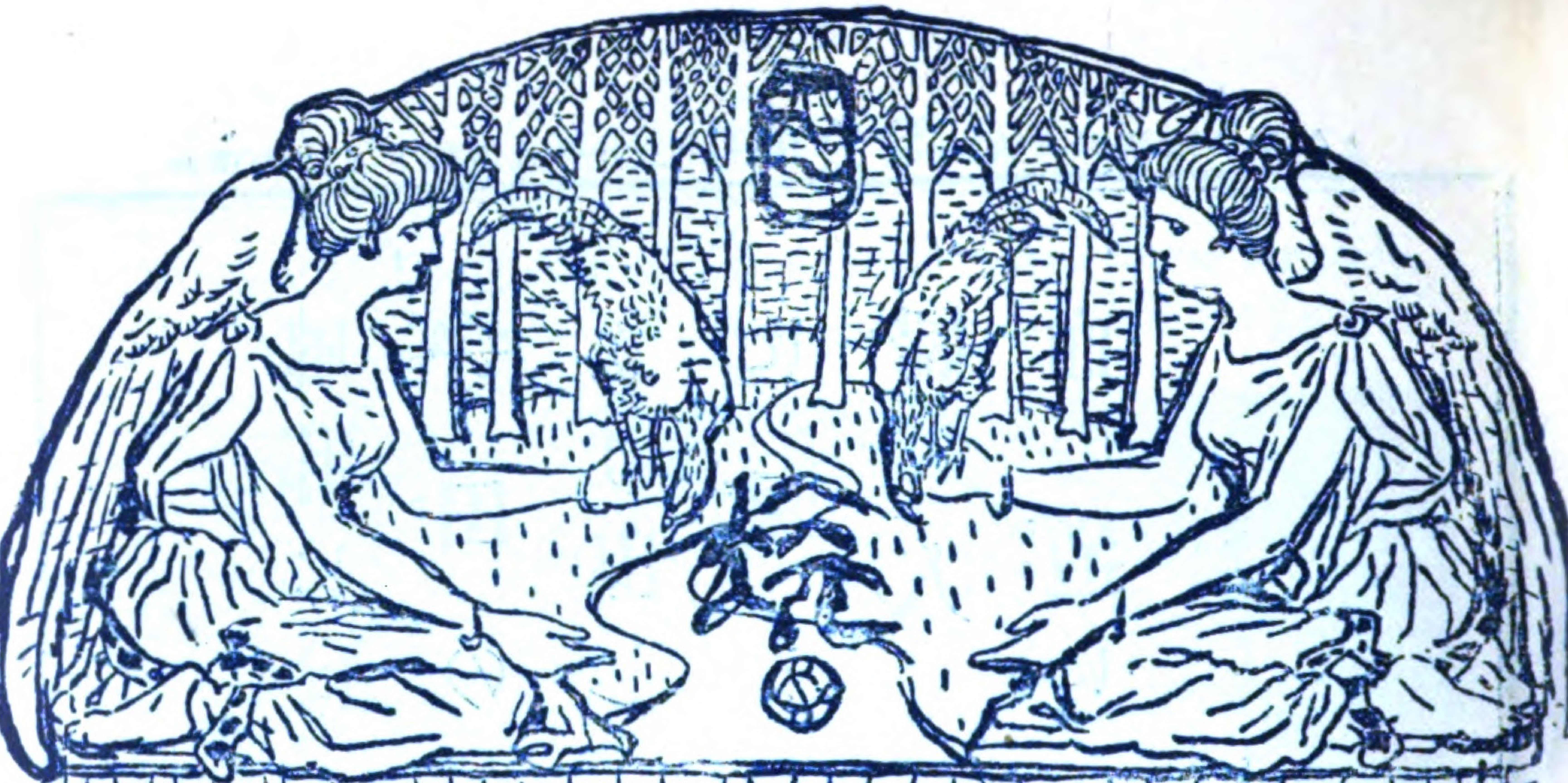
▲初版購入者にして索引のみ御入用の方は特價七拾錢 送料市内四錢 其他は八錢

『日本書紀』は我國古代史の隨一なり。祖宗建國の由來、我國特有の神話傳說、性情、道德、政治、武士道、産業、風俗、宗教、藝術、言語等、是等萬般の起原と沿革とを知らんとする江湖の讀書家は勿論、政治家、哲學家、歷史家、敎育家、考古家、神道家、文學美術家等、一に之に依つて古代的智識と趣味とを養はざるべからず。從來之が明確なる註釋の書に乏しかりしが、明治國文界の碩學、故飯田先生が、畢生の考覈を經て、最も精緻に之が一大釋義を完成せられたる此の『日本書紀通釋』出づるに及んで、引證の該博、解釋の的確、以て千古の疑義を一掃し、學界空前の珍籍と稱せらる。近來古代日本研究の新機運と共に、本書を渴望せらる諸君遽に激増せるを以て茲に索引を加へて再版に附し、汎く一般の高需に應ぜんとす。此の機會を逸せず、乞ふ速に御申込あれ——見本 申込次第進呈

▲東京神田錦町一丁目（振替東京四九九一番 電話本局二四三八番）明治書院 ＝ 東京日本橋區數寄屋町（振替東京二三七一番 電話本局五三一番）六合館



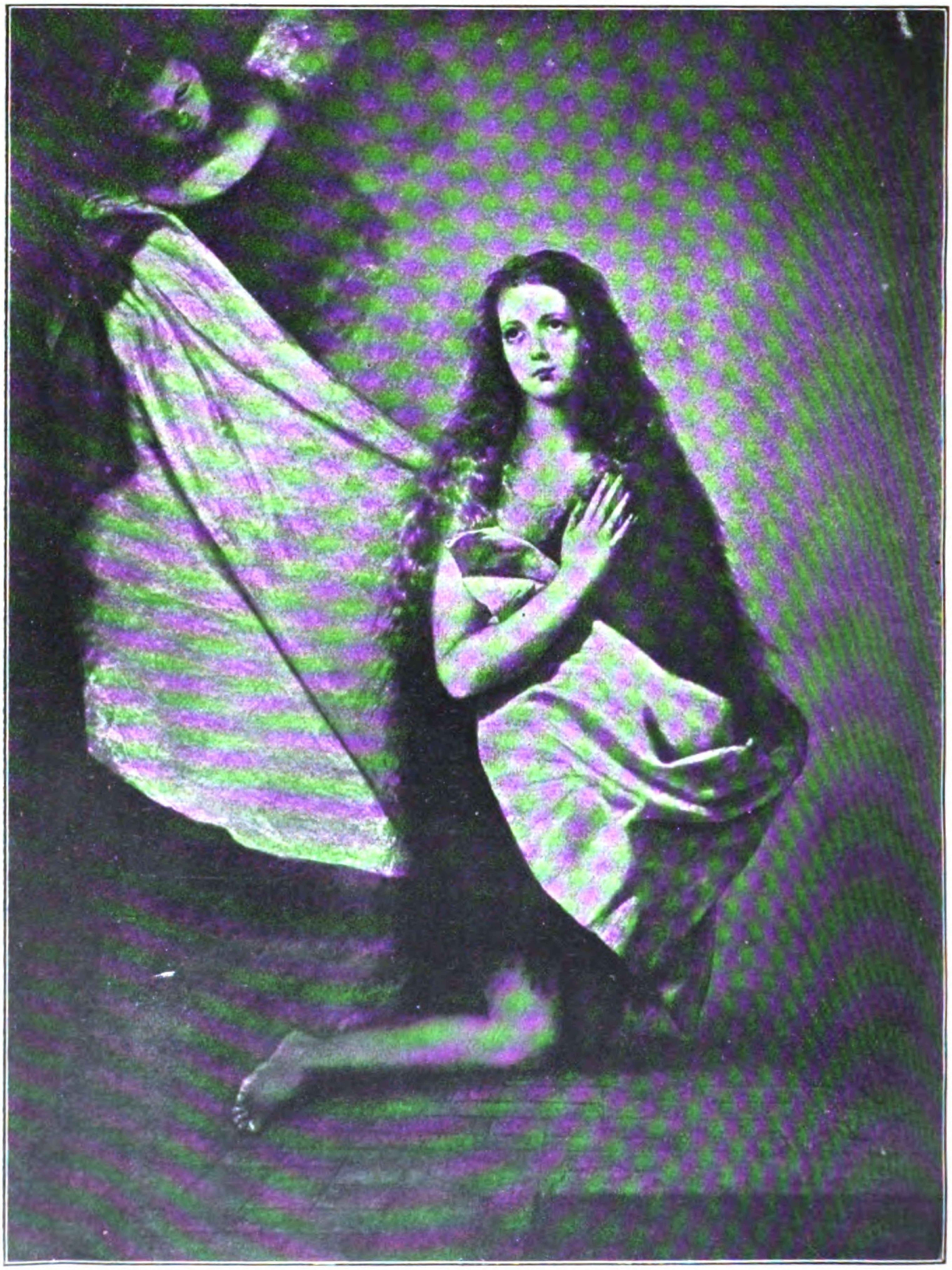
中央公論第二十四年第拾號秋期大附録號目次



風邪には
守田の
ふり出し
に限る
婦人
血の道に
よし



S. Mary of Egypt praying before her own Grave; an Angel prepares to fold her Shroud about her.



BY JOSEF RIBERA



第二十四年第拾號
第二百四十七號
秋期大附錄號

日清關係の善後

(一)

所謂安奉線問題に就て、日本政府の執れる自由行動なるものは、底意十分に強くして、多くの場合に開戰の布告と同一効果を生ずべき性質を有す、露國陸軍が當時日清の開戰を豫想して、北滿洲に在る守兵を一二動かしたりし形迹ある、また素より其の所たりと言はざる可らず、但だ清國に戰ふの力なかりし爲めに、幸ひにして國交破裂に至らざりしのみ

日本政府が斯く危險なる政略に出てたる結果は、表面に於て寧ろ良好と見るべきものなきにしもあらず、清國が狼狽して俄かに省悟し、鋭意して懸案の解決に力めたるは其の一也、從來の如き非理不法な

る主張を固執せず、互讓の精神を明示したるは其の二也

現に八月十九日を以て安奉線問題の骨子を決定し、之を奉天に於ける錫、程、小池の協議に移すと同時に、北京に於て那桐、梁敦彥、伊集院の間に交涉を繼續し、竟に九月四日を以て調印を終れる協約は下の如し、其の間島問題に關する協約に曰く

大日本國政府及大淸國政府は善隣の好誼に鑑み圖們江が淸韓兩國の國境たることを互に確認し並妥協の精神を以て一切の國法を商定し以て淸韓兩國の邊民をして永遠に治安の慶福を享受せしめむことを欲し玆に左の條款を訂立せり

第一條　日淸兩國政府は圖們江を淸韓兩國の國境とし江源地方に於ては定界碑を基點とし石乙水を以て兩國の境界と爲すことを聲明す

第二條　淸國政府は本協約調印後成るべく速に左記の各地を外國人の居住及貿易の爲開放すべく日本國政府は此等の地に領事館若くは領事館分館を酌設すべし開放の期日は別に之を定む

龍井村　　弓子街　　頭道溝　　百草溝

第三條　淸國政府は從來の通り圖們江北の墾地に於て韓民の居住を承准す其の地域の境界は別圖を以て之を示す

第四條　圖們江北地方雜居區域內墾地居住の韓民は淸國の法權に服從し淸國地方官の管轄裁判に歸す淸國官憲は右韓民を淸國民と同樣に待遇すべく納稅其の他一切行政上の處分も淸國民と同樣たるべし

右韓民に關係する民刑事の一切の訴訟事件は淸國官憲に於て淸國の法律を按照し公平に裁判すべく日本國領事官又は其の委任を受けたる官吏は自由に法廷に立會ふことを得但し人命に關する

重案に付ては須らく先づ日本國領事官に知照すべきものとす日本國領事官に於て若法律を按照せずして判斷せる廉あることを認めたるときは公正の裁判を期せむが爲別に官吏を派して覆審することを淸國に要求することを得

第五條　圖們江北雜居區域內に於ける韓民所有の土地家屋は淸國政府は淸國人民の財產同樣に完全に保護すべし又該江沿岸には場所を撰び渡船を設け雙方人民の往來は自由たるべし且し兵器を携帶する者は公文又は護照なくして境を超ゆるを得ず雜居區域內產出の米穀は韓民の搬出を許す尤も凶年に際しては倘禁止することを得べく柴草は舊に依り照辦すべし

第六條　淸國政府は將來吉長鐵道を延吉南境に延長し韓國會寧に於て韓國鐵道と連絡すべく其の一切の辨法は吉長鐵道と一律たるべし開辦の時期は淸國政府に於て情形を酌量し日本國政府と商議の上之を定む

第七條　本協約が調印後直ちに効力を生ずべく統監府派出所並文武の各員は成るべく速に撤退を開始し二個月を以て完了すべし日本國政府は二個月以內に第二條所開の通商地に領事館を開設すべし

右證據として下名は各其の本國政府より相當の委任を受け日本文及漢文を以て作成せる各二通の本協約に記名調印するものなり

明治四十二年九月四日
宣統元年七月二十日

大日本特命全權公使　伊集院彥吉
大淸國欽差外務部尙書會辦大臣　梁敦彥

また間島以外、即ち主として滿洲に關する協約に曰く

大日本國政府及大淸國政府は滿洲に於て雙方共に關係を有する事項を明確に議定し將來の誤解を

防ぎ以て兩國善鄰の關係を益鞏固にせむことを希望し茲に左の條欵を訂立せり

第一條　清國政府は新民屯法庫間の鐵道を敷設せむとする場合には豫め日本國政府と商議すること に同意す

第二條　清國政府は大石橋營口枝線を南滿洲鐵道枝線と承認し南滿洲鐵道期限滿了の際一律清國に交還すること竝該枝線の末端を營口に延長することに同意す

第三條　日清兩國政府は撫順及煙臺兩所の炭鑛に關し利平商定すること左の如し

甲、清國政府は日本國政府が上記兩炭鑛採掘權を有することを承認す

乙、日本國政府は清國の一切の主權を尊重し並上記兩炭鑛の採掘に對し清國政府に納稅することを承諾す右の稅率は清國他所の石炭に對する最急の稅率を標準とし別に協定すべし

丙、清國政府は上記兩炭鑛の採炭に對し他所の石炭に對する最急の輸出稅率を適用することを承諾す

丁、炭鑛の區域並一切の細則は別に委員を派して協定すべし

第四條　安奉鐵道沿線及南滿洲鐵道幹線沿線の鑛務は撫順及煙臺を除き明治四十年即ち光緒三十三年東三省督撫が日本國總領事と議定せる大綱を按照し日清兩國人の合辨と爲すべく其の細則は追て督撫と日本國總領事との間に商定すべし

第五條　京奉鐵道を奉天城根に延長することは日本國政府に於て異議なきことを聲明す其の實行の辨法は地方に於ける兩國官憲並專門技門技師をして妥實商定せしむべし

右證據として下名は各其の本國政府より相當の委任を受け日本文及漢文を以て作成せる各二通の本協約に記名調印するものなり

明治四十二年九月四日

宣統元年七月二十日

大日本國特命全權公使　伊集院彥吉
大清國欽差外務部尙書會辦大臣　梁敦彥

吾人は此の兩協約を以て日淸關係の善後として、幾許の價値あるかを注視せんと欲す

（二）

間島の領土權を全然淸國に讓步せるは、名分に於て淸國の頗ぶる得意とする所なるべし、統監府が文武官憲を出して儼として居留の韓民を保護し、古史舊記を引きて領土權の當然韓國に在ることを主張し、其の極武力を用ゆるに至るとも、一步だも讓らざる態度を示せるは、外交資料を保留するに於て頗ぶる妙なりしとせざる可らず、區々たる一間島の有無は、以て日韓の利害休戚に關すると大ならざれば也、外交に於て硬論を主張する者は、尺寸の地と雖も之を得るを尙び、我が主張に一步二步たりとも之を枉げざるを快とするも、實は大體に通ぜずして、徒らに俗見に拘泥する者のみ、識者の與せざる所とす、去れば我が外交當局も、本問題を以て一の外交資源と爲し、之を讓步するの條件を以て、更らに他の何物をか得んと覗ひつゝありしが如く、現に淸國との交涉中に在ても、韓民の保護權を保留する以上、領土權を淸國に讓るの內意を暗示したりしとありき

安奉線問題に自由行動を執り、少からず淸國の威信と感情とを害するや、我が外交當局は、直ちに間島の問題に讓步して以て淸國の面目を立て、併せて其の感情を和らぐる計畫なりしに似たり、間島の墾地に於ける韓國の保護權をも擧げて淸國に讓り、前の暗示よりも更らに多くの讓步を爲したりしは、即

ち其の一證ならずや

世或は吉長鐵道を延長して、韓國會寧に聯絡せしむるの約束を以て、清國の大讓歩なりとし、我れは名を捨てゝ實を取れるものなりと做すものあり、清國が間島の領土權を獲得せしは、素より其の名分に於て勝利として悅ぶ所なるべし、蓋し清國は此の一點に於て聊か面目を保持するの外、別に奈何ともする能はざるのみ、支那傳統の外交政略は、名を捨てゝ實を採るとあり、實を捨てゝ名を採るとあり、要は時の形勢如何に在り、古來大國の面目として、名實併せ捨つるを忌むと實に甚だしかりき、今や日本をして間島の領土權を讓らしめ、以て名分を立つるの外、清國の面目は以て保つべきものあると無し、日本の外交當局が間島問題に讓歩して清國の面目を立て、以て安奉線問題の橫暴に對する罪を償はんとしたるは、頗ぶる智慮ある措置と謂ふべし

然れども吉長鐵道を會寧に聯絡せしむるの一事は、其の實價果して幾許ぞや、日本內地に在ては、資本に窮するがため利益ある必要の線路をも完成する能はず、遞信大臣足を擧げて一び都門を出づれば、到る處我田引鐵の連中に取卷かれ、歡迎に盛饗に、優遇懇待至らざる無き渴仰を受く、而して此等鐵道は皆相應に利益あり、相應に必要なるものなるも、不幸にして資本窮乏のため、十分に我田引鐵の連中を滿足せしむるに至らざるのみ、然るに清國の領土たる滿洲に鐵道を布設し、殊に利益なき鐵道をも布設す、果して何の利益ありとするぞ、試みに思へ、吉林以東の如き貧寒の地方に、殊に韓國會寧の如き不毛同然の地方に、鐵道を延長したりとて、果して何等の利益ありや、之を布設するも收支相償はず、

收支相償ふに至るは若干年の後なりといふ、所謂若干年とは五十年の後か、百年の後か、自國内に在ては、人民の熱望する、然かも必要にして且つ利益ある鐵道をすら布設し得ざるに、却つて他の領土內に於て不經濟なる鐵道を布設す、幾んど何の意たるや解す可らざる也、或は我が國權を擴張し、我が軍略上に利益多しとする乎、思へ、會寧と海上との聯絡は何の港灣に由るか、由るべき港灣を海上に有せず、突然として是より貧寒且つ險難なる山地に入り、遠く吉林に通じたりとて、我が國權何が爲めに擴張さるゝや、軍略上よりいへば、鐵道の有るは無きに優さると萬々なるべし、然れども此の鐵道を利用して何の敵と戰はんとするや、相當の資本もなきに、不經濟なる鐵道を布設せば、露國の如き或は日本異圖を抱藏すと邪推するも亦知る可らず、現に清國の論者中には、吉會鐵道(吉林會寧間)の布設を特許するがため、日本の野心をのみ增長せしむべしといひ、寧ろ間島の放棄を利とすとする杞憂說をすら主張するものあるに非ずや、不經濟なる鐵道のために、徒らに他國をして危險なる憂慮を懷かしむ、智なりと謂ふ可らざる也、況んや之を以て名を捨て實を採るものと倣すをや

英獨佛米は、競ふて清國本土に鐵道敷設權を得んとし、今や其の資本供給にまで熱烈なる競爭を爲しつゝあり、粤漢川漢鐵道の借款の如き是れ也、然れども清國本土は人多くして物饒かに、富力の大なると、到底貧寒なる滿韓と同日に語る可らず、且つ英獨佛米の四國は、其の資本豐富にして、今や國外に其の放下の途を求むるもの也、日本の如く其の內地の必要且つ利益ある鐵道すら布設し得ざる少資本國には非ざる也、我が日本未だ富力豐饒にして收益多かるべき清國本土の鐵道に指を染むる能はず、却つ

て貧寒にして收益なき地方にのみ强ひて鐵道を布かんとす、列國の識者は果して何と看るべきや。我が外交當局にして果して智慮あらば、吉會鐵道の如きは、單に間島讓步の代償らしく見せ掛くる表看板のみ、近く十年十五年には、實際布設するとなかるべし、否、露骨にいへば所詮布設の成案あらざるべし、唯た一方には一部國民の虛榮心を滿足せしめ、一方には又何等かの外交資源と爲すに止まるべし、吾人は斯く觀察す、此の觀察中らば、吾人以て我が外交當局の智を稱するに躊躇せずと雖も、若し眞に吉會鐵道を布設する志あり、以て一個の成功と信ずるが如きあらば、其の意外に淺薄なるに啞然たらざるを得ざるのみ。

（三）

他の協約は特に論ずるを要せず、但だ法庫門の併行鐵道に就て、兎にも角にも淸國をして讓步を聲明せしめたる(第一條)は、一の成功とするに遲疑せざる也。但だ玆に至るまでには、英國資本家を鎭撫するがため、同盟國政府の力を煩はしたると少からず、爲めに事實に於て略々問題を落着せしめたるもの、玆に至て淸國政府をして公然讓步を協約文面に記錄せしめたるのみ

大石橋營口間の鐵道枝線は、東淸鐵道時代に於て、露國が一時の鐵道材料鐵搬用に供せしのみ、後年之を撤廢すべきとを淸國政府に約し置きたりしがために、利權回收に銳意して、苟くも乘すべき隙あれば、必らず之を捨てざる淸國は、早くも露國との前約を楯に、八月限り此の枝線を撤廢せんとを日本に要求し居たりしが、玆に至て南滿洲鐵道の枝線たるとを承認し、併せて現在の停車場（〇〇〇に在り、

營口市街を距る約二哩餘）を營口市街近く、即ち南滿洲鐵道の希望地に延長することを承認し（第二條）、之と交換的に我れも亦清國の京奉鐵道を、奉天城根まで延長することを承認したり（第五條）、蓋し我が國は京奉線の南滿洲鐵道を横斷することを許さゞりしがために、其の停車場は餘儀なく奉天城を距ること二哩餘なる我が南滿洲鐵道の停車場近くに置かざるを得ざりしが、此の承認によつて、安奉線は直ちに奉天城西邊門外まで到達するを得べし

並行線問題に於て清國の讓歩せる代りに、我れも亦撫順煙臺の採炭に對し、清國に採掘税及び輸出税を納むることを承諾したり、本協約は之に由て始終彼我の互讓に成れるを看る

（四）

間島及び滿洲に關する協約に於て、我れの讓歩したるもの實に甚だ多し、吾人は素より此の讓歩を不當とするものに非ず、但だ之に由て、安奉問題に於ける我が自由行動の不法を償ひ得ば、則ち以て幸ひと爲すのみ、此の協約に由て、頗ぶる我が讓歩の誠意を示せるに由りて、清國の感情を和らげ、由て以て兩國の關係を善くせんことを祈るのみ、現に安奉問題のため、今尚ほ清國の諸處に日貨排斥の計畫頻りに企てらるゝに非ずや

區々一船舶のため、若くば一鳥糞島のために、清國と交渉し、甚だしきは武力を用ゆるの決意を示すが如き、我が對清外交は從來實に幼稚なりき、安奉問題に自由行動を聲明したる亦之と齊し、大國には大國の雅量なかる可らず、弱國に對してはまた須からく其の作法あるべし、吾人は切に我が外交當局の

用意の周密にして、再び安奉問題の如き失體を演ぜざらんことを望み、併せて其の善後に鋭意せんことを促す、清國に對して硜々然として唯だ一滿洲の事のみに齷齪するが如きは、決して我が外交局面の大を爲す所以にあらず

富豪に日本一たる一策を進む

（上）

富豪たること多くの人の望む所也、然れども富豪となつて竟に何の得る所ぞや、以て美人の媚を買ふべし、以て金殿玉樓を購ふべし、以て安居逸樂を恣にすべし、然れども斯くして何の快かあるや、匹夫も其の志を奪ふ可らず、富客に聽かずして死せる嬌婦は古より多し、三菱の富を以てするも以て一の金物商の宅を奈何ともする能はず、淺野の豪を以てしても一の洗濯屋を動かす能はず、況んや學識と健康と平和とは、黄金を山積するも以て得べからざる也、多くの人は富豪を羨むを常とするも、其の羨まるゝ富豪は却つて文字なきを慚恨して一の學生を羨み、多病痼疾を患ひて車夫の健康を羨み、妻妾の嫉妬親子の反目に懊惱して、往々にして田夫野嫗の家庭の平和を羨む、閑鷗は眠らずして却つて其の足に暇なし、富人は其の身安きが如くして而して其の心破る、故に富豪たらんと志望して竟に富豪たるや、却つて憮然として自から其の志望の淺薄なりしを憐れむ者太だ多し

富豪たるも、其の名聲の甚だ世に聞へず、素より後世にも傳はらざるは、彼の一篇の文章一代に傳唱せられ、一場の說教に善男善女を隨喜渴仰せしめて、德澤の無窮に垂るゝ文人と宗教家とに及ばざるよ遠し、但だ富豪として兎にも角にも日本一と稱せらるゝに至らば、彼の盜賊の張本として隱れなき石川五右衛門に優さる遠からん、富豪たるは財を盜み人を殺すが如き惡事に非ざれば也、乃ち日本一の富豪たるに至て、聊か稱すべきものあり、假令內に不如意の嘆あるも、暫らく忍びて可なるべし、然らば則ち富豪にして日本一たる如何、曰く日本人の富豪は三井と岩崎となり、他の富豪にして之を凌がんと實に難し、素より不可能事（イムポツシブル）には非ざるも、今の人一代二代にして到底企及す可らず、故に日本一の富豪たらんとは暫らく之を斷念して、更らに他の方面に於て日本一たる所以を求むるに如かざるのみ、富の勢力を以てして、別に日本一たるに如かざるのみ

（中）

現在我が國に於て一流の富豪たらんと欲して得ざるは、實に彼の安田藤田の二人とす、二家の財產額は素より吾人門外漢の精知するを許さゞるも、世評によれば大約四千萬圓內外なりといふ、依て此の富を以て日本一たる所以の方法を求むるに、吾人は之を新聞事業に在りと斷言するを憚からず

四千萬圓の全財產中、其の一割を割きて一家の生活財產とす、四百萬圓あらば、其の年利四分としても一箇年の收入十六萬圓にして、三分とするも十二萬圓、一箇月實に一萬圓に當る、一箇月一萬圓の生活は、富豪としても上等也、安田藤田の一門如何に多きも、一箇月一萬圓の生活費に滿足せられざるの

理ある可らず
斯くして一家の生活を泰山の安きに置き、殘る三千六百萬圓を投じて一大新聞を起すべし、二百萬圓を以て土地家屋印刷器械等を建設せば、以て理想的のものを得べきや言を俟たず、殘る百萬圓を以て內地は素より海外にまで支社支局支部を設置する費用に充て、百萬圓を當座の運轉資本と爲し、三千萬圓を積置金とし、其の利子を以て永久に缺損額を補充し往くとせば、四分利として一箇年百二十萬圓一箇月十萬圓宛に當る、一箇月十萬圓の缺損を覺悟せば、思ひ切たる理想的の大新聞を作り得らるゝにあらずや

國際問題に就ては、今の倫敦タイムス以上に聰明なる報導を爲し得べく、中外の要事は總て之を電報し、日本文の外、少くも英佛兩國語を以て論文其の他重要なる記事を掲げ、用紙を鮮明にし、挿畫を精良ならしむ、總て當代技術の最善を盡すを得べし

斯の如くならば、此の大新聞は、少くも日々五十萬枚以上百萬枚を刷出し得べく、其の勢力の强大なる、隱として一敵國と齊しかるべし、一管の筆、能く天下民心の向背を定めしむべく、一篇の攻擊論、能く時の政府を震撼し、內閣を更迭せしむるに足らん、是れ豈に日本隨一の大新聞たるに止まらんや、恐らくば世界無比の大新聞たるに足らん

東洋の一孤島に於て、日々百萬枚以上を印刷し、天下を動かすべき勢力ある大新聞を作り出すは、寧ろ最大快心事ならずや、啻だに一島帝國のために氣を吐くに止まらざるべき也

（下）

富豪たるも日本一たると能はずんば、素より以て世界に聞ゆるに足らず、此の頃死去したりし米國の富人ロック、ヒル氏すら、其の二億乃至三億圓の財産を未亡人に遺せしにあらずや。我が岩崎三井と雖も未だヒル氏にすら及ばざると遠し、何ぞ況んやロック、フエラア、モルガンにをや、又況んやカーネギー、ヴンダアビルトにをや、又々況んやロスチャイルドにをや、然かも一び其の手を新聞紙に着くるや、優に日本一たるのみならず、幾んど當さに世界一たる大新聞を作り出して、一世を傾倒せしむるに足る、其の創設者にして且つ持主たるものは、坐ながらにして時の内閣を一喜一憂せしめ、天下をして常に其の進止を仰視し注目せしむ、啻だに一世の快心事たるに止まらず、又實に名聲を不朽ならしむる所以なりとす

此の一策甚だ妙にして而して世界の富人未だ玆に考へ及ばざるは何ぞや、曰く知らざるのみ、富人は未だ政事家程に新聞紙の勢力ある所以を解せず、ナポレオンが筆の力時に劍の力に優さると遠しと言へる意味を悟るに至らず、偶々新聞紙の事情に通ずるものも、其の資本の割合よりも人の頭數多く、事務は繁雜にして幾んど營利事業たるに適せざるを以て、未だ之を敢てする道樂を自からするに至らざるのみ、然れども碌々として多く成すなく、僅かに日本一たるすら能はざる富豪に取ては、新聞紙ほど奇拔にして成し易きものあらじ、安田藤田の徒、豈之を敢てする勇なき乎



政友會史論

無名氏

政友會は何が爲めに今更ら仰山らしく十年祭を擧行したるか。大隈伯などは九周年に十年祭とは一年繰上げにあらずやと評して居るが、其眞意は、桂内閣に、我等は二百名以上の議員を擁する大政黨であるといふことを知らしむる爲めの示威的の催であるか、將た桂侯を初め内閣員一同を招待して、我等は事實に於ては政府黨である、我等の仲間に加入さへすれば如何なる願望でも聞屆けらるゝといふ事を地方人士に隱約の間に知らしめんが爲めか。其判斷は銘々の勝手として、我等は玆に此機會を利用して、政友會創立以來十年間の棚卸しをして見やうと思ふ。固より總ての點に就いて語る譯には行かぬが、其中の主もなる點又は面白しと思ふ點に就いて其一斑を話さうと思ふのである。

政友會の父は申す迄もなく伊藤公であるが、其母は誰であるか。世には父無し子といふものがあるが、母無し子に至ては實に天下の珍聞である。我等は政友會の創立を語るについては、勢ひ伊藤公の政黨に對する關係を語らなければならない。

超然内閣といふ言葉は誰が發明したかは知らねども兎も角も伊藤公の憲法義解の中に其意味が演べられて

居る。其言葉は伊藤公によつて發明せられぬまでも、少くも其意味は伊藤公によつて傳はつたのである。處が總ての事に明敏なる伊藤公も、政黨は議會の開設と共に到底止むべからざるものなることを看取し、又操縱や結託ては兎ても思ふやうには參らぬといふことを看取し、いよ〳〵手を政黨に染めやうと考へたのは恐らくは明治廿五年第一次松方內閣の末路であらう。それは陸奥宗光や伊東己代治の徒が頗る其方面に伊藤公を引張つたのであらうが、公自身も亦斯く考へたのである。處が其時は却て意外にも西郷、品川などの國民協會なるものが飛び出して、政黨話はそれまでになつて了つたのである。其後いよ〳〵第二次伊藤內閣の世となつては、陸奥や伊東の手を通して自由黨と結託し、それから第三次伊藤內閣となつて地租問題の爲めに自由進歩兩黨の反抗に遭ひ、今度此節こそ自ら政黨の首領となつて、彼等と雌雄を爭ふべく、已に軍用金の才覺までも一方には井上侯の手を通して出來せんとするの際に於て、端なくも山縣公一派の反對に逢ひ　其反撥が終に大隈板垣推薦の動機となつたのであらう。

されば伊藤公と政黨との關係は決して一朝一夕の事てはない。明治三十三年、肝膽相照すといふ妙な言葉の下に、自由黨は議會に於ける協贊權を賣り、山縣內閣は之を買ひ、買ふ者は買ひ盡し、賣る者は賣り盡し、此上は新たに喧嘩を初むるか、左なくば內閣總辭職をするか、二つに一つとなつた時分になつて、伊藤公の食指は大いに動き出したのである。そは自由黨は山縣內閣といよ〳〵關係を斷絶した上は、最早や、誰にか便るの外はなかつたのである。進歩黨とは憲政黨內閣の末路に於て犬も喰はぬ喧嘩をなし、其創痍未だ癒えぬ間であり、さりとて獨力にて、一方には進歩黨に當り、他方には內閣方に當るといふ事は容易ならぬ事と見たからして、彼等は頻りに伊藤公に望を囑したのである。

扨伊藤公は何時までも只助言者として立つ譯にも行かず、又何か遣つて見たいやうな氣持もするし、其半生の經過を算し來れば、人臣として爲すべき事は爲し

盡し、剩す處は僅かに陸海軍の元帥と政黨の首領のみてあれば、最早や此際は政黨に向て其新たなる、其抑へ難き雄心を試みんとしたるは强ち無理からぬ事てある。そこて或は井上侯と共に九州に赴き、或は渡邊、金子、末松の徒と共に北陸に遊び、頻りに政黨製造の瀨踏みをしたらしくあつた。

自由黨の方に於ては此有樣を見て、此上は此方より持ち掛くることが何よりも捷徑と判斷し、星や松田は相携へて大磯に伊藤公を訪ひ、絶對的無條件て自由黨を伊藤公に獻上すべく申出てたのてある。處が伊藤公は流石に伊藤公てある。なか〳〵首を縱に振らぬ。彼は放膽なる政治家のやうてあるが、なか〳〵用心深くある。彼は捨つる時には時としては輕卒の譏を免れぬが、取る時には何時でも愼重てある。之が彼の政治的生涯に於て比較的失敗の少き理由てあらう。扨其申込に對して、有難くはあるが拙者にも一つ考があるから其考を他日打出して、其處て協議しやうといふ事になつたのてある。即ち彼は、自由黨に擁立せられて首領となつた形式を取らずして、自ら發起人となつて總てのものを我が大傘の下に集めんと試みたのてある。然し如何に彼の心が政黨に熱したるかは、自由黨に對する返答が三十三年の八月八日て、其立憲政友會の宣言書並びに綱領を公けにしたのが八月廿五日てあると云ふ、只此二の日附を對照して考ふれば分明てあらう。兎に角斯くの如くして政友會は出て來たのてある。

如何に政治の事には老練なる伊藤公ても、政黨には素人てある。其處て伊藤公は政黨なるものを、或意味に於ては餘りに容易く考へ、或意味に於ては餘りに六つかしく考へたのてある。何事にも自ら大先生を以て居る伊藤公は、政黨に對しても其態度を持したのてある。其處て自ら模範的政黨を作るべく決心したのてある。人或は伊藤公を以てドクトリネール(理論家)といふものもある。又或は王荊公の亞流といふものもある。或點に於ては些か其威なきにしもあらずてある。而して此時には伊藤公のドクトリネールの要素が遺憾なく發揮せられたのてある。

我等は今茲に其宣言書なるものを掲載する必要はないが、只其趣意について語れば、誠に立派なものである。

それは第一は閣臣の任免は憲法上の大權であるから、政黨員よりするにせよ、或は黨員外よりするにせよ、全く元首の自由意志に存すべきものであつて、已に大臣となつてからは黨員政友と雖も之に容喙するを許さぬといふ事が書いてある。之は一方から見れば政黨員は絶對的に閣臣に採用すべからずといふ議論を破つたやうにも聞えるが、一方から見れば、閣臣は政黨員でなくてはならぬといふ所謂政黨內閣論者の意見を否定したものとも解釋せられる。兎も角も伊藤公は內閣は內閣、政黨は政黨、全く分別あるものと定義を下したのである。別言すれば政黨內閣を根底より否認したものである。只政黨員でも差支ないといふ事丈けを條件としたのである。更ちに別言すれば、政黨員であるから採用せねばならぬといふ理窟もなく、政黨員であるから採用してはならぬといふ理窟もないといふ事を述べたので。詰り內閣組織には、黨派を眼中に置かぬといふ意味になるのである。

第二は行政を刷新し國運の隆興に伴はんとするには、一定の資格を設けて黨の內外を問はず、適當の學識經驗を備ふる人才を收めねばならぬといふ事をいつて居る。即ち獵官運動に對して豫め豫防線を張つたのである。一定の資格といふ事が眼目である。

第三には地方若くは團體利害の問題に至ても公益を以て標準とし、鄉黨の情實に泥み、當業の請託を受けてはならぬといふ事をいうて居る。之れは取りも直さず、從來自由黨のした事を彈劾したものと見ても差支ない。兎にも角にも秩序を整へ、紀律を明かにし、一意專心奉公の誠を以て政黨の事に從へとは公が明言したる處にして、蓋し中心より斯く期したのであらう。そこて公は自ら模範的政黨の發起者を以て任じたのである。

然し如何によき鍛冶なればとて、鉛を鑄て銀となすことは出來ぬ、鐵を打て金となすことも出來ぬ。伊藤

公は誠に此宣言に背かぬ首領であらう。然し伊藤公にして若し其大いなる傘の下に集る黨員が如何なる人々であるかといふ事に氣が附いたらば、かゝる立派な宣言書は出されぬ筈である。何となれば、首領と黨員とは其性質に於て全然相容れぬものであるからである。否、首領の黨員を集むる目的と、黨員が首領を戴く目的とは全然相容れぬものであるからである。

如何に緣故があるとは申せ、伊藤公は赤の他人である。然るに星一黨の自由黨が其黨派を伊藤公の膝下に捧げんとするのは何か理由がなくてはならぬ。彼等は自分共の力では天下を取る事も出來ず。又天下の利益の分け前も多く取ることも出來ぬから、兎も角も伊藤公を擁して早く其目的を達したいといふに外ならぬのである。名義こそ違へ、客といつても主人といつても室の中に集るものは同じ人間である。伊藤公が發起者となつて呼集めても、有力なる團體として集るものは自由黨である。自由黨が伊藤公を擁立するのと事實に於ては何等の差もないのである。彼等は伊藤公の理想にも、伊藤公の意見にも何等の重きも置かず、何等の興味も感ぜぬものであつて、只伊藤公を擔ぎ上げて天下を取るか、然らざれば天下を取ると同樣の利益を取るか、二つに一つを得んと逸りに逸るのである。然るに此勢に氣が附かずして、假令一時たりとも模範的政黨を作らうなどと思つたのは伊藤公にとつて、些か迂濶といはねばならぬが、そこが所謂過を觀て仁を知るの類であつて、寧ろ伊藤公の尊敬すべき或半面であらうと判斷することも出來るのである。

我等は強いて政友會の母を求むれば、多くのもの丶中より星亨を數へねばならぬと思ふのである。星亨は今も猶政黨間の英雄として崇拜せられて居る。中には偉人星亨などゝ申すものもある。我等の見る處では、彼は或意味に於ては餘程買ひ被られて居る。又或意味に於ては誤解せられて居る。然し何は兎もあれ、群小紛々の中に於て、政友會の母として數ふべきは彼であらう。而して其產婆としては先づ井上侯を名指すより外はあるまい。我等は今此處に星亨を論ずる暇はな

い。然し政友會を解釋するについては少しく彼を解釋するの必要なきにしもあらずてある。彼の前半生は語らずもがな。兎も角も大隈内閣を打壞はしたのは外に於ては彼てある。支那の詩人高青邱は張儀蘇秦を詠じて、天如早爲生民計、各與城南二頃田といつた。即ち此二人に少しの田地さへ與へて置けば、合縱連横などいふいたづらもせなかつたてあらうといふ意味てある。若し星亨に彼の希望通り、外務大臣の椅子さへ與へたならば、彼の力ではどうせ永く續かぬ内閣なるが一箇月や二箇月の壽命は延びたかも知れぬ。然し彼は其れを得ざるが爲めに、松田や林や、殊に板垣の尻を叩いて終に大隈内閣を叩き壞はした者の重なる一人となつた。獲物は當然戰勝者に屬すべきものであつて、山縣内閣も彼を無視する譯に行かなかつた。從來政府との關係は土佐派之が中心となり、己代治之が媒介者となつて居たのてあるが、山縣内閣創立以來は星が主もなる代表者となつて、樽俎折衝したのてある。第二次山縣内閣も隨分星には迷惑をしたが、迷惑をしたにせよ、せぬにせよ、賴むべきは彼一人てある。利益の集る處は怨の集る處てあるが、それよりも寧ろ勢力の集る處であつて、星は已に自由黨の事實上の首領であつた。板垣などは何時の間にか見る影もなくなつた。そこて若し星が小功名心に驅られて鷄口主義を取る男であれば、少くとも五六十名の議員を率ゐて、三國志に於ける呂布や馬超の位置は優に之を占め得られたのである。然し彼は見掛よりも見識があつた。自ら偏小なる政黨の首領となるよりも寧ろ大政黨の總取締役となつて實權を振ふべく覺悟したのてある。彼は恐らくは何人が首領となつても事實に於ては自分が首領である何人の名によつて組織せられたる政黨でも事實は自分の所有物なることを自覺したのてあらう。そこて彼は自ら率先して自由黨を賣り附け、併せて自分をも賣り附けんと試みたのてある。而して政友會の組織は兎も角も事實に於て彼の見込を九分通りまて實行せしめたものといつてよからう。

元來何れの點から見ても、伊藤公と星亨とは夫婦と

なるべきものではない。彼等は何等の相契るべき共通の性格を有して居らぬ。何れかといへば寧ろ互に反撥すべき天分を有したものである。然し奇なる運命は此二人を契合せしめて終に夫婦とならしめたのである。茲に我等の注意すべき一事がある。それは人を論ずるには其人の時と場合とを考へねばならぬといふ事である。同一の樹木でも綠葉の生え茂りたる時と、黄葉の爛斑たる時と、冬枯の瘦幹嵯峨たる時と、殆と同一物と思はれぬのである。人は如何なる場合に於ても其個人性を失はず、又失ふ事も出來ぬが、又時と場合によつて其人物が時々刻々變化して行くといふことをも記憶せねばならぬ。今日で最も老實なる行政家たる英國地方政務院長官ジョン、バルンスは嘗てトラフアルガル、スクヰアに於て無政府主義に近き過激なる演説の爲めに刑に觸れた男である。最も安心すべき政治家として信用を受けつゝある佛國現在の内閣議長ブリアンの如きも其戸籍は今尙社會黨である。之れと同様に星亨にも幾様の星亨がある。尙ほ彼は政黨員として何故に彼が如く有力であつたかといふについては多少の研究を要するのである。彼は政黨の寄生蟲ではなく政黨其物である。金子、末松、渡邊無邊などの直参連やら、伊藤己代治の如き覆面連と違ひ、彼は赤裸々の政黨員である。彼は總ての物を他の政黨員同様に持てゐたのである。然しそれ丈けであれば彼も亦一個の政黨員たるに過ぎぬのであるが彼は總てといはざる迄も多くの政黨員が持て居らぬものを持てゐたのである。それは第一は金錢に關する能力である。淸貧などゝいふが、人を使ふ上についても、自ら動く上についても、困つたものである。隱君子ならばいざ知らず、個人的生涯にて終るならばいざ知らず、公人として働くには兵糧が第一である。處が多くの政黨員は此點に於て初めより考が粗であつたが、彼は如何なる場合でも金錢といふ事を忘れなかつたのである。之が彼の品性若くは履歴の上には大いなる汚點を與へたと同時に、彼が黨魁として大なる強味であつた。固より彼も人並同様に貧乏した事もあつた。然し兎に角貧乏はしても兵糧に事

を缺かぬ丈けの準備を怠らなかつたのである。之と同時に彼は立派なる事務家であつた。辯護士の會長をやれば會長が勤まり、議長をやれば議長が勤まり、大臣をやれば大臣が勤まるといふ男であつた。それは單に天品の事務家といふにあらずして、苟も己れが當る事には彼は全力を注いで研究もし、學習もしたのである。世に彼ほど細心なる議長はなかつた。彼は議席に就く前に、あらゆる起るべき問題を豫想して其屬僚と共に研究に研究を重ね、頭腦を練り堅めて出て行つたのである。それで彼の勇氣は猪勇でもなく、猛勇でもなく、自ら自己の能力を自覺するの勇氣であつた。それで彼は遞信大臣としても僅かに二箇月位しか在職しなかつたに拘らず其施設は一般の屬僚を感服せしめて餘りあつた。更らに一歩を進んで考ふれば、彼は野蠻的文明の素養を有つてゐたのである。世には野蠻的素養を有つてゐるものも多くある。文明的素養を有つてゐるものも少くない。然し彼の如く兩方の素養を一身に調和してゐるものは頗る稀である。之が彼が總ての人の中に於て最も有力なる資格の主もなる一であつたらうと思はれる。而して彼も時と共に推し移り、世と共に進むといふ考を以てゐたから彼の人物は其周圍の必要に應じて段々變化して來たのである。それで彼を今日に於て論ずるには多少の斟酌を要する次第である。

世間では彼を剛岸不遜、一本調子の男と思ふものもあるけれども、彼は虎となることも出來、鼠となることも出來る。只鼠となつても尋常の鼠となる事の出來ぬ迄である。例へば彼は伊藤公に對して如何なる態度を取りしかといふに、なか／＼恭謙であつた。政友會結黨式の日、二次會を築地瓢屋で開會した時に、伊藤公は稠人廣座の中で星に向ひ、君等が如きデマゴッグでは兎ても政黨の改良は出來ぬといふ事を放言した。それを聞いて居るものゝ中には手に汗を握つたものも少くなかつた。けれど星は別段言ひ爭ひもせず、只苦笑して居たばかりである。彼は伸ばす時には手も足も伸ばす。が、縮むべき場合には頭をも縮めたのである。之れて彼が志の尋常ならぬ事と、又彼が人物の經驗と

歳月とによつて、進歩したといふ能はざる迄も變化した事が分るのである。

我等は玆に政友會の前に横はる一の難物があることを考へねばならぬ。それは大隈伯でもなく、進歩黨でもなく、山縣公及び山縣内閣である。山縣公は已に三十三年の五月頃、自由黨と絶縁の後、恰かも政友會が伊藤公に其首領たらんことを持掛け初めた頃に已に辭職の決心をしたのである。處が團匪事件や何かで延引したが、伊藤公の政友會組織の成つた日は即ち彼が辭職を斷行すべく決心したと同時である。彼は公然其辭表を九月二十六日に出したが、然し彼の辭意を其親近者に洩らしたるは同月十六日即ち政友會結黨式の翌日と云ふ事を聞て居る。此辭表は山縣公の方より考へて見れば當然の事である。彼は戰後の經營として爲すべき丈けの事は略ぼ成したのである。彼にとつては骸骨を乞ふに決して疚しき事はない。のみならず乞はざるべからずと思ふた事がある。それは政友會の組織である。左なきだに伊藤公は何時にても交代すべき候補者の第一位に屬するものであるに、況して政黨を組織して天下を席巻するといふ事になつては、これは當然自ら退いて伊藤公に讓るべきは理の避くべからざる事と考へたのである。處が伊藤公の方から見れば左様には參らぬのである。伊藤公は自ら政黨組織の大事業であるといふ事も知つて居る。又彼は山縣公も之を知つて居る筈と考へて居る。されば結黨式の濟むか濟まむのに内閣を明渡すといふ事は、其名義は賢路を開くとか何とか立派であるけれども、實は人に向て無理難題を打ちかけるのであつて、まさか、かゝる思ひ遣りのない不親切はせぬものと思ふて居たのであらう。伊藤公の親近者中には、詰度山縣が内閣を投げ出すから其用意をして置けと忠告したものもあつた相だが、伊藤公はまさかさういふ事はあるまいと思うて居たらしい。然るにいよ〳〵山縣公は投げ出した。そこで伊藤公は受取らぬといふ、こゝに一場の葛藤が出て來つたのである。世間では山縣公の筆法は、恰かも大隈、板垣兩伯が憲政黨組織の曉に伊藤公が内閣を明渡したと同様、

詰り伊藤公の大隈板垣兩伯に加へた處を以て伊藤公に加へたのであつて、所謂大隈伯に對する借金を山縣公に向て拂はねばならぬといふ事になつたといふものもあるが、我等は必ずしも左樣の譯とも思はぬ。只形式より見れば二者に於て何等の異る所なきのみならず。伊藤公の周章狼狽も別段大隈板垣兩伯よりも少くなかつたらうと思はれる。如何に駄々を捏ねても名義は山縣公にある。必至は伊藤公にある。最早や伊藤公は其前には叩頭せねばなるまい。けれども彼はなか〳〵神妙にはせなかつた。元老や前山縣内閣の連中を寄せて勝手な熱も吹き、愚痴も溢し、叱言も並べたのてある。然し結果は矢張り同樣てあつて、彼はどうしても内閣組織に當らねばならぬ事になつた。一方には政黨組織あり、他方には内閣組織あり、恰かも盆と正月と一所に來たといふ場合に於て、不幸にもインフリインずは彼に取りついたのてある。處がかゝる苦心の最中に於て更らに大いなる苦心をせねばならぬ事の出來たのは、所謂渡邊事件の出現てある。即ち泣顔に蜂とは此事てある。

世の中の人の記憶は短かいものてあるから、最早や渡邊事件はいふに及はず、渡邊其人の名さへ打忘れたものが多い有樣となつたが、其當時に於ては、渡邊事件は實に奇妙奇天烈の事件として最も世の中の注意を惹いたのてある。我等は今玆に少しく渡邊の政友會に於ける位置を語らねばならぬ。元を正せば渡邊は松方侯の子分てある。大藏省て渡邊國武、中村元雄、河島醇の三人男として知られた其一人てある。けれども三人の中ては渡邊が最も賢かつたに相違はない。彼は到頭仲間を乘り超して松方侯の下に次官となつたのてある。それから伊藤公の下に大臣となつたのてある。伊藤公が松方侯と調和して松方侯が再び大藏省に入るや、渡邊は遞信大臣に轉じ幾もなく又た大藏大臣となつたのてある。何時の頃よりか彼は兎も角も彼の恩人たる松方侯と仲違ひをして伊藤公の子分となつたのてある。彼が伊藤公の子分としてどれ程の働をしたかは分らぬが、兎も角も彼は議會に於ては一錢一厘も負か

らぬといふ事や、彼も一時、此も一時といふ事やら、いろ〳〵の警句を吐いて俗吏中に於ては錚々たるものとして評判を博したのである。二十七八年戰役伊東巳代治の如きは自分は骨身になつて僅かに男爵を贏ち得たが、渡邊は何の功あつて子爵になつたかとて隨分不快に思ふてゐたらしい。巳代治は常に彼を評して、世に扇子で額を叩く幇間は珍らしくないが、英雄豪傑を氣取る幇間は當世の珍であるといふて居た。中村元雄の如きは、彼を土左衞門と名つけて居た。然し反對者が何といふにせよ。彼は伊藤公の幕下としては巳代治よりも寧ろ信頼せられてゐたのである。彼は第三次伊藤内閣の時にも勸誘を蒙つたけれども、尚早しとして謝絶したのである。處が彼は藩閥に緣故があるでもなく、政黨に關係があるでもなく、只其兄貴の千秋と共に形影相倚るまでゝあつて、いはゞ一刻一人の男である。そこで伊藤公を擁して政黨に據るより外なしと考へ、伊藤公の政友會創立の動機については彼は最も多く刺激を與へたる一人であらうと思はれる。巳代治などは何れかといへば新政黨などを作るよりも、自由黨を其儘用ふるに若くはなしといつたのである。これは自分の政黨仲買以來の都合もあつたらうが、又伊藤公にとつても其方が好手段と考へたのである。處が渡邊は伊藤公を中心として新政黨を組織せんとする最も熱心なる主張者であつた。それは自ら伊藤公に次いで所謂侍所の別當たる位置を占むべく期待したからである。伊藤公も亦彼の心事を諒として彼を創立委員長となした。いはゞ彼は伊藤公に次いでの位置を占めたのである。處が此男が如何なる譯であつたか十月七日の夜、伊藤公の招集に應じて公よりいよ〳〵内閣組織の決心をしたといふ事を聞いたる一人であるに拘らず、翌八日の早朝六時頃、突然井上侯を訪ひ、これから伊藤に絶交を申し向くる積りだと告げたのである。大山後に崩るゝとも、白刃前に橫はるともピクともせぬ井上侯も、之には流石に一驚を喫したに相違ない。彼はそれより井上侯の宥めをも聞かず、直ちに靈南坂邸に伊藤公を訪ひ、公が三十八度以上の熱でソファに橫は

つて居たに拘らず。何やら譯の分らぬ怨言を吐き、恐然闥を排し階段を蹴て歸つたのである。而して翌九日の新聞には、狡兎盡きて良狗烹らるといひ、政友會は腐敗したりといひ、世の中の人をして殆んど啞然たらしめたのである。處が事は其れて止まればそれ迄てあるが、超えて十一日には所謂郊外散歩、心機一轉の奇言を吐き、癲癇病者の落付たる如く再び其態度を改めたのてある。渡邊は固より自ら氷釋したかも知れぬ。然し氷釋せぬのは政友會の總務委員てある。彼等は渡邊問題を伊藤公に持出し、伊藤公の許を得て、十月十七日の日附を以て、翌十八日に「渡邊事件の顛末」なる彈劾的長篇を公けにしたのてある。それて內閣組織もいよ〳〵頓挫したものと思つたものもあつたが、伊藤公は其日を以て病を押して大磯より入京し、翌十九日にはいよ〳〵親任式の擧行となつたのてある。處がこゝに面白き話は推薦せられた連中の中には自分は如何なる大臣となるかさへ知らず、御召なればとて兎も角も大禮服を着て參內したものもある。我身さへ此通りであれば、同僚の誰が何大臣になるかといふ事は多くのものが知らなかつたらしい。殊に前日、狂亂に等しき擧動をなしたるものと彼等の名によつて彈劾したる渡邊が、彼等と共に宮中にあらんとは、彼等の意外中の意外としたる處である。聞く所によれば、彼等は渡邊の影を認め、彼奴が來て居るかと互に宮中で囁き合ふたものもあつたといふ事てある。我等は渡邊が何故にかゝる狂氣染みたる事をしたかといふを詮索する必要はない。然し彼の政友會に於ける位置の變化を明かにする爲めに些か觀察すべき事もある。彼は自ら伊藤公の總支配人と思つて居たのてあらう。彼は所謂直參黨の旗頭を以て任じたのてあらう。所謂星亨一派の政黨出身者を抑ふるには乃公を除いて他に人がないと思ふたかも知れぬ。何れにしても政黨分子を星が代表するとすれば、新參分子若くは直參分子は渡邊が代表したと推測することが出來る。そこて此兩派は組織前から固より衝突すべき要素を有するものてあつて、權力の爭奪といふまてには至らざるまても、殆んど其れを

前知せしむる如き態度を以て相對峙したのである。或者の語る處によれば、渡邊は自ら内務大臣を以て任じたのに、星亨の兒分共から脅迫がましき談判を受け、是非星を内務大臣にして貰ひたいと迫られたといふ事である。それから内務大臣は兎も角も星もやらず彼もやらぬ事として、彼は次には大藏大臣を以て任じたのである。然るに伊藤公は外を見れば山縣公一派が居るし、内は未だ安心の埒に運はず、徒らに兒曹を集めて内閣に立つのは些か心細く感じたらしく、殊に一度渡邊を大藏大臣に据ゑ置いて公債を募集したるに、松方侯や當時の日本銀行總裁川田等の反抗の爲めに大失敗を見た事もあるから、これは寧ろ井上侯でもこゝに据ゑた方がよからうと思ふたらしい筋もある。段々移り移つて彼が第二の見込たる大藏大臣さへ覺束なくなつたので彼もいよ／＼堪忍袋の緒を破つて棄鉢となつて暴れ出したのであらうと想像せられる。然しそれは單に想像なるや若くは事實なるやは我等の保證の限てはない。只彼が暴れ出したと同時に、之まで政友會の産婆であつた井上侯は忽ち影を隱して其蹤跡さへ分らなかつた。而して井上侯が無可有の郷より他の元老に送つた手紙には無邊狂禪と、俠骨の俠を狂者の狂の字に改めて書いてあつたといふ話である。井上侯は固より渡邊には愛措をつかしたのである。松方侯は初めよりつかして居つた。伊藤公も今度の事件では同じく愛措を盡かしただらう、が然し今更ら致方もない故、彼を引張つて大藏大臣にしたのであらう。かゝる經過を經ていよ／＼第三次伊藤内閣或は第一次政友會内閣が出て來つたのである。要するに此の事件は、第一には政友會の弱昧が暴露し、第二には内閣の不統一を豫想せしめ、第三には星亨をして坐ら勝者の位地を占めしめたのである。

伊藤公は其内部の統一せるせぬに拘らず兎に角多數黨を擁して議會に望んだのである。そこで議會は如何であるか。彼も多少は豫想はしたのであらうが、かくまでも激しく貴族院の反抗を買はんとは恐らくは思設けなかつたらう。彼は政治家としては決して一面その

み見る男でない。表といへば必ず裏も見る。前といへば後も見る。彼の思慮はなか〳〵周密である。けれども彼は何れかといへば順境に成長したる政治家であるから、大隈伯のやうに向ふ見ずの樂觀はしないか、時としては己を以て他を計り、些か、自分のかくあるべきといふ事と、かくある事とを混同するの缺點がある。然し之も彼にとつては缺點とはいふものゝ人格としては寧ろ褒めて差支あるまいと思ふ。彼は自分が獻身的に山縣公の重荷を交代して負ふたからには、山縣公は勿論、其同臭味の連中は必らず相當の援助は與ふるものと考へたに相違あるまい。彼の立場よりいへばかく考ふるも無理からぬ事である。處が實際はなか〳〵さうでない。伊藤公の政黨組織は一方に於て伊藤公の人望を博した丈け、他方には不人望の源となつた。彼は帝室内閣論より政黨内閣論に降參したものであると見做されて、上院の多くの部分より少からざる反感を買つた、のみならず彼が星亨等を其幕下に致したる結果は、星及び星等に對する總ての反感情を彼が引受けねばならぬ事になつた。事實に於ては星に身替をさせるのではなくして彼が星の身替をせねばならぬ事に立到つた。議論は兎も角も感情は右の通りである。そこで貴族院の有象無象は大擧して三箇條の覺書を作つて伊藤首亨相に肉薄したのである。第一は晉の事である。第二は選叙を愼しみ官紀を振肅せよといふ事である。それには岡崎邦輔などの遞信省官房長となつた事も含んで居る。第三は國務と黨務とを區別せよといふ事である。之には平常は互に鎬を削つたる貴族院連中は約一百八十七名も連判していよ〳〵伊藤公に其の黑白の決答を促がすといふ事になつたが、星もかくなれば最早や退くの外はないと諦め、伊藤公と協議の上、其談判委員が伊藤公を訪ふ前日に辭職したのである。然し星の辭職ばかりで此氣焰は收まるといふ譯には行かぬ。今でこそ蟲も殺さぬ顏をして居る清浦子や平田男の徒も此際には隨分働いたらしく思はるゝのである。兎にも角にも、これは政友會對貴族院の一大血戰であつて、今日に至るまで貴族院と政友會とが尙圓滑を缺く所以の源は

ていにありといふも、強ち過言ではあるまいと思ふ。

今は伊藤公も百計盡きたのである。そこで一方には上方に優遊して居る山縣公、松方侯を招き、一方には近衛議長を經て、いよ／＼大詔煥發といふ事になり、漸く貴族院を切り抜けたのである。此戰爭は道理よりいへば七分が伊藤公にあつて、三分は貴族院にあるのである。それで山縣公も松方侯も感情は別として、イザとなれば伊藤公に賛成して貴族院の反抗を鎮撫するに盡力したのである。そこで貴族院は一字一句も修正せず、其まゝ通過したが、收まらぬは彼等が政友會内閣に對する若くは適切にいへば伊藤公に對する惡感情である。此感情は容易に冷却せず、冷却しても其痕跡を絶たず、次の政友會内閣即ち西園寺内閣にも少からざる祟りをなしたのである。

兎も角も議會は濟んだ。これからが政友會内閣の萬歳を謳ふ時であるべきだが、其實はなか／＼左樣には參らぬ。伊藤内閣は山縣内閣を相續すると同時に財政の困難をも相續したのである。それで當面は增税で切り抜けたが、前途は暗憺たるものであつた。そこで此上は悉皆新事業を中止して財政を緊縮するより外はないといふ事は誰の眼にも明白であつた。現に第二次桂内閣の如きも、其通りにやつたのである。處が伊藤内閣では其通りに行かぬのである。渡邊子は事業中止論を持出した。渡邊の側から言はすれば、伊藤公も同意したといふ事である。然し事實は何とも分らぬ。此意見は必らずしも渡邊子一個の意見ではない。恐らくは何人の意見も此通りであつたらう。殊に當時の大藏次官田尻子等が入智惠と思はるることもあつて、必ずしも渡邊の新發明とも思はれんのである。然しながら内閣はそれてはなか／＼折合はんのである。何れの大臣も渡邊と鎬を削つたが、殊に其正面に立つたのは、星の後釜に据りたる原敬であつた。詰り内閣會議は渡邊對原の決鬪となつたのである。若し伊藤公が渡邊に全力を藉したならば或はそれで抑へ附けたかも知れん。然し例の渡邊事件以來兩人の關係は頗る水臭いものであつた。實をいへば伊藤公も渡邊に對しては面白くなく、

又渡邊の意見に對しても半信半疑であつたらう。そこて伊藤公は此喧嘩を調停するよりも寧ろ見物して居たらしい。若し肩を持たとすれば渡邊のよりも寧ろ原敬の肩にあつたらう。ていよ〳〵様子が面白くなくなつたと見て、伊藤公は忽ち其十八番たる棄鉢と出掛けたのである。即ち一片の辭表を提出し、一卷の陶淵明集を懐にして、飄然大磯に歸つたのである。これが五月二日である。

十人に九人までは伊藤公の辭表を眞面目に考へたものはない。此辭表で渡邊を叩き附けるか若くは叩き出すか、孰れにしても折合をつけて、再び内閣を組織するであらうと思はれたのである。若し又伊藤公の眞意が辭職にあつたにせよ、若し周圍の事情が斯くせねばならぬといふ事であれば、斯く出來なかつた事もあるまい。處が元老連中は餘り熱心には伊藤公を引留めなかつた。理窟はどうであつたか知らぬが、事實は井上侯を除く他の元老は政友會の組織を、中心には賛成したのでなかつた。井上侯さへも無邊狂禪一件で、些か冷却したのである。それで只成行に委せるがよからうといふ事になつて、傍觀の態度を取つたのである。否。何れかといへば、寧ろ伊藤公の再び出て來ることを好まなかつた事情もあつたらしい。その以後の表面の事實を概叙すれば、五月四日山縣公西園寺侯は宮中に召されて善後策に力を致すべきことを承はり、十日には伊藤公の辭表は聽許せられ、首相代理西園寺侯は臨時總理大臣になつたのである。此場合に於て伊藤公には再來の望はなかつたのであらう。これより桂内閣の出來るまでの事は隨分面白い事もあるが、これは直接政友會の歴史に關係がないから之を默過するとして、兎も角も西園寺侯は茲に總理大臣の豫備練習に取かゝつたのである。これまで多くのものは侯を眞面目の政治家として受取るものは殆んどなかつたのである。處が彼が臨時總理大臣として此間に處したる手際はなか〳〵立派なものであつて、これでは此儘据ゑ置いても差支なからうと思つたものもあつた。然し周圍の事情はなか〳〵臨時の二字を彼の頭から取り去るこ

とを許さず、彼も亦之を知つて決して自ら之を求めなかつたのであらう。兎も角も世人ては意外としたる、當時の所謂緞帳芝居、當時の所謂緞帳役者たる桂侯が内閣を組織したのである。

扨政友會の模樣はどうかといへば三十三年九月組織の當初に於ては八道の草木威風に靡くといふ有樣にて、殆んど政友會員にあらざれば人にあらずといふ勢て、舊自由黨員は勿論のこと、國民協會からも、進步黨からも、若くは官吏の古手からも新手からも、或は實業家からさへも、集まつて來て、いよ／＼天下を席卷するの有樣であつたが、其力を試むべき點に到て忽ち大頓挫を來したのである。即ち渡邊事件、貴族院との葛藤、伊藤内閣の沒落、一として政友會に打擊を與へぬものはなかつたのである。而して茲に最も打擊を與へたるは星亨の刺殺せられた事である。これは六月廿一日であつて第一次桂内閣成立の六月二日を隔ること僅かに三週間である。星は遞信大臣を罷めてよりいよ／＼政黨事務に取かゝり、東京市を立脚地とし、關東を根據とし、退いては政友會内に龍蟠虎踞し、進んでは此勢を以て天下に打て出てんとするの準備をなし、よつて以て黨員の望を繫ぎ得たるに、此場合に於て彼を失ふたのは、實に言語に絕したる打擊であつた。加之機を見るに敏なる伊藤公はいよ／＼洋行と出掛けたのである。彼が第三次伊藤内閣の罷むるや忽ち淸韓旅行をなした。故に此場合に於て歐米旅行に出掛くるは彼にとつては誠に好都合であつたに相違ない。然し黨員にとつては決して左樣でなかつたのである。兎も角も卅四年の暮より五年の初にかけての議會は彼の留守中に開かれたのである。此議會では政友會でも隨分桂内閣に當つたのである。當るも其筈である。前内閣に於て政友會を惱ましたる當の敵は殆んど此内閣に代表せられて居たからである。彼等は知るや知らずや、兎も角も第一次桂内閣に向ては、隨分衝かゝつたのである。然し此衝突は桂侯のタクトによつて到頭思はしく物にならずして此議會は經過したのである。伊藤公は固より從來の行掛もあれば、假令熱心なりとい

ふを得ざるも、遙かに電報を發して黨員を戒飾して餘り衝かゝらぬ丈けの事はしたのである。然し此議會の最中に日英同盟の締結なるものがあつて、桂内閣には意外なる利益を與へたのである。之について伊藤公對桂侯の關係などは多少研究を要することもあるが、それは此問題に縁遠いから他日に讓ることゝする。伊藤公は卅五年の春歸朝し、來る八月總選擧を控へて居たので、四月八日公は、此總選擧にも所謂理想的政黨として理想的選擧をせねばならぬといふ宣言書を黨員に發したのである。而して其中には「特に吾同志の服膺す可きは、常に政黨の利益を後にして、國家の利益を先とすると是れなり」といふ事もいつて居る。兎に角此選擧は政友會に取つて少からざる利益を得たのである。即ち從來三百名の議員に對して百五十五を占めてゐたのが三百七十六人に對して百九十三を得ることゝなつて、依然絶對的過半數を失はつなかたからである。

扨、總選擧は八月であつて其時分からチラホラ増税論が沸き出てたのである。桂内閣はどうしても海軍の擴張せねばならぬ事になつて居る。其擴張をするには地租を繼續するより外なしと思ひ定めたのである。元來山縣内閣の時に地租增徵に際して年限を附けたといふ事が失策であつた。伊藤公なども確かに之を失策と認めてゐたのである。然し附けた年限が來れば之を繼續するの困難は、新たに之を增徵するの困難に讓らぬ。伊藤公と雖も海軍の擴張せねばならぬ事は百も承知して居る。又地租によるが最も便利なる事も承知てあらう。それは當時の大藏大臣曾禰荒助子が、地租を繼續せんでも出來るなどゝ大阪邊で言つたのを聞いて、伊藤公は怪しからぬ事だと呟いたといふ噂もある、又ある新聞記者に對して、地租繼續は致方もあるまいと話された事もあつたやうに聞いて居る。處が黨員は左樣には參らぬのである。現に各支部に於ては續々地租繼續の不可を議決したのである。元來總裁萬能、總裁專橫の政黨として、未だ總裁の訓令を待たず各支部に於て議決するなどは僭上であるが、此時ばかりはかくあつたのである。のみならず、有力なる議員は大磯

に出掛けて、兎ても地租繼續は思ひもよらぬといふ事をいふたのである。

當時政友會は總選擧の結果、絶對的過半數を制し、上には元老第一位の伊藤公を戴き、眼中固より小僧内閣――桂内閣――のあるべき筈なく、只一蹴りに蹴り散らさんずる勢であつたのである。我等は當時世間に知られたる桂侯と今日の桂侯とを同視する譯には行かぬ。桂侯其人の實價には別段の相違なしとするも、當時に於ては小僧上りの政治家とより見られて居らなかつたのである。内閣は内閣として重からず元老によつて重しといはれた内閣であつたのに其元老の元老たる伊藤公を戴く政友會に於て固より桂内閣を恐るべき理由もなく又尊敬すべき道理もなかつた。而して伊藤公の頭も段々地租増徴繼續案反對の方に傾き來つたのである。それは必ずしも黨の大勢にかぶれたといふてもあるまいが、ともかくも彼は桂内閣よりも黨の大勢に重きを置いたらしく考へられる。それで出來得べくんば桂内閣を黨の大勢に從はしめたいと思ふたのであらう。彼は實に其手段を取つたのである。然し桂内閣に於ても矢弦上にあれば放たざるを得ずである。總ての事が定り、いよ／＼其計畫を發表せんとする曉に於て、寢耳に水に其れを變へよといはれた所が到底も出來る話ではない。如何なる六つかしい藝當でも自ら出來ぬといふ事のない桂侯も、これには當惑したかも知れぬ兎も角も伊藤公對桂侯の相談は終に纏らなかつたのである。黨員の多くのものは寧ろ纏らなかつたのを本意としたかも知れぬ。少くとも其策士に於てはかく思ふたのであらう。已に桂内閣と手を携へて行くことが出來ぬといふ事であれば、伊藤公は政友會總裁として何れにか道連を求めなくてはならぬ。そこで伊藤公大隈伯の會見なるものはいよ／＼卅五年十二月三日に出て來つたのである。そこは流石に伊藤公である。彼は桂侯と物別れの砌に於て、大隈伯と會見するといふ事をホノメカしたのである。桂侯も今となつては留むべき筈もなく、之を聞流したのである。此會見は岩崎彌之助等の豫て夢想したる伊藤大隈聯立内閣の地をなすもの

として、三菱一派殊に其代表者ともいふべき加藤高明などが盡力したのであらう。此會見は固より圓滿てあつたに相違はない。何故なれば、大隈伯は伊藤公のいふ事を、一も最も、二も最も、三も最もとして賛成したからである。そこで伊藤公もいよ〳〵決心の臍を堅め政友會の大會に於て政府反對の大演説をなしたのである。地租增徴の繼續に反對する許りてなく、大いに緊縮論を唱へたのである。政友會は殆ど先天的に増租機關として出て來りたるものであるが此時に限りて初めて異りたる方面に働かんとしたのである。然し其兩黨聯合の大勢は進歩黨に於ける大隈伯の演説に依て最も鮮明に最も痛快に吹聽せられたのである。大隈伯は其前夜伊藤公と會見した顛末に輪をかけて所謂大隈式の誇張的演説をやつたのである。そこて桂侯の立場は恰かも第三次伊藤内閣に於ける伊藤公の立場の如く、伊藤公の立場はそれに對する大隈伯の立場の如くなつたのである。いふて見れば、伊藤公は數年前大隈板垣に對する仇を此度此節桂侯に向て討つと云ふ事になつて來た。之は伊藤公として本意てあつたか、不本意てあつたかそは詮索の限にあらざれども、其形跡を論ずれくてあつた。かくなれば政府が屈服ば殆んど斯くの如せざる限りは解散の外はない。そこて當然解散となつたのである。豫てより藩閥打破を理想とし政黨内閣を目的としたる連中は、天下の事大いに定ると思ふたのてある。所謂天下の大政治家伊藤公大隈伯手を握り、天下の大政黨政友會と進歩黨と聯合するに於ては、天下何物か之を防ぐ者あらんやてある。そこて彼等は大願成就の光明を眼前に控へてゐたのであるから臨時總選擧にも兩黨申合せをなし、何れも相侵さずして相助け、以て其現狀維持の行き掛りを新議會に持ち込まんと企てたのである。而して事實に於ては殆ど其通りに行はれたのである。若し此儘に推移れば伊藤公の前途は大隈伯と殆ど多く相異る所はなかつたのてあらう。政友會にして其儘に進み行かば、之も亦進歩黨と多く選ぶ所はなかつたのである。そこで此聯合は政友會の歷史よりいへば實に一大危機てあつた。政友會は元來其の存立する目的に於て政府黨として存立したのであ

る。星亨等にして自ら反對黨を以て甘んぜば、山縣派と結託する必要もなければ伊藤公に黨を獻上する必要もないのである。彼等が百方苦心したのも實は其黨をして政府黨たらしめんと欲したからである。單に働きに於て政府黨たるのみならず、政府黨の金看板を掲げんが爲めである。星等の眼中より見れば、伊藤公は政府黨の金看板に外ならず、又伊藤公より見ても自ら反對黨として立たんが爲めに組織したのでなくして之を爲政の方便として組織したるに相違はない。理想的といひ、模範的といふもそれは政治者の立場よりいふにあらずして治者の立場よりいふのであることは固より疑を容るゝ餘地はない。然るに今更ら大隈伯と聯合して桂内閣に反對したとなつては政友會の本領は殆んど沒却した事になる。桂内閣は或は詰らぬ内閣かもしれぬ。然し誰が内閣を組織したにしても内閣は内閣である。況んや桂内閣の政綱なるものは、國運の發展に追隨するものであつて、政友會が今日の隆盛を來したも畢竟此方針を翼賛し來つたからである。そこで我等は此聯合を以て政友會の歷史に於て一大危機なりしことを明言するのである。

然し桂内閣の側より考へて見れは、伊藤公と大隈伯とは同一視する譯には行かぬ。大隈伯は只黨魁である。黨魁以上には政治上何等の取柄はないのである。伊藤公は黨魁としては公の一部若くは一小部分に過ぎないのである。彼は之を私にしては長州三尊の第一尊である。之を公にしては元老の隨一である。我國に於て元老制度なるものは廿七八年役より三十七八年役の間に最も隆盛を極めたのである。此制度の是非は別論として、元老制度は實に或時に於ては議會以上の議會、内閣以上の内閣であつた。處が伊藤公は其の筆頭にして進んでは至尊の啓沃に答へ、退いては當時の責任者に對し、忠告もし、助言も加へ、時としては或程度までは壓迫をも試むることが出來たのである。そこで單に政黨の首領としては左程に恐ろしくもないが、元老兼政黨の首領としては實に虎に翼を附けたも同樣である。野に於ては豫て伊藤公の禁物たるデマゴッグの大

殺分となり、朝に於ては元老の首位を占むるといふ事になつては、なか〳〵容易ならぬ事である。そこで桂内閣も政友會を敵とするは面倒ではあるが恐ろしくはないが、伊藤公を敵とすることは隨分骨が折れたに相違はない。伊藤公を敵とする以上は伊藤公の元老たる資格を剝ぎ上げて全く大隈伯同樣のものに爲すより外はない。而かも斯くの如き事は、桂内閣の立場として手輕に出來べき事でもなく、又出來さんと試むべき事でもあるまい。併し窮鼠は猫を嚙む。桂内閣も萬已むを得ざる場合には、其の位地の力を極端迄利用し、伊藤公が、如何なる片隅に押し詰まるかも知れぬ。故に伊藤公其人に取りても亦た一大危機であつたと觀察することが出來る。

そこで如上の事情よりして伊藤公對桂侯との間に妥協は出來たのである。固より此妥協は桂侯の方より持込んだに相違はないが、伊藤公も渡りに船であつたに相違はない。伊藤公の特色は如何なる場合に於ても騎虎の勢に乘ぜぬといふ事である。彼は虎に跨がらんとする迄には行くが、なか〳〵跨らぬのである。彼は進むことをも知つて居るが又止ることをも知つてゐる。そこで大隈伯の方では、伊藤公の風を滿帆に孕んでいよ〳〵桂内閣退治の快擧に取り掛らんと企てたけれども、船が港を離るる頃には伊藤公の風は已に凪いたのである。而かも此間に立て山縣公の如きは最も其力を致したのであらう。世間では山縣公と伊藤公は所謂政敵で兩立せぬといふけれども、それは只一面を見た話である。彼等は爭ふ點に於ては魔氏と微伯も啻ならぬのである。然しながら、五十餘年來死生の間を共にし來れる友人としては、彼等はマサカの時には互に相助け相合することを忘れぬのである。そこで彼等の關係は一種特別の關係で、敵のやうでもあるし、味方のやうでもあるし、時と場合によつて其調子を取ることは容易でないのである。而して其れを知るものは外の人にあらずして、恐らくは彼等相互であらう。そこで政友會及び進步黨の領袖等が互に兩黨聯合して桂内閣蹂躪の勢を見つゝある間に、葉山の桂侯別莊に於て桂侯

山縣公、伊藤公等は相會して妥協をしたのである。此妥協は地租案撤回同樣となつて、桂內閣は何の爲めに議會を解散をしたか、今更ら此上もない不面目であつたが、面目不面目は彼等の問ふ所でなく、兎に角妥協によつて政局を收拾することに話がついた。そこて伊藤公は元の伊藤公となり、政友會は元の政友會となつた。但し伊藤公が元の伊藤公となる事は難儀てなかつたが、政友會が元の政友會となることは容易でなく、總裁專利といふ議論もあり、黨員の沸騰を來した。然し大勢に於ては右の通りに定まつたが、彼等は其欝憤を臨時議會に於て洩らし、教科書事件について菊池男を攻擊し、取引所問題について平田男を攻擊した。而して此等の部分的攻擊によつて張り切れる許りの癇癪玉を破たのてある。只氣の毒なるは進步黨てあつて、彼等は全く出し拔かれたのてある。而かも彼等の出し拔かれたるは半ばは其自業自得と見るの外はあるまい。何故なれば政友會は、其本質に於て彼か如きものであるからである。

妥協はしたものゝ此儘ては政界は一步も步けぬのである。そこで一方には桂首相の辭表提出となつたのである。我等は其理由について深く語ることを得ぬが世間で噂する所によれば、到底伊藤公が元老と政友會總裁の使分けをされては政府に立てやりにくいといふ事であつたといふ事である。已に單純なる黨魁として伊藤公を待つことが出來ぬといふ事であれば、彼を單純の元老として待つの外はない。即ち桂侯は伊藤公を斯くあるべく希望したのであらう。伊藤公は何處まで政黨に執着したのてあるか、我等は之を知ることは出來ぬのてある。何故なれば伊藤公の當初の目算は殆んど悉く齟齬したからである。其相談相手と賴みたる渡邊子はヒステリーを起して背き去り、いやても應でも力になると思うて居た星亨は刺し殺され、直參の面々は殆んど一人として彼の思ふ通りの働をなすものなく、或は落膽し、或は失望し、已に名を黨籍より削るものあり、削らざるもそれと殆んど選ぶ所なきものもあり且つ又三十五年の末進步黨との聯合以來政府の正面の

反對に立つたが爲めに、當時の警視總監たる大浦の爲めに、陣笠議員は隨分擾亂され脱黨除名の關係から追々其の數が減つて來たのてあつて、先づ政府に地租案を撤回せしめ、手を下げて和睦を乞はしめた丈が手柄てあつたが、それも伊藤公の手柄といふことを得るも政友會の手柄といふを得ず、政友會より見れば先づ退潮の時てあらう。彼は萬難を排して何時までも政友會首領で居るか、さうすれば一度和睦しても再び內閣と戰はねばならぬ。よし桂侯が內閣を明渡しても再び貴族院に據り、嘗て伊藤公を惱ました同じ手段に輪をかけて公を惱ますことは覿面てある。それて伊藤公もこゝは考へたに相違はない。彼の如き思慮ある大政治家として固より考へねばならぬのてある。其結果は終に伊藤公が樞密院議長となり、樞密院議長の西園寺侯が政友會總裁となつて交代し來つたのである。事實を略叙すれば、七月一日に桂侯は辭表を出し、七月六日に伊藤公は御宸翰を忝うし、其十二日には彼も決心して恩召に從ふといふ事を復命したのてある。而して十三日には彼は樞密院議長となり、其隨伴として山縣公、松方侯二人も樞府に入つたのてある。

世間ては此事についていろ〳〵の議論もある。我等は其議論について一々審判を試むるものではないが、只此の一事は苦痛でもあつたらうが伊藤公として最もよき決心てあつたと思ふのてある。伊藤公は由來創業の人てある。即ち第一の總理大臣、第一の樞密院議長第一の貴族院議長、第一の韓國統監、凡そ何事も最初に手を着くべき役前は彼に來たのてある。彼は政黨に於て何等の貢獻する所なきが如しと雖も、實は彼の爲すべき事は爲し盡したのてある。我等は伊藤公の政黨に於ける施設について不幸にも彼の理想の行はれざりしを斷言するに憚らぬ。模範的政黨は或意味に於て腐敗の模範的政黨に變じたのてある。然しながら若し其功過を論ずれば、或意味に於ては板垣伯よりも大隈伯よりも政黨に對して、伊藤公の貢献が、短かい期間に拘らず、フルートフルてあると明言するに遲疑せんのてある。其第一は、彼によつて初めて、政黨とは紀律

獨裁あるものとなつたのである。彼が總裁專制は彼の理想程には行はれなかつたけれども、其主義は明白となつたのである。今日に於ては最早や總裁專制といふ事に疑問を挾むものはない。彼は又政黨と國家と其利益が一致せぬ場合には何時も政黨の利益を犠牲とせねばならぬ事を闡明したのである。それも其通りには行はれぬが、主義としては明白となり而して或程度まで行はれ得たのである。此二つのものは我國政黨の歷史に於て實に重大なる事である。之に加へて彼によつて政黨が初めて總ての階級に跨り、總ての人物を網羅するものとなつたのである。固より出たり入つたり其變化常なく、而かも所謂從來政黨に關係なかりし新分子が、彼の風を聞いて加入したるものは殆んど彼と共に若くは彼に先つて罷め去りたるに拘はらず、兎に角に政黨の門戸は彼によつて初めて開放せられた。彼が政黨の首領になつたが爲めに、如何なる人も政黨に入つて肩幅狹くなる考を去り、如何なる人も政黨に勝手に加入するといふ事になり、又政黨の連中も然かすべきものと思うて來たのである。いはゞ從來の政黨は只一種の階級に限つたものであるが、彼によつて總ての階級に及ぶやうになつた。固より彼一人の力のみといふ事が出來ぬが、政黨の門戸開放は彼に負ふ所多しといふも溢辭ではなからうと思ふ。

若し此場合に於て、彼が只罷めた許りであつたならば政友會は非常なる打撃を受けたに相違はない。處が幸にも彼は適當なる繼續者を見出したのである。何故に彼は西園寺侯を繼續者に据えたのであるか。從來樞密院議長であつたものを猫兒を移す如く之を移して、自ら代るが如きは、或點からいへば隨分高手的の遣方である。我等は此點に於ては最も西園寺其人に對して賞讃の辭を惜むことは出來ぬ。樞密院議長の椅子より當時の政友會總裁の椅子に代つたのは薔薇の床より茨の床に代つた位のものであつた。彼にして星亭ならば之も當然である。然し何をいつても西園寺侯は貴公子である。彼は星亭の如き猛獸遣ではない。彼は自ら求めて顯要の位置に立たうといふ事もなく、只何處まで

も受身的に政界を渡つて來たのてある。自から樞府を退きて先輩伊藤公の爲めに椅子を備ふるは、必らずしも難からぬのてある。併し自から一言半句の苦情なくして伊藤公の後釜に据るの一事の非常なる獻身的精神を要したるとは、苟も當時の政機に通ずる者の驚嘆する所てある。世間ては山縣門下には人が多いが伊藤門下には人が少いといふ。多少は知らぬが、伊藤公の門下に西園寺侯の如き人のあつたのは趙甌北が所謂「士少能臣第一流」といつた如くてあつて、或點からいへば非常なる掘出し物といはねばならぬ。思ふに西園寺侯は伊藤公の境遇を氣の毒に思ひ、又は伊藤公に對する他の連中の仕打を面憎く思ひ、一片の俠骨若くは反撥骨禁ぜんと欲して禁ずる能はず之を引受けたのてあらう。蓋此總裁を得たのは政友會の歷史にとつては非常なる仕合せてある。世間ては伊藤公のみを知つて西園寺侯を知らなかつた。西園寺侯が總裁となつたといふても世間ては藁一本程の重さをも加へなかつた。然し首領を失つた政友會は兎も角も之て心を安んじた。全く安んじたてもあるまいが安んぜざるを得なかつたのてある。

然しながら政友會と桂內閣との關係は相變らず水臭かつたのてある。政友進步聯合の夢は双方の領袖共に未だ全く覺めなかつたのてある。加藤高明などは相變らず兩黨聯合に骨を折つたのてある。而して西園寺侯の態度も其當座は別に之といふこともなく、何れかといへば桂內閣を有苗に譬へて隨分激しい事をいつた程てあつた。此調子て行けば兩黨聯合も全く行はれぬ事もないと進步黨の連中が相變らず鼻毛を延ばして獨合點をしたのも必ずしも不思議てはあるまい。それから時運は急轉直下して日露の關係いよ／＼切迫となり、第十七議會の招集はこゝに、兩黨結合の正味を試めす時機となつたが、これは不幸にして河野議長の勅語奉答文によりて解散となり、三十七八年にかけてはいろ／＼のことはあるが、詰り擧國一致て黨派として論ずべきことは多くなかつた。そこは流石に日本國民てあつて、戰爭中の議會は政友會も進步黨も殆んど選

ぶ所なかつた。勿論小問題については政府とも衝突し、いさかひもしたが、大體については何等の異る所もなかつた。只こゝに注意すべきは此場合に於ても、原、松田等と大石、犬養等との間には以心傳心相通じ、一度機會があれば公然の聯合をなすべき準備を怠らぬと同時に、他方に於ては西園寺侯の立場はいよ〳〵明白となり、桂内閣と西園寺侯との間には自ら一種の氣脈の通じて居つた一事である。而して此氣脈を通ずる機關は恐らくは原敬であつたらう。原は一方には桂内閣に、一方には進歩黨に結んだやうな形跡がないでもない。此れは梶原景時逆櫓の筆法で、何れに轉んでも只は起きぬ準備に相違あるまい。只だ此れが爲めに甘々と乘せられたる進歩黨が氣の毒である。而して之も半ば彼等進歩黨員の自業自得であらう。何故なれば彼等は政友會を根本的に解釋し得ぬからである。

ポーツマウスの條約は實に天下の不人望を結晶した條約であつた。處が此の條約について公然贊成の言を放つたのは西園寺侯である。政友會の多數は固より此條約に對して不滿であり、又中には止むを得んと思うたものも此反對の機會を利用して、政府を叩き潰さねばならぬと敦圉いたものもあつたであらう。加藤高明の如きも西園寺侯の贊成演説を以て甚だ不得策であると呟いたといふ事である。加藤の如き外交的知識を有して居るものは、此條約の止むを得ぬ事位は充分承知であらう。それをかくいふのは政黨の立場として不得策であると思ふたからであらう。然らば西園寺侯は何の苦む所あつてかゝる事を明言したか。我等は最早や彼が桂内閣の相續者たることを自覺したからであると判斷する外に適當の判斷はないのである。政友會員は最初西園寺侯を迎ふるに一個の木偶王として迎へたかも知れぬ。然るに此木偶王は時としては威靈をあらはすことを見て、彼等は一驚一喜したのである。西園寺侯は伊藤公程に積極的に黨に臨まんのである。然しながら彼は受身としては實に非常なる鞏固な地歩を占めて居るのである。彼の眼中には政友會總裁の椅子は、吸ひ殘したる卷煙程の價値もない。彼は何時でも之を

捨つるを惜まぬ。又惜まぬといふ事を如何なる場合でも發表することを辭せぬのである。彼の黨員に臨む態度を見るに諸君若し予が命を奉ぜずとならば是亦可也。余は何時にても總裁の椅子を去るべし。乞ふ諸君隨意にせよといふ風である。處が西園寺侯にやめられては政友會は萬事窮すてある。原や松田も其他の人も居るてあらうが、然も一黨の勢力を内に引纒めて行くものはない。內の纒まりは出來ぬとしても、當分合持ちもよからう。けれども外の纒まりはどうであるか。西園寺侯は此點に於て殆んど他に比類なき位置を持て居るのである。彼は門閥家である。即ち清華の名家である。彼は宮廷に於て最も緣故深くある。彼の實兄德大寺侯は四十年來　陛下の親臣である。而して彼は又畏多くも少年時代に於ける　陛下の御相手である。彼は何時にても至尊に咫尺すべき資格を自然に具有して居る。且又彼は普通の公卿と違ひ、伊藤公、井上侯とは最も親近の仲間てあつて、彼の相續者は毛利先公爵の第八男にして、彼此の事情よりして長閥とは離るべからざる關係を有つて居る。而して彼は公使ともなり、大臣ともなり、又臨時總理大臣ともなつたのであるから、彼は已に總理大臣の候補者たるに於て何人も異存はないのである。かゝる總裁に逃げられては政友會はたまつたものではない。それで駄々を捏ねるのは政友會の駄々ッ子ではなくして寧ろ其總裁である。會員は寧ろ總裁から駄々を捏ねられるのを怖がつて居る。最も烱眼なる西園寺侯は已に此の幾微を看取して居るのてある。そこで彼は平常は政黨に對して恰かも金持の若旦那が番頭に一切を委すが如く、原を番頭とし、松田を添役として一切の切り盛りをさせるが、イザとなれば自ら出て其大方針を授け、大體の差圖をするのである。そこで伊藤公の所謂總裁專制の主義は彼によつて最もよく行はれたのである。直言すれば伊藤公は多く語つて少しく行ひ、西園寺侯は少しく語つて多く行ふたのである。

西園寺內閣は所謂政友會の第二次內閣である。不運なる進步黨は、今回も出し拔を喰つたのである。大石入

道などの運動は全く後の祭りであつた。西園寺侯は殆んど前桂内閣の政策を踏襲したのである。之は踏襲せねばならぬ時機であつたのみならず、踏襲するが最も便宜であつたからであるに相違ない。そこで踏襲で卅九年の議會は過ぎたのである。此場合に於て彼が外務大臣として加藤高明を失うても尙動く所なく、堅く執つて鐵道國有を斷行したるが如きは天晴大宰相の器度を備へたものといつてよい。加藤は强請る丈は充分强請つたが、とう／＼强請り切れずして自ら蹴いたのである。加藤にして三菱の緣故がなかつたならば第二の渡邊無邊として立つより外はなかつたらう。然し彼は三菱といふ大金持を後立てとし、又些か世と推移るの見識があつた故に、再び倫敦に舞ひ出すことも出來たのである。

話、前に戻つて西園寺侯も自ら政局に立つて初めて貴族院なるものゝ厄介なることを實驗したのであらう。之を實驗すると同時に貴族院に手を着けねばならぬことを考へたのであらう。否な彼は豫ねて貴族院操縱の秘策を、胸中に藏し居たかも知れぬ。然し彼は手をつくるには最も多く便宜を有した。彼は京都の公卿である。そこで公卿出身の議員は彼に於て自然に融合すべき因緣がある。彼は又少壯貴族の仲間と風流徵逐の關係よりして其心を收攬するの便宜もある。そこで彼の食指は貴族院に向て動いたに相違はない。元來、衆議院は君の爲すが儘に任す、貴族院は乞ふ乃公に一任せよといふのは、桂侯對西園寺侯の間に於ける不文の憲法であつたかも知れぬ。處が四十年の議會にはいよ／＼郡制案を出して其利鈍を試みたのである。これは西園寺侯にとつては非常なる失策であつたかも知れぬ。何故なれば此問題については當然山縣公を敵とせねばならぬからである。然し此案の提出者は西園寺侯よりも寧ろ其番頭たる原敬であつたかも知れぬ。何れ

にしても西園寺内閣は貴族院に向て手を突き込んだのである。而して之が西園寺内閣の壽命を縮めた一の動機となつたかも知れぬ。

我等は政友會の歷史を語るものであつて、西園寺内閣の歷史を語るものでない。そこで總ての事は拔きにして、ともかくも西園寺侯が如何に貴族院に心を用ひたかといふ事は、遞信大臣山縣と大藏大臣阪谷子との辭職後、やゝありて貴族院より千家男と堀田子とを拔き來つたといふ事ていよ〳〵確めらるゝと思ふ。兎も角も西園寺侯は政治の大機大用については甚だ俊敏であるが、一般のアドミニストレーションについては寧ろ無頓着の風があつて、各省大臣をして勝手にやらしめたのである。詰り一言にしていへば、總理大臣としての器度はあるが、總理大臣としての勉强が足らぬといふに歸着するのである。それは半ば體力の問題であるから强て望む譯にも行くまいが、例へば行政整理は打切などゝいふ警語を吐いて議員の膽を奪ふ事はするが、懇々切々議員を說きつけて、釋然了解せしむるが如き海面倒な事は、彼に於ては、爲さゞる所であつて、又彼の性質として能はざる處かも知れない。彼是非難はあるが、西園寺内閣は第一次政友會内閣よりも、より多き失體は暴露せなかつた。其内閣の不人望は六分通りは不景氣が手傳つたものであつて、必ずしも悉く之を内閣の罪に歸することも出來ぬのであらう。外交の非難もあつたが之も辯解すれば幾分かは辯解すべき點もあつたらう。何は兎もあれ、四十一年の總選擧は彼等の注文通り、彼等に於て行はれ、百九十三名の議員を得たれば、之を前回の總選擧即ち三十七年の總選擧に於ける百三十名に比すれば非常に盛運であつた。かく過半數を占めたからは、此内閣は萬々歲であるべき筈であつたが間もなく西園寺侯は辭表を提出したのである。彼の就職が電光石火であつたと同時に其辭職

も亦青天の霹靂であつた。折角總選擧までなし、折角過半數の黨員を得て、之から仕事をせねばならぬ時になつて忽ち辭表を提出するは隨分聞えぬ話であるが、其聞えぬ所に又妙味もあらう。西園寺侯にあつてはかゝる多數を有つて政府に立つには敵よりも味方に困つたであらう。世の中に何時も困るものは敵よりも味方であるといふ事は、政界に多數を引廻はしたものゝ常に感ずる所である。そこで彼は寧ろ外壓內動の勢に迫られてのだれ死をなすよりも、其優勢なる黨員を擁して、其勢力を保持し、以て豫め再擧の計をなしたであらう。これは善意の解釋である。當時の事情は、如何に止らんとするも止る事は六ケ敷かった。實業界は鋒を揃へて反對したからである。若し普通の徑行に出づれば、政友會は四十二年度の議會に於ては桂內閣に喰つて掛るが當然であらう。世間では桂侯 西園寺內閣を毒殺したなどゝいふ者もある。之は固より取るに足らぬ妄說であるが、兎にも角にも西園寺內閣の倒れたのは桂一派の仕業である。とは黨員等の考へた所である。然し西園寺侯は政友會なるものゝ本領をよく知つて居る。今更ら桂內閣と喧嘩をしたといつて政友會に何の得る所があるか。固より桂內閣を傷くることも出來やう。然しそれよりも自ら傷くことが多いといふ事は彼の特に計考したる處である。そこで彼は必ずしも御用政黨ともならぬが、又反對政黨ともならぬ。出來る限り桂內閣の政策を翼贊して行くのである。桂內閣は我等の政綱を實行したからといへばそれで澤山である。彼は斯くの如くして黨員を繋いで居る。そこで今日の政友會は御用黨の損害なくして殆んど御用黨の利益を占めて居る。彼等が自分で內閣を組織した時よりも地方遊說などには便利であらう。又其門戶の繁昌は總裁の閑地に就た後から却て增加したのである。それは取りも直さず總裁は再び要地に就くとを豫想しての事と思はれる

のである。而して西園寺侯及び其首領株も恐らくは斯く思はせて居るのであらうと察せられる。今日の政友會の政策は鬼の居ぬ間の洗濯で、今の中に精一ぱいに地方の地盤を固めんとするより外ないやうである。これも彼等にとつては得策かも知れぬ。彼等は貴族院に手を出すことは今尙出したくはあるが、出せば多少の危險があることを感づき、出すに出されず、引くに引かれぬ狀態にある。そこで若し他日戰爭が起れば、衆議院よりも貴族院の分野に於てゞあらう。然しさういふ事が起るや否やは今尙未判の問題である。

我等は政友會の十年間の歷史の終りに達したのであるが、今日に於て政友會の組織を觀察して見れば、所謂幹部なるものは甚だ薄弱である。原や松田は表面の幹部ではなくして、表面の幹部は死せる噴火山の杉田が占めて居る。今日に於て所謂幹部の働きは只中央通信機關といふに過ぎぬのである。政友會の今日の如く大をなしたる所以、又大をなしても非常なる不紀律に陷らぬ所以の一は伊藤公の遺策たる門戶開放、總裁專制に外ならぬが、更らに一つの理由は、地方團體組織である。彼が如き大政黨は到底之を區分せずして結託することが六つかしい。それで、之を人によつて區分するか、土地によつて區分するか、又議論若くは利益問題によつて區分するかといふに、いろ／＼の利害がある。人によつて區分する場合には人と人との爭となる、又利益、趣味、議論によつて區分すれば黨派內に黨派を作ることになる。現に政友會に二日會なるものが出來て跋扈したといふ活ける證據もある。只地方によつて區分する事は寧ろ淡泊である。何故なれば九州といひ、或は東北といひ、其地方には種々の人も居り、種々の議論もあるので、之を一つの單位と見做す事は結託の上に於て害少くして利益が多い。然るに政友會は右の如き地方的聯邦制を取る。若し面倒な問題が起

れば、地方團體の決議に任せる。地方團體の決議を司るものは主もなる二三子なるが、いよ〳〵面倒なる時は各地方の代表者に相談する。そこで總ての事が甚だ容易に纏るのである。これが政友會の今日の大をなして其大を失はざる所以であらうと思ふのである。

政友會の人物としては星亨去つてより後甚だ落莫である。所謂伊藤公直參の士、末松、金子、都筑などいふ人々は何時になくやめ去つたのである。星が死んだ後は政黨の分子も甚だ振はぬのである。只今日に於ても政黨分子としては松田を推し、直參分子としては原を推すのである。松田は一方に於ては不得要領の人といはれて居る。又溫厚の長者といはれてゐる。が彼は見掛程の仙人でもない。政黨の泥水を二三十年も飮んで居れば釋迦でも孔子でも人並のものとはなる。松田も兎に角政黨の首領株として多年其中に泳いで來たのであるから世間の思ふ程の仙骨でもない。彼は一身を處する上については必ずしも巧みでないとはいへぬ。一人前の立場は何時でも失はぬのである。只彼は何時でもハツキリせんのである。然し彼の特色は寧ろ間色にあるかも知れぬ。彼は星亨の時でも原敬の時でも脇師としては缺くべからざる男である。只彼は如何なる場合にも自らイニシエチブを取ることもなく、又取らんとした事もない。此十年間に於て兎も角も男を上げたのは原敬である。彼は伊藤公の政友會組織の當座は總務委員ではなくして幹事として招かれたのである。彼の位置は當時に於ては左程重大なるものではなかつた。處が彼は其年の暮、星亨の後を承けて遞信大臣となり、渡邊子の事業中止問題について大喧嘩をやり、段々其頭角を現はして來た。彼に多とすべきは他の直參連中が、二の足を踏む時に、彼は諸足を踏んだのである。之れが彼の直參であるに拘らず、又紛々たる吏臭を帶ぶるに拘らず、終に有力者となつた一原因であらう。

のみならず、彼はハイカラとか新智識とかいふ連中のやうな輕薄才子ではない。虚榮家でない。彼は星亭の如き高壓力を持たぬが多少の徹底力を有して居る。いはゞ彼は要領を得る男である。小理屈も捏ねるが、一度請合つた事は概してアテになる男である。總ての社會に於てアテになる人程大切の人はないが、政黨に於ては別して大切である。何故なれば政黨には證文もなく、證券印紙もなく、いはゞ只口約束ばかりての世界であり。又それてあるから多くのものは只口ばかりて放つて置くのであるから、其中にアテになる人があれば、其人は内からも外からも重寶がるゝに相違はない。星の有力なる一の原因も亦アテになる所にあつたが、原も亦其アテになり樣は違ふが、アテになる點は星に次て彼を擧ぐる外はあるまい。而して之が原の有力なる一原因である。又淸貧は濁富に若かずとは政黨に於ける今日の情勢である。原は濁富とはいへまい。然し彼は淸貧ではない。自分は金持でないにせよ、兎に角に金の融通は出來る男である。黨員から養なはれたる板垣伯と黨員の幾分を養うた大隈伯の相違を知るものは政黨のうちに於ける金錢の勢力は、普通の商人のあひだよりも、もつと光あるものなるに心附くてあらう。原は又此點について松田などゝ比べものにならぬ。松田は龜の如きものである。手を出しても頭を出しても僅かに我身を守る迄である。其以上の事は彼には出來ぬ。然し原は融通がつくから隨分之を振り廻すことが出來る。又彼は非常なる勉强家である。人よりも少く働いて多くの分前を得やうなどゝいふ事をせぬ。彼の缺點を語れば、いくらもあるが、缺點は世間が知つて居るから寧ろ長所を擧げた方がよからうが、内務大臣の彼も或點までは成功したのであつた。内務省の屬僚は、彼ほど早く譯の分る男もなく、決斷する男もなく、又決斷の大體を間違はぬ人もないとい

うて居た。彼は老朽の役員をドシ〳〵やめて大學出身の若手を用ひた。極言すれば寧ろ媚びたといはるゝ程てある。兎に角彼は一個の大臣としては立派に及第したのてある。かゝる狀態てあるから彼は人の上に立つには、其狹隘なる點、其冷酷なる點、其理窟ッぽい點、其無愛想の點、其南部鮭の如く鼻曲にして意地惡き點、其他多くの缺點あるに拘らず、敵も味方も西園寺侯を外にしては彼を相手として政友會を待つより外はないのてある。然し西園寺侯が總裁を去らねばならぬ場合には、彼が後を引受くるや否や、又引受けても西園寺侯に劣らぬ働をなすや否やは全く保證の限でない。

結論として一言すれば、十年間の政友會は功罪相償ふといつてもよからう。其多數を擁して政界を腐敗せしめた點に於ては恕すべからずてあるが、兎も角も彼等は國運の進行に伴ふ政黨てあつた。彼等は自ら確固たる方針はないが、國運の進行に追隨して行つたから、其結果は詰り積極的方針を把特したも同樣てある。彼等は增稅の必要の時には增稅黨となり、軍備擴張の必要の時には軍備擴張黨となり、開戰の必要の時には主戰黨となり、媾和の止むべからざる時には不精無精てあつたが兎に角之に默從した。そこて彼等の行動にして國運の進行を阻害したと認むべきものは殆んと多くないのてある。此點については伊藤公の理想も不用意の中に舉つて來たといつてもよからう。かゝる理由て政友會は日本第一の多數黨となつたのてある。此理由さへ失はねば今後第二流以下の政黨となる氣遣は必ずしも近きにあるまいと思ふ。（完結）

懷疑と努力

金子筑水

何と言つても今は廣い意味に於ける懷疑時代てある。表面から見れば、所謂進取、活動、新思想、活事業が社會の各方面に溢れてゐながら、裏面に立入つて見れば、あらゆる疑惑が知識ある階級の人々を支配してゐる。人心には凡人的方面と凡人には甘ぜられない知慧の兩方面とが備はつてゐる。果てしのない懷疑に見切をつけ、凡人生活に返へつて、實際上の業務に全心を打ちこんてゐる間は、暫く懷疑の惡夢にも襲はれないが、知慧の方面が頭をあげたからは、我々は限りない疑惑に苦しめられる。人生が疑問と不可思議とに滿ちてゐるかぎり、懷疑は遂に避けがたい運命てある。

然しながら、其の理由を以て人生を疑惑の塊と斷じ、永久に懷疑的狀態に浮沈するが人類生活の本意てあらうか。人生は假令疑惑の塊てあるにしても、多少にても之れを解からうとする意志もなく、懷疑は到底全人生てあるかの如く見做して、生涯を疑惑の翻弄に委ねるが果たして生活の本意てあらうか。古來の極端な懷疑家の例に徵するに、初めは現實に立脚した懷疑も、中頃から現實を離れた空想に傾き、次第に疑惑の深みに沈んて、遂に絕望と死とに終らない者は少ない。懷疑が吾人に避けがたい運命てあるにしても、唯しかたがない、已むを得ない、どうする事も出來ないとのみ思ひこんて、運命の前に呆然一身を投げだして、積極的には何等の努力を試みることも無用てある如く悲觀すべきてあらうか。在來の努力の失敗に懲りはてゝ、人間の知慧や努力も、人生の懷疑に對しては、到底空てある如く疑はなければなるまいか。歷史も人生も、或は空なものと疑はなければなるまいか。

無論此の種類の疑惑は、容易に打消されない。事實の上に疑惑が解かれないかぎり、相當の知識を備へた者は、絕えず此の種類の懷疑に苦められる。我々は之れに對して殆ど爲す所を知らない。此れに充分の理由

もあれば根據もある。然かも顧つて思ふに、果たして永久不斷の懷疑が全人生であるとすれば、人生はもはや吾人に失はれたものである。生活の意味は、遂に死に過ぎないものになつてしまふ。斯くの如き人生觀は、如何にしても我々に堪へられない。人類の過去の努力が如何にあらうとも、又假令我々の努力が失敗に終らうとも、永久不斷の懷疑に安んぜられないが人間の本性である。我々は如何にしても全懷疑の不安狀態から脱しやうと努力する、又然か努力せざるを得ないのだ。此の發憤此の努力は、初から必然失敗を豫想した無益な行爲に過ぎないものであらうか。日常生活の事實から言へば、深い疑惑に包まれながらも、我々は尙一種の希望に活きてゐる。吾輩は飽まで其の努力を續けやうと主張する。此の立脚地からふり返つて見ると、懷疑者の態度にも缺點があり、其の不安狀態から脱しやうとする努力にも正當な理由が有るのではないか。

讀者よ、誤解してはならぬ。懷疑の不安狀態から脱するため、一切の疑惑に目をつぶつて、再び無智の動物生活に返へれとは、もはや今日の我々には無理な注文である。又今の一派の學者の主張する如く、人類をすべて凡人視し、甚しきは無智の動物と同一視して、我々には最早何等深甚な疑惑も無いやうに裝ふは、これも正しい學説とは思はれない。人間が複雜な欲望に滿ち且知識を備へたかぎり、複雜な懷疑は遂に人生に免れがたい運命に相違ない。强ひて諸の懷疑に眼をつぶつたとて何の利益が有らう。古來の宗敎家や哲學者は、正當に人類の疑惑とすべからざるものを疑惑とした傾きが有るにもせよ、欲望の發展には限りがなく、欲望が複雜になればなる程、實生活上ます〳〵複雜な疑惑が發生し來たるべきは自然である。萬古不易の人生觀を造出して、永久に人生の懷疑を拭はふと欲するなどは、最早古人の夢に過ぎない。人生の存する所永久に懷疑が存すると覺悟しなければならない。

斯かる懷疑に對して、人類のあらゆる努力は、果たして全然無効なものであらうか。どうも輕卒には斷定されない。全懷疑者は一概に之れを無効である如く疑

へど、我々はそこに尚熟考すべき點があると思ふ。過去人類の歷史は、一概に之れを空といへば其れまでゝあるが、觀察點を換へて考へれば、小さいながらに、少なくとも人類に取つては、其の努力は決して全然無効であつたとは言へない。之れを全然無効であつた如く疑ふは、今人の眼識を以て古人の努力の結果を推した誇張的獨斷ではないか。過去の文明は假令粗末であるにしても、吾人の先祖が苦心に苦心を重ねた努力の產物である。無智の動物生活から今日の生活に至るまでの徑路は、全く人類自身の努力の跡ではないか。此等の努力を全然無効といふは、例の空想上の獨斷ではないか。全懷疑者は動々もすれば、在來の宗教も哲學も全然空であつた如くに放言する。昔の宗教や哲學が今人に架空と見え、今人の懷疑を解くに足りないのは、むしろ當りまへの事實ではないか。精しく當時の一斑文明を考察して、さて歷代の宗教史又は哲學史を味へば、古來の宗教又は哲學は、今日から見て如何ばかり粗雜であるにしても、其の時代々々には多少の貢獻を致したものに相違ない。此時を全然空である如く放言するは、未だ眞に宗教史又は哲學史を味はつた者とは言へない。勿論過去の哲學や宗教が、過去の人類の苦んだ全體の疑惑を解き得たかどうかは疑はしいが、少なくとも其の懷疑の一少分は、其れによつて解かれたに相違ない。懷疑は大にして、努力の結果は小さい。小さいながらに、少なくとも人類に取つて、其の努力は、決して無効であつたとは言ひがたい。

假に過去人類の努力が全く無効であつたとしても、我々には尚一縷の希望が存する。過去の努力の無効は、必しも將來の努力の無効を預言しない。懷疑者と雖も、斷然斯かる預言は肯て爲し得ない。事實上我々は不知不識此の種の努力を重ねてゐる。斯くの如き努力は、全懷疑者の目には、或は僭越至極なものとも見えやうが、終生全懷疑に包まれた不安の生活と比較して、其の得失果たして孰れてあらうか。吾人が情意的生物であるかぎり、又吾人が絶對虛無觀に陷らないかぎり、事實上日常生活に處するに、我々は絶えず多少の努力

を重ねてゐる。人類の性質上吾人は到底斯く努力せざるを得ない者ではないか。

從來世人が人生といふ事を考へる態度を見るに、大方は其の自然的、物質的方面に重きを置いて、却つて其の意識的精神的方面を疎外してゐる。自然的方面は無論人生の土臺であり半面であり、之れを疎外するの不可なるは言ふまでもないが、多少深く人生を考へた者に取つては、意識生活が人類生活の特色て、人生といへば、主として其の複雜な精神現象を意味する。人生の進歩も退歩も疑惑も努力も、主としては主觀の精神生活内の事、人生一切の開展は、自然現象的方面に求められるよりは、主として其の精神的方面に求めらるべきものである。精神生活の分野は、我々に取つて、限りなく廣く、限りなく深いものと感ぜられる。我々はそこに自然界よりも更に廣大無邊の別天地が存すると思ふ。人類のために運命つけられた天地が此處に存するとしか思はれない。

然るに此の世界は、初から永久不變な形に於て靜止してゐる世界ではない。或定まつた永久不變の法則と實相とを備へた世界ではない。人類が創造し、人類が改築し、人類が自由意志を以て經綸し來たつた人類の世界である。人生が將來如何に開展すべきかは、ひとり人類の努力如何によつてのみ定まるべきもので、決して之れに定まつた未來の運命はないと思ふ。人生をザインとせずしてヱルデンと觀るも之れがためではないか。

然るに從來の全懷疑者の態度を見ると、動もすれば、或一定不變の絶對眞理が客觀的に存するものと思ひこみ、消極的態度のまゝ、斯かる眞理に遭遇しがたきを悲むといふ趣がある。人生の秘密が不變のまゝ何處にか隱れてゐるやうに思做す氣味がある。これがそもそも誤解の根底ではないか。人生は人類が造つて行くものとすれば、我々の疑問とするものが、永久不變の形に於て、どこに隱れてゐるのではない。吾人は吾人の意志を以て、人生を當に如何に造るべきか。そこに眞の疑惑は存するのである。彼の永久靜止の秘密に疑ひ

を懷くといふが如きは、まだ古來の空想上の懷疑を夢みる者に過ぎない。

人生を如何に造るべきか。我れを如何に造るべきか。これが實際上の最も眞摯な又最も切實な懷疑である。斯くの如き懷疑は、切實な生存肯定の懷疑、懷疑のための懷疑ではなくして、生存のための實際的懷疑である。勿論我々は斯かる懷疑のために苦しい思ひをする。されど如何なる手段を取つても、又如何に失敗しても結局孰れの方面へか自己を造つて行かないわけには行かない。孰れの方面へか努力せずにはゐられない。彼の空想的懷疑家は、何處にか客觀的に潛んでゐる秘密の暴露を消極的に待つてゐる。いつまで待つたとて、懷疑の和ぐをりがあらうか。實際的懷疑者に取つては、斯かる懷疑は畢竟空想に過ぎない。彼れは自分の努力のために疑惑し、努力の結果の上に其の疑惑を和げやうとする。全體の態度に甚しい相違があるではないか。

現代に於ける我々の懷疑は深く且大きい。我々は如何に己れを造るべきか。眞に惑はざるを得ない。我々の努力には失敗もあり間違もある。其の成功する所は、眞に徼々たるものであらう。然かも其れが人生の常態であるかも知れない。今のところ自分にはさうしか考へられない。世人は懷疑に對する努力を空想と呼ぶてあらうか。空想の實現が人生の歷史ではないか。繰返へしていふ。人生は定まつた運命の機械ではない。人類が空想を實現して、之れを改築し創造するところに眞の人生は在ると思ふ。神秘も不可思議も、畢竟我々がみづから造出すものではないか。

須らく積極的なれ

（勤儉貯蓄と利用厚生）

鎌田榮吉

勤儉貯蓄は無論宜い、勤もよければ儉もよい、貯もよければ蓄もよい、之を守るは元より宜いが唯その恐るゝ處はそれが消極的の考になる事である、否此勤儉貯蓄といふ文字それ自身に既に消極的意味が附着し居

るから、之を守るとしても餘程無害有効に行はれる樣にせなければならぬ。

消極論者の眼を以て見ると凡て以前と變つた事といふと惡く見える、特にその富力の增したる結果、人々の生活の度が高まり、衣食住の費が多くなると最も惡く映ずる、奢侈に流れるとか豪奢に傾くとかいふ、が只それ丈の事であるならば奢侈豪奢は無論よいことである、唯惡いのは身分不相應といふ事で、之は個人に就いて言ふも然り、一家に就いて言ふも然り、社會に就いて言ふも亦然りだ、社會は精神的進歩と物質的進歩とが兩々相待たなければならぬのだが、その所謂物質的進歩とは何ぞやといはゞ無論富力の增加である。

富力の增加とは何ぞやといはゞそは生活程度の高まり、衣食住の裕かになる所に現はれるものである、いや獨り衣食住のみではない、道路も善くなり橋梁も善くなるといふ樣に凡て社會的設備の整ふた所に於て亦現はれものだ、然るにそれ等を見て直にこは奢侈なり豪奢なりといつて悲觀する人々あり、無暗に誹謗を逞うするのは大に間違つた事と思ふ、此樣な事を今頃言ふのは稍々陳腐の嫌なき能はずだが、而かも如何せん現に此陳腐極まる間違つた考を抱き居るものが所在に存在するに於ては、矢張り稱道してその妄を啓くことをも勉めねばならぬ、

併し正しき意味に於て奢侈、豪奢を忌むものならば吾人もそれに同ぜざるを得ぬ、即ち或る少數の階級が驕泰を極めて錦衣玉食廣厦に身を寬うするに反し、一般人民は粗衣惡食矮廬に身を苦むる如き低き生活狀態に居るべく餘儀なくせらるゝのは最も惡いことてある、宮殿は華美を盡し寺院は莊麗を盡すといふ樣に所々に大建築物の行人の目を驚かすべきものあるに拘らず、一般人民は痛ましき豚小屋然なる茅屋に住むといふ有樣は往々にして見る所、東洋の衰亡國に於て特に多く然るを知るのである、心淺き旅行家は動もすると徒らに此種の大宮殿大寺院あるが爲に、其國を直に富めりとすることもあるけれど、それは甚だ觀察を誤つたものだ、昔から暴君汚吏あり、一國の富度の如何を

顧みず、收斂を事とし民間の財力を枯渇しても尙ほ、それを以て一大宮殿一大寺院を造營するといふ事は、何處の國にも珍しくない事で、之が爲に幾多の紛議を釀し來つて居るのである、此の如きは勿論奢侈豪奢の偏に忌まるべき部類のものだ、けれどもそれとは趣を異にし、國民全體の富力が加はり、その結果それが個人々々の衣食住に現はれ公共の設備に現はるゝに於ては何等の不可かあらう、否逆推して偶ま以て一國富度の增大を見るのだから却つて祝すべきである、此の如きは却つて第二の新しき生產を爲し新しき貨殖を促すべき勢力となるのだから甚だ喜ぶべきであそ、

それをしも顧みず、偶ま地方を巡回して、農民が白い飯を食つて居るを見ては驚き、蝙蝠傘をさして居るを見ては訝り、直に奢侈呼ばはり豪奢呼ばはりして慨嘆するのはいけぬ、成る程個々の人に就いて見たら、慨嘆を値するものも有らう、が施政者としては其樣な個々のもののみを見てはいかぬ、須らく全般の上に周密なる觀察を下し、一國の大計を過らざる工夫が肝要である。

一國の文明は單に物質的進步のみでは行かぬ、精神的進步と相並ばなければならぬ、否物質的進步は精神的進步に伴ひ、精神的進步將た物質的進步に伴ふといふ樣に兩者の間に相卽不離の關係あるものだ、して見れば唯無暗に消極的に貯蓄をし、粗衣粗食をしやうとて到底いかぬ、何故なれば人間は第一精神的に何等かの刺激が無くては動くもので無い、働くのはそれに應ずる相當の快樂を取らんが爲である、然るに只大に働き大に貯蓄せよが衣食住の慾は謹めといはれた日には、迚も孜々として額に汗する勢力は起つて來ぬに定まつて居る。隨分是れ迄は消極的の御法度、所謂る儉約の御布令なるものが幕府時代には頻出されたものだが、これによつて如何に人民が懶惰になり國家の困難を見た事が有つたかは、歷史に往々證せられる處である。

徒らに形を見て、土地を抵當に入れるものが多くなつたからいかぬなどともいふ、これも前に述べたと同

樣の意味て、個々に就いて言つたら惡くもあらう、が一方に入れるものあれば受くるものもある譯だ、只入れるものの殖えたのを見て惡いと評するのは速斷に過ぎる、惡いといふにはそれが或る少數者の手にのみ收めらるゝか否か、それを先づ見定めた上てなければならぬ、土地兼併といふ事はいかぬ、若し土地を抵當に入れるといふ現況が、偶まそれに誘致さるものてあつたなら始めて不可といふ斷定が下せるので、それならばそれに應ずる處置を取りその傾向を沮止せねばならぬ、が只土地を抵當に入れるからとて騷ぐには及ばぬ。何故かといへば金融機關の漸次に整つて來た爲に一般にそれを利用して資金の運用を敏活ならしめた結果かも知れぬ、農工銀行は何の爲に起るか、實にそれを目的として起つて居るのてはないか、それ等を能く考へねばならぬ、土地の抵當必ずしも惡くは言へぬ、又抵當に入れるものが眞に當局者の憂ふるが如く懶惰てある爲の結果とするも、然らばそれを受けて金を貸すものは勤勉なものてなければならぬ、懶惰者に奪つて勤勉者に與へる、何等の惡成績を見ぬてはないか。

之を要するに勤儉貯蓄論甚だ宜しい、個々の家に就いて言ふならば甚だ宜しい、が國家全體の政策としては如何か、遣り樣によつては或は宜いかも知れぬ、とはいへ政府自らがそれを奬勵し廻つてはいかぬ、內務省が主となつて、縣官郡吏市町村役場の公吏等をして說き廻らしむる時は思はざる弊害を生ずる恐がある。特に政府の手て貯金を說き勸むるに於ては、銀行へ行けといふよりも郵便貯金へといはざるを得ぬ。政府として勸めるには如何しても信用の確實なものを擧げねばならぬ、勢民間のものよりも政府のものをもいふ樣になる。兎に角それも宜しとし、人民は相率ゐて郵便貯金に赴いたとする。が今こそ不景氣だとしても、いざ景氣回復となつて急に資金の運用を要することが有る。その際には續々貯金の取付をするから政府は之が爲に大破綻を爲すことがあらう、特に況んやそれを鐵道資金に廻すに於てをや、その金は全く固定して仕舞うのだから、民間の必要に應じて隨時に拂渡すことが

出來ぬ、如何なる禍を見るも知れぬ、非常に危險な事と思ふ。

元來儉約一方で金を貯へるといふ、所謂儉約貯金をいふ事は、一個人としても老人の仕事である、既に生產を止めたる老人の仕事である、それを國家がやつてはその國家は決して進步はせぬ、國家がその資金を生產的に消費するを勉めず、唯消極的に蓄積するとあつては、それは即其國家の進步の止まつた徵候である。近き適例は佛蘭西だ。佛蘭西は非常な貯蓄國だ、資金も甚だ裕かだ、がそれで何もせぬ、民間から言へば政府に貸し、政府から言へば他國に貸す、只貸すのみを勉める、それも生產的不生產的を問はず、唯利率さへ高ければ何處へでも貸す、利子のみ食つてそれを收めては元金に廻し貯蓄をする、又貸して利子を取つては貯蓄をする、貯蓄に次ぐに貯蓄を以てするのである。積極的に事業をする精神は全然消耗して居る、その極度に至つては子供の繁殖を迄恐れて一向ら財產のみを增さんとする。人間を多くして貨殖を計るなら分つて居るが、人間を少くして而かも貨殖を計るといふ事は分らぬ、斯る國は衰亡に陷らざるを得ぬ、さればこそ佛蘭西は既に第二等國に陷り、將に又第三等國にも陷らんとしつゝある、斯の如くにして止まずんば其遠からず西班牙邊と比肩するにも至る事と思ふ。

佛蘭西の國勢不振は職として消極的貯蓄の弊によるのだが、而かも初を顧れば政府が非常に之を奬勵したのである。即ち夫の獨逸戰爭に破れた結果として、政府は此方面にのみ多大の力を用ひた、無論敎育にも力を用いた、獨逸の國運は敎育の力によつて進步した、佛も亦然らざるを得んといふ樣な事で遣りは遣つた、が只單兵急に必要な學問をのみ注ぎ込まうと考へて體育などを顧慮せなかつた、佛蘭西の學校には敎場はあれども運動場はないといふ有樣である、究竟詰込主義の敎育はあるけれど、それは只頭を太くするばかりの敎育で國民の元氣を養ふ譯にいかぬ、否益々元氣を消磨し行きて國勢は愈よ衰へるに至つた、ところが此處にいふ勤儉なる語には矢張り元氣を委靡せしむべき非

常に消極的な悪い意味が附き纒つて居る。

私は豫ねて言つて居るが、別に利用厚生といふ語がある、此四文字は旨く解釋を附けると甚だ宜い、特に此文明の今日に適用するに最も宜い、即ち之は物の用を利して生を厚くするの義であるが、二十世紀の文明は何ぞといはゞ、それは實に物の用を利するに存する、天然の力を利するに存する。例へば蒸氣の用を利して汽車汽船を作り、電氣の用を利して、電信電話を設くるの類で、依つて以て生活の程度を高め人類の幸福を增進せんとする最も積極的のものである。彼の勤儉貯蓄たるや此利用厚生の精神と相待ち、並び行はれて初めて遺憾なきものである、貯蓄は無論せねばならぬ、がその貯蓄たるや、資力を活用し生産力を增加し、依つて以て厚生の道を圖らねばならぬ、

成るべくならば日本人は最も滋養分ある食料を食ひ、最も堅實なる衣服を着け、最も堅牢にして且つ美觀なる家屋に住居せねばならぬ、此等のものは唯個人個人の富力を代表するものだが、別にエレクチヴウェールス、即ち集合的富を代表すべきものには道路あり、溝渠あり、橋梁あり、その他一切公共的の設備は皆これである、此種のものをも十分に完備せしめて吾人はその最善最美なるものとならしめたい。

道路、溝渠、橋梁の類は、都會では昨今幾らか進步して來て居るが、田舍へ行つては實にひどい有樣である、早い話が昨今流行し來れる彼の自働車を驅つて旅行したら如何で有らう、一步郊外へ出れば直にその通行を許さぬ危險な橋が有るのだ、ワーレスなる人が魯西亞の狀態を書いていふ「魯西亞までと稱する道路なる者は、我英國に在りては道路の敷地と言はねばならぬ、我英國にては橋梁は河の兩岸を結合すべきものだが、魯西亞では河の兩岸を分つものだ」と、之は酷評であるけれども、彼は言ふ「事實田舍へ馬車で行くとその橋は馬車の重量に堪えぬから、橋あるが爲に我々は態々馬車を降りねばならぬ」と。

現在の日本は亦此酷評を免れぬものである、が富力の充實せぬに漫に此等の設備をのみするのは無理であ

る、けれども行く々々は遺憾なく此の如き道路、溝渠、橋梁等を初とし所謂コレクチヴウェールスの發達を圖らねばならぬのだ、之が即ち生を厚うする所以である。戊申詔書を拜讀するに非常に積極的の發展を勸められてある、勿論消極的の側もある、が決して世間て兎角言ふ樣な消極的一方の御主旨てはなくて、實に積極的に民力を進めるといふ事の方が主となり居るものてある。若し民衆にして此積極的方面を閑却し、徒らに消極的態度に陷ることが有らうか、そは第一に此詔書に悖る罪人とならねばならぬ。

當局者の誠意は申迄もないが一種の學風とてもいふか、極消極的の知識の入り居る部分があるから、折角難有き詔書の聖旨に接しても、所謂先入師となつて、兎角自分の信念の方にのみ解釋を付け行く傾がある、其樣な事では甚だ不都合な結果を生じ畏れ多い次第であるから十分注意が望ましいものだ。（談話筆記校閲濟）

政友會論

△政友會論

田川大吉郎

◎政友會の運命は早晩桂侯掌中の花てあらうと、僕は夙うから想ふて居る、尤も此傾向に對して防戰的態度を執る者が、僕の知る限り原敬、岡崎邦輔の二君てあらう、若し二君の力、政友會の滔々たる尊大思想を遏止し、彼をして建設當初の理想に復らしむることが出來れば、それこそ二君の大なる成功で、日本の憲政史は永く二君の名譽を顯彰するで有らう、然し政友會の近狀は、到底二君等の力の能く爲し得る所に非ずと僕は窃に想察して、それだけ失望致して居る

◎元來政友會には黨派的根性が薄い、從つて僕は政友會が多數を恃んで一黨專斷の風を議院に逞しうするとの世説を認めない、今日、少數の悲しさに、往々此種の評論を做す手合をして他日政友會今日の位地を得せ

しめば、其横暴放恣の狀態は、決して今日以下ては無いと信ずる、政友會には割合に無邪氣な所がある、淡泊な所がある、又政治上に不注意無經綸の結果、氣のつかねぼんやりした所がある、政友會は太した込入つた遠慮ある惡策を構へ得ない、

◎こゝに政友會の怨せらるゝ所がある、同時に政友會の頼母しくない所がある、同時に政友會の膨脹する所以がある、一言以て之を蔽ふ、僕は政友會の今日ある所以を、其重寶がらるゝ點に在ると思ふ、一定の主張なく、只權者に與みし、權者の思ふまゝに驅使せられ、其間表裏反覆の跡を、顧みて一笑に附し去る、勇力餘り有つて理義の見、良心の明なき團體は、團體として最も使ふに易き重寶なる團體である、政友會の本領は之に近い、

◎此故に歷代の權者が絕えず政友會に秋波を注ぐのは、政友會が衆議院に於る多數黨だからては無い、それも一つの理由だけれど、重なる理由は其使ひ易い所に在る、使ひ易い、それて誰にも使はるゝ、政友會からいへば誰にも與みする、政友會の重寶なる所以てある、それて政友會は今天下に重寶がられて居る、內閣からも重寶がられて居る、御用商人からも重寶がられて居る、地方選擧民からも重寶がられて居る、然し乍ら誰からも尊敬せられない、重寶といふことと、尊敬といふこととは全然別種のものと見える、悲しい哉、議員二百名、衆議院過半數の勢力を擁して、反つて天下冷笑の府と爲る、僕は政友會の爲にも、又衆議院の爲にも、之を思ふごとに特に悲嘆慷慨に堪へない、

◎餘の議論は且らく舍き、僕をして政友會の性質に付き一言せしめよ、僕は政友會を以て政黨と認めない、之を倶樂部と認めて居る、多數人相會し、特に政治の目的を以て相會して居る、其心持から言へば政黨たるに近い、政黨で無くてはならぬ筈であるけれど、其實質に就て觀察すれば、主義があるのでは無し、政治的目標があるのでは無し、一旦政權を握つた場合に斷然として施行すべき新なる經綸政策があるのでは無し、又其經綸政策の爲め辛苦し努力して居るのでは無い、

彼は團體として政治的の趣味言動に乏しい、從つて其各黨相觀るにも多くの罣礙區別が無い、此を以て改進黨の人をも迎へる、國民協會大同倶樂部の人をも迎へる、戊申倶樂部の人もござれ、又新會の人もござれ、將た無所屬の人もござれ、八方無障礙、一切無差別、何でもござれである、政治的團體とは此樣なものでは無い筈である、而して其有るまじき筈のものが有る、そこに政友會が政治的團體としての缺陷がある、僕は政友會を政黨と認めない、只倶樂部と思ふ、一種の政治的戲言笑語の倶樂部と思ふ、俄雨の最合傘、暫くにして別れ行くべき運命の定まつて居る集團と思ふ、勿論、總ての政黨には幾分の倶樂部的性質は有る、それて念の爲に辯ずるが、僕は政友會を倶樂部の性質が勝ち過ぎた政黨と思ふ、のみては無い、實は倶樂部の性質ばかりの政黨と思ふ、此點に於て其政黨の名を、名を借して實を蔑して居る團體では無いかと思ふて居る、

◎桂派と比べて見れば、其理由若くは色彩が極めて明白に爲る、世間では桂派を政黨を認めないものと難癖をつけて居る、現に西園寺侯まで其樣な意向を抱いて居るらしいが、皮相の見、僕は其呑氣さ加減を惜まざるを得ない、桂派は進んで政黨の名を冒さないけれど、明かに政黨の實を具へ、自ら政黨的行動を致して居る、早い話が彼等の寄合は確に同志同系統の結合である、決して雜然紛然、誰でもござれの倶樂部的集團では無い、又其内閣を組織するや、必らず斷じて行はんとする一定の方針政策がある、前内閣時代の事は問はずとする、今期内閣の如き、其可否に對する贊成反對の意見は別として、内閣を襲ふ所以から、内閣に居る所以、議會に對する所以、官僚に臨む所以、國民を率ゆる所以、所謂頭の頂邊から、足の爪先に至るまで、一種の流儀が明白に照り輝いて居る、西園寺内閣に對して西園寺内閣を覆へした所以の理由抱負經綸が昭かなること日の如しである、桂派には確かに此或ものがある、西園寺派には此或ものが無い、此或ものゝ有るものが即ち政黨である。政黨の名は無くても政黨である、此

或ものの無きものは政黨で無い、西園寺派は即ち政黨で無い、

◎政友會は何日まで其政黨ならざる狀態に甘んぜんとするか、僕は其桂派に降るの日が即ち其政黨たる形體實質を具へるの日だと思ふ、政友會にして一日永く其即かず離れざる今日の狀態を續ければ、それだけ政友會が政黨たるの機緣をおそくする、一旦思ひ切つて桂派に降れば、其時以後、政友會の方針は、桂派の鎔爐の中に鍛かれて、それで正しく桂一流の政黨に爲つて了ふ。

◎僕は多年敬意を表し來つた自由黨の末路が此く爲り了るとに萬斛不盡の恨みがある、然し降りみ降らずみ陰晴不定なる今日の天候は太だ迷惑千萬のものである、政友會が此く爲り了つても天候が一に定まる愉快は、其恨みを補ふに餘りがある、僕は寧ろ之を希望する、

◎僕を以て桂派の旗持を爲すものと爲す勿れ、僕は今日の桂內閣を以て遙に前日の西園寺內閣より佳と爲す者であるが、然し乍ら陸軍政策、滿洲政策に對する桂內閣の方針は僕の服せざる所である、僕は之を以て方今の政治上の重大なる問題、實は唯一の向背點と信ずる、此點に於て僕は到底桂內閣の謳歌者では無い、

◎政友會が桂派に下る時、原、岡崎氏、及び其與黨は如何にするか、或人はそれはモー分つて居ると言ふ、僕は分つて居ないと言ふ、此は僕が二君等に望みを屬することの深さに過ぎて居る譯かも知れない、然し僕は此望みの空夢に歸せさらんことを希ふて居る。

△政友會論

靜觀居主人

政友會の特色は何か仕事を爲やうとする所にある。あの政黨が今日の如き大を致し、且つ比較的統一のあるのは、總裁の任に當る人が總理大臣になつて國政を執るといふ見込があるからだと論じた人がある。成程それに違ひはない、然し夫れ許りでなく、黨て以て何か

仕事を爲やうとして居る。提携とか妥協とか肝膽相照とかいふのは殆んど政友會十年來の特色である。西園寺内閣は二年以上も續いたが、伊藤さんの政友會内閣は八箇月しか持てなかつた、それ故此十年間に政友會が國政に當つたといふのは至て短かい。外の政黨に比べれば二年でも三年でも、やつた事はやつたが、議會て過半數を占むる政黨としては其年限餘りに短い。外の國てはさうてはない。然し一方から見れば、内閣を組織せなくても、殆んど政權には與つてゐない事がないといふ姿てある。それは外てもない。例の提携、妥協、肝膽相照だ。そこて今度も、何時政友會が政權を取るだらうとか、若くはどういふ主義政綱て行くだらうとかいふ問題よりも、どう提携するか、どう妥協するか、どう肝膽相照すかといふ問題の方が注意すべきこととて、又實際注意されて居る。即ち今度政友會が其持前の技量をどれ丈けあらはすかゞ面白いのてある。

處て私は、總裁を初め、政友會の有力者達は、今の當局者の手足になつて働くといふことは不本意に違ひないと思ふ。物を貰つて雇兵になつて働くといふ事は益々不本意だらうと思ふ。さうしなくてはならぬやうに餘儀なくされて、外から利用せらるゝ目に逢ふのは不本意の極に違ひない。本意はどうしても過半數の政友會は、過半數の政友會らしく、一手て政權を取り、一手て國政を運轉して行かうといふ事にあるだらうと思ふ。それてあればこそ、どうかすると手段を選ばずして焦せる。過半數さへ保てば、詰る所政權に緣があると思ふ。獨りて政權が握れると思ふ。そこて衆議院丈けてはいけぬ、貴族院にも手を延ばし、同黨同臭味の人を貴族院からも半數なり過半數なりを得たいと働いてゐる。畢竟一手て政權を取らうといふのが政友會近來の志てある。其點ては山縣一派、桂黨の仲間あたりと大いに衝突すべき因緣がある。又隨分際どい軋轢を內々やつた事歷もある。私は、政友會は結局、其欲する通り、一手て政權を取るやうになるだらうと思ふ。が現在事實として明かなるは、政友會は過半數の力を

以て、而かも在野黨だといふ事である。衆議院丈けでまだ貴族院に手が伸びぬ爲めかといへば、そればかりでもない。それには日本特有の歷史があり、前例もあり、據り所なく超然內閣に政權を渡さねばならぬといふ仕義もあらう。が、其超然內閣の下に立つとすれば、どういふ具合に之と提携するか、妥協するか、若くは肝膽相照すか、人の注意を免るゝ譯に行かぬ。そこが又一番面白い處で、興味のある疑問である。

處で、私は、今年は多分妥協するだらうと思ふ。少くとも半妥協位までは行くだらうと思ふ。それは西園寺が欲するからでもない、又原、松田其他の領袖株が願ふからでもない。何であるかといへば外でもない。桂はどうしても政友會に斷念が出來ない、あの勢力を向ふへ立てる事が出來ない。從來の提携、妥協、肝膽相照は、或は政友會の方から求めた歷史があつたかも知れぬ、が今度はさうでない。自分で政權が取れぬ以上は間接なり隱密なりに利權を持たうといふ卑劣の考の人も政友會中にないとも限らぬ。が今度は桂の方で未練が殘つて、其心の引力で惹き付けて、提携、妥協、肝膽相照さうといふ力の方が何だか少し强からうと思ふ。

政友會の大會の演說では、日本には未だ政黨を無視するものがあるから困るとか、それだから一層心を勵ます必要があるとかいふ意見が多かつた。然し其實、今日の政治家で政黨を無視するものなどはありやしない。據り所なく、據無視するやうな仕組の上に乘つかつ許りり處なく無視して居るやうな事をする人間が居るだ。桂も決して無視して居らぬ。一視同仁なり何なり矢張り視て居る。視て居る中で一番好きなのは政友會である。又獨り好惡の上のみからでなく、政友會に傾かねばならぬ因緣も大いにあらう。どうあつても桂は政友會に未練がある。若しあの人が軍服を着た人物でなければ、西園寺の前か後かに政友會總裁になる人である。それで、あれほど新政黨で据膳を据ゑても箸を取らぬのは外でもない、一口喰へば政友會が逃げる。政友會に逃げられぬ爲めに片方の据膳はどうしても喰

はぬといふのであつて、此一事で以ても、政友會に對して未練のある證據とならうと思ふ。

桂がこれまでやつて居る説明、並びに今度の議會に對して出さうと思つてゐる財政案の中には、官吏增俸の財源の一件もあり、税法整理の財源の一件もあり、又大變心配の種になつてゐる國有鐵道の中途半ばなる後始末に對する桂の經營計畫もあるが、私の考では多分之は西園寺に通じてあるに相違ないと思ふ。どうかした傳手を以て、西園寺に通じ、どうかすると、西園寺は承知してゐるかも知れぬと思ふ。といふのは財政には西園寺は散々しくじつた。西園寺も其れを承知してゐる。だから、宜しく賴むと桂がいへば、私だけは賛成て御坐る位はいはねばならぬ義理合であらうと私は思ふ。且又桂が政友會に思召があることは西園寺の頭の中に立派にある。されぱといつてあの人はそんな事を嫌がる人てない。て其事を念つてゐても、それは承知であるといふ返答を與へるだらうと私は思ふ。そこで内々は已に妥協が出來て居るだらうと思ふ。然しそれが表向になる時に、どういふ風に桂が持込んで、どういふ風に政友會が引受けるか。之れにはいろ〳〵な事件が附帶して起るかも知れない。けれども大した事は起らぬに相違ない。修正——そして妥協といふ位の處であらう。

終りに今一つの問題がある。それは外でもない。妥協だか提携だか出來て、肝膽相照すと、其肝膽の照らし賃をどうして貰ふか、又呉れるか。其れは秘密の問題で一寸分りにくからうが、人はみんな目を附けて居るから、今に分りませう。

△政友會の現在と未來

島田三郎

政友會はその創立十年の紀念として派手な集會を開いたが、之は名を紀念會に假りてその實示威運動を行つた事と思はれる。政黨の示威運動とは妙な命名だが、政友會に取つて此必要無いてはない。元來政治なるも

のは他の冷靜なる學術的研究とは趣を異にし、勢を制する必要があるから、從つて又その力を示して他を吸引する必要もある、政友會が紀念會の名を以て此集會を開きたるは、一には其自ら誇る所謂大政黨の觀を示し、他の去就不定の人物を引寄せる手段として至極妙であらう。

政黨は單純なる理義の研究的協會でないから、此點からして勢力の必要も亦入用で有らうがその根柢に理義の上に立つ所の牢乎たる主張が無くば、その集めた多數及び作つた勢力は之を何の地に如何に用ひんとするか、此點に於て予は政友會に向つて解すべからざる疑問を抱いて居る。政友會の現政府に對する關係は如何、政友會は政府以外に獨立する政黨なるか如何、獨立する政黨としても政府黨か抑も反政府黨か如何、自己に確信する主義主張ありて、多數を擁してそれを政府に行はしむるの抱負あるか如何、或は取りて政府に代り自らそれを行ふの自信あるか如何、此等の點に關して茫洋として殆んど見ることが出來ぬ、若し此等の自信も無く主張も無きもので有らうか、漫に黨員の多數を誇つたところで、その所謂多數並にそれより得たる勢力を何れの方法に用ふべきか、是れ局外に居る吾人の知る能はざる所であるが、恐らく政友會の議員諸君と雖も之を知らぬであらう、果して此の如しとせばその誇る所の大政黨の實は何處に存するか。

大と多とは文字の既に異なるが如く意義も亦異なるものである、人は如何に多く集會するともその中に確乎たる信念が成立して、感情を同うし主張を同うし希望を同うし精神を同うする者でなくば、是れ群居といふべくして團結とは言ひ難い、從つてその頭數如何に多くとも之を稱して多數政黨とはいへるが敢て大政黨とはいへない、若し人口の多數を以て言ふならば、印度は三億ある、之に對し英國は四千萬に過ぎぬ、けれども人は英國の大を語るが印度の大を言はぬ、予は斯かる觀察をを以て政友會の大政黨たるに首肯が出來ぬ。昨年の總選擧には政友會は百七十有餘の多數を得たから、絶對過半數に至らぬとも優に議會の最大多數

であつた、若しそれ丈の頭數の中に主義、感情、希望、精神の確乎たる一致あり、透徹したる政策が成立したならば、僅に二箇月の後、議會に多數を有せざる桂系統に內閣を明け渡す必要はない、然るに此多數黨は形式に於て議會の最大勢力たるに拘らず、上下の信望は殆んど地に落ちて仕舞ひ、平素政府に柔順なる銀行家商業家も尨大なる豫算過多の公債には反對を唱へ、元老も國民も此政策の一變を希望したる結果遂に內閣の交迭を見るに至つた、此の如く總選擧に得たる多數の勢力が當時現存し居りし內閣を支ふる力だに無かつたのを見れば、今日過半數を得たる政友會が政權を左右するの勢力となる事は甚だ疑はしくはあるまいか。或るものは斯く評するて有らう、昨年五月に得たる議員數は前よりも增加したけれど過半數には至らなかつたが、今日では過半數を制して居るから百事成らざるは無いと、併しながら政友會の過半數を得たるは今日に始まつたものでない、十六議會に於ては總數三百に對して百五十五を得て居り、その後又增して百五十八に至つた事があり、準政友會員を合せればその以上に達した事も有るのだけれど、遂に之を以て政權を左右する基礎とは認められなかつたのは何故である、言ふ迄も無く此多數が決して上下信認の實質を有しなかつた爲であらう。若し英國のそれの如く、衆議院の多數の背後に眞に國民の勢援があり、その黨の主張する所が眞の國民の輿論であるならば、假令區々の反對が貴族院に有るとも結局その進路を妨げ得ぬので有る、然るに今日に於ては貴族院が容易にその進路を遮り、而して國民が之を見ても敢て公憤を發せぬのは何に因るか、是れ外觀に於て多數を制し居る政黨が眞乎國民良心の反射とは認められず、從つてその多數の意見が直に國論とは認められ得ざる故である、既往の成績を見るに、政友會が三年間政府黨として立ち、その黨員を內閣に有して居た時の政策は國民の厭苦する所であつた。豫算の膨脹、三千餘萬の增稅公債の激增。其結果として公債價額の暴落。內外人財政の不信用。鐵道の國有。皆政友會內閣の提議し政友會議員の贊成した所である

が、健全なる國論は明に其反對を表し居り、襲に此方針を是認したる桂系統までも、輿論の趨勢に鑑みて、今日此政策に反對の方を取つて居るのである、桂内閣の爲す所は未だ識者の希望に協はず、特にその富民に便にして中等以下の社會に不利なる政策と、又税制整理を忽諸に附する如きとは國論の否認する所ではあるが、比較的に觀察して之を政友會の施政と並べ見るに此れ彼れより頗る可なるを見るのである、此一事に於ても政友會は多數の議員を有するのみで有つて、一分の信用をも國論の上に加へたとは言ひ得ない、西園寺總裁は政友會の規律あり節制ある事を說き、又一個の私を棄てゝ公に殉ひたる結果、能く國政を助けたと公言されたが、若し其自黨の内閣の定めた所は一齊にそれに默從し一言の異議なきを以て敢て規律あり節制ありと稱するを得るならば、政友會は慥に爾く言ふを得る、併しながら可否を獻替して豫め内閣の議を動かし、國民を信服せしむる善政を行はしめて、然る後黨員一齊に之を可決するの途に出てず、只服從を是れ事とするに於ては、その所謂規律節制は無意味の一致で、之を精神あるものとは言ふを得ぬ、一二領袖の定むる所は徒らに異議なく之を可決するを以て政黨の特色とするならば、其事は偶ま以て其黨に生命なき特徴也と評するを得やう。

私を棄てゝ公に殉ふ。その事は甚だ美であるけれど、果して其如くに事實も亦美であるか、日糖事件に關する瀆職事件は我憲政史を汚せる稀有の怪事で、政黨の信用と議院の神聖とを傷くる不祥の事件であるが、私を棄てゝ公に殉ふ政黨中此事に關係した議員の最も多數であつたのは解すべからざる事でないか、或るものは之を辯解して、此關係者は單に政友會所屬議員のみではなく、進歩黨にも大同派にもあつた、その中政友會議員の最も多數なのは、全體の政友會議員が亦多數だから已むを得ぬ結果であるといはうか、併ながら政友會には特に其責の重いものが有る、その譯は、抑も議院に於ける役員として、議長副議長の如きは重要の者ではあるけれども、此等は所謂年寄役で、議院の

規則に通曉し、習慣を記憶し、公平の心を持する老實の人てさへあれば之に當るを得る、が常任委員の如きは實地政治の機務を解し、運用の能力ある熟練家を必要とする、特に豫算委員長の如きは、其人を選むに經歷と信用と能力との三者を兼ぬるを必要とする、政友會は毎會栗原亮一を擧げて此任に當てたのであるが、日糖事件の破裂するに及び此栗原亮一が深き關係を會社に有し、且つ數年以前の聯絡も有るといふ事は裁判所の公文によつて明白となり、其罪惡の曝露された事は如何にも政友會に取つて信用を傷くる一大事件といふべきてある。決して之を平の議員末輩の徒が刑人になつたと同視すべき事ては無い。更に之のみては無い、改正居場法實施延期の問題に關しては、立川請願委員長も亦瀆職の刑人となつた。私を棄てゝ公に殉ひ規律あり節制ある政黨にして斯の如くなるべきてあらうか、且つ此等の被告人若くは刑人に對する政友會の態度を見るに極めて嚴肅を缺いて居る、進歩黨ては此等の徒を除名したが、政友會も大同派も本人に退會の自由を許與して別に其行爲を非斥し以て他を戒飭するの途に出なかつたが、此の如きも亦節制を重んずる黨の所爲といふを得可きか如何。

併し予が辭を正しくして政友會を難詰するのは畢竟無用の業てあるを知る、何故なれば政友會の多數なるは、其實規律を嚴肅にせずして泛々たる洋萍の徒を包容したる結果てあつて、其主義も主張も無い所が却つて多數を致す必要條件てあると思はねばならぬ、若し一定の主張あり主義あるならば各種異見の人を包容して之を羅致する事は出來ず、從つて其誇る所の所謂大政黨を現出する事は出來無いてあらう、現代の政界は理義の觀念よりは利害の觀念に支配される狀があり、國利民福の如何よりは各自自己の便宜如何を打算して進退するものが少くない、此場合に於て一定の主義政策を立て、同意の人を取り反對の人を棄てたならば勢ひ多數を羅致する事は出來ぬ、理義が愈よ明確てあれば益々分離の傾向を強くするて有らう、政友會の領袖は流石に能く此幾微を察する聰明の眼識を有して居

る。其桂内閣に對して即かず離れずの態度を取るのは、政權に夤緣して間接に便利を取らんとする議員を羅致するに便利であるからだ、そして多數の力に依らなくては地方の利益分配に與るを得ぬ、此利益分配に與らんとするものは來つて入黨せよといふ事は、是れ各地に人を得る最も有効な好辭柄であるから、政友會の四方に遊說する者が其地方の希望に從つて此種の言をなせば、泛々たる浮萍的議員は屐を倒にして來つて政友會に投ぜざるを得ぬてあらう、是れ又その多數を致す一大理由てある。予は政友會の多數を致す所以の此處にあるを見て居る、豈其主義、希望、政策、精神の一致を望む暇が有ろうや。

　政友會は之に因つて其望む所の過半數を得たから、或るものは之を以て其前途の好望洋々たる春、海の如きを想像するてあらう、けれども予は却つて前途の多難を想はずには居れぬ。何となれば地方の利益問題を香餌として其會員を膨脹したのてあるから、利益問題の實地に並び起る時には理義に依つて其緩急を裁する事が出來ぬ、といつて一齊に其希望を入れて之を行へば國費に無限の膨脹を致すこと、恰も府縣會に於て各郡の權衡を取り、一齊に土木を興して地方民を重き負擔に苦めた覆轍をば、更に國事の上に生ずる事とならう、若し又緩急を計つて其一を取つて他を棄てるならば、同會員の議員中地方利益の衝突を生じて紛爭を招くに至らう、是れ政友會が議員の多數を維持した丈て、直接政治に當らざる時にも起るべき一難事である、更に又萬一機運に際會して直接政權を取るに至つたならば政權と利權との分配を要求する多數のものに苦められて之を滿足せしむる事は甚だ難いてあらう、往年憲政黨が一致を缺いて施政の弛緩を來し、之が爲に政黨政治の信用を失つたのは、實は此欠點を有したに由るのである、理義に因つて操持堅き人物より成る多數ならば、何れの場合にも此憂は有るまいけれども、利益の香餌を賭けて泛々たる浮萍の徒を羅致した團體は、之を用ふるに於て、中に含まれたる缺點の弊を受くるを免れざる所てあらう、予は政友會の多數を得たる現

狀に於て樂觀を抱くことは出來ぬ（談話筆記校閲濟）

△政友會の未來

伯爵　大隈重信

六つかしい問だ、豫言は雜作なく出來るもので無い、深見明識と言はうか、一種の天才と言はうか、或は宗敎的に言ふなら神の意であると言はうか、昔から豫言者なるものが有つて豫言をする、併し此複雜なる人事は生滅變化反覆常ならぬものであるから、仲々遺憾なく全般に亘つて見極むることは難いものである、それ故多くの豫言は事の後から見ると或は中り或は外れて居る、況して政治なるものは最も複雜なる人々の思想の上に築かれる者だから、其現象を誤なく豫言するは至難である、併し如何に複雜であり、生滅變化反覆常ならぬものであるにしても、屹度其中には一貫して移らざる條理がある、即ち宇宙の變化の現象の中には又宇宙の不變の理法なるものが存在せねばならぬから、之を數理的に究め行けば見込の立たぬ事は無い。併し中ると外れる、中ると外れるとは一寸矛盾の樣だが實際は左樣だ、弓を彎く樣なものだ、滿を持して狙ひを定め、之ならば大丈夫といふ所で放して見ると中らぬ、意外の處で狂ひを生ずる、其他富籤を抽く、馬券を買ふ、相場を張る皆左樣だ、理窟で合つて實際で外れる、即ち中ると外れるのである。が理窟の上からでは、今日は複雜な人事も頗る科學的に綿密に研究されて來て居る、歴史學がある、社會學がある、此社會學は進化論に本づいて組織的に統一的に研究されて居る學問だ、それ故政治家は一面歴史家で無ければならぬ、又一面社會學者で無ければならぬ、希臘の古賢プラトーは政治家は哲學者で無ければならぬとも言つた、兎に角長い間の政治上の推移には一貫して移らざる宇宙の理法が見られる、それを辿れば見極めの着かぬ事は無い筈だが、其處が眼前の小事實となると兎角中ると外れる、豫言は或は中り或は外れるものと思はねばならぬ、

て先づ其理窟丈て言ふならば、佛書にも生者必滅とあり、平家物語にも奢る平家は久しからずとある、之は動かすべからざる眞理であるから政友會も早晩衰へるて有らうと思ふ、斯う言へば甚だ單純て漠として居らうが、併し左樣て有らうと思ふ。元來政黨なるものは單に黨派の上に立つべきものか、將た國家の上に立つべきものか、之を先づ明確に辨へねばならぬ政治の芝居元は如何しても國民の意思の上に立たねばならぬものであるに、今の政黨員なるものは此國民の利害、此國民の理想を蹂躪り顧慮せぬ樣てある。之を甚だ遺憾に思ふ。その證據には代議士の進退去就が一に自己の意思に本づき國民の思はくなどを少しも注意せぬ、選擧された時には或は無所屬てあり或は大同派てあつものが、自分勝手に旗色を見て政友會に入るといふ樣な事をする、之ては明かに選擧區民を欺いたもの、最早や其利害を代表するものては無いのだ、而かも彼等と國民と毫も之を怪まぬ樣てある、斯くして一院一黨論なるものも起る、之は名は代議制の樣てはあるが其實甚しく其精神を沒却したものてある、時々我國ては擧國一致といふ事を唱道し、政友會も時としては又之を繰返す、之は昔から有る事てあるが特に近來は多くなつた樣だ、が擧國一致を言へば、其結果は自然の數として一院一黨にならねばなるまい、之ては全然支那の儒者の理想たる王道論に復歸する事になる、王道論の主張は、民を愛する王者の下に服從さへすれば、國は自ら盛に民は自ら幸を受くるといふのだから、最早や斯かる複雜なる代議政體を要せぬては無いか、人心の異なる其面の如しといふ其人心がうまく一致出來るものなら代議政體は最早や無用の長物てある。此事にして成し得られんか、支那人が四千年來心力を費し來つて成し能はぬ所を、日本人が敢て成し得るといふ事になる、そして憲政の必要は無くなると共に又黨派それ自身も滅ぶべきものてある。斯かる事は既に理想とも言へない、全くの空想てある。

が世間には動もすると此種の空想が多い、或は貴族院に政黨が入つてはいけぬといふ。或は衆議院には二一

黨の對立を要する、それには少數黨が浮游して居て、時に從ひ何れへなり附くが宜いといふ。斯々る空漠たる議論が屢次現はれる、孰れも皆舞臺に現はれた役者丈の空想で、背後に潜む國民をば全然度外視した言分である、そして遂には一院一黨論、擧國一致說などいふ四千年來支那人が抱き續けた大空想で到底實行出來ぬもの迄唱導される、今日は進化論が起つて居る、最も近來に於て社會學が起て居る斯かる世の中に最早やさる空想を樂む暇は無い筈である、それだから予は政治家には社會學者を要すると思ふ。

一體國民に憲政的意識が乏しいのである、それ故代議士が勝手に去就しても見て怪まぬのである、此かる狀態で進まば、利の多き所勢の大なる所は人の集まる所だから、政友會に於ても其欲望の繋がれ得る間は人が集り行くべく、從つてまた盛になるも知れぬ、がそれには窮極が有る、後には屹度內訌が起ると思ふ、いや今日に於ても少しは萌芽が有るのだけれど未だ甚しく現はれて居ぬ、其處が所謂規律あり節制ありと言ふ所であらうか、彼黨員の地方に遊說するや、其口實としては國家全體の利害關係をば後にして、單に地方の利害に說き入り、或は港、或は水道、或は鐵道、或は學校、此等を政友會に入れば望み通りに開いてやる建てゝやると言ふのだから、自然に彼等は誘致されて政友會は膨脹するのである。

が國家は萬能力でない、然るに如上の要求を盡く容るるの日には無限の富を要する、顧れば今日の財政は如何であるか、當局者は初中終苦んで一方には事業の繰延をする、一方には頻に勤儉貯蓄を勸める、そして其貯蓄を郵便貯金の方に集めて地方の勸業銀行に費つたり、鐵道擴張費に充てたりする、金は政府に一つも無いのである、人民は又人民の方で、非常特別稅を永久に取られては困る、收稅吏の誅求が旣に甚しくつて困るとて呪咀の聲を放つ、斯かる有樣であるからいざとなると無限に國費を膨脹せしめて其要求を盡く容れる事は到底出來ぬ。といつて容れねば欺かれた側のものは不平を言ふに定まつて居る、又孰れを容れ孰れを

容れぬかを内議し、或は西に許し東に許さぬとかいふ事をすると、忽ち仲間喧嘩が起つて來る、之は其膨脹が單に利益の掛引如何にあり、國民的意識の上に存せぬ結果として已むを得ぬ事だ、即ち政友會は利害の衝突によつて必ず潰亂するであらう、先づ其機の迫る迄當分互に忍ぶ迄であるから基礎は甚だ薄弱な譯だ。

　之を歴史の上に證據立つる必要がある、それは西班牙て、西班牙には政黨内閣が行はれて居る、政黨の重なる目的は政黨内閣の樹立にある、そしてそれに依つて憲政の美果を收め樣とするには國民の勢力を土臺とせなければならぬ、然るに我政友會内閣は昨年既に總選擧をも終り、議會には過半數を有し居るに拘らず、何事ぞ内閣を明け渡して之を政黨以外に立つ官僚派に渡して仕舞つた、渡すにも渡すべき理由が有らうがそれが明かに國民の後援を有せぬからてある、さも無くば議員に半數を有するとせば即ち其背後に二千五百萬人の國民の力が潜むのだから、一二貴族院に頑强なるものが有つたからとてそれを排し得ぬ譯は無い、西園寺侯が病氣だからとて原、松田が代つてやれぬ事もないからそれを口實として官僚派に内閣を明け渡す必要は存せぬ。英吉利の内閣を見よ、バンナーマンが死んだら、直に其黨派のアスキスが代つて局に當つたでは無いか、何となれば其背後には國民の多數が控えて居るからである、然るに政友會内閣の之を敢てし得ぬのは、政友會なるものが由來國民とは沒交渉だからだ。

　西班牙も政黨内閣で形は英國と同樣てあるが實質は日本に似て居る、何時も政府黨が多數を占めて居る、之は理の當然て特に言ふを用ひぬが、然らば基礎は鞏固て容易に破れる筈はないものを、可笑しい事には直に内訌を生じ破綻に終る。そしてそれが一度び在野黨となると妙に常に少數黨となつて仕舞う、如何にも不思議てある。政友會は過半數を制したからとて高が十人十五人に過ぎぬのだか西班牙では全數を三百人とすればその二百人が政府黨、即ち政府黨は全數の三分の二を占むるのだ、それが一度政權を人手に渡して野に下るとなると忽ち百人に減ずる、そして丁度それとは

反對に少數黨が直に內閣を取る、取ると直に多數黨になり、百人のものが二百人に增す。之て察すると、三百人の內百だけは日和見黨て浮動して居る譯てある、即ち眞乎に國民を代表するに非る者がこれ丈ある譯だ、西班牙の國勢萎靡して振はぬのは甚く所此處に在ると思ふ、彼も亦光榮あり歷史ある古國てあるに拘はらず、今は大國の列から除かれて氣息奄々僅に列國の均衡の上より保たれて居るのは職として此處に在ると思ふ。而して此西班牙に偶ま我日本が似て居るといへば、如何にも旭日登天の勢、國家興隆の運に在る國に取つて甚だ不祥の樣てはあるが、如何せん事實に於て我政黨の現狀は西班牙のそれに似て居るのてある、いや選擧された代議士が漫に我意の儘に行動することは西班牙にも甚だ少き程の現象てある、此かる現象は果して眞に國家興隆の運に副ふべきものか如何か、歷史上から言へば斷じて不祥な事といはねばならぬ。

が我國民は果して何時迄も此狀態に滿足して居るであらうか、然らずして其自覺の起る時は即ち反抗の起る時である。其時には亦政友會の衰へる時である。けれども政友會にして亦國民と共に自覺し、國民を正義の下に率ゐ、己れを棄てゝ國家の大利害を中心の目的とし、之に依つてのみ行動するに至つたならば、今日多數を制して居る丈に大進步を爲すに相違なからう。

が地方に於ては今日既に救ふべからざる困難に陷つて居る樣て、政友會中でも心ある人は潛かに心配して居ると見受くる。日糖事件、屠場法案事件等に罪人を出したが、國家は之を大事と見、彼等の所行を罪惡と見たのだけれど、政友會は之を何と見たのてあるか、罪惡とは見ぬのか、見ても手を着けぬのか、着け得ぬ事情が有るのか、それは知らぬが、何等戒飭の處分をしてない。之ては政友會も危いとは多少同會員中にも分別し居る人が有るてあらう。要するに今日でも何等かの動機が起りつゝあるので、それがパッと大に起らぬのが寧ろ不思議位な有樣である。

けれども早晩國民の方で起るてあらう。何時迄も無視して居りはすまい、之が又全く起らぬ樣な國民てあつたら西班牙人と同じ事である。併し我日本人は決し

て西班人と同じ國民では無い、政友會にして早きに於て改むれば啻に政友會の幸福のみならず亦國家の幸福である、が若し之にして出來なければ噬臍の悔は必ず至る、能しや改めても時を緩うすれば勢は去つて仕舞ふ、すれば寂滅である。中るも八卦中らぬも八卦、だか理窟の上からのみ大膽に極無遠慮に言へば斯樣である。（座談筆記校閲濟）

△政友會員としての希望

子爵　秋元興朝

御求めの問題は汎く政黨といふ總論的のものなら有りますが、それを話した所で政友會員としての希望を表白するに足らない、即ち政友會といへば更に輪廓が狹くて內包が多くなるからである

殊に政友會は自分所屬の會でありますから、他の黨派に對する批評と違つて自畫自賛に終る嫌もなきにも非ずである。それて、極めて大體の事をいへば旣に先日西園寺總裁や原氏が大會で話された所で盡して居る、漠然とはして居るが、本位を國家に置き、誠實に思慮し公平に判斷し、私を棄て丶公に殉し、民權の發達を謀り、自治制の完備を期し、憲政有終の美を濟すといふ位な處であるのです。

創立十年の紀念大會を開きましたが、十年は個人として見れば長くもあらうけれど政黨として仕事をするには餘程長い星霜を經過せねばならぬから時間の上から云へば十年などは言ふに足らぬのです。元が立憲政治なるものは西洋より新に移植されたものて、我國に行はれてから僅々二十年、それ故一般國民には尙ほ十分に其眞諦が分つて居らぬ、封建制度や郡縣制度などを實驗した樣には分つて居らぬのです、それて世間往々それ等と格別の相違ないものの樣に思つて居るも少なからぬので從つて今日の處直に政友會を以て理想に近き政黨だとは言ひ得ぬてしやう。

然るに批評する方ては其樣な國狀などを一切度外に措き、唯政黨の理想なるものを主として種々言議をな

すものがあるから八釜しくなる、兎に角政友會は刻下日本に於ける大政黨の資質を具ふる所より他の政黨よりは勢ひ嫉妬の眼を以て迎へられる、從つて兎角の批評も起るのであるけれど、今日の國狀では獨り我政友會のみでは無く、他の政黨と雖も理想に近きものは認めることが出來ない、即ち政友會と雖も決して現狀に滿足し居るものでは無いそれは國家の程度が然るのだから已むを得ません。て將來を言へば國運の發展と共に我政友會も愈よ理想に近くなる樣にと發展を望んで居る。總裁既に其人を得、亦幹部に群材も居る事だから、必ず道を誤らず進歩し行く事と、我々は固く信じて疑ひません。然らば之を具體的に如何なる方面に向つて發達し行くかを語るのは六つかしい問題で、憲政施行以來日尚ほ淺く、遺憾ながら其運用は十分の處まで行つて居らぬから、單に事實のみの問題を捉へて論じ兼ねる場合も無きにしも非ずであります、外國の例を擧げて之を言へば歐羅巴の先進國に於ては其內閣の政策は主義の上に一定の標準を樹て自由貿易保護貿易若くは軍備擴張軍備縮少と云ふが如き大綱の下に劃出される樣であるが日本では未だ其域に達しない、有らゆる國政上の必要のものを提げて立つ樣である、が將來政治思想の發達に伴ひ、一の主義政見を看板に揭げて以て其細目に及ぼすことにならぬければ理想に達したとは云はれぬのですが現在の國情は未だ夫は六ッかしいのであつて、恰かも東京の商店と田舍の商店といふが如く、東京では酒屋は酒屋、餅屋は餅屋といつた樣に一種類の商業を營み得るけれども、田舍では左樣行かぬ、荒物屋風のものが澤山無ければならぬといつた樣の相違であるが、要するに伊藤前總裁も言はれた如く憲政は調和を必要とするから時の宜きに從つて調和を考へて行かねばならぬ、現在の政友會に幾多不備の點が有つても、それは國情と相待つものであつて一足飛にはゆかぬのです。

　これ以上の事は政策になる、政策は即ちポリシーであるから御話は出來ぬ。兎に角黨派を組織する以上はその黨派の發達維持を全然度外視する譯には行かぬ、

尤も非常な國家の一大事てもある時には又別問題て、眼中黨派あるを忘れる必要もあらうが、それは平時に於て言ふべきてない、國民が既に憲政的意識に富み、地方自治の成績も十分立派に擧がるに至つた後、尙ほ政友會の行動が憲政の理想に副はぬものが有るといふなら、其時こそ堂々鼓を鳴らして攻めて宜い、然るに性急なる反對側のものは動もすれば萬國の模範と仰ぐ憲政國を理想とし、更にそれよりも一二段上の標準からして批評するのは無理てある。又政黨として既に大を成した以上は自ら政權者となり憲政の本旨に協ふ政黨内閣を樹立するがよいと煽動するものがあるが、我政友會は國家本位てあるから、故なきに波瀾を起して國家を騷がすものてはない、時の内閣に失政あらば進んて自ら代りもし樣が、左も無きに於ては極めて誠實に凡ての問題を考へ精密なる調査を基礎とし而して歸納的知識に因りその意見の合するものには協贊を與へて行くが當然てある。盲從は元より惡いが盲反、又更に大に非なるものてある。（座談筆記校閲濟）

△政友會の大政黨としての價値

箕浦勝人

政友會が一黨にして優に衆議院に過半數を制し尙ほ益々肥大を加ふるの狀況に對し所見を聞きたしとのことなるが別に所見も何もない唯だ政友會の爲めに其繁昌を祝せんのみてある併し折角の來訪なれば政黨に關する一般の所見に就て聊かお話して見やう。言ふ迄もなく政黨は立憲政治の運用上必ず無かる可らざる機關てある、苟も憲政の健全なる發達を望み、圓滿なる運用を期するならば、政黨は缺く可からざるものてあると共に、又自然に發生し來らざるを得ざるものてある、世には政黨は嫌ひなりなど云ふ者もあれど最早好き嫌ひの問題てはない。或は餘り珍重なものてはないかも知れぬが仕方がない勢て必至のものてある、既に必至のものてある以上はその政黨の健全に發達して愈よ榮

えて益々大を成すことは甚だ喜ぶべきの事て忌むべきものては無い、政黨の大を成すことは無論結構てあるが、併し只一黨のみては行かぬ、苟くも憲政の美果を收めて國利民福を計らんには、只一大政黨のみありて他に之と拮抗すべき大政黨の無い樣ては行かぬ、さればとて又幾多の小黨を分立せしめて政府が自由に之を操縱すると云ふが如き有樣ては倘更百弊續出して健全なる憲政の發達は期し得られぬのてある如何しても二大政黨の對峙を要する、世に一院一黨論など唱ふるものもあるけれどそれは謬見に過ぎぬ、勿論政友會が頻りに大を加ふると云ふことは決して忌む可きことても非難すべきことても無い、政友會は政友會て遠慮會釋なくズン／＼黨勢を擴張して進むが宜しい、がそれと同時に他の政派が之と對立すべき一大團體を成し一大勢力を作らなくてはならぬ、若し一院一黨の姿を爲さしむることありとせばそれは政友會の罪にあらずして他の諸政派の不覺てある。

政黨の大を成すは元より宜しい、が只尨然大を成した丈ては詰らぬ、進て政局に立ち行政の責任に當て政見を實行する事が必要てある二大政黨の對立して交る／＼行政の責任に當り各々標榜せる主義政綱に依て政務を振作するは政黨の發達を健全ならしめ憲政の運用を圓滑ならしむるに於て必要缺く可らさるの條件てある二大政黨相拮抗して切瑳琢磨の間に發達するものてなければ健全なる發達は得られぬのてある自から主義政綱を提けて行政の責任に當り國民の面前に立て實際的に施政の巧拙を競ひ相砥礪して進む間に政黨の健全なる發達も保たれ憲政の運用も妙境に達することが出來るのてある此の作用に依て發達したものてなければ其基礎薄弱にして大に憲政に貢献することは覺束無い

我邦の政黨は頗る幼稚にして憲政の運用も甚だ妙ならず一の尨大なる政黨はあれども自から行政の責任に當らずして他の利用に供し內閣は自家の脚地を持たずして他の庇下に息ひ實に不安の位地に居る其間固より他の大政黨ありて此不振の狀態を打破するものも無い此樣な有樣を改良するにあらざれば一時尨大なる政黨

が出來ても功能は無い

要するに憲政の運用には健全なる政黨の發達が必要であることと勿論であるがそれれには二大政黨の對立して交る〴〵行政の責任に當ると云ふ樣な有樣にまで進まねば駄目だ今日既に一大政黨は出來た次きは之に拮抗すべき他の一大政黨の起ることが必要である

（談話筆記校閲濟）

△政友會の爲に謀る

中村彌六

政友會が今の樣に尨大になつたのは同會員の識者の間に餘程甘く考へられた結果だらうと思ふ、何といつても政黨は衆議院に多數を制せなければならぬ、多數を得てこそ初めて政見も行はれ、多希望も達せられるのである、此第一目的を達するが爲には當分何もかも忍ぶべしとは、段々政友會の識者の間に考へられて來た事と思ふ。之は如何にも尤もの事である、苟も政治家たる以上は如何しても自ら政權を握らなくてはいけぬ、自ら政權を握つて政見を行はんには何事を犧牲にしても必ず先づ議會に多數を制せなければならぬ。

が之は唯有數の識者だけの間の事で自餘多數者には此樣な高尚の考は無く識者の甘言に乘り唯一分の利害の打算に本づくもの、政友會に入れば直接間接に利益が得られると信じて投じて來たものであらう、利益といふにも色々ある。直接に金錢に就いての利益もあれば、選擧の上の利益もある、又位地に關しての利益もあらう、といつた風に千種萬樣であらうが、その目的理想こそ違へ等しく多數黨たるを欲するの點に於ては一である、言はば雪達摩的に成長したのである

徒らに大を成したからとて何にもならぬ、大を成すと共にいつか其目的をも遂行せなければならぬ。政友會が花々しく行動する事なく、今日まで快からざる政府に對しても陰忍して來て大を成したる今日となりては最早や其目的慾望を遂げなければならぬ事情と時機が追々近付いて來た樣に思ふ有數なる識者の慾望は言

ふ迄も無く政權を握る事である、政權を握れば自己の政見を行ひ得ると同時に、多數陣笠連迄の欲望、をも亦得させてやる事も出來るから一日も早くと思ふものの其內閣に肉迫する時機と場合に付きての考案やら又夫迄陣笠連の慰撫やら幹部有數者の苦心の程察せられる事だ政友會が彼の如きの優勢を以て而かも何時迄も倘ほ何等の施すなく、無爲にして猛然と起る時機を見出さず有らうか、それでは駄目だ强弩も放つ時に放たぬ時は魯縞をも穿たぬのみか必ず內訌も出來る然らば政友會たるもの何れの時機を利して猛然と起つべきであるか去らば其時機は此の來るべき議會歟否な〱即ち予は斷言する、丁度來年の今頃がその期であると。

何故來年と云ふ歟先づ考へて見給へ抑も四十四年は現行條約滿期の期限である、單に通商條約とは言ふ條、經濟上の事は勿論として其他に關係する所甚だ大なるものあり我國は戰爭に勝つて一等國の列に入つたといふものの現行條約の儘では稅率は協定だ、これの有る間は吾人は名實共に列强の羈絆の下に立ねばならぬ從つて眞乎に獨立國の體面を保持して居らぬ、それ故此改正を四十四年に於て成し遂げて始めて眞の獨立國となるのだ此の改正は明治維新の宏謨を翼贊し奉る最終の大事業で有ると云ふも不可なしだ

かゝる事柄を今の內閣が成し遂げたがつて居るに相違ない、又やれば桂が公爵となり大浦後藤の子爵が出來るは知れた事、又之を政友會がやるなら他日原男、松田男が出來るであらう、斯く言へば餘程此事は至難の業らしく、又實際世人は至難と思つて居るかも知れぬが、實は何も大した面倒はあるまい、今日に於ては我國勢は十分に列强に認められて居り、往年とは周圍の事情が甚だ異なつて居る、即ち甚だ我に是なるものが有るのだから左程面倒は無い筈と思ふ此の問題は重大で然かも軍人の容喙なく政黨の仕事には無此上好問題である果して政友會の手で遂行すれば必ずや體面が立派になり立黨の基礎が鞏固になると思ふ。此處政友會が功を爲すべき天下無比の天王山である、之をしも敢てせず、ムザムザ他人にやらせて袖手傍觀する樣で

は意氣地無しの骨頂である。從つて其會の前途知る可きである。

兎に角注目すべきは此の條約改正前に當り即ち來年猛然として現內閣に肉迫するか又政友會が果して內閣の椅子に凭るを得るか又天下が之をやらせるか、吾人の刮目して見るべきは實に此處に在る、政友會未來の二百三高地は來年の冬に在るのだ。政友會が內閣の椅子を占めそして條約改正の効果を收むるを得るならば、玆に初めて尨大なる彼の黨員の慾望も直接間接に恩惠に浴するを得て滿足され、有數者は上に立つて固く政權を握り天下に功績を示して一黨の基礎愈よ安全になるべし。

政友會が今日迄絕對に陰忍して來たのは敢て天下に功なしとは言はぬが、謂はゞ他人の商業に資金を調達し、幾らか利子を貰つた丈に過ぎない四十四年といつても最早や間も無い、又今から二年て議員の改選期が來る、政友會たるものは今よりその計を爲し、來るべき選擧は自らが之を行ふ、勢の非なるものが有るならば幾度でも解散をも敢てするといふ大膽なる覺悟を持たなければいけぬ、之は徒らに放言するので無い、私が政友會員であるならば屹度斯くするだらう。主義政見の我々と異なる所があるにせよ、兎に角等しく憲政の完備を期して生れ出たもの、そして折角彼れ程の政黨が出來上つたのだから思ひ切つてやつて貰ひ度いと思ふ、武士は相見互だ、必ずしも反對側に立つからとて猜忌嫉妬を以て迎へる樣の者は憲政の賊だ。

一體御互が立憲政治を標榜し政黨內閣を理想として星霜幾十變、色々劃策して來て居り乍ら今日尙ほ非政黨內閣を戴いて居るてはないか、憲政の美果を收めんと欲せば如何ありても政黨內閣に漕ぎ附ける事を第一の主眼とせねばならぬに拘らず今日の如き有樣ては仕樣がない、幾多小黨が分立し對峙して居た事ては駄目だ、暫く小異を棄てゝ、等しく大同の下に合體し、先づ非政黨の敵に向つて驀進すべきては無いか、各自小異の下に爭ふの日は先づ非政黨主義者を倒してから後てよい、此意味に於て私は一院一黨說にも贊成する、

目的としては一院一黨說を是認はせぬが、當面の方法としては必ずしも惡き事では無いと思ふ「齊一變して魯に至る、魯一變して道に至る」で、道に至る段取としては齊は先づ魯に至るも宜いでないか、

今日と雖も政黨の力を無視して到底位置の保てぬ位の事は何人も心得ては居るが、而かも巧にそれが操縱にのみ勉めて策の得たるものとして居るは是れ其人の罪にあらずして其操縱に應ずる者の罪だ王朝の昔、源平武士を交々篏制せしめて以て萬全の計としたるものも何くんぞ知らん、その任ずる所は偶ま勢の歸する所であつて遂に王權の移轉を禁ずるを得なかつたでは無いか、非政黨者の政黨に於ける亦此轍を覆まざるを得ぬは明瞭だが、只それを待つては時間がかゝる時勢の進運が許さぬ時間の點に於て甚だ不經濟である。それ故我より進んで早く理想に近かなければならぬ、平氏の壇浦の運命は定まつて居たであらうが、源氏の一族不倶戴天の仇有るを忘れ檣に鬩き平氏をして一の谷に城き扨は海に浮ばしむるの餘裕をも與へたり。一院一黨說も斯かる見地に於て意味が有る。兎に角我々の期する所は早く政黨內閣の樹立を見る事である、而して政友會は先んじて既に多數黨となつたのであるから、眞平に憲政を愛する至誠に出づるならば、目的の爲に手段を選ばず、斷々乎として猛進するが宜い。而して其天與の好機は來年に迫れり政友會たるもの猛省して可なりだ。（座談筆記校閱濟）

△政友會論

尾崎行雄

先づ**政友會の長所**をいはうならば、紀律、節制があつて、力が多いといふ事であらう。全國に亘つて地盤が堅く、又議員の頭數が多く、貴族院にまでも手が伸びて居る。又黨員中にも物の分つた、しつかりした人が少くない。人或は政友會には無定見、無主義の者が多いやうにいふものもあるが、それは日本人並といつた方がよからう。政友會員を無定見、無主義といへば、

日本人皆然りて、特別に政友會員のみさうだといふ事はない筈であるし、又さういふ事が出來るべき者でもない。

又政友會の短所をいはうならば、旗色が餘り鮮明でないといふ事であらう。然しこれは大なる政黨、其主義を實行せんとする政黨、或は政權を握り、若くは握らんとする政黨には免るべからざることであつて、政權に近く幾何の少ない小政黨のやうに旗色を鮮明にして大聲疾呼する譯に行かぬものである。是れは世界を通じて皆然るのであつて、在野黨は言語の間、聲の間に其意見を明白にするが、責任の地位に立ち、若くは立たんとする政黨は、言語や聲の上には幾分控目にする傾を免れない。

又政友會の將來を考へて見るに、世の中には、これから政友會は衰へるだらうとの意見もあるやうであるが、一盛一衰は總ての事に免れぬ數であるから、何時までも盛んにばかりなつて居ることも出來まい。然しながら之れは何れの政黨に就ても皆然りであつて、獨り政友會ばかり衰へるといふ理由は決してないのである。勿論強きものに反抗するは人情の常であるから政友會は「大」なりといふ其「大」自身の中に、他日有力なる反對者の起るべき原因を含んで居るが、黨勢を擴張すると共に黨質に注意し、時勢の變に應じてやつて行けば、政友會は衰へなければならぬといふ定まつた理窟はないやうに思ふ。



現在に於ける海外一切の狀勢殊に我國と密接の關係ある滿米問題等の消息をば最近の新聞雜誌等により若くは彼地の事情に精通する人士の寄稿により網羅し敢て江湖の參考に供せんと欲す

有望なる滿州の新工業

藥學博士　慶松勝左衞門

滿洲が租借された當時にはその開拓の爲に多くの人が滿洲に視察に行つた、が當時は事猶ほ草創に屬する時て經驗のある人も行つて居らなれば交通の便も開けては居らぬ、滿洲を是非すべき材料といふものが備つて居らぬ、それ故當時の滿洲を視て戻つて、善いといふ人が有つても之に與する事は出來ぬし、惡いといふ人が有つても亦之に與する事は出來ぬのてある、而るに今日は凡ての事情が四五年前と丸て變つて居る、汽車は開けて交通機關は備つた、實情に精通した人も澤山殖えて居る。眞に滿洲の狀態を明かにせんとならば、視察者は今日に於て多く渡航すべきてある、それが如何したものか却て寥々してその影を見ぬのは惜むべきてある、のみならず論者は往々にして四五年前の視察に前提を置いて呶々して居る、誠に慨すべきてある、然るに大連には既に二年前後藤男爵の深遠なる意見に基いて、中央試驗所なるものが設立されて滿洲の產業を調査し研究し、其成績を汎く内外に公表して企業者の爲めに有益なる材料を供給する機關が具備されて居るのてあるから、今日に於て斯の如きものを充分利用したならば、確實なる根據のある事業を滿洲に興すことは大に容易であるのみならず、夫れを吾々の切に實業家諸君に希望する所である、爰に少しく中央試驗所で調査し試驗した滿洲に於ける有望な事業を紹介しやう。

第一には酒である、委しくいへば高粱の火酒である、滿洲に於ける酒の原料は高粱である、高粱は彼地では、第一に先づその實が食料に供せられる、その一部分が醸造されて蒸餾酒が出來る、莖は燃料若くは建築材料に供せられる、玉蜀黍なども有るけれど先づ此高粱が最も多量に產するものである。價は奉天邊の市價で一石約二圓五十錢、總ての穀類中最も値の安いものだ、土人が之から酒を造ることは數百年傳來の法に依つて居る、此高粱酒は盛京省丈で約二十萬石、その他吉林、黑龍江兩省は盛京省よりも倘ほ多いから皆で約百萬石內外、東三省に於て一年間に出來るのである、支那政府は高粱酒に課税するが、第一にその原料に對して賣買税を取る、第二に製造器税を取る、之は一年幾何といふ定額があつて、その器械の實際の使用有無を問はず取るのである、第三には出來上つた高粱酒の賣買税を取る、此等の税は東三省の諸税中最も首要なるもの、恰も我國の淸酒税の如きものである、酒造の在來の方法を簡單に言ふと、先づ最初に麴を作る、それを麯子と稱する、之は大麥と小豆とを練り固め、濕氣を與へ麴室へ入れて眞夏に醱酵させるもので、四十日位かゝると麴菌が繁殖して出來上るのだ、普通此麯子は恰も煉瓦の如き長方形を成して居る、之を一年中貯へ置き、藏から出しては使ふのである。

扨てそれから酒の釀造には、第一に驢馬を使用して高粱を臼で磨く、之れを蒸しに掛け、冷却した後に前述麯子を粉韲して加へる、それを窖に入れて密閉するのである、すると極めて不完全な醱酵を起すが、窖からそれを約八日乃至九日目に出し、不完全なる蒸餾器に掛けてアルコールを取る、がその粕にはまだ多くの澱粉が有るから、更に高粱の原料と麴とを加へて前と同一の方法を繰返すこと約五回、其處で漸く全部が粕となるのである、即ち釀造に要する日數は約四十五日程、之で初めて酒が出來る、酒の取れる高は、一石の高粱に就いて約五十五プロセントのアルコール分を含む酒が二斗六升三合だけ出來るのである、舊來の此釀造法を見るに不完全の點が多い、麯子は元來麴菌の繁

殖體に他ならぬのだから價の高い小豆や大麥を用ふる要はあるまい、又眞夏は四十日長時間を費して作る要もない、麯子の原料には價の安い高粱を用いれば宜いし、又それを作るには特に麴室を設けて麴菌を培養すれば四季何時なりとも隨意に且つ短時間に作り得られる、次に酒の醸造は今迄は水を多く使用せなかつた、せないにも理由はある、蒸餾器が不完全だから水を多く使用すると濃い酒が得られぬ、それに手數も多くかゝり燃料も多く要するからである、理由は分つて居る、がその缺點は蒸餾器をさへ改良すれば十分に防ぎ得るのである、水は最も醸造に必要なもので、之を充分に用ひれば從來の如く醗酵に四十日五十日を要する事もなく、又反覆の必要もなくて、約五六日間に全部の醸造を終り得るは確かな事だ、蒸餾器は現今西洋で普通アルコール製造所に於て使用して居るものを用ひれば、燃料も少くて濟みアルコールの放散も殆んど無くて濟むから、酒の量も多く取れる、此等の主要なる改良の爲に試驗所では數回試驗を重ねた。

第一に麴室を作り、高粱を粉韲したものに麴菌を培養したのに約二日（大凡五十時間）で完全に麴が出來る、高粱は一々驢馬を使つて臼で磨くなどいふ手數を省き、加壓釜に入れて二氣壓乃至四氣壓を加へ蒸氣で蒸す、すれば約一時間で煮えてドロドロの粥になる、高粱の澱粉は普通の氣壓では糊化せぬものだけれど前述の方法でやれば容易なものだ、之を出して糖化器に入れ、冷却後、前に作つてある麴を入れ攝氏約五十度位の温に放置する、すれば約五時間の後には糖化作用が完全に終る、その液をば又冷却して攝氏廿度内外にし、別に培養しある酵母を投じて醗酵を起さすのである、斯くして約五六十時間も經れば十分アルコール分に富んだ醗酵液を得るのである、之をば直火にて熱することをせず、劃温式のアルコール蒸餾器に入れ蒸氣を吹き込んでアルコール分だけを驅逐する、すれば殆んど、アルコールを失はずに十分に得られるのだ、

扨て此方法で舊來の方法と成績を比較すると、今度は一石の原料からして約四斗の高粱酒が取れる、單に

アルコール分丈ていふも早や此丈の差がある、況んや麹の原料の價額の安いと、麹子を作つて年中貯蓄して置く費用の省けると、又高粱を碎く爐馬の不用に歸すると、釀造の時日の短縮、それに從つて燃料の少くて濟む等の事を擧げれば實に高粱酒製造に於ける一大改革と稱して宜い、以て優に舊來の方法を撲滅し得ると信ずる、此上高粱酒釀造事業に就ては之等の技術上の點よりのみならず課税の上にも多大の關係がある、といふのは前述した如く支那政府は製造器に迄も課税するのだけれど、若し我邦人が鐵道附屬地內若くは關東州內て之に從事する事になれば、殆んどその税は免れ得る、將來或は何等か之に就いての交渉が起らぬとも限らぬが、それは多分大丈夫てある、好しやどの樣な事があるとしても技術上よりして莫大な利益があるのだから何てもないが、現に奉天の鐵道附屬地內て試驗所式に則り、實驗を開始した人がある、將來此種のものが尙ほ續々殖える事と思ふ。

高粱から高粱酒を取る事は滿洲に於ての事業だけれども、今一つ日本內地に於て出來る仕事がある、それは高粱を純アルコール製造の原料として利用することとて內地に於ても大に歡迎されるべきてある、滿洲に於ける高粱酒といふも化學上から見ると只稀薄なアルコールに外ならぬ、それ故一歩進んて高粱を純アルコール製造の用に供して果して他の原料よりも有利なりや如何の問題は一應解釋する必要がある、高粱は五十八乃至六十プロセントの澱粉を含んて居る、それて實驗上の計算から行くと其澱粉量の八十プロセント丈がアルコールとなることが分つた即ち他の穀類、ライ麥、玉蜀黍など相匹敵して居て偕にアルコール製造の原料とするに足りる、それて價格は最も廉く內地に輸入しても一石三圓位て濟むてあらう現時九州てはアルコールの原料に甘藷を使用する、それに就いて今精細な數字は擧げ得ぬけれども、甘藷の澱粉量並にそれより生ずるアルコールの收獲量とを比較するに高粱の方が有利てあると思ふ、兎もあれ既に遠く獨逸へ此高粱が試驗の爲に輸出された位て、之は恐らくアルコール試釀原

料としてだと信ずる、若しも邦人が滿洲に於て高粱酒を造らぬまでも、內地に居てアルコール原料に高粱を用ひたならば面白い結果を見ることゝ思ふ。

第二には大豆油である、之も滿洲に於ける大工業の一である、大豆は滿洲に於ける甚だ產額の夥き農產物で、單に南滿のみならず北滿に於ても亦多く產する、鐵道沿線丈でも一年約二千萬坦（一坦は我百斤）を得べき概算である、之が本年一月から四月迄に大連港より輸出された高のみでも約三百萬坦、大豆から製造した豆粕の高は二百五十萬坦である、此豆粕は近時窒素肥料として最も聲價を博したもので內地でも大に用ひられると同時に西洋にも盛に出る、特に英國に向つて出る、海外へ輸出される大部分は先づ英國に行き、其處で豆粕と大豆油とに搾り分けられる、豆粕は肥料になるのみならず、家畜の飼料にも使はれて牛馬豚等に與へれば非常な營養になる、最近の英國の或雜誌によると、普通牛乳は四パーセントの脂肪を含むけれども、此大豆粕で育てた者よりは七乃至八パーセントの脂肪があるといふ事である、してその家畜の糞が又肥料に應用されるといふ二重の利益がある、此方の問題は暫く措いて豆粕の應用が盛なるに連れ副產物として大豆油が澤山出來る。

豆粕の製法は簡單に言へば斯うである。豆を壓搾して之を少時蒸し、それを型に入れて搾つて油を取るので、普通豆五十斤から約四斤の油が得られる、然るに分析の結果に徵すると豆の中に含む油分は約十八乃至二十プロセントである、之を現在では方法の不完全な爲に僅に八プロセントしか取れない、まだ澤山の殘りが豆粕に潛んで居る譯である、若し此方法が完全に改良され大豆油が殆んど理論數だけ取り出されるとしたなら豆粕事業の一大改革でなければならぬ、試驗所では目下準備中で實驗には着手せぬけれども、之に對する所見を語れば、壓搾法に由らずに浸出法を採るが宜いと思ふ、浸出法には近時汎く動植物の脂肪分を取出すのに應用せられて居る四鹽化メターンと稱する液體はアルカリ工業の副產物として最近非常に安く製造さ

れる、その沸騰點はアルコールの如く低く、特長としては臭氣なく味なく發火の憂がない、それ故之を浸出液として使ふが最も適當であらう、他にも石油エーテル、若くはエーテルの如き、或は硫化炭素の如きがあるが、發火の憂か又は惡臭があるといふ樣な譯で實際には適せぬ、扨て此四鹽化メターンを使用して理論數の油を取り出すとすると大豆百斤に就いて約十斤丈在來より多く得られる、豆油の時價は、百斤約七圓であるから、即ち大豆百斤(豆粕二枚)に就いて六七十錢のものが餘計に取れる譯になる、豆粕の時價は一枚約一圓二三十錢だが此一圓二三十錢のもの二枚からして六七十錢のものが多く得られるのだから利益は莫大な譯、これが豆粕製造に第一に改革すべき點である。殊に之には特別高價の機械を要せぬので、浸出と蒸餾と要する釜さへあれば濟むのである、尚ほ之に就いて近き將來に於て實驗の結果を報告しやう。

大豆油は從來第一に南淸に於ける食料に供せられたもので、今日も亦左樣で近來その需用が殖えて來て居る、が供給高は更に增して、今日では需用に超過して居るの有樣だから、何等か豆油の用途に就いては今に於て研究を要すべきである。西洋では何に使用し居るか能く分らぬが恐らくは種々の油類のイミテーションに使つて居るのであらう、化學上からいへば大豆油は半乾燥油に屬するものだから、ボイル油の如く塗料とするにも適せず、又更に減磨剤とするも適せぬ、それ等のものに混用するより他に道がない、又石鹼とするにも不適當な性質を有して居るし、食料としても夫のオレーフ油の如き上等のものとは匹敵し難い、即ち單獨には立派な應用の道が認められ難いのである、が試驗所に於て種々施行した試驗の結果によると左程悲觀すべきものでもない、即ち精製法を施すと藁黄色にまでなり、且つ靑臭い香もなくなり寧ろ香はオレーフ油に似て來て食料に適する樣になつた、而かも價は僅か百斤に就いて一圓五十錢位より高まらぬから、普通のテーブル油として十分なる用途を見出し得るのである、今日西洋で純粹のオレーフ油と稱するものでも、殆ん

ど純粹のものは無い、皆綿實油を加へて居るといつて宜い、てあるから此大豆油はその綿實油の代用品たる地位を占むべきてある、更に又試驗所の實驗によると、精製した大豆油は燃料としても煤煙が非常に少く、鑛山用の安全燈などに使用するに堪え、優に菜種油の代用となる事をも實證し得たのである、

次に大豆油は石鹼に適せぬといつたけれど、他の油脂さへ混用すれば立派なものが出來る、そして價は牛脂製のものよりも低廉である、牛脂は百斤に付き十五圓、椰子油は二十圓位のものだが豆油は前にも述べた通り七圓内外だから、之を原料とした石鹼が甚だ安く出來る事は言ふ迄もない、又大豆油よりする石鹼は鹽分を含む水にも能く泡沫を生じて使用に堪る、滿洲より北清一帶の地は鹽分に富む所だから、從來牛脂で造つた石鹼は其地方の水に不適當てあつた、然るに大豆油石鹼は此缺陷を補ふに於て大なる利用の道があると思ふ、内地でも石鹼業者が注意して大豆油を使用したなら頗る利益てあらうと信ずる、但し此油は鹼化には少しく工夫を要するから之迄試みて失敗したものもあつたけれど、成績は確實だから操作の方法さへ工夫すれば宜いのだ、西洋でも此大豆油石鹼は實際に製造し創められたと聞て居る、

第三には高粱稈かよりする製紙事業である。今迄此高粱稈なるものは多く皆燃料に供せられたのだが、此燃料としての價値を試驗所で試驗して見た處、撫順炭の發熱量が約七千カロリーあるに對して之は約二千九百カロリーである、即ちその熱量は石炭の半分にも及ばぬ、何しろ高粱稈は土人の燃料であるから、今之を滿洲に於て製紙事業の材料とするには、更に之に代るべきものを燃料として土人に供給せなければならぬ、が幸に滿洲には撫順の石炭があり、無限に燃料を供給するに足るべく、殊に同炭坑で將來撰炭をして塊炭と粉炭とを區別することゝならば、此粉炭の利用法として之を土人に供給して、代りに高粱稈を得るに於ては實に一擧兩得である。

高粱稈の代りに石炭を其の儘、用ひては熱が强過ぎ

るから粘土と半々に交ぜて炭團にしたらば、土人家屋の溫突(オンドル)に焚くに適當であらう、現に之は長春附近で試みて居る事で成績は頗る佳良であるといふ。石炭に換え得るならば土人は喜んで高粱稈を與へると思ふ、すれば非常に經濟的に集め得られる、假に高粱稈を一噸六圓に買ふといふ計算を立ててもそれから出來る紙の原料のパルプ百斤の價は五圓七八十錢になる勘定だ、それを更に前に述べた樣な方法で容易に交換が行はれる曉となると、即ち粉炭半粒と高粱稈一噸とを交換する樣な事になると、費用は極めて安く、殆んど運賃計りの問題ともなる譯だ、此計算でやればパルプの價は一層安くなり、百斤五圓內外で出來る、現今內地にて使用する輸入のウッドパルプは、一年總額百四五十萬圓で、その價は百斤に付て六圓二十錢である、パルプの價の此樣に高いのには內地の製紙業者の等しく苦痛に感じ居る事だから、製紙業を我國に發達さすには此高粱稈パルプを製造する事が非常に有利と信ずる。

試驗所に於ての實驗によると、高粱稈には約四十パーセントの纖維を含む、此纖維が即パルプになるのである、試に此パルプを以て日本紙を漉いて見るに極めて好良なものが出來る、例の藁紙に比して第一に宜いのは黏力が强いこと、第二には墨附のよいこと、第三には色澤が美濃紙に類して居ることで、大に紙業者間に喝采を博した次第だ、之は獨り日本紙のみならず、西洋紙にも支那紙にも應用し得るから利用は非常に廣いものである、目下滿洲に於ける高粱の產額並に將來の耕作反別等に就いては調査中だから他日更に具體的の案が立て得らるるであらう、又製造地としては、撫順、奉天附近を選び、且つ河水を利用するが最も適當と信ずる。

第四には柞蠶工業である、柞蠶繭は滿洲の重要なる物產で、その一年の產額が十八萬坦、[illegible]絲が一萬五千坦程である、柞蠶繭の大部分は芝罘へ輸出され、同處で製絲される、之が彼の繭紬に織られるのだ、之には山東繭紬といふ名が有るから、普通山東省から出るとのみ世人は思ふけれども實は滿洲の產物である、それ故

滿洲を經營するものは之を直に滿洲て加工することを工夫するが必要である、兎に角此事業は吾人の大に注目すべきものである、價額からいへば繭一個一厘とするも、概數てはあるが約四百萬圓以上になる。從來の製絲法をざつといふと。

繭を曹達液て煮て之を蒸し、八粒乃至十二粒を板に載せ、不完全な繰絲器械に掛ける、從つて絲の纖維が非常に切れ易く、絲には類節があり、太細が甚だ多い、又作蠶は元來石灰質が多いものだから絲も同じ事て、硬粗の質をなして居る、それに濕氣に對しても伸縮する性がある、又それに惡臭がある、色も殆んと茶褐色てある、その爲現在の儘ては、兵兒帶か座蒲團に用ふる繭紬より外のものは織る事が出來ぬ、繭紬が染色に適せぬのも節の多いのも皆此作蠶絲の製造法の不完全から來て居る。

が內地に於ける作蠶絲の需用は可なりある、京都が一番盛んて他の府縣をも合すると年額約百三四十萬圓を輸入する、此等は多く交織に利用し、經か緯のみに使はれる、若しも此の作蠶絲にして上述の缺點が無く、殆んど生絲に類したものが出來るなら、繭紬よりも一層精巧な織物を得、大に應用の道が廣くなると思ふ、試驗所では第一に從來の繭紬の漂白を試みたが、毫も地質を損する事なく純白に製作される、更に之を友禪更紗に染めて見た所鮮明に出來上り價額は大體に於てモスリンと同一てある。即ちモスリン一匹を十圓五十錢とせば此繭紬の友禪若くは更紗染も亦十圓五十錢程て、而かも長く使用に堪え得る點に於ては、モスリンに優さる事數倍てある、次に屑繭から生ずる屑絲は、從來絹絲紡績の材料として專ら歐洲に行つたのである、此利用法として試驗所ては眞綿と紬絲とを作つて見た、ところが眞綿は殆ど日本眞綿の中等品に位するものが出來、その價は百目約一圓二十錢位てある、即ち日本眞綿を假に四圓とすると殆んどその半分にも足らぬ、又紬絲も相應のものが出來、內地產のものが百目三圓位なのに對して二圓程のものが出來た、之は作蠶の屑絲の利用としては大なる成効である。次には

作蠶から理想的に生絲代用の絲を取る事も已に成効して居るが之に就いては他日又詳細に紹介する折があらう。

上來述べ來つた所を總括すれば、即ち滿洲に於ける重要な工業としては、醸造、製油、製紙、製絲、の此四事業があるといふ事に歸する試驗所に於ける實驗は小規模のもので、その結果は元より毫も相違なく直に取つて以て大規模の製造に移し得るとは斷言出來ぬけれども、兎に角實驗を基本として居るから、企業家が之に基き更に實際に付いて調査したなら一層確實であらうと思ふ。之が抑も我々の今日に於て企業家の滿洲に注目せん事を望む所以である、若しも此等の事業を日本人にして等閑に附することが有つたなら、久しからずして盡く外人の掌中に歸すべきことは、現在身親しく大連に居て考察し得らるゝ次第である、

その他鑛業とか、鹽からするアルカリ工業とか、或は製革業、硝子業等も、滿洲に於ける注意すべき事業てあるけれども、此等は漸次實驗に着手する積りだから、その結了を待つて更に意見を開陳する機會が有らう。

沙港より

北米時事社　情火環

沙港の規模

其の規模の大を以て云はゞ他にその倫あり、其の宏麗冠絶を以て云はゞ沙港の如きもとより數ふるにも足らざるものならむか、なれども吾人は推して沙都を稱揚するに近代の模範的都市と云ふに憚らざるものあり何が故に爾云ふ

抑々洋の東西を問はず、都市と云ふ都市に就き先づ第一に云爲せざるべからざるは蓋しその都市の膨脹力たらざるべからず、縱しや爰に龍動の雜沓、紐育の繁華を併せ有する都市ありとするも其の都市にして些かの膨脹力を有せずとせば今日の榮華も恃とするに足らず、之れに反し如何に蕞爾たる一荒村と雖もその膨脹力侮るべからざるものあらばその將來期して待つべきものあるや必せり。而して之を沙港の今日に見よ。

最近の調査によるに市の面積五十九平方哩、人口三十一萬、對外貿易に就いて云へば外國『重に東洋』への輸出額千八百四十三萬九千五百九十一弗。沿岸の內國諸港に對して四千六百八十九萬二千二百七十五弗。輸

入内謂、三千三百八十四萬九千三百四十三弗は内國諸港より、二千五百七十八萬一千〇七十二弗は外國即ち重に東洋よりと云ふ驚ろくべき數にして金融の重要なる機關たる銀行業はと云ふに個數二十六、その資本七千五百萬弗に越え一昨年末に於ける世界市場の大恐慌に苦められざりしは僅かにこの市のみと稱せらるゝによるもその市の實力と伴ふ金融設備の十分なるを推察するに難からじ。

或は之を公共的事業の片面たる公園に徵すれば現在市が有する公園の數二十餘箇所と算せらるゝに係らずなほ市會は四百十五英加の地を新に提供し、昨年度末の市會が一百萬弗を投じて公園設備費たらしめ、公共圖書館に備ふる書籍十萬五千册今年度の豫算千四百五十九萬二千三百八十八弗を有する點より論ずるも沙港の富力の一斑を察し得べし。

聞く沙港にとりて忘るべからざる二十五年の昔を懷古せむ乎、二十平方哩の面積に戸數粗らに散り千八百八十八年の統計は人口僅に二萬八千人と註せられし眇たる一都市が而も一夜、祝融の來りて全市を烏有に歸せしめ今日の情勢はその後更らに新に建設せるものに屬すと、昔日の面影見る影もなき市が二十五年の短日月間に一躍して西北亞米利加を代表すべき都市たるに至りては誰れかその發展に一驚を喫せざるものぞ。

如斯き、或は天の時、地の利、市に幸する多きあらむも若し人の和するなくんば到底望むべからざる事なり、沙港市民が如何に市の膨脹に力を致すかは嘗て桑港が多年の國際情誼、深厚なる利益關係を忘却して排日の暴擧を敢てする際に勉めて日本に親しみ沙港を以て東洋貿易に於ける唯一の關門たらしめ之を礎に市の將來は太平洋沿岸に於ける紐育市たるべき覺悟を示し將た市の運命を卜知せらるべき阿幽博覽會の精神を表現すべき表象に汽車を抱ゆる米國婦人と相對し船を提げたる日本婦人の姿を加へたる決心に見るは容易なり。

この精神の委細を覗ひ知らむ資料として玆に吾人は最近の二例を上げんか、一は即ち今春、阿幽博覽會開會前に於ける

商業俱樂部の決議

にして事の起りは某日本人が白人の經營に係る一洋食店に於て雇人の爲め凌辱を加へられ直ちに同俱樂部の注意を喚びたるに俱樂部は直ちに委員を撰定し事實を調査せしめたる結果

一、この事件に對する日本人の當俱樂部に送附せられたる顚末を事實と認む。

一、須らく當事者たる洋食店主をして適宜の措置あらしめざるべからずと雖も急激に事を計りては反て雇使人の反感を招き爲めに同洋食店の營業を妨害する恐あり

一、然れども吾人はこの沿岸に第二の紐育を建設せんと欲するの市民なり

一、吾が市の發展は之れを東洋の賜に俟たざるべからず

一、依りて吾人は今後十分に戒警を加へ親日の實を上げざるべからず

と云ふ如き報告書を總會に於て可決せり。こは即ち

日本實業家招待

にして、こは昨年、太西洋艦隊の日本訪問に前後してわが國が米國各實業團體の觀光隊を歡待せる好意に酬ゆる爲め阿幽博覽會を好機とし日本實業家を招待せんとの議起り沙港タコマ、スポケーン、ポートランド四市の商業會議所は異議なく贊同の意を表し直ちに之を桑港商業會議所に諮りたるも排日派の鼻息を覗ふ以外能なき桑港は徒らに荏苒日を空しくし竟に何等の返答なきに沙港外三市は桑港を加入せしめず而して四市が招待せる日本實業家は桑港に案內せざる事の議を決し、日本に招待狀を發せしが桑港にては之を聞くと同時に周章、電報を以て參加を申し込み來れるも固く之を拒絕し紛援に次ぐに紛援を以てし漸く大統領タフト氏及び沙港出身者たる內務卿バレンヂャ氏の斡旋により漸く桑港も他市と共に加入するを得たる次第なり

新商業會議所會頭

今夏、前々知事マクロー氏期滿ちて退くや沙港商業會議所は懇にその會頭留任を說きたるが、氏の志既に退隱に傾くこと固きにフレデリック氏來寇を領ひ商業會議所會頭に推れ亦た止み難き事情存し遂にジェー、デー、ローマン氏代りて推さる。氏は嘗て沿岸の實業家代表者の一人としてわが國を訪ひ具に觀る所あり歸來頻りに日本通を以て任じ加へて『日本は米國に對して他意を挿むものに非らず、彼等は合衆國の供給に待たんとする者なれども、不幸、米國人の之を顧みざる結果、吾人は實の山に入り手を空しうする者なり』と唱導するの人、氏の選ばれて商業會議所會頭たり更に沿岸連合會の總裁を兼れんとするは大に吾人の注目に値する所たらざるべからず。

阿幽博覽會

去る六月一日より沙港に於て開催せられたる阿幽博覽會は重にアラスカ、ユーコン兩地方に於ける富源を紹介する主意を以て約五千萬弗の費を投じて設立せられたる五なるがアラスカ地方は人の知る如く千八百六十七年合衆國政府が七百二十萬弗を支拂ひ露國より買收せる六十萬平方哩の區域にして金の產出價一億二千五百萬弗、獸毛皮八千萬弗、魚類九千六百萬弗に上ると稱せられ二十萬の家族各々三百二十英加を占め得とのことなり

開館式

開館式　進步せる沙港の鑑たるべき阿幽博覽會は六月一日公式に開會を告げられたるが當局者が十分に設備せる運輸機關も每事殆んど滿員の姿にて正午に至る頃は既に入場者七萬五千と註せらる。この日米國陸海軍及び我が練習艦隊派遣の水兵百五十名の行進なりオノア庭內太平洋精神を表せる旗下には我が司令官、セブリー提督と提ひ之れを閱す、閱兵終れば群集は體育館より直ちに式場たる無蓋劇場（あんぴしあたう）に押し寄せ四圍殆んど身動ぎもならず、やがて司令官外來賓の席定るや午前十一時會計コリン氏司令し、式はインネス樂隊のアメリカン吹奏に始り天主教のオデア僧正の祝禱、總務理事ナッド氏の式辭、奏樂、グロリア華盛頓、次いで大喝采に迎へられ壇上に立てるは鐵道王ヒームス、ヒル氏にして約一時間に亘る大演舌を試みらる。

にて、總裁チルバーク氏立ちてタフト氏の祝電を讀む曰く、

阿幽博覽會總裁チルバーク宛

予は貴下及び貴下の會衆に對し博覽會開會の盛典を熱誠に祝賀すると共に我が大西北部人士の奮鬪的發展を遙に祝す、抑々阿幽博覽會はアラスカ地方に於ける天興の大富源を世界に誇示するのみならず太平洋沿岸に於ける貿易通商の發展に資すること多くその益に浴する者啻に西北住民のみにあらず

云々と述べチルバーク氏壇を下り高僧キター師の祝禱ありしが未だ終らざるに譲て用意せる背後の大鈴は白亞館よりの電波を傳へ、同時に米國旗高く式場に翻り全市の汽笛鳴りて之れに和し茲に式を終へぬ。

日本海軍日、六月四日は日本海軍日と稱し特にわが海軍々人を歡待しわが艦隊より軍樂隊を派して興を助く。

海外消息

八月三十日巴里より　無念庵

●謹啓　佛國新内閣に對する市民一般の氣受け頗る良好にして、新内閣が成立早々大英斷を以て海軍部内に一大クーデターを決行せんことを揚言しつゝある事實は少なからず國民の歡心を買ひ得たる樣に見受けられ候。しかし所謂黑人政客の言ふ處を聞けば、新内閣は前内閣よりも更に基礎の薄弱なるものゝ如くなる由、前内閣が極左黨を中心とし、社會黨を基礎として全然其旗幟を鮮明ならしめたるものなるに反し、ブリアン氏の新内閣は社會、(自黨)共和等其他各派の領袖を引き拔いたる、云はゞ寄木内閣にして、ブリアン氏が能く之を統一し行くや否やは頗る疑問なりとの事に候。さあれ、兎に角佛國海軍の微弱を武器として前内閣を斃したる事なれば、國民は、遠からず此方面に於ける何等かの、大計畫を新内閣に豫期しつゝある樣候。

●西班牙動亂の眞相　西班牙今回の革命騷動は抑も如何にして起りしか、之れ西班牙王國の事態日に非なる今日、最も興味ある問題に候はずや。西班牙に極めて激烈なる革命主義者の潛伏し居る事は人の皆能く知る處に候が、しかし西國の革命黨員の多くは決して他國に於けるが如く革命主義者として一團をなし居る者にあらず、彼等の多くは中流以下の人民、平常は正業に從事し居る普通の人民が上流人の腐敗壓迫に憤激して、內心機會あらば其不平の氣を晴さんとする者共にして、敢て主義とか意見とか六ケしき理論に依つて行動する者にあらず、偶々其行動が革命主義者等のなすが如き者と同一なるより革命黨員の如く見做さるゝも、惡しく云へば妄に政府の命に抗する暴民とも云ふべき者なり。

▲されど彼等は書を讀み、理窟をこねて行動する者にあらざるだけに、眞面目にして毫も其間に浮華の嫌あらず、危險の程度も又從て大なり。一朝事ある際には一州一地方の人民悉く徒手空拳を以て起つべく、若し之を露國流に訓練したらんには西班牙王國は到底持ち切れざるべしとの事なり。

▲唯王國政府の聊か意を強する處は彼等が割合に暗黑にして、王政府の命に抗するも敢て取て以て之に代はるべしとの大野心を有する旨なきにあり。

▲初め騒動の起因は前號にも述べ置きしが如く、モロッコ問題に出てたり。西國は嘗て西班牙太帝國たりし當年の名殘としてモロッコに數箇所の領地を有し其中の一たるメリラに於て二三の會社を立てゝ、摩國王より鐵山採掘權を得、鐵道を敷設して盛に營業し居たりしが、此程王位爭奪問題に一段落つくと同時に二會社の地位危くなり、之に隣接せる土民カビル人二會社の營業權を侵害せんとしたり。之れ土民側より見れば大に無理ならぬ處もあれど、西班牙政府は大王國の手前打捨て置く譯にも行かず、摩國要塞兵を出して之を擊ちたり。摩國民之を見て大に怒り遂に大舉して西國要塞兵に抵抗する事となり、反て西班牙軍を敗走せしめたり。

▲茲に於て西國は遂に本國に動員令を下し、大々的出師準備に着手したりしに、西國バーアセロナ、カタロニア諸地方の住民先づ之に反對して王命に從はず、續いて各處の志士、不平の徒等到る處に起りて筆に口に西國出兵の暴擧を難じ政府及び上流人士の不德を責めたりしかば、王國政府も大に驚き、一方に於ては極力言論の自由を拘束し兵を出してバーアセロナ市を包圍せしめ、總て劍と鐵砲とを以て內外を鎮壓せんと試みたり。之れ即ち今回の騒動を惹起したる所因に候。

▲バーセロナ市民は九千の武裝せる民兵を出し四民保安委員會を組織し、極力王軍に抵抗したりしが、大半は捕虜となり、他は悉く斬殺せられたり。カタロニア、リスカヤ等又之に同じく、王軍の鋒先に罹りて斬殺せられ、一時西國の革命黨は鎮靜せるものゝ如くなりたり。

▲首府マドリッドに於ける革命黨の機關雜誌「パイス」は、アルフオンソ陛下及び首相ムーラのあまりに非立憲的なる行動を怨み、斯くてあらんには西國の將來も押して知るべしと述べたり其他一般の新聞雜誌は政府の禁獸を恐れて默し居るも一方に於て摩國土民との戰爭容易に鎮壓さるべきにあらざれば、西國今にして覺醒する處なくば、西國王室の將來を悲觀する者は豈唯に革命黨員等のみならざるべしとは佛國某外交家の直話に候。

●クリート問題の成行　其後クリート問題は愈々面白くなり來り候。勃牙利は昨年來のバルカン騒動に於て土耳古より獨立し墺國の士州合併又伯林條約の意志に背きて斷行せられたるを見、クリート島民も又、此機に乘じ土耳古の配下を離れて希臘に合併せんことを企てたり。希臘政府は、七月六日を以て英露佛伊四國大使に向て、クリート島駐屯

の四國兵を撤兵期限たる七月二十六日までは撤退すならんことを要求したり。然るに其要求の諾否未だ定らざるうちに早くも七月二十六日は來りたるを以て列國は大に其處置に窮したり。之れクリート問題の再燃したる所因に候。列國の意向は寧ろ希臘に傾き居るものゝ如く見受けられ候。

▲然るにクリート島民は軍隊と相呼應して、去る七月二十八日砲臺に各所に希臘國旗を掲げたり、之れ實に土耳古を度外視せる行爲なるを以て土耳古は希臘政府に向て第一に希臘國旗を引卸さしむること、第二にクリート島に對して、希臘政府が何等の野心なきことを公文書にて宣明せんことを要求し、若し之を承諾せずば雅典駐劄土國公使は召還せらるべしと通牒せり。

▲此の通牒は聊か希臘政府を驚かしたりと見え、希臘政府は、之に向て溫和なる協定を望む旨を答へ、一方に於て英佛露伊の四國大使に向ては之に干渉を試みんことを哀願したるものゝ如く、四國大使は土耳古政府に向て、土耳古艦隊が此際クリート島を訪ふは不穩なるべきを勸告したり。

▲されど四國は國旗掲揚の不當を認め、且つは土耳古政府の態度にも鑒み、クリート島の當局者に向て國旗引卸を嚴命すべきことを要求したり。ク島政廳は一議に及ばず國旗引卸を實行せんとしたりしに、人民は武裝して之を拒み遂に實行する能はず、ク島政廳內閣は之が爲に總辭職をなせり。假政府次で立てられ、憲兵は希臘國旗を擁護すべきを約して人民を退散せしめたり。茲に於て四國政府は止むなく軍艦を增派してカニアに上陸せしめ、砲臺に揭揚せる希臘國旗を引卸し旗杆を切斷したり。

▲四國政府の決斷は大に土耳古政府の意を得たるものと見え、巴里の某紙に掲載したる君府通信に依れば、希土協和は極めて穩かに取結ばるべしとの事に候。しかしクリート島の合併問題を如何に處分すべきか、之れ實に希土兩政府、及び英佛露伊四國政府の間に懸れる最も大なる難問題にして、場合に依りてはバルカン以上の紛擾を惹起せぬとも限らずと、其局に當る者は心痛致し居る由。

●不幸なる波斯新帝　父なる先帝位を讓られてより、新帝年齡僅に十二歲にして波斯皇帝とならせられたるが、又帝は逐はれて露國に沒落せんとし、八月十七日を以てテイランを發せんとの報ありしも、波斯國庫窮乏の餘、先帝に贈るべき年金一萬五千磅の支出にさへ苦しみ居る有樣なる由、ロンドンタイムスは新帝の不幸を痛論して曰く「世に最も薄倖なる帝王を數ぐれば波斯の幼帝は其隨一ならん、彼れ恐らく波斯のリツトルシヤーたらんよりは其母の懷に抱かるゝを望むならんと

▲波斯の秩序回復は到底幼帝の能く爲し得べき處にあらず、何れ他國の援助を借るを要するも、他國と云へば先づ第一に指を露國に屈せざるべからず。

▲英國は此際露兵の波斯に駐屯するを氣味惡るく思ふべし。去りとて、全然露國をして波斯を放棄せしむべき要求は英露協商が許さず、又今、

露國をして波斯を同化する儘に放任することは英國の能く堪え得る處にあらず。之れ幼帝の立たせられしより一層切實に感ぜらるゝに至りたる兩國間の難問題なり。

▲英國の輿論は一般に露兵の撤退を以て穩當なりと云ふ波斯が救ふべき唯一の方法は波斯をして波斯人の爲す儘に任かす事、第三國をして干渉せしむべからざる事にありとなし、現在の波斯國民黨は露兵と全然調和せず、秩序回復せられざる今日唯一歐洲人保護の名目の下に少しく駐屯の期日を延引せしむる事は差支なかるべきも露國は誠意を以て速に露兵撤退の實を擧ぐる事に努めざるべからずと云ふにあるものゝ如くに候。

▲巴里の「タン」は波斯の將來に關して曰く「誰か波斯の明日を豫想し得る者ぞ、先帝は國外に放浪するも遺憾なかるべし。獨り殘されたる孤子サッドルシャーこそ實に不愍の至りなれ、幼帝の下には何人が如何なる政府を作るとも、其政策は須らく、サーエドワード、グレー氏の所謂第三國の仲介なき者たらざるべからず、而して此仲介者を防守する唯一の方法は偏に國內に秩序を回復するにあり云々」と

ゾラの作物では「ジアーミナル」「ゼ、コンクヰスト、オブ、プラッサンス」「トランスグレッション、オブ、アッベ、ムッレ」が一番面白く、ダヌンチオの作物では「ヴイクチム」が一番面白いと田山花袋氏は話して居る。



東大寺戒壇院の多聞天廣目天を論す

青柳有美

今人、皆知識を索めんとするに汲々たり、智慧ある者は、天下を擧げて其の羨むところとなる。されど、知識の深き人は必ずしも世の至幸者に非ず。智慧に富める人、常に天下の最福者に非る也。愚なる者は、寧ろ煩ふ事無くして、其の日を樂むを得べく、無學者は想を惱ます事少くして、人生を酔夢の間に送るを得べけむ。是に於てか、智者と識者とは、人の中にて最も苦悶多きものとなる。されど、奮つて能く此る懊惱に堪え、泰然として自ら持する事莊重なるは、是れ智者と識者との特徴なり。猶太敎の經典『傳道之書』に曰く

　夫れ智慧多ければ憤激多し知識を增す者は憂患を增す

と。奈良東大寺戒壇院所藏四天王塑像中の多聞天と廣目天とは、即ち此の『傳道之書』によりて傳えられたる意を、最も遺憾無く權化具體せるものにして、一たび寧樂の舊都を訪ひ、此の二天王の塑像を目にせるものは、其の精巧と神韻とに動され、更に這れに作者たりし人の理想に憧憬し、讃嘆遂に驚倒せられずんば止まざらんとす。嗚呼亦偉なる哉。

佛敎神話に據れば、四天王たる持國增長、廣目、多聞は、共に慾界第一の天主たる帝釋の外臣にして、世の武將の如く四天下を護するもの也。更に經典『智度論』の記載に據れば、多聞天は福德の名四方に聞え無量百千の夜叉を統領して北洲を守護し、且つ佛の道場を護

りて其の說法を聞くが故に『多聞』と稱せられ、其の梵名『毘沙門(バイシュラバナ)』は是れ即ち『多聞』若くは『普聞』の意にして、又、廣目天は梵名を『毘流博叉(ビルーパクシャ)』と稱せられ『雜語』の意を有し、其の目の及ぶところ廣大にして、能く種々の語を爲すが故に此の名あり、毘舍闍鬼等無量百千の諸龍を領して西洲を守護すと。

東大寺戒壇院所藏の多聞天及び廣目大塑像の作者は先づ此の兩天王が、此くの如き職責と特徵とを有するものたるを知り、後始めて之を作りしものなるべしと雖ども、その作者にして若し知識と智慧とが、人を驅りて幽玄なる憂患に陷らしむるものたるを自覺せるに非ずんば、如何ぞ彼の如き作品あるに至るを得んや。農商務省發行の『日本帝國美術略史』に據れば、是等の二塑像は他の持國增長二天王の塑像と共に、天平時代の作たる事疑ひ無きが如し。それより以前既に四天王の彫像を作れるものあり、更に又鎌倉時代に入りて運慶の如き好んで神將天部等を作りしと雖ども、是等を以て戒壇院所藏の多聞天及び廣目天に比すれば、殆んど見るにだも値せざるものといふも、敢て不可無からんか。奈良新藥師寺所藏の十二神將の如き、聖武天皇時代末期の作にして、或は戒壇院の四天王塑像より後年のものなるべしと雖ども、その長所は將に寫實の細緻を極めたるものなるに過ぎずして、作物に蘊蓄せらるる幽玄微眇の理想を其の中に探らんとするも、亦遂に得べからず。若し夫れ運慶以下鎌倉時代の彫像作物に至りては、僅に豪壯を衒はんとせるに過ぎずして、之が作者は徒に表情の激越痛烈ならん事をのみ是れ力めたるが如き病所なり、尋常の觀照家は一見その痛快の外觀あるを悅ぶならんも、學者若し具に味ふ事少しく久しからば、忽ち之に飽き、是等作者の理想が如何にも淺薄にして唯に皮層の表情に走り、格段の妙趣を作物抱に懷せしめ得ざりしを恨みとするに至るもの無くんばあらず。之を要するに、奈良東大寺戒壇院所藏四天王中の多聞天及び廣目天の二塑像は、日本全彫刻史を通じて古今第一の名作たるのみならず、又世界に

於て一二を爭ふべき逸品たるの風趣と資格とを備ふるもの也。

ミケルアンゼロは歐洲の美術家中にありても、高尚幽邃の思想を其の作品に縁りて表現し得る技巧を有せるものなるを以て名あり。アンゼロの作物は未だ親しく之を眼にせざると雖も戒壇院にある多聞廣目二塑像の如く、然かく理想と技巧との一致を觀るを得べきや否や、之を法王宮所藏作物の寫眞より推すれば稍々疑無き能はず。萬國畫家ワット曾て曰へる事あり『藝術は一種の言語にして、吾人は之を所縁とし倫理及び精神上に關する近代の思想を發表せざるべからず』と。戒



(多門天像)

壇院の多聞廣目二塑像は、實に大なる雄辯なり、而も、之によりて、發表せらるゝものは一時代に限られたる思想に非ず、さればとて又素より古代に特有なる思想にも非ずして、千古を一貫し人生に遍通する大事實を語るものなり。佛國畫家ゼローム以爲らく『良く畫かんとする者は語るべき何物かを有せざるべからず』と。然り、唯に畫人のみならず有らゆる藝術家は、皆な語るべき何物かを有するに非ずんば、以て偉大なる藝術家となりて偉大なる作物を出す能はざるもの也。戒壇院多聞廣目二塑像の作者は實に語るべき大なる何物かを有せり。是に於てか、是等の二塑像は、日本美

術の精華を以て目せられ、天下の逸品たるに至るを得たるものなるべし。

而して、その語らんとし告げんとせるところは、果して何ぞ。その之を所縁として發表せられたる人生に千古一貫せる大事實とは、果して如何。

ゲーテの『ファウスト』若くはバイロンの『マンフレッド』を讀める者は、如何に智識と知慧とが、之を持てる者を苦しめ憂ひしむるものなるかを知るべし。科學も哲學も、到底、人に和平と歡樂とを與え得るものに非ずして、智者胸中には絶えず多大の憂患を宿すものあるは、實にマンフレッドの語の如し。されど、同じく是れ憂患同じく是れ憂愁なれども、これに陽性憂患、陰性憂患の二種あり。陽性憂患は憤激的のものにして陰性憂患は沈欝的のもの也。詩人ミルトンによりて畫かれ。

去れよ、父無くして生れたる暗愁の子よ、虚燿を是れ事とする歡樂よ。

と切に人の世の欣喜悦樂を罵倒する『イル、ペンセロソ』の精神は、是れ憤激的陽性の憂患にして

老人よ、死するは左まで辛きものに非ず

と囁きつゝ其の唇を白くし、獨り自ら我が城内の高樓に死せるマンフレッドは、是れバイロンによりて沈欝的陰性の憂患を權化せられたるものなり。戒壇院多聞廣目の二塑像は、人若し智慧を得る事多けれど、愈々之によりて憂ひ、知識を増す事大なれば、益々悲みを繁からしむるものある人生に現存する此の事實を語り告ぐるもの也。『傳道之書』には錄して『智慧多ければ憤激多く知識を増す者は憂患を増す』と曰へるも、この對句の主格は之を交換顚倒するも、敢て不可無きのみならず、寧ろ却て人生の眞事實に近づくを得るものにして、人若し知識多ければ憤激多く、智慧を増す者は必ず常に憂患を増すもの也。而して、憤激は陽性の憂患たり、又『傳道之書』に所謂『憂患』は沈欝性憂患を意味するものたるは素より言ふまでも無き事にして兩者共に憂患憂愁の範圍を出でざるものあるや一なり。

多聞天は常に佛の道場にありて其の説法を聞き、其

の名の如く多聞なるが故に知識多からざるを得ず。是に於てか陽性の憤激的憂患に陥り、人界の百事に憤激し、世の徒に歡樂を唯是れ事とするものを觀ては、歎き憂えざるを得ざる也。又、廣目天は其の目の及ぶところ廣大にして、能く種々の語を爲し得る智慧者なるが故に人世に、愚なる者多くして佛の道に悖る事のみ頻りなるを思ふては、深く之を煩ひとし、沈鬱的陰性の憂患に陷らざるを得じ。奈良東大寺戒壇院所藏の多聞天廣目天二塑像の作者は、恐らく自ら其の得たる知識と其の享けたる智慧とによりて苦められ、憤激と憂患とに惱されたる人にして、能く此の間の消息に通し、多聞天を假りて知識に伴ふ憤激を現し、廣目天を假りて智識に伴ふ憂患を示さんとするものなるべし。視よ、多聞天の眥と眉とを高く釣られて激昂將に其の極に達し、大に憤慨怒號せんとせるが如きの狀あり。然れども、遂に此の激昂は其の極に達せず、憤慨は怒號狂呼叫音を發するまでに至らず、力めて口を閉ぢ、胸に炎々たる憤激を忍び、一手は堅く劍を握り一手は高く佛舍利の塔を捧げ、兩足強く惡鬼を踩み躙る。又視よ、廣目天の兩眼は漸く僅に開きて其の半ばは閉ぢ、眉と眉とは近かく相接して頰の邊に堪え難き憂を宿し今や悲哀は將に其の極に達して泣き壞れんとするが如きものある



(廣目天像)

を。然れども、叉遂に悲哀の囚となりて泣き壞るゝまでに至らず、無限の悲痛を其口許に嚙みしめて、一手は輕く筆を取り、一手は智慧の語錄を卷ける一軸を握り、蹌踉き倒れんとする兩足は、之を辛く履み止めて闇鬼を勇御す。知るべし、戒壇院多聞廣目二塑像作者の理想とせるところ實に茲にありて、幽玄沈痛に配するに更に絕大雄揮の氣膽を以てし巧に之を發輝するにあるを。而も此くの如き崇高の理想は、能く其の技巧と調和して毫も相反く事無く、今の文明人をして倘ほ且つ、之が觀照によりて正當に作者が意趣のあるところを看取し、依りて以て感激の甚大なるものあるに至らしむ。誰か高嘆せざらんや。

　千五百六年に於て羅馬帝タイタス建造の浴場附近より發見せられ、現に法王宮に所藏せらるゝ彼の有名なるラオコオンの石像は、紀元一世紀なるメイタス帝時代の作たるを以て信ぜられ、古今東西を通じて彫像の中の逸品たるを以て目せらるゝものたるのみならず、憂患と之に伴ふ力爭とを表現せんとする作者の意趣に於て、稍々戒壇院所藏の多聞廣目二塑像に似たるもの無きに非ずと雖ども、ウヰンケルマンが、人は總てラオコオンの如き偉人たるに至れば人生の悲痛を耐忍し得べしとの觀念を其の觀照者に起さしむるに至るものなり」と曰へるは、未だ戒壇院の多聞廣目二塑像を視ざる者の言にして、之を其の寫眞によりて推すれば、ゲーテが『プロピラエア』のうちに『小子は奮鬪するも力及ばずして驚愕し、父は奮鬪するも其の功無くして却て反抗を招き、長子は最も傷けらるゝ事少なきが故に、悲哀痛苦共に之を感ずるに至らずして茫然たるも、父の苦めるゝを視て恐怖せるの情あり』と曰へるは、寧ろ却て其の當を得たる評言たるを思はずんばあらず。されば、ウヰンケルヌンがラオコオンに就て言へるところのものは、却て之を移して戒壇院の多聞天廣目天二塑像の評言と做すを得べく、之の表面如何に激浪怒濤によりて動搖せらるゝものあるも、千尋の底には依然として平靜を呈する大海の面影は、之を戒壇院の二塑像に索め得べきも、不幸にしてラオコオンに於て遂

に之を見るべからず。戒壇院の多聞天は知識多くして憤激多きに至れるも、夢些かたりとて其の激情に驅られたるが如き表情無く、深く之を胸中に藏めて、奮然佛の道場を守護し、無量百千の夜叉を統領して北洲に天王たり、廣目天は智慧を增す事大にして又憂患を增せども、同く之を忍んで能く是等の憂患と鬪ひ、無量百千の諸龍を領して西洲に天王たるの氣慨を示し、作物のうちに蘊蓄せらるゝ意趣理想の廣大無邊なる事は之をラオコオンの石像に比すれば、全く雲泥の差違あるものといふべき也。ラオコオン作者の理想は實に淺薄なり皮層的なり。レッシングの歐洲古代の藝術を評するや曰く、是等の時代に於ける作物は憤怒に代らしむるに眞摯を以てし、悲哀に代らしむるに沈痛を以てし、爲に其の間に美を觀るに至れる也と。戒壇院の多聞天は憤激に代るに眞摯を以てせられ、悲哀に代るに沈痛を以てせられたるものなり。美、實に其中にあり。人は決して知識と智慧との擒となり、憤激して狂態に陷り、憂ひ煩ひて起つ能はざるに至るが如き事あるべきものに非ずして、莊重自ら持し、能く鬪ひて其の職責を全ふするを以て理想とする事、奈良東大寺戒壇院多聞天廣目天二塑像の作者の理想の如くならざるべからず。ウキンケルマン曾て曰く、希臘は一人にして能く、藝術家と哲學者とを兼ね得たる者を有せりと。戒壇院多聞廣目二塑像の作者の如きは、之によりて之を觀れば、夫れ一人にして能く藝術家たり哲學者たるを得たるもの乎。又ポールドウキン、ブラウンは其の『美術篇』のうちに於て、希臘の彫刻家を以て審美眼の精緻なるものあると共に、卓拔の識見あるものなりとなせしが、戒壇院の多聞廣目二塑像の作者は、希臘の彫刻家にも優りて更に審美眼の精緻なるものと、更に卓拔なる識見とを有せるもの也。是等二塑像の作者と希臘彫刻家との間の徑庭は、猶ほ希臘彫刻家と以太利ルネイッサンス時代に於ける彫刻家との間に於けるが如き乎。歐米の鑑賞家概ね希臘の彫像を以て蘊蓄ある平靜と威嚴とを特色とするものなりといふを常となせども、その雄壯と端嚴とに於て、戒壇院の多聞廣目二塑

像に及ばざるや遠し。

「東大寺造立供養記」に曰く、天平勝寶七年四月鑑眞五臺山の土を持ち來りて東大寺盧舍那佛の前に戒壇五間四面を立て、聖武上皇此の處に菩薩戒を受くと。今の奈良東大寺戒壇院所藏の四天王塑像は、この戒壇の四隅鎭護の爲に、此の時代に於て作られたるものなるべし。傳に據れば、僧鑑眞は唐の人にして、二弟禪產道與以下許多の徒屬を率ひて渡來したるものなり。鑑眞は又既に戒壇を築くにだも尙ほ唐より將來の土を用ひたるほどなれば、其の四隅に安置せる四天王塑像の如きも、又素より唐の土を用ひたるものなるべく、之が作者は鑑眞の一行中にありし唐土の名知識にして、その得たる知慧と智識とに苦められて久く煩悶し、而も遂に之より解脫して、飜然、三寶護持の覺悟を固むるに至れる僧侶なりしなるべし。然らずんば、如何ぞ能く彼の如き崇高なる理想を其の作物によりて表現するを得んや。

ラオコオンの石像は、父子共に裸體像なり。故に唯僅に腹壁の痙縮するものあるを觀るのみにして、其の苦痛の情を忖度するを得べきほどなりと雖ども、戒壇院の多聞廣目二塑像は、裸體に非ずして體軀及び四肢共に金甲に被はるゝが故に、表情の面積甚だ狹くして唯僅に面貌のみに限られ、之のみによりて『日本帝國美術畧史』に所謂雄武沈實の相を表はし、人を動かす力の稍々廣からざるが如きあるを千古の遺憾とす。

世界一周記（米國橫斷記）

敬四郎

（八）桑港

一

軈て食堂で檢疫が始まる。制服を着た老人の醫官が一々乘客の顏色を見て廻つて、少し靑い顏でもして居る人があると、手を握つたり頰を突ついたりする。が、そんな人も大概は通つて、今度は旅劵の檢査となる二人の移民官と一人の通譯が陣取つて居て一人々々調にかゝる。「何處に來たとか、「何時まで居る」とか、「金持か貧乏か」とか、下らんことをす

二三ヶ條も尋れて、漸と「上つても宜いといふ」迄まで來て居ながら上つちやならぬと言はれたら如何樣な心持がするだらうなぞいふことは考へる暇もなく、鞄に傘を持つてサッサと梯子を下りていく。

棧橋に下りてからはさア騷だ。全體自分の荷物は何處に下りてるのだらう、トランクは何處か知らんと、人と荷物とうぢや〱して居る間を右往左往して居るうちに、「さア稅關の檢査だ」といふ。「いゝえ、課稅品は何も持つて居りません」一點張で、何とか彼とかそれを通すと、クック社のリード君が來て「荷物は其儘で可いのだから早く自動車に乗り玉へ」といふ。それで無茶苦茶に自動車に乗ると、自動車も無茶苦茶に走つて、何でも坂のやうなところを上つて行く。其中にギヤキ〱と車が止つてリード君が「こゝで下りるんだ」といふ。言はるゝがまゝに下りて見ると、それはとある丘の上で、目の前には白い四角な、小山のやうな家が聳えて居る。これが船で聞いたフエアンモント、ホテルだといふ、無茶苦茶に大きいホテルだなと思ふ。

二

食堂に下りて晝飯を食ふ。長さが何呎で幅が何呎とやらの、兎に角圖拔けて大きな廣間に四五百人の紳士やら淑女やらが集まつて彼處のテーブル此處のテーブルを圍むで食事をして居る。女が三分に男が二分、女ばかり目も映ゆる裝束の上にコテ〱と造花を括りつけた大きな帽子を冠つて居る。各々の食卓の上には黃紅紫白、名も知れぬ花がそれ〱の香を競つて居る。床と天井どの中間には優に六尺もあらうかと思ふ大きなギヤマンの花電燈がぶら下つて居る、そしてすべて此等の色と光とに對して高い天井からはパッと一樣に金色の光を落す。その金と、銀と、紅と、紫と、其他あらゆる色と光とは兩壁を其儘の大鏡に行當つて、更に燦然として我等の兩眼に迫つて來る。その一隅にいやに黃色く小っぽけに映つて居るのが自分の面だなと思ふと、別に情無くもならないが、さりとて名譽でもないやうな心持がする。

食堂を出て、滑つたり轉んだりして大理石の廣間を通りぬけてエレヴエーターに乗ると、スーッと運ばれて四百何番とといふ自分の部屋へかへる。安樂椅子の上に腰を下ろして、ウーンと兩方の足を伸ばす。そして兩腕をニユッと張つて思ふさま大きな欠伸をする、その「アーン」といふ聲の中には、恐らく驚愕、歡心、嫉妬、負惜み等、すべて此等の分子を含んで居たに相違無い。恁んなに複雜の欠伸をしたことは生れてからまだ一度もない。

三

正式の見物は明日から始るので、今日は一と先づ休息だといふので、さて午後からは如何したものぞと思案して居るところへ、朝日社に關係のある清瀬君といふ方が來られて「これから澁川君を案内するのだが、君も一緒に來ないか」と誘つて下すつた。さらばと兩君の後に跟いていよ〱見物の第一步を踏み出す。

廊下に出てチリーンと鈴を押すと、スーッとエレヴェーターが昇つて來る。兎も角もそれに乗ると後から清瀬君が帽子を突つく。何か知ら

んと思つて振り返ると小聲で同君が「帽子を脱るんだ」といふ。成程氣が付いて見ると其處に盛裝した二人の婦人が乘つて居たのであつた。何だか馬鹿らしいやうな氣がする。エレヴエーターが止ると、出た處は棕櫚の鉢木があるかとばかり大きな鉢植の棕櫚を並べた廊下で、そこを通り拔けるとこのホテルの裏門に出る。

「何を見たか」と尋ねられても別に答へやうも無い。五階から六階、七階の家がのべつに續いて、中にクロニクル、ビルディングだとか、トビユーン、ビルディングだとかいふ十四五階から二十階の建物が、其處にも此處にもひよこ／＼突立つて居る。其の下の方を男や女がうぢや／＼お祭禮の行列のやうに歩いて居る。ウカ／＼して居たら衝當つて撥飛ばされさうなので見物は二の次、先づ足許の用心が第一になる。そして其合間／＼にチヨロ／＼偸み看るやうにして見物するのだから、何を見たのやら滿足に覺えて居やう筈がない。その中にマーケツト街のエムポーリアムといふ百貨店に這入つた。間口百間に奥行五十間もありさうな六階か七階の大建物で、その第一階から六階なり七階なりまでが皆商品で埋まつて居る無いものは棺桶に石塔丈け、あとは金銀寶石の諸道具から襁褓の紙吊まで備へておく。丁度午後の三時頃で、亭主を朝早くオフイスに追遣つてからに自分等は留守居の仕様事なし、退屈まぎれにこの時刻から奥さん方がぞろ／＼出掛けて、彼處の店こゝの舖と慾んな處を素見じ廻るのだらうな、來るものも來るものも女許り、鳩胸をツンと突出して尻をヒンと浮かしてスツ／＼と歩く姿は、大慈大悲の天女とこそは見えもすべけれ、亭主を追遣つておいて後で氣儘の蕩放題をして居る夜叉のやうな女だとは仲々看破れるものではない。

此處を出て電車に乘る。電車を下りて鋼索鐵道（ケーブルカー）といふに乘る。一つ二つ坂を上り下りして某の四ッ角に下りると、今朝同船で着いた永井新任領事が急ぎ足に歸宅するのに行き逢ふ。「某君が待ち居るものであんなに急ぐのだらう」と言つた人があつた。成程さうだらうと、その美しい新婚の夫人を見た人は誰でも思ふべきである。領事とわかれて夕日の映ゆる空の方へ向けて二三十間程行くと、右側の高いところに金字で「小川亭」と書いた小さな看板が見える、下に「日本御料理」と書いてある。これは船中でも屢々噂の出た當地切つての日本料理店なので、今夜は暫くり此處で飲むで永い船中の疲勞を癒やさうといふわけなのだ。入ると既に同船の誰彼も見えて居た。

その翌日からタツク社案内の見物が始まつて、自動車を走らしてタツ／＼と駈け廻つた。第一日目には金門公園といふへ行く。金門海峽の南角の上にある大公園で、海岸に添うた一帶の丘地、何の事は無い鎌倉全體を公園に見立つたやうなものである。山がある。池がある。野天で芝居をする仕組もあれば、一方の谷かげには日本庭園だと言つてお定まりの茶店が一つ立つて居る。二日目には渡船で對岸バークレーの加州々立大學を見に行く。渡船と言つても向島あたりで見るやうな風流なのではなくつて、何處までも米國式な、一時に五六百人も詰込んでグイと渡して仕舞ふといふエライヤツである。それが先方の棧橋に着くと綱がヒヌ

と鐵道のフォームに密着して其間寸分の隙をも餘さない。それで今度は待ち構へて居た汽車に乗ると、汽車は市街の中でも市街の外でもわらわらとづッ走つて瞬くひまに目的地に着いて仕舞ふ。三日目には觀光鐵道に乗つてタマルパイ山といふへ登る。三臺程の客車を連いだ輕便鐵道で山を捲いて蜒蜿のやうに敷いた線路をクルクルと迂回して登つて行く。頂上に達すると、一面には渺茫たる太平洋、一面には倚伏綿亘する加州の峯巒が一眸の中に集つて、桑港やバークレーは遙か眼下に點綴して見える。

九日の午前にまた桑港からオークランドに渡つて、そこから南太平洋鐵道會社のプルマンカーといふ大きな寢臺車に乗つてソートレーキ市に向ふ。發車して間もなく振動が止んだと思ふと汽車は何時の間にか蒸汽渡船に乗込んで其處の入江を渡つて居るのであつた。櫻府(サクラメント)に停車した時、昨日當地に來て居た澁川氏が乗込む。いや桑港があゝで櫻府がかうだと、見物の第一程仲々に捗ふ。

(九) シイラネバタ

汽車は先程からシイラネバタ山にかゝつた。ホノルヽの夏が桑港で春の眞中になり、此處ではまた晩冬初春の候に逆戻りする。蹤てはホツリホツリと纔かに其處此處の谷陰に見えて居た雪が、五六千呎を登つた此邊では最う見渡す限り銀世界に化つて、雪山のかげに沈んだ夕日がわづかに檜木の梢頭を薄く射て居る。汽車は山の中腹を縫うて走るので、線路の下には遙かに千仞の谷を望む。夜陰はそこから起るかとばかり、谷底は既に昏色が罩めて居るが、よくよく眸を凝らして見るとほの暗い中にボヤンと薄い光を認める。谷間に溜つた雪解の水に夕の空が映ゆるのであらう。その中に日が暮れ切る。内には電燈が點くので外の世界は見えなくなる。軈て白の上衣に黒のヅボンを穿いた大きな黒人のボーイ(ニガー)が來て「第一回食事(ファーストコール)」と呼んで歩く。食堂へ出ると最う大勢這入つてナイフ、フォークをがちやつかせて居る。

食事を終つて列車の最後にある喫煙室(スモーキングカー)に行つて備附の雜誌を見る。此處は一名展望車(オブザヴェーションカー)と言つて兩側後部の三方が硝子窓になつて居るので、晝間ならば列車の進み來つた背後の光景が一目に見える處である。汽車は時々雪除の中を通る。窓を洩る、燈火が雪除に添うて結ぶ氷塊に映つて、煤煙に汚れた氷が淒寒く光る。暫時すると鍋の尻に目鼻を付けたやうな以前の黒人ボーイが來て、白い歯を剝出して「次の停(トーレンストッ)車場に十分間停車(プステンミニッツネキストステーション)、此處で時が(ダイムゲッツファスター)一時間進むよ(ワンアワーヒーア)」と布れて歩く。やがて汽車が止る。窓越しに見ると道路の兩側に幾基のランプが並び立つて、そのランプの向からは其處此處の小窓から燈火が洩れて射すのが見える。思ふに山間の小邑だらう。

(一〇) 大鹽湖

朝起きて見ると山は夜の間に越したものと見えて、汽車は勾配の緩い磽野を全速力で走つて居る。最う六時頃であるが空には雲が重く垂れて、

勿論朝日の影は見えず何だか薄ら寒い朝である。見る限が灌木の原で、目に入る立木とては一本も無い。鍬を負つて野良に出掛ける農夫が通るでもなく、遠の煙筒から朝餉の煙が上るのが見えるでもなく、唯ドンヨリした鉛色の空の下に曠漠たる枯野が横はつて居るばかりだから、全體の調子が何となく淋しい。この殺風景な曠野を貫いて汽車は殆ど一分一哩の速度で走つて行く。

顔を洗つて、朝飯を食つて、かれこれ十時近くなつた頃汽車は一大沙漠にかゝつた。此處には灌木さへも跡を絶えて見渡す限が沙又沙、その沙の上に一坪二坪稍宛白く凝つて見えるものがある。何か知らんと思つて居ると「鹽だ」と、例のヤンキー君が教へて呉れる。

この沙漠を後にして暫く進むと、汽車はいよ〳〵大鹽湖の鐵橋にかゝる。この鐵橋といふのは長さが殆ど四十五哩あるので、以前はその湖岸を迂廻して行つたものを、三時間の損耗に堪へ得ないと言つて、例の米國式を發揮して遂にこの大鐵橋を作り上げたのださうな。地點によつては遂ぞ陸の影を見ぬ處もある。この湖水は名の如く鹹水湖で其鹽氣が十四プロセント、夏期には水泳の客が集るが殆ど身體全部が浮出さうだ。現に丸太を浮かしたのが見える。八分通りは水面上に露はれて居る。「それぢや迚も心中はやれんね」と椋十翁の玄耳氏が言ふ。皆がドッと笑つたので例のヤンキーが「何うしたのだ」と聞く。「ナニ、日本では心中といふことが流行つて惚れ合つた同志によく水の中に飛込んで死ぬ奴があるが、恁んなに鹽分の強い湖水ではとてもそれが出來兼れるだらうと言つて笑つたんだ」と言つて遣ると、「己もその心中とやらが爲て見たい」といふ。爲たいと爲て見たいとの間には其の實一字以上の差異があるので、爲て見たい位ではまだ〳〵心中が出來るものぢや無いといふと、傍から細君が口を出して「如何せ死なぬ心中なら爲て見ても可いぢやないか」といふ。さう恁うして居る中に汽車は鐵橋を渡り終つて、間もなく對岸のオクデンに着く。

(二) ソートレーキ市

オクデンは後に山を負うた山間の小市で市俄古行の幹線と、ソートレーキを通つてデンバーに至る支線との分岐點である。車窓から首を伸べて四邊を見廻すと、停車場から程遠からぬ處に漢字で「大陸供給會社」と書いた看板が見える、矢つ張り日本人が居るなと大に愉快に思ふ。市俄古行の車と分れてこれから支線に入る。畑や村落の間を縫つて一時間程走ると最うソートレーキ市に着く。停車場ではリード君が忙がしい。それ靴だ、それ傘だと、一々取落物の無いやうに注意をして、皆んなを馬車に乗せておいてから自分も後から入つて來る。禿頭から落さうになつた山高をポンと叩いて、トン〳〵と一度足踏をしてから「宜しい?」とか何とか言ひながら赤髭の口元に笑を湛へて這入つて來る。軈て馬車は煉瓦を敷詰めた道路の上をゴト〳〵と軋つて指定のホテルに向ふ。低く垂れた雲の下に赤塗の電車が忙しさうに走つて、冷い風がヒヤ〳〵と吹いて來る。五時に着いて六時の晩飯にはまだ一寸時間があるので、一人ぶ

らく／＼と出かけて町を北へ山の手へ行つて見る。元來この町はユタ州の首府とは言へ、人口六萬程の小市でたゞ此處に有名なモルモン宗の本山があるといふので聞えて居るのだ。ホテルのあるのは町の中央部で、其角を北に折れて十二三町も行くと、寺や住宅の多い部分に出る。明日は「復活祭の日曜（イースターサンデー）」と言つて基督教の賽日である。大小幾つもの紙包を提げた奥さんや娘さん達がゾロ／＼と町から歸つて來る、何れ明日の御仕度だらう。又寒い風が吹いて來た。首を擡げて望見ると町の背後に連つた高山の頂には眞白に雪を帶びて、彼の峯此の峯には白い雲がさ迷うて居る。ホテルに歸つて晩飯を仕舞つた頃には案の定ポツリ／＼やつて來た桑港で逃上げた後で、この山間の小市邑に來て雨の音を聞きながら靜かに眠る——先づ安心と言つた體である。

翌朝食事を終つていざ見物といふ時に雪が降り出した。暫時待つたが止みさうも無いので一行は其まゝ自働車を走して雪の中を駈け廻つた。もと／＼このソートレーキといふ地方は亞米利加印度人の巣窟であつたのだが、千八百四十七年にブライアムヤングといふ人がモルモン信徒を率ゐ來つて此地に居を卜して以來、六十年内外で遂に今日の市街をなすに到つたのであるさうな。それでこの地にその本山を置いて途方もない大きな圓堂などを造り上げたので、忽ち其名が天下に知らるゝに至つたのださうだ。世界一のオルガンがあるといふのは即ちその圓堂の中にある。此の家は有名な鑛山家某の所有で千八百何十年に何十萬弗で建たものだ。これは當州撰出上院議員某氏の邸宅で、材料が何と何と何、その工賃が幾らいくらだ」と、案内者は例の米國式説明をのべつにやつて行くが自動車が早過ぎるので何れが何れやらさつぱり分らない。「鷲の門」だのヤングの銅像だのといふものを見てから愈そのモルモンのお寺へ行く。餘り高くない木立の梢を越して例の圓堂の大屋根が眞赤に見える。そしてその左右には總花崗で築き上げた大きな本堂が聳立つて居る。「あれは時々説教に使ふお堂でこれは重なる儀式を執行する處である」と、彼此の建物を指して案内者が説明して廻るのを、近郷から出て來た田舍者の一隊が我々と一緒に謹聽して歩く。雪は疾うに止むだが風がヒュー／＼と寒い。「今日は日曜でオルガンが鳴るから午後から聽に來へ、込合ふに相違ないが席は已が如何にかしておいてやる」といふので「ぢや宜敷頼む」と言ひおいて、兎も角もホテルへ歸る。

晝飯が濟んで立出の用意をして、モルモンの寺へ廻ると、午前の案内者が約束の通り堂の一隅に席を殘して置いて與れた。流石に廣い堂も殆ど人で一杯になつて、正面の大オルガンの前面には男女の歌ひ手が遠目には人形のやうに列んで居る。やがて幾十本か幾百本かのパイプを排めた大オルガンがブー／＼と鳴り出すと、その歌ひ手等が高い低い樣々な聲の限を盡してそれに和する。此分ではどうやら天の岩戸も開きさうに見えたが、兎に角時間が無いのでそこ／＼に其處を辭して町の南の停車場から、ライオグランデ鐵道に乘つてコロラードスプリングスに向ふ。立ち際に何處からか聞きつけられたものと見えて、當地發行邦字新聞の佐藤君——と記憶して居る——が挨拶に來て下された、忝いことであ

る。

（二）ロッキー

日暮に近づくに從つて段々と山が深くなる。軈てはまたも白いものがチラ／＼落ちて來る。も少し行くと四邊(あたり)は既に一面眞白である。雪に中てられたのでもあるまいが大熊君が眞青な顏をして腹が痛むといひ出す。六神丸は如何だ、熊の胃が好からうかと騷いで居るのを見て、我同じ車の隅の方に亞米利加女には珍らしい程しをらしい姿をした若い女と乘合せて居た二十七八の男が來て「私は此鐵道附の醫者ですが、何なら藥を上げやうか」といふ。大熊君に取次ぐと、「いや、それ程でも無いやうだから御厚意は謝するが最少し模樣を見てからに仕やう」といふので、病氣のはなしはそれで濟んだが、これから話の緒が開けて、何だ彼だと雜談にうつる。その中に日が暮れて汽車は山の中の小驛に止まつた。

此邊は鑛山區の中央なさうで、それらしい元氣がどことなく現れて居る。線路の傍に焚火をして温まつて居る連中がある。眞紅な顏を寒風に晒して勢好く歌つて通るものがある。ブレッドハートの「坑夫の歌」なぞいふ小說はこんな處から生み出たものだらうと思つた。此處で醫者夫婦が下りる。「恁んな處に住んで居て淋しかア無いのですか」と聞いて見る。「いゝえ、別に。靜かで、さうして暢氣ですから町場に住んで居るよりも氣樂で宜う御座ゐます」とその美しい妻君が答へる。成程あゝしてお互がお互に滿足し合つて暮して居るならば、山が海でも別に不滿は無いのかも知らんと、私かに夫婦を祝福してやつた。車外に出た醫者夫婦が雪の中に立つて「さよなら」をする。此方でも帽子を脫つて「おさらば」をする。其中に汽車は立つて、焚火、坑夫の歌、及び若き夫婦等を後に遺して、益々山奥の方へと進む。

翌朝目を覺まして見ると、峯も、谷も、溪川の畔も、皆雪深く埋れて居る。その雪に埋れた中に止つて汽車は少しも動かない、唯時々ボーボーと鳴らす汽笛の音が谷間に響いて聞えるばかりだ。さうかうする中に彼方からも一つ汽車が來た。黑い煙をボッ／＼と吐いて氣忙しさうに走つて來る。その長い／＼工作車が通越すのを待つて當方(こちら)の汽車も動き出した。

さすがに深かつた雪も漸く薄らいで、九時十時頃になつては道端に消え殘る脊梅鮪程なのさへも無くなつて仕舞ふ。雪が盡くる頃から汽車は岩山のそゝり立つ處へかゝつた。線路は狹い溪谷の間を走つて居るのであるが、その右側に四五間幅程の急流を挾んで見上げるばかりの巨岩がつゞいて居る。見上げるばかりではまだ盡さぬ。いくら覗き上げても車窓からは仲々見上げきれぬ高いやつもある。それが日本の山水で見るやうな、苔の蒸した、濕氣(しめりけ)のある。見て清々(すが／＼)するやうなのでは無いので唯無暗に巨いとばかり、いやに干からびた、丁度燒石のやうな岩で、見て居て體の水氣を悉く吸收(すひと)られるやうな思がする。その粘い岩が十哩も二十哩も、遂には五六十哩もつゞく。彼等はそれをローヤルゴーヂと稱へて、實に天下の偉觀だと意張つて居る。成程偉觀かも知れぬ、併し一

向懸心せぬ偉觀である、素より美觀でも何でもない。その所謂天下の偉觀を通越すと、段々と平地に出て來て遂ては彼處を通つて來たのか知らんと思ふ程に山が遠くなる。詰りは昨日の夕方から今日の午後にかけて北から南にロッキーを横斷したことになる。斯んな工合に四月十二日が終つて物影が長く地上に曳く頃コロラードスプリングスに着く。

十三日午前九時馬車を雇つて山の方へ行く。此の町はロッキーの麓、高原の上にある人口二萬程の小市で山間の避暑地、日本ならば輕井澤とでもいふべき處だ。道は爪先上りて、晴れては居るが山の方から吹いて來る風は仲々寒い。外套の襟を立てゝもまだ寒い。町を抜けて段々と郊外に出る。路傍の子供等が珍らしさうに我等を凝視める。やがて一時間程經つた後にマニトーといふ處へ着く。こゝは一寸した別莊地で、避暑客への備であらう、大きい小さい幾つものホテルが見える。此處の名物をマニトー鑛泉と言つて路傍の小川の畔から湧出る炭酸泉である。混々として溢るゝ泉をしたゝかに飲むでまたも出掛ける、馬車に乘つて山登は初めてゞある。亞米利加人が馬鹿なんだらう、草鞋穿きに握飯といふやうなことは當地てはあまり流行らんと見える。馬車は例の乾き切つた岩山の中をクル／＼と迂回して登て行く。隨分亂暴だと思ふやうなところへも道路を付けて、到る處に人爲の力を誇つて居る。軈て「風の穴」といふところへ着く。これは我國でよく見る鍾乳洞で、案内者は西も東も同じこと、「これが何の象で、あれが何に似て居る」と嘘八百を並べて廻る。但し松明は米國式で無いと見えて、行く手／＼にパッ／＼と電燈が點ぶ。洞の前の料理屋て晝飯を食ふ。遙か右方に雲を頂いて立つ高峯を指して「あれはパイクスピークと言つてロッキーの此の部面に於ける最高峯である」と、リード君が説明する望遠鏡を取つて覗くと、成る程高いには高いが、その頂上に持つていつて大きなホテルが建てたところは何處までも米國式である。

此處から別道を通つて「神の園」といふへ下りる。林間を流るゝ溪流の響が潺々として宛ら天樂の調とでも聞える處だと想像すると大した間違である。神の園とは即ち百鬼の園で、途方もない大岩が此處にも彼處にものき／＼として無作法におつ立つて居る處である。それで「あれが巨人の怪もののけ物退治て、これが亂神の立姿である」と、案内者は例の通りの説明をして過ぐる。この大層な神の園を出るとそこは怪岩の跡を絶えて、唯廣漠たる高原になる。疲れ切つた馬を鞭撻つてその高原を下り行くと、遙かに夕日を受けて赤く白く横たはつて居る市街が徐々として近づく。その市街の後方には果しなき廣原が連つて、緩く起き伏す丘を宛らの波のうねりに、限なき大海が展開がつて居るやうに見える。

（一三）中部亞米利加

十三日の夜コロラードスプリングスを立つ。其夜ホテルに舞踏があるといふので立ちがけに舞踏室に寄つて見たがまだ始まる氣色も無い。唯正面の小高いところに囃方の備準丈けはしてあつた。

ホテルから停車場の間四五丁が程を兩側に立木が並ぶ。停車場に着く

と間もなく東部行の汽車が來るといふのでお客さんが込合つて居る。待合所の一隅に四五人の男が驛員を取卷いて何か談じ付けて居る。鞄が無くなつたとか、スリに遭つたとか、恁んな山の中にも氣の利いた商賣の人間が居るものと見える。軈て汽車が這入つた。急いで乘込む、既に寢床を作らして寢て居る人もある。我等も別に仕樣が無いのでつゞいて寢る、ホテルでは最う舞踏が始まつて居ることだらうなぞ思ふ。

十四日、晴れだ。さすがに田舍の朝景色は惡くない。米國を三分して東部を商工業區、西部を鑛山區、その中間のこの界限を農業區となす。見渡すかぎり平坦な畑地で、其間を細長い野路が紆餘曲折して通つて居る。遠近の村落には幾つもの風車が廻つて、牛や、豚や・鷄が其處此處に草を食み餌を啄むで居る。其間に農夫が來る、農婦が往く、農馬車が走る、宛然一幅の好畫圖、「何んや、曲が無い景色やな」と云ふ人もあつたが、自分は甚だ趣味ある景だと思つた。

コロラードスプリングスから市俄古までは殆ど千二三百哩もあるので急行で走りつゞけても一日二晩はかゝる、正午頃オマハで市俄古大西鐵道（シカゴグレートウエスターン）に乘換へて明くる十五日の朝市俄古に着く。其朝も晴れて居た。六時頃寢臺に居るまゝ窓掛を上げて見ると、まだ大都會の面影こそ見えぬ、路傍の家が追々に込んで來て、同じく田舍の眺ながらも、早起の人の往き來のさま、荷を積んで通る馬車の軋り工合なぞが昨日あたりの暢氣さとは大に趣を異にして居る。汽車は不相變全速力で走つて居るので嗽（うがひ）をして服を着更へた頃には既に製造場の建ち並ぶあたりに來て、それから物の十分とも經たぬ中に愈停車場の構内へ這入つた。澤山に客車の並んで居る傍だの、機關車の煙を吐いて居る傍だの、何處行かの汽車がお客を滿載して出てんばかりに用意して居る傍だのを通り越して、遂に汽車は大きな屋根に被はれた長いフォームへ横附になる。日本には猫兒が何疋居るとか尋れて萩原老人を弱らしたチャールスザッテル君だの、自分の郷里のバルチモーアは美人の本場だと言つて盛に惚けて居た史學者のフランクニューカマーハック學士などにも訣れ別れて、自分等はリード君に伴れられてホテルに向ふ。途上車中で「これからは段々人氣が險（けは）しくなつて來るから懷中物なぞはよく用心しないと飛んだ目に逢ふことがある」と注意されて、俄かに衣嚢を探つて見るなど、遣つて仕舞つてから可笑しくなる。成程往來は朝からの人出て、此分てに桑港なぞは迚（と）ても及びも無さそうだと思ふ。

(一四) 市俄古

一

市俄古――と言つた丈けではまだ盡さぬ。即ち中央大市場（ゼクレートセントラルマーケット）と附加へればならぬ。人口二百五拾萬、年々の增加率が七萬五千で、凡ての製造物、凡ての農產物は先づ一度此處に聚つて後各地に散つて行くところだと云ふ。天然の岩か、人が築き上げたものか一寸見分けがつかぬ樣な大廈（たいをく）が巍然として空に聳えて、狹い街路（とほり）は其處へ日が射すのか知らんと思はれるまでに暗い。人馬絡繹だとか、肩摩轂擊だとか、支那の[illegible]

はどれ程に賑つたものかは知らぬが、兎に角此塲は人と、馬車と、自動車で埋つて、その埋つた中を掻分けて電車が奔る、その電車の頭上を、轟然たる響をなしてひつきり無しに高架鐵道が通ふ。紛然雜然、金魚が口端(くちばし)を延べて上水(うはみづ)を吸ふやうに、人はチョキンと首を持上げて、什麼かして空氣の吸ひつぱぐれの無いやうにと努めて歩く。

午前中リード君に伴れられて大熊君と共にクック社支店から商業會議所へ行く。兎角亞米利加人は演說を好む、太つた白髮の書記長は高が三人の聽衆を前にして大演說を始めて仕舞つた。「敢て米國が日本を開いたといふわけでは無いが、とにかく米國は日本無二の友邦ぢや無いか」といふ。「それに加州邊の愚民の煽動に乘つて、眞面目で日米戰爭說を云爲するとは何のこつた」といふ。「この半世紀以來の親交は、僅か一部の野心家の放言に依つて左右せらるゝべく、しかく脆弱なものとは信ずることが出來ない」といふ。「米國は廣い國である。或一部に起つた響が忽ち全般に擴つて卽座に全國の情熱(センチメント)を興奮せしむるやうな國では無い」といふ。「君等が歸つたら宜く此理を說明して、何も然う騷ぎ立てるには及ぶまいと言つて聞かせるのだよ」といふ。「戰火の戰爭は俺や嫌だが、一つ商工業の戰爭でも遣らうぢや無いか」といふ。「君等の國で獨逸製(メードインヂヤーマニー)の安物ばかりを喜んで米國品(ユーエスぴん)を歡迎せぬといふのは全體分らん話ぢやないか」といふ。「兎に角階下の商品取引所を見せるから一緒に隨いて來給へ」といふ。それてその取引所に案内せられえ、賣手買手が破れんばかりに聲張り上げてやんや〱と遣つて居る光景(さま)を見せ了つた後

「これで仕舞つたのだからさア歸るんだ」と、またもがや〱の往來へおつぽり出されて仕舞ふ。

二

市俄古の名物はミシガン湖の畔でも無く、ステート、ストリートのカフェーリンの美人でもなくて、市街の南部にあるその大家畜市場(ユニオンストックヤード)である、十六日の朝、霧深き中に自動車を飛ばして、そのストックヤードへと出掛ける。途中迂回してシカゴ大學からワシントンパーク、ジャクソンパークの邊まで見物する。霧が深く罩めて居るので、途上二三間を隔てゝは何物も見えない。突如としてその霧を衝いて自動車が一つ飛んで來る、數秒を隔てゝ第二の奴がまた飛び出す。かくて第三、第四、霧より出でて霧に入る自動車は、恰も彈丸でも飛行くやうな有樣である。ジャクソンパークからは、晴れたらば、海のやうなミシガンの大湖が一目に見えるわけなのだが、唯深々と白く煙つて、僅かに汀に打寄する漣波の激々たるを看るのみである。然う恁うする中に自動車はストックヤードの門前に停る。

抑々このユニオンストックヤードといふのは米國切つて、と云ふよりは世界切つての家畜市場で、一日に十五萬頭からの牛馬豚羊を賣買することのある處なさうな。門を這入ると、長靴を穿いて鞭をモシャ〱させた、餘り人相の好くない賣手買手が、或は馬上に、或は徒歩で、其邊をはうついて居る。リード君が事務所へ行く、事務所では縞のジャケットを着た十七八の給仕を附けて一行を案内さして與れる。全體の敷地が

五百エーカー、檻の數が二萬一千五百、其中に敷設してある鐵道の延長が三百哩、それで銀行が二つに料理屋が六軒あるのださうだ。そして其の檻を殘らず充せば一時に七萬五千頭の牛と、三十萬頭の豚と、十二萬五千頭の羊と、六千頭の馬とを入れることが出來るのだといふ。

それ等の光景を一と通り見終つて同じ構内にあるスヰフト製肉會社といふへゆく。入口の小房には各種の肥料、石鹸、其他牛油の製品を陳列した硝子張の見本棚を備附けておく。總てエレヴェーターに乘ると階上の一室に案内せられて、此處で見物人が集ふのを待つて一團として伴れ出される。先づ幾つかの貯藏室を看る、次に冷藏庫を見る。斯くて其等の見物が了へると愈評判の屠殺場へ案内される。薄暗い廊下を通つて木の梯子段を昇ると其處は梁の高い廣間で、木や鐵の手摺が全體に油ぎつて、腥い臭氣がプンと鼻を衝く。案内者が「此方へ」と云ふので隨いて行くと、さア大變なところへ出た。

室の一方に數十個の上空の木檻が造り附けてあつて、其上に三尺幅程の橋を架してある。檻と檻との界目には辨のやうなものをしつらひて第一から第二。第二から第三と通ずるやうになつて居る。一方の口から二頭づつの牛を追込む。牛が嫌つて仲々その所定の檻に這入らない。橋上に濶歩して居る巨大漢が手にした鐵鎚を差し伸べて牛の尻のあたりを突つく。已を得ずして牛がその所定の檻へ這入る。頃合を見計つて牛殺が其の鐵鎚を振つて牛の腦天を一つ發止と喰はする。撲られたが最後、今迄息をして居た牛が前足を折つて至極無造作にコロリと檻の底に轉がる、うろ／＼して友達の遣られるのを見て居た奴が今度はやられる、矢つ張り前足を折つて以前の奴の上に倒れる。二つながら倒れると檻の一方の口が自身に開いて二頭の牛がコロリと前の板敷に轉がり出る——哀なるは死の形貌だと思ふ。

轉出た牛は、梁から下してある鉤に後脚を引懸けて、グイ／＼と吊し上げておいて喉笛を裂かれる。裂け口から赤黒い血がドク／＼流れ出る、血の雨といふがこれは血の瀧である。て優壓のが七つ八つも揃つて一時に行はれるのである。板敷と云ふのは丁度風呂場の洗場のやうになつて居るので、流れ出た血は眞中の溝に集つて滾々として屋外に出て去る。血を搾り終ると今度は皮を剝ぐ、皮を剝いてから首を斷つ。斷たれた首がチヨコネンと傍の鐵製の盥の上に並ぶ。——焦熱地獄といふ。血の赤きを宛然の火の紅きに、生きながら地獄の光景を目睹するやうである。

秋原老人は頻に首を振つて「偉いこつちやなア、偉いこつちやなア」といふ。年下の田邊君は顏を背けて淸心丹を呑むで居る。獨り大熊君は手帖を出して一時間の屠殺數を書留めて居る。斯くて皮を剝がれた牛は、獸醫の檢査を經た後に、又別の持場に移されて其處で奇麗に洗滌される、洗滌が濟んで冷藏室へ行くといふ順序になる。屠殺場を出てから、製肉部、製鑵部、石鹸製造部といふやうなものを順次に観巡つてホテルに歸る。リード君が「何うだつた？」といふから、「驚いたもんだ」と答へておいたが、實に彼樣な物を平氣で食つて居る間はとても彼等の獸性を除去することは出來ないのだと思つた。ホテルに歸つて部屋の抽出を開けて

見ると、前の客が置いて行つたのだらう、其處に砂糖菓(キアンデー)の小箱がある。試に中を開けて見ると二つ三つ殘つて居る。それを一つ頂戴して漸く屠殺場の腥氣を去つたやうな心持がした。

三

ストックヤードに次ての市俄古の名物は、これも世界一の名に背かぬマーシャルフィールド百貨店(デパートメントストーア)である。日本一、東洋一の「三越」を十數倍した程のもので、地上が十二階、地下が、三階、各階が貨物と人とで埋つて居るので、此處には棺桶に石塔までも備はつて居るといふので評判になつて居る。見物に行くと昨年朝日新聞の一周隊を案内したといふ二十一二の別嬪が附いて廻つて與れる。色が白くつて、背がスラリとして、親切で優しい、「好か女子(をなご)ちやなア！」——大熊君なぞは四十面下げて目を細うして悦に入つて居る。陳列室の外に休憩室や寫眞室があるのは無論のこと、食堂もあれば圖書館もある。小供の遊戲場もあれば、婦人なぞが目が疲れた時の御用にと適度に光線を鹽梅した半暗室もある。店内に電信電話局があるのなぞは珍しくも無いが、病人が出來た時の爲にと常勤の醫者が詰切つて居る應急救護所の設備迄が整つて居る。近頃某の雜誌で諸家の「三越」に對する意見なるものを拜見したやうに思ふ。奢侈の助長所だとか、不用(いらざる)の贅澤だとか、隨分手嚴しい非難をなされたお方が無いでもなかつたやうだが實世間には偶々議論を立越えて居ることが無いでもない。

明日出立といふ十七日の午後にジヤクソンパークのフィールドミュージアムといふへ往つて見る。各種(いろ/\)な古器物や動物の剝製なぞを陳列して置くところは普通の博物館と大した相違は無いが、此處で一番目を惹くのは亞米利加印度人(アメリカンインディアンス)に關する蒐集(コレクション)である。弓や矢、それから赤や青の繪具で人面を描いた皮衣なぞも皆とり/″\に面白いものだつたが、最も興あるのは彼等の習俗を寫した模型であつた。今日の人は筆を執り算盤を彈いてパンを儲ける、昔の印度人(インデアン)は鹿を逐ひ、熊を屠つて日を迎へ日を送つて居たのである。獵の前、獵の後には、火を焚き酒を酌んで山神を祭る。月明き夏の夕、僅かに梢葉を漏した一本の杉の木を圍んで、部落の老幼が集うて御供の踊(サクリファイスダンス)をおどる。

　兎逃すな、逃すな兎、
　鹿も山の上、峰の上、

笛、太鼓の鳴物賑かに、曉東雲の白む頃まで踊る。

暇な時には彼等は獵具の修繕をする。冬の日、天氣の好い時なぞはお人好しの喜八さんといふやうなのが居て、日向に出て木面(めん)を彫る。口を穿ち、目を二つ彫り拔いて鼻を附ければそれで出來上る。お能の面のやうな、馬鹿囃の面のやうな、周圍を取卷いて居る子供等がやんやと囃す。

守護柱(トーテムポール)といふものがある。五十尺許の木柱の鹿、狼、鷲、蛙、蝙蝠なぞの形態を異様異態に彫つたもので、各戸の入口にそれを建てゝ所屬の部落を表はしたものだといふ。この鹿を逐ひ、面を刻みて悠々閑日月を樂んで居た太古の種族も、今は分を爭ひ秒を競ふ白人に壓倒せられて

哀れカンサスの南、テキサスの北あたりに其の餘喘を保つに過ぎないのだと云ふ。

翌十八日の午後、ソボ降る雨の中に市俄古を發してナイヤガラフォールスに向ふ。

（一五）ナイヤガラフォールス

朝早く突然汽車が停つた。停車場があるのでも無し、然りとて別に轢死があつたでも無いらしい。何うしたのだらうと思つて居るとリード君が來て「一寸下りて見ろ」といふ。言はるゝが儘に下りて見ると、成程其處は崖の上で一面に平石を敷き詰め、一つ二つベンチなぞも置いてある霧が濛々と立罩めて居るので何も見えぬが、その霧の中から殷々地軸も搖がんばかりの響が傳はつて來る。即ち此處がフォールスヴューといふところで、市俄古からミシガン中央線（セントラル）でデトロイトを過ぎりエリー湖の北岸を走つて來ると、初めて瀧が見え出す處ださうだ。瀧に下車して一日の清遊を恣にすることの出來ない人の爲に、特に數分間停車して、せめてもの見物を爲さしむる處だといふ。

軈て汽車が米領ナイヤガラフォールス市に着く。荷物は停車場に預けて馬車に乘つて對岸加奈太側のクリフトンホテルといふへ行つて朝飯を食ふ。北風が寒く吹いて橋の上では帽子を飛ばされさうだつた、空はどんよりと曇つて居る。

ホテルには我々の外に誰も客が無い、大きな各室ががらんばうである。朝飯を食ひながら瀧を眺める、轟々の響が硝子戸を透して室内までも轟き渡る。霏濛々として崩落する萬斛の水の外には、山も空も冬枯の色淋しく、一種蕭寂の氣人に迫るを覺える。

朝食を終つてまた馬車を驅つて附近の見物をする。ゴートアイランドに渡つてアメリカ瀧及加奈太瀧を眼下に瞰下す。更に眼を返して瀧の上流を望めば、團々たる氷塊が激流に押されて千軍萬馬の狂奔するが如き趣を呈して瀧に向つて寄せて來る。雄大か、壯大か、瀧とし言へば灑々たる懸瀑を憶ひ、亂滴綴綴を交ふるが如き幽瀑をのみ想像して居た自分は殆ど形容の辭に窮して仕舞つた。瀧の下は有名な奔流（ラピッツ）になるのだが丈餘の氷が張詰めて居て、其の壯觀に接し得なかつたのは遺憾である。瀧から歸つてフォールスヴュー附近にある發電所（パワーハウス）を見る。何百萬ホルトの電力を六百哩四方に送るのだと云ふ、車輪の響轟然嘩然、これも世界一の名には洩れまい。ホテルに歸つて繪葉書なぞを求める、通貨（かね）も違へば話す英語の調子も違ふ。いくら國が違ふと言つても河一河の隔つる丈けでこれ程までに萬事が異なるかと思へば、西洋人が日本に來て事々を珍しがるのも無理も無いことだと思ふ。

午後五時一人ホテルを出てヴィクトリア公園を加奈太瀧の傍まで往つて見る。飛沫に被はれて容易にその全形を覗ふことが出來ない。路上の小亭に一人の亞米利加人が居た。「何うだ、日本にも斯んな瀧があるか」といふから、「斯んなべらぼうなのは無いが、最つと優美な、最つと趣のあるのが澤山にある」と答へる。「俺も來年は往つて日光、富士見るあり

ます」と言ふ。

折から雨が降り出して一層の冷氣を増したやうに思ふ。二三時間の後にはもう此地を去るのだと思つて、目を瞠つて出來る丈けの印象を腦裏に刻まうと努める。瀧は濛々と煙つて數羽の岩燕が白烟の中に飛び交して居る。

(一六) ボストン

その夕、雨が上つて夕日が青く瀧を彩色(いろど)ろ頃ナイヤガラフォールスを立つた。バッファローで紐育中央線(ニューヨークセントラル)に乘換へて眞直にボストンに向ふ。

二十日午前十時半ボストンに着く。鐵道の附近には町から町が相次いで、無數の煙突からは纔に黑煙を吐く、西部中部には見られない景色である。

ボイルストン街のブランスウイックホテルに入る。山中哲學博士の店が同じボイルストンの三百二十四番だと聞いて居たので、早速加洋丸以來の久闊を叙しに出掛けて行つたが留守だつた、店には陶磁器から青銅類の骨董品を所狹に並べて中に五六人の日本人米國人が事務を執つて居る。

ボストン――マサチュセッツの首府、新英州(ニューイングランド)の重要部市、米國に趣味といふものがあり、古色といふものがありとすれば、それはこのボストンにある。この都(まち)の歴史は一六二三年から始まるので、街衢の多くは昔ながらの狹い、曲折を極めたものである「古つぼけた町ぢやおまへんか」、而かもこの古つぼけた町を除去して仕舞ふならば米國の歴史は大半消滅して仕舞ふ。

ホテルの西にコプレイスクエーアといふ廣場がある、トリニティー教會だの、公開圖書館だの、美術館だのといふ近世建築の粹を鍾めて居る。晝食後打揃つて圖書館からハアバードの方面へ出掛ける。

圖書館前から電車に乘つて北へチャールス河を越すと大學の所在地ケムブリッヂになる、ハアバードスクエーアで下車して先づ大學を觀る。鐵柵の廻つた廣い構内にはセヴアホールだとか、ゴーアホールだとか、テーヤーホールだとかいふやうな石や煉瓦の建物が竝び立つて居る。建物と建物との間は綠の芝生で、鳩が飛び栗鼠が戲れて居る、試に口を鳴してそれを呼べば、栗鼠は怖るゝ氣色もなく近づき來つて小ぽけな目を刮いてチロコネンと立つ。チャンニングや、エマソンや、オリヴアウエンデンホームスや、それに小村伯、齋藤修一郎君なぞが居た時分にも慥度に栗鼠が來て目を刮いたか知らんと思ふ。實にも近處にハアバートが在るお蔭でボストンは米國學藝の淵藪と呼ばれて居るので、ヴァンダービルトや、ヂエゴールドや、モルガン等を神樣のやうに思つて居るニューヨーカーを眼下に瞰下し得るのはボストニアンの誇(プライド)とする處である。

大學の四、ケムブリッヂコムモンの一隅にワシントンエルムと言つて有名な楡(にれ)の大木がある。一七七五年は七月の三日、此の木の下で初めて

ワシントンが獨立軍總司令の職に就いたのださうな、樹下に其由を刻つた碑が建つて居る。

ブリトンが攻寄せたといふ。母は古鐵砲を取出してそれを總領息子に渡す。彈丸が無いといふ、錫匙を碎いて、彈丸を鑄る。次の兒が十六になる。古い錆刀の外には何物も無い、母はその錆刀を渡して「此を以て戰へ」と言ふ。「敵陣に進み入らば、銃を措いて逃ぐる者があらう。其の銃を取つて何も進め」と言ふ――亞米利加にも武士道はあつた。

バーンステーブルあたりを一隊の義男軍がケムブリッヂを指して急ぐ。百姓の兒が來てそれに馳せ加はる。爺が門前に出て一行を見送る、「女々しい振舞をすな、若しお前が男らしう振舞つて呉れぬならば、俺や生てお前に會ふこたアせぬぞ」といふ。

斯くて手ン手に打物取つたる二萬の義男軍がボストン附近に聚まる。

ドルチエスター丘はボストンの市街を眼下に瞰下す。ヂエネラルワシントンは夜陰に乘じて一隊の兵を送つて其處に掩堡を築かせる。彼等は遙かに英國哨兵の「無事！」「無事！」と布れ歩く聲を聽きつゝ沈默して鶴嘴を働かす。翌日大戰鬪があつた。丘より雨下する砲彈に堪り兼ねて英兵は船を艤してボストンを逃れた。これは今より百三十五年前の話、星移れば物變る、彼等の子孫は今や布哇を併せて比律賓を呑んで仕舞つた。

其夜山中哲學博士の御馳走で寄席を看る。猿の曲藝だの、美人の唱歌だの、それは〳〵面白くつて思はず口が幾度かアングリ。

翌日例の馬車乘見物を遣つて夕刻其地を出發、フオールリバーから汽船が愈紐育へ向つた。ナイヤガラで風邪に罹つた椋十翁は此時餘程の發熱て、給仕に來た黑ン坊が青鬼赤鬼に見えたといふ騷だつた。

（一七）紐育

一

「巴里を觀よ、而して死ね」とは十九世紀の哲學者の言つた事だといふ、現代の賢者は「紐育を觀よ、而して生きよ」と敎へるのだと、同船のニユーヨーカーの講釋を聽きながら灣口を上つて行く。朝まだきより起きて甲板の上に立つて居るのである。ヒユー〳〵と風が吹いて寒いこと夥しい。

紐育！　紐育！　香港も觀、市俄古も觀、ボストンも觀たものゝ、期待は紐育に集中されて居たのである。紐育を見んでは何だか米國を見たやうな氣がしない。

その期待たれた紐育は只一面の白霧の裡に包まれて容易にその姿を現しさうにもない、たゞ小蒸汽だの土砂船なぞが忙しさうにその附近を往交うて居るのが見えるばかりだ。軈て船の左舷に當つて遙かに一個銅像らしいものが見えて來た。雙眼鏡を取つて覘けば右手を高く差上げて燈火のやうな物を持つた女神の像である、灣内に入り來る凡ての船、凡ての人を睥睨して居るやうに看える、「あれぞ平和の神像と云つて、紐育に入り來る人の、何人も見落さぬ銅像である」と。例のニユーヨーカーが

教へて呉れる。其間にも船はヅン〳〵と進んで居る。暫時して船の速力が減じたと思ふと、突如として前面に霧を排して雲衝く大厦の天頂が表はれた。眼を擦つて尚も凝視むると十階二十階、摩天の高屋が巍然としてその左右に簇立して居る。空播家！　空播家！　霧を隔てゝ聳立して居る空播家の大塊を望めば、夢の奥に怖い怪物を認めたやうな心持がする。

其中に船が第何十何號の棧橋に着く。喧々囂々、スカイスクレーパーなぞは見えればこそ、自己存在の有無さへも疑はしくなる。

荷物は前方送り届けて置いたので其方の面倒は無い。唯身一つを沸き返るやうな人込から脱け出て自働車に乗つてトットと逃げる。第五大路は三十一町目のナルコット館と云ふのが十日の滞留の本城と決まる、流石は紳縉の邸宅の櫛比する場所柄なさうで喧囂の中にも何處となく落着のある街である。四階の三百二十四番といふへ案内せられて、兎も角もと部屋つゞきの風呂一浴。

「ハーロー、マンハタン千六百〇八番」、新井の大木君に電話を掛けやうと思つたが仲々通じない。折柄ボーイが來たので早速頼む、「ハーロー、マンハタン一六〇八」「何うぞ、貴方、最うよろしう御座います」、大木君が今夜來るといふ。晩飯まではまだ時間がある、敷島ではないベルメルといふ煙草を出して一本點ける、此處迄來たからには見物はせんでも最う澤山だといふ心持になる——早くも紐育に呑まれ掛けて居るんだ。

二

廿二日午後、リード君を隊長にホテルを出て右へ曲つて、最一つ右へ曲つて第五大路を南へ下る。山中商店の紐育支店の前を通過ぎて少し行くと、廣小路と第五大路と落合ふ廣場になる。四つ角の眞中に芝生の小圃を作つて少許り木なぞを植ゑてある。圃の周圍には多くのベンチが据ゑてあつて髭を生して山高を冠つた野良苦良男供がパンを欲しさうな顏をして凭れかゝつて居る。

スクエーアの南側に三十階の三角塔が聳立つて居る、鐵家と言つて紐育名物の一つになつて居る。形狀の工合でその周圍には常に風が絶えないので、少し強風の日なぞには用心をせぬとよく女の裾を捲上げるとなぞがあるのだと云ふ。それを見る爲に常時四五十人の馬鹿者が其近邊を烏鷺〳〵して居るのだと山中博士の諧謔だつたが、眞逆に其麼馬鹿者も見えなかつた。

それを右にづん〳〵南へ下りて行く。廣小路の人込の中を押され〳〵て市廳の邊まで行くと右側に雲衝く高塔が巍然として立つて居る、成程紐育の凌雲閣とは斯麼のを言ふのだなと思ふ。此れに較べると先程の三角塔なぞは孫曾孫とまでは墜ちなくも兄弟とまでは六ヶ敷さうだ。裁縫機械の本家本元。シンガー館といふのは即ちこれで、銀座を東側に救世軍の本營あたりまで行くとその支店があります。

エレベーターに乘つて昇ると一階二階三階四階、天邊の四十七階の展望臺に上つた時には目も眩つて「偉い高い處へ上つたもんぢや喃！」。

三

其夜——といふのは廿二日の夜だ、水野總領事の私宅で晩餐の饗應があつた。頻に髯を撚立つて、甚だ「水野幸吉」らしく無いお方だと聞いて居たが、偖てお目に掛つて見ると、丸顔の赤ら顔の、身體こそ太つていがつしりしたお方だが武骨な裡に愛嬌のある、立派な米國風の紳士である。「日本も最少し機械の應用を識に遣らんけりやならん。日本人は手で出來ん處を機械で遣るんだが、當國では機械で遣れんところを手で爲るといふ工合なんぢやからなア」と始めて來ると氣焔萬丈、書架の中央に飾つた「漢口」といふ本がピカ〳〵とその金文字を電燈に光かして居る。水野領事と、領事夫人と、及びお二人の愛孃と、和氣靄々、春風不斷に吹きめぐるが如き家庭の裡で斯かる御馳走になりました御厚意は一行の永く忘れ得ないところである。

廿三日は雨だつた。昨夜の御馳走がもてたといふでもあるまいし、遙々世界見物に來て居ながら一寸やそつとの雨降に怯えたといふわけでもあるまいが、兎に角誰も出掛ける人が無い。其中に大熊君が遣つ來る、「何うだ?」。「何うでも無いさ」とは答へたものゝ、其實少々米國に中てられた氣味で甚だ振はないで居たんだ。其處へ萩原老人が這入つて來る「萩原さん、昨日あなた何爲居つた。途中黑ン坊の婆アさんを引捉へておからに、頻に何やらん言ひ居つたぢや無いか」。「引捉へたんぢやおまへんがな。俺の歩き居るところへ來て何んぢや知らんペチャ〳〵言ひ居つたが薩張分りまへん喋な。怪體な事言ひ居らんて早う往にやれ言ふのやが仲々往なんさかひ、閉口し居つた、わたい」。「夫婦に成つて吳れちう事でも言ひ居つたんぢやらう」。「阿呆らしい、あんたぢやあるまへし。俺の禿頭よりはあんたの髯の方が好う黑ン坊に似合うて居ますさかひ」。大熊氏莞爾として其の長髯を撫して居る。何うやら白毛が二三本殖えたやうだ。

大熊君も去つて仕舞つた。萩原老人も歸つて行つた。後は一人で徒然に堪へ無い。椋十翁が朝日新聞の當地特派員福富正利氏から大阪朝日を借りてあるのを思出して、それを又借りて來る。東京の寺が燒けて、代議士が七八人も拘引されたと言ふやうなことはシカゴの新聞で一寸看たが、これには勿論まだ載つて居ない。唯如是閑といふ人の小說がある。額の男が何うとかしたと、成程閑さうな事を言つて居る。閑さうな事は言つて居るが仲々閑で無さゝうでもある。畢竟は眞面目なやうなとぼけたやうな、要領を得てるやうな得てないやうな態度が、今のやうな世に處しては矢つぱり一番要領を得てるんだと思ふ。近頃忙しい思をして居た處へ、これはまた好いを讀物得て嬉しかつた。アイクマーベルだとかマークトエーンなぞと言つて矢つぱり駄目だ、少しは亞米利加の奴等にも猫、額の男位は紹介して說きたいものだ。一つ奮發して日本文士招待會でも催したら如何だらう。銀行の頭取や汽船會社の社長などを招んで金儲けの比較研究を遣るばかりが敢て和親の上策とは限るまい。薄暗いので電氣を點ける壁には母鷄に雛鳥を描いた額が懸つて居る。

新聞に出すのだからと言つてマーツーといふ寫眞屋で寫眞を寫された

り、鐵家(フラットアイアンビルヂング)の下から見物自動車に乘つて、モルガン、ヴアンダービルド、カーネギー等の邸宅から、河邊散策地(リバーサイドドライヴ)、グランド將軍の墓、コロムビア大學、中央公園のあたりを見物し、隙々夜一人藥物屋へ出掛けて行つては宛然(さながら)二三年も米國に住んで居たやうな心持で買物を爲て見たり、日曜日に教會へ往つて見ては成程お寺とは金持の後家さんや暇な女子供が退屈凌ぎに押かける處だといふことを實見し、東京から出立後に出した手紙を受取つては矢つぱり故郷の便は惡くないものだといふやうなことを承知して、廿六日といふに華盛頓に行く。

(一八) 華盛頓

華盛頓は京都のやうな處だ、と言つて敢て意氣地無しの、人形のやうな人間ばかりが揃つて、やれお茶だ、それ謠曲だと、宛然人生をマヽゴトのやうに考へてる人間から成立つて居ると言ふのでは無い。附近に大阪といふ一面から見れば俗惡極まる大都會を控へて居り乍ら、超然としてその俗界の上に立つて一種捨て難い趣を備へて居るといふのが、華盛頓の紐育に於ける有樣である。京都や東京が日本の生命であると同時に大阪や名古屋も日本の生命である。だから市俄古や紐育が米國の生命であるのは素より論が無いが、同時にボストンや華盛頓も同じ價値に於て米國の生命、尠くとも生命の根元(ソース)であると言ふのだ。物も食へば糞も放る、それで詩も讀み歌も詠むのが人間と言ふものだと言つたやうなわけさ。着た晩の七時頃に出掛けて國會圖書館を觀に行く。國會圖書館と言つたとて、敢て議員專用の書籍館では無いので、上野あたりの圖書館と少しも變らぬ公衆圖書館である。先づその堂々たる外觀が一小丸圍を挾んで對立する議院(カピトル)の建築に對して何等の遜色が無い。金光燦爛たるルネサンス式圓屋根(ドーム)の頂が殘照に映ゆる樣なぞは啣然として天國の宮闕を望見るが如き趣がある。その圓塔(ドーム)の頂上(てつぺん)に永劫不斷に燃えて盡きざる科學の炬火(トーチオブサイエンス)なぞをくつ附けた處は仲々に米國式に振つて居るぢや無いか。

中に這入る。閲覽室を中軸にして四方に各室が廣がつて居る。東館、西館、南館、北館、東廊、西廊、南廊、北廊。下院議員讀書室、上院議員讀書室、各室、各廊、各館が華麗し美盡しの繪畫彫像で飾立てゝある。中央の圓塔の下が大閲覽室なので二階三階を突拔けて圓塔の天井にまで達して居る、二階の正面には例の如く大時計が据付けてあつて、三階の周圍からはコロムバス、ヘロドタス、ミケランヂエロ、プレトー、ホーマー、ソロン、ニユートン其他、發見を表はし、歴史を表はし、美術を表はし、哲理を表はし、詩を表はし、法律を表はし、科學を表はす十六聖の彫像が遙かに階下の有象無象を瞰下して居る。世界の學者が悉く國換をして米國に歸化して來たやうなものだ、但し中には少々不平な學者が無いとも限らぬ。さりとて往ぬにも往なれず、消えんにも消えられず、不得已其處に立つて居るといふわけなのだらう。相手の都合なぞには頓着しないところが米國式だ、ヘロドタスやミケランヂエロなぞは少し困つて見えて居た。まア一寸往つて覗いて御覧なさい。天井にまれ

壁間にまれ、何處を見ても繪が描いてある。勉强、勞働、休息、遊樂、歷史、音樂、解剖、雄辯、法律、宗敎、法律、戰爭、平和、此等が總て種々なる徵象（シムボル）になつて表はれて居る。華麗か妓麗か、佛作つて魂入れず兎に角佛丈けは出來て居る。

其晩圖書館でガイガー翁に逢つた。ガイガー翁といふは實は紐育の寶石商店だが、今日華盛頓へ來がけの汽車の中で一緒になつた人である。何でも古い駐米公使故吉田清成氏と昵近だつたとかて、それから話が始まつて知合になつたのだ。商用で來たんだといふが、今夜圖書館を觀に行くと言つたもので先生態々這つて來たのだ。高からぬ體（からだ）をチヨコチヨコと運んて先に立つて案内をして與れる。「紐育へ歸つたら是非己（おれ）の店へ來て見ろ」といふ。

翌日大使館へ往つて高平大使に會つてから上院を傍聽した。入場券も何も要（い）らばこそ、勝手に這入つて行つて勝手に聽けるのは何たる便利なことだらうと思ふ。折柄稅法改正案で大分賑つて居た。デモクラット黨のゴーア君と同じ黨のベーレー君とが雄辯を振つて盛に反對黨をまくし立てゝ居る、が遂に多數を頼む政府黨は島田君の快辯や大石君の怪辯に逢つても、そん麼に動ずる氣色も見えない。

博物館で華盛頓の着た服だとか、その冠つた帽子だとかいふものを見た。モールスといふ電信機の發明者が子供の時お父さんに送つのただといふ手紙がある、アンドヴァーといふ處の小學校へ寄宿して居た時ので一七九九の八月二日と書いてある「[illegible]ペンを送つて下さるならば僕アお父さんにお禮を言ひませう」、「苺を送つて下さるならば僕アお母さんにお禮を言ひませう」なぞいふことが書いてある、外交官になつても慥かに成功した人に違無いと推定する。

翌日若葉のそよぐホテルの庭に朝日を迎へて踊る小鳥を後にして華盛頓を立つた、見渡す限りが駘蕩たる春の色で、路傍の家に繞へる洗濯物の白きさへも長閑なる眺に趣を添へた。

途中フイラデルフイアに下車して獨立閣を訪ふ。華盛頓を初め諸名士の集まつて會議をしたといふ部屋、その腰を掛けたといふ椅子、獨立宣言書の署名に用ゐたといふインキ壺、獨立宣言の成立を布告したといふ鐘なぞを見る。會議室の壁に獨立戰爭當時の雜沓を描いた畫を懸けておく。試に傍に居た小僧に「何だ」と聞いて見る、「彼（あ）りや選擧の繪だ」と言下に答へる、鼻先に鍋墨を塗つたやうな小僧子でさへ選擧が何だ位は知つてると見える。

（一九）後の紐育

四

華盛頓から歸つて後紐育の雜沓へ這入つた。華盛頓の、而かも人通の尠いコングレスホテルあたりにて居て紐育の南北大路（ブロードウェー）へ來て見ると、折柄の夜は夜もすがら衣香簪影、よく厭きもせんてあんな風に着飾つて居られるものぢやなと思ふ。

「何（ナン）ぢやいな、馬が離れて居りますさかひ」、領事館に往つて、正金支店

に寄つて、水族館を見物に行く。マンハッタン區の南端、税關の又南、海に面したキャッスルガーデンといふ處にある圓形の建物で、何處も同じことパチャ〳〵と水を撥かしてモー〳〵と吼えて居る海豹のみが全館の人氣を一身に聚めて居る。水族館を出て食事車――といふのは電車位な箱を馬に曳かせたので、晝とか晩とか、食事の時刻を見計つて人の來さうな處に陣取つて居る。お客が來る、車の尻の方からトン〳〵と上つて食事をして出て來る。それで新橋が駄目になつたら京橋へうつる――この至極輕便な食事馬車を通越して税關の邊まで來ると、路上に白馬が斃れて居る。頭を割つたものと見えて顔のあたりが血だらけになつて居る「怖しいこつちや、エライこつちや」、馬だけならまだしも、幾萬といふ自動車に轢るゝ人の數は日に幾人(いくたり)なるやら、チャラン〳〵と鈴(ベル)を鳴して救護車(アンビユランス)の奔るのを見ない日とては一日も無かつた。株屋街(ウオールストリード)の邊へ來ると巡査が呼子を鳴して一人の小僧子を追ふ、小僧子も巡査も群集に阻まれて容易に逃げも得ない、追ひも得せない。其中に小僧子が捕まる、人が黑山のやうにたかる、歩きも動きもされたわけのものぢやない。

大木君の案内でグランドオペラハウスといふので芝居を觀て、ワナメーカー百貨店の自動階段で滑り轉びそくなつて、手形交換所で設備の整頓して居るのに驚歎して、ガイガー翁の店で寶石の細工物を見せて貰つて、日本倶樂部で牛窪山中文店長の御馳走になつて、地下鐵道の疾いのに目を廻して、五月一日の午後二時半といふに亞米利加の地を離れて大西洋航海の途に上つた。キッス抱擁、離恨綿々、流石に米國人にも涙はあるものと見た。椋十翁は風邪の爲遂一船遲らす。

嗚呼不可解(アンノーン)の亞米利加、矛盾(コントラスト)の亞米利加、渾沌(ケーオチック)の亞米利加、刺戟を欲し、生氣を欲し、鈍化したる頭腦に彈力を與へんと欲する等の人々は、來つて亞米利加の渾沌渦中に投じたが宜しい。厭世悲觀のと青息吐いて居る連中は紐育の大通に二時間も立つて居れば癒つて仕舞ふ、文部省の訓示よりも幾ら効能があるか知れやしない。

マルコポロ旅行記中に見ゆる蒙古人の風習

鳥居龍藏

『元代』に於ける蒙古人の風習の一斑を窺ふ可きるものは、かの『黑韃事略』の如きありと云へども、亦た同時代の旅行家として有名なるマルコポロはこれに就ていかなる事實を今日に殘せるか、この穿鑿は人種學上、

現今の彼等の風習と比較し、尤も面白き問題なりと云ふ可し。

『マルコポロ旅行記』によれば(H. yule, Travels of Marco polo, 第三版による)其中に蒙古人の風俗習慣を記載なしたるは、たゞ僅かに第四十二、四十三、四十四の三章に過ぎず、即ち第四十二章には、風習の一斑、第四十三章には、宗教の事、第四十四章には、戰時の風習の事を記したるが、彼等の平生の有様を見るには、前の二章尤も必要なり。

先づ第四十二章にはいかなる事を記すやと云ふに、彼は其風習に就て、左の如く語りぬ、曰く、

韃靼(Tartars)の風習、冬は家畜の食する牧草のある温かき地に移り、亦夏に至れば、樹木、牧草に富み、水のある山、溪の間の涼き地に居を撰べり。彼等の家は圓形にして、數多の棒より造られ、其れに毛氈を覆ひ、この家は彼等の移住するいかなる處にても持ち運ばる、棒は互に堅く結束し、其構造は尤も簡單なり、而して其家を組立てらるゝや、入口は南方に向て設く。彼等は多くの車を有す、車は堅固にして、黒毛氈を以て覆ひ、其中に雨のもるゝ憂ひなし、是等の車は牛及び駱駝の挽くものにして、旅行の際は、婦女、小供はこの中にあり。

婦女は賣買交易の務をなす、是れ其夫及び家族の供給に向て、必要なることとなり。

貴族の生活は、殆んど何事にも煩ひなく、たゞ戰の演習用として、狩獵、鷹獵をなし、或は彼等の Goshawks 及び鷹(Falcons)に從て捜索をなすのみ。

彼等は乳及び肉を以て食物とす、是等は自から飼へる家畜、若しくは狩獵の際獲物等によりて供給す、而して彼等は尙ほ、馬、犬、土中に棲息せる土鼠等、總ての肉を食す、飮物は牝馬の乳よりなる。

妻女は性質尤も善く、夫に對して忠實、家婦として尤も秀づ、十人乃至十二人許の妻は同室に生活すれども、互の間、各々平和にして一致し、聊かも風波の起るを見ず。

韃靼の結婚法は、男子は一夫多妻なれども、其最初

に娶りたる妻は、常に頗る尊敬を受け、正妻として待遇せらる、而して彼女に生れたる子は亦た等しく嫡子の資格を有す。

夫は妻の母に結婚の報酬を與ふ、而して妻は夫に對し何物をも持參せず、彼等は多くの妻女を有するを以て自然他の民族よりも、夥多しく小兒を有す、彼等は從兄弟、從姉妹と婚を通ずるを得べし、且つ父にして死去せば、年長の子息は生みの母の外なればこの父の妻を自からの者となすを得、眞子息以下の者はこれを爲す能はざるなり、死去せし故の兄弟の妻は娶るを得べし、彼等の結婚は非常なる騷擾を以て頌讃せらる。

以上は『マルコポロの旅行記』第四十二章に現はれたる蒙古人の風習なるが、其冬、夏に居を撰ぶ樣は元代ほど甚しくはなけれども、今日尙ほ蒙古各地に於て認むるものにして、尙ほ氈張の製も聊かも相異なる所を見ず、車を數多有することも同一にして、蒙古人はこの車を稱して黑車（Hara teregu）と稱す、即ち毛氈の色より來りし名なり。

婦女の實質は元代の當時と生活の狀態一變し、戰爭なるもの絕えて無ければ、現今は專門的にこれを主としてなす風はなけれども、尙ほ家事一切を管理するは婦女の任務となり居れり。

貴族の狩獵、鷹獵等の風は、今や殺生禁斷の喇嘛教の盛に行はるゝ結果として、或少數者を除く外、殆んど一般にこの風存在せざるに至れり、こは即ち彼等の中に尙武の精神のすでに全く衰へたることを證するものなり。

食物として乳及び肉を食することは、今も同一なり、されど、其食する肉類は元代の當時に於ける如く、殆んど如何なる哺乳動物にも及べることなく、今は主として羊、牛、時として馬の肉を食するのみ、犬の肉を食するが如きは、其俤存在せず、而して飮物にたゞ一の牝馬の乳のみを擧げたれども、現今の彼等は尙ほ牛乳、羊乳等をも飮料とせり、寧ろ後者の使用多きが如し。

彼等は一夫多妻は今も相同じく、正妻の待遇、眞子息の權利等に於ける、又マルコポロの當時と異なるなし、されど結婚の際の贈物は、現今の有樣にては、元代と對反にして、妻の方より夫の家にこれを持參することゝなれり。

次に第四十三章の「韃靼の宗敎」には、いかなることを云へるかと云ふに、即ち

茲に宗敎の有樣を記載せんに、彼等は最も高き天の神を日々香を焚きて禮拜す、されど彼等は其神に自からの心、身の健康を祈るのみ。

彼等は亦た Natigay と稱する神を有す、こは地の神にして、專はら小兒、家畜、收穫物等を守護す、而して彼等はこの神を甚だ信仰、尊敬し、氈毛若しくは布を以て造りたる各々の家の內に其神像を安置す尙ほ彼等はこの神像と相等しき夫人(妻)及び小兒の偶像をも造り、夫人の像を其の左方に置き、小兒の像を前方に置く、若しも彼等が食事をなす際には、共に其神の口に肉、脂肪の脂多き所を供へ、尙ほ其夫人及び小兒にも同一のことをなす、彼等は肉汁を取り、之れを家の入口の所にて潑く、こは其神及び其神族が正餐の分配を有すべきを信ずればなり。

彼等の飲物は我等の White wine 製の如く牝馬の乳より造られたるものにして、最もよろしく、彼等はこれを稱して Kemiz と云ふ。

富める彼等の衣服は表面は多く金、銀にて裝飾せられ、裏面は高價の毛皮を以てせり、この毛皮の種類は黑貂、Ermine, vair 及び狐等よりなれり、

以上の信仰は、是れ明かにシャマン敎的のものにして、當時未だ喇嘛敎の入り來らざりし以前の狀態を窺ふに、頗る貴重なる材料なりと云はざる可からず、今や淸國領蒙古に於ては殆んど全くこの信仰の有樣を見る可からずと雖も、かのバイカル湖畔に住する Buriats 族の間には尙ほ聊か其俤を存在す、余も昨年興安嶺附近、西郞札嚕特(チャロット)に於て、其遺風を發見せり、こは『東京人類學會雜誌』六月、七月號にわたりて記載なしたれば一讀せられんことを乞ふ。

飲酒の様、さては彼等の衣服の狀態を見るべし、これ當時の土俗史上の一材料たるを失なはず。

『マルコポロ旅行記』の二章にわたりて記したるは以上の如きもの而已、この二章や頗る簡單なる斷篇的の事實なりと雖も、兎に角、元代の蒙古人の風習の一斑を知る好材料なるを以て、吾人は尤もこれに注意、いかに其當時と現今と風習の變化なせしかをよく推考すべきなり。

登嶽記（下）

黑頭巾

其一

●富士山、遠く白く、宮城の後ろに見えて、雙鶴空に舞ふときは、限り無き太平の象として畫くところ也。

●實に飛鳥の翼の下なる富士山は、いとも芽出度きものといふべし。

●山に登りて見れば、一鳥飛ばず、一獸奔るを見ず。天風冷々として吹く。

●白雷也の籠りけん、戸隱山には佛法僧（鳥）の鳴くあり白山の松島も亦た凡界に見ざる姿也。

●富士山には、石楠木の花美しく咲き匂へども、來り降る仙禽は、凡人の目には見えぬにや。

●三合以上、山は唯だイタドリ草が、新たに畢れる揷秧の如くに點綴する計り。靈ある山の懷は天風の撫でるに任かす。

其二

●四合半の窖にて老行者に逢ふ。白衣に白脚胖を著け鬚眉悉く銀白。神々しき姿哉。

●老行者は語る。彼れ、奥州の人、蜻蛉釣りし昔より此山に往來すること早や六十年ならんとす。今年七十二、登山百三十七回。

●吾輩、感嘆して、今更の如く、此の白頭翁を見守る。

●老行者は更に語る父六十一にして逝く、生前已に八十一回登山す。僕還曆のとき、父の數に及んと期して努力せしも遂に及ばずと。

●則ち知るべし、此の翁、還暦以後、十二三年間に六十回登山することを。

●老行者いふ、當初旅費一兩にて餘りあり。後ち二圓となり、三圓五十錢となり、今や十數圓を要して猶ほ豐かならず。

●世變の以て徴するに足るといふも、僕亦漸く老ゐんとす。今年登山僅かに二回。

●此の翁、藏するところ、登山スタンプ帖、一回則ち絕頂の印を押すもの、厚さ四寸。折本にして經卷の如し。金襴の表紙を貼し、白衣に映じて、特地に光彩を放つ。

●吾輩、數多の富士山志を讀む。未だ百回以上登山者の事を載するもの無し。今回の行、忽ち此の翁に邂逅す。又た山靈の引合せならずんばあらず。

●聞說、富士山下、御殿場附近の人と雖も、登山せざる者少からず。若し登山者と未登者とを較量せば、未登者固より多からんといふ。

●牧師神に狃れ、僧は佛を侮るは東西の人情也。富士山下の民、日夕山氣に打たれつゝ、遂に登らずして此世を去るといふは、豈惜からずや。

●猫も杓子も、一度は登山するは此の頃の流行也。聞く、男目賀田夫人行の如き、下駄を穿ちて登攀を試む。

●此の如きは、木花咲耶姬命の神慮にも、叶はざりけん、風雨大に到り、貴婦人一行顏色を失ふ。蓋し俗界の山神は、天界の山靈を侮るを得ざるもの也。

●盲人一行の登山、寧ろ滑稽に類すと雖も、其志や猶ほ嘉みすべきもの無くんばあらず。

●杳公語る。一盲人に登山の所感を叩けば、則ち答ふ、唯だ疲勞するのみと。

●古來、一度登らぬ馬鹿、二度登る馬鹿の俚諺あり。登山の苦樂を言ひ得て一句に盡く。

●一度首尾能く絕頂に上下するを得ば、所謂「生命保險」に被保險の資格ある者たるを失はず。

●若し心神の力を試みんと欲する者は、則ち富士山に登れ。

●一萬二千尺の絶頂に立ち、氣燄を吐くを得ば、其人や、心神の力、能く畢生の事業に堪ふるものとして、意を強くして可也。

●少壯登攀に堪えずとも、絶望するを已めよ、大に神を養ひ體を錬り、以て捲土重來の勇を養へ。

●彼の老行者の如き、古來稀有の人、其の登山の威懐は、宜しく其の樸訥なる筆を以て傳へしむべく、其のスタンプ帖は、須らく帝室博物館に奉納せしむべきもの也。

其三

●「影富士」といふものこそ面白けれ。此の如きは、吾輩が、嘗て豫期せざりし奇蹟の第一ならずんばあらず。

●富士山に奇蹟無し。其の、これあるは、影富士に始まる。

●既に五合目を過ぐるの後、回看すれば下界猶ほ明らかに、頂上は暗くして、早や日光を見ず。吾等の前途は日沒也。

●雲は金剛杖の根より湧きて、流れて、裾野の上に凝滯し、亂絮を薄く散らせるにも似たり。

●其上に富士山の黑き形、倒映して、雲上、「倒さ富士」を現出し來る。

●吾輩嘗て、夏八月、蘆の湖畔に遊んで、白芙蓉の湖水に倒映するを見る。

●吾輩の「富士葉書帖」藏するところの奇景の一、觀爛博士送れるもの題して、加島附近の倒富士といふ。

●喬木二三本聳えて、樹蔭に華表など鮮やかに見ゆ。前は一面の青田にして、白く大なる富士山倒まに映ず。

●北齋の「富士百景」畫くところ、波間の倒富士、波濤洶湧して殊に雄渾の致あり。

●然りと雖も、吾輩の知れる倒富士、此の如く白色碧水に倒映して寒光を放つものばかりにして、未だ此の黑色倒映する『影富士』を夢想せざりし也。

●『影富士』の雄大なるを見れば、頂上を望んで、得も言はれぬ喜びに、自から微笑を禁じ得ず。

●再び金剛杖を揮つて、足を擧ぐれば、嶺は黒く、その左右に廣がる空の光明は、彌陀の尊像の背より放つ後光を見る心地す。

其四

●六合目の窖は形勝殊に壯、相去る一合程、白衣帶劍の人や、前掛の男らしきが崖に立ちて吾等一行を待受くるに似たり。

●六合目に達すれば、壯大なる窖あり、之に添ふて巡査駐在所あり。査公出て一行を迎へ、吾輩同伴の査公と、口を揃へて、此に宿することを勸む。

◎窖の主人、五十餘、肥えて愛嬌ある男也。昨夜、御殿場よりの電話に依り、諸公を歡迎するの準備既に成れりといふ。

●時尚ほ早し。署長と亭主との好意、默す可らざるも吾等餘勇尚ほ抑ふ可らざるものあり。

●竊かに泰岳居士はと見れば、亭主を見つめつゝ、弘誓の舟を得たる心地、その横顔に讀まる。

●居士は有德の人也。一同居士の面目を立てゝ、投宿に決し、速かに草鞋を解き足を洗ふ。水清冷、氷に似たり。

●居士、嘗て吾輩に禪劍遺稿を贈る。故植村宗光師の遺稿也。師は征露の戰に陣沒す。禪に深く、文學士の一異彩也。

◎恰も十年前、八月、宗光師一行、御殿場口より登山す。陰曆十七夜、二合半と三合目との間に於て月出を見る。

●宗光師記していはく、衆欣喜措く能はず、暫らく莚を敷き憩て之を賞す。是より月は一行の登るを追て昇り三合目に至りては、既に皓々として頭上に輝けり。

●又曰く、夜既に深く疲勞も亦大なれば三合止宿の議動もすれば勝を制せんとす。幸にして否決されたり。乃ち勇を鼓して、四合に到りて投宿す。草鞋を脫するに遑あらず、先づ莚を窖の前に敷き、晴夜の風月を賞し、齎らす所の酒を出し、連りに數盞を傾むく。

●又記して曰く、此所に達するに先だち、一朶の黑雲あり、背後より富士山頂を覆ふ、此に至りて前面には

月依然として照らし、星辰燦爛として天に滿つるに拘はらず、頭上には霹靂頻りに轟き、電光閃々たり。其の曲折陸離として長く雲間に閃く狀、暗澹たる密雲の之に照されて、忽ち金色の奇山怪峯を空中に現出するの景は、嘗て下界に見ざる奇觀也と。

●吾輩の登山は、不幸にして月夜に當らず。則ち入合日に强行軍を試みざるの一理由も亦た此に存す。

●且つ併せて記して、吾紀行の缺を補ひ、又以て理想の一奇景を他日の登山に期する所以也。

●宗光師又いふ、人或は山上の日出よりも月出を賞するものあれども、日出の大觀は月出の倫にあらずと。是れ公論なるべし。

●好し〳〵、明朝快晴、世界一の日出を見んものを、さらば居士よ、今夕早寢、以て勇を養ふこと、又た君の賜也。

●吾輩も亦た嘗て宗光師の面目を記憶す。師、道器異常、今や則ち在ることとなし。

●吾輩は、富士山の日出、月出、師が邊塞の夢に入り來りしを信ぜずんばあらざる也。

●師が降魔の劍の鍔に措く露に、宿りけん滿洲の月は、その昔し、富士山の絶頂に向つて、師を導きし眞如の月なるぞや。

其五

●山中、夜の來ること早し。何時の間にか、日はドップリと暮る。

●白雲は、ムラ〳〵と湧き起ちて、おほよそ五合目位以上を殘して、富士山は、「綿の海」の中なる仙島となり了んぬ。

●下界は、すべて「綿の海」の海底にやあらん、天には星斗輝きそめぬ。

●此の如き世界に、安泰なる窖の中に、いとも樂しき一夜を送ること、吾等、豈列仙傳中の人物となれるに非ずや。

●晩餐の卓に上るもの、『胡瓜のナマス』あり。魚は鮮、胡瓜は芳、胡瓜は、吾輩殊に大好物とするところ、此の如き快樂、列仙傳も未だ嘗て想ひ到らず。

●富士山中、芳醇の野菜、唯だ胡瓜あるのみ。胡瓜は仙味を帶ぶ。河童も胡瓜の舟に棹し、江を渡つて、則ち能く仙骨を得るといへり。
●既に此の好下物あり、酒無かる可らず。携へ來れるウヰスキイを出して飲む。
●此の酒や、吾輩、帝都を出るのとき、鳥居龍藏君、吾輩の登山を祝して齎らし贈るところ也。
●鳥居君久しく蒙古に探檢して、鐵木眞の夢の跡の月影に、一秋を過ごせしも、未だ富士山に登らず。
●彼、嘗て新高山の最高峯に登りて、樹を削りて日本人先登の碑を立つ。
●然れども彼の山や、高處まで草木あり。富士山の赤裸々にして天籟の自由に吹き到ると頗る景情を異にす。
●彼、登山せざるの辨に曰く、斯山、唯だ崇高を極め、人類學上の知識を供給するところある無しと。
●吾輩は、此の山上に來つて、嘗て氏より聞ける猓玀（Lolos）種族の天地創造の神話を想起せざる能はず。

●神話にいふ、天地未だ剖判せず、晝夜無く、日月輝かず、地上一の人間無し。
●神は、地上の泥土を取つて人間を造り給へり。神は、此地上に煙を焚き、食物及び酒を供へき。是れ後世、神が人間より、香を焚きて清酌庶羞を饗せらるゝ起源也。
●神、第一日に泥土を執つて、人間を造り畢れり。翌朝來り見れば破毀されあり。第二日も此の如し。
●第三日は、神、竊かに隱れて窺ふに、之を破毀する者は地神也。
●地神曰く、神よ、地は吾の所領也。吾は地の主人也。何故に、吾に語らて、土を取りて、此の如き事を爲し玉ふや。
●神曰く、地上未だ人間無し。吾は、之を造り出さばやと、汝が泥土を取りしのみ。造り終りたらんには、汝に、必らず其の泥土を返し申すべし。
●地神曰く、幾歳の中に返し給ふや。神答ふ、六十年の後にと。
●世の人、天壽凡そ六十歳をつねとするは此の故なれ

ば也と。

●吾輩は、殊方、末世の人ながら敢て猥褻の神に告ぐ、靈あらば聞しめせ。

●神よ、人さへ渡る海を越えて、斯の山に來りて、日の本の神の業を見玉へ。木花咲耶姫命は、六十年にして土を返へせとは宣はず。

●而して吾等は、冥想すれば、名を知らぬ神達、此の山上に集ひ玉ひて、靈ある土を取つて、『昔しながらの日の本の人』と歌ひつゝ、力ありげの人間を造り玉ふさまの、夢まぼろしの如くに見ゆるよ。

●實に、世は降り、吾等は神の力に憧れたり。

●羽化登仙といふは他の事にあらず。斯の夜の吾等が心なるべし。

●飄然、「綿の海」の上なる仙島に攀ぢて、人の世をば忘れて、神の國を偲ぶこと、豈幸ある業にはあらずや。

其六

●査公いふ、六合目の窖(ムロ)は、富士山中のホテルとも謂ふべし。結構の宏且つ美、他の得て比すべきものある無し。

●とはいふもの丶、床は板を敷きて、其上に薄縁(ウスベリ)を敷きたるまゝ、梁は低くして泰岳居士叔姪は、鞠躬如として來往す。俯仰差支無き者は吾輩一人のみ。

●一行の入り來るや、番頭は、直に別席を繕ひ、寢床をのべ、金巾の幕を引きて咄嗟に貴賓席を作り出す。

●同宿の客は、皆雜居す。吾等は、膳を運び來り、帷幕の中に晩餐を擧る。

●觀瀾博士贈れる大和煮及び自宅より携へ來れる味附海苔の罐詰を開く。

●此の窖(ムロ)、種々の罐詰及び和洋酒其他の飲料を藏す。淺草海苔は、則ち珍品に屬す。

●食後、天界の夜景を見んと言ふ。居士、蠟燭を探す。吾輩、豫備せる懷中電燈を出して、途を照らして行く。

●山頂、電話あり、電燈は、未だ山靈に知らしめざりしものなるべし。

●此の電燈に、尤も深く思ひ付たるは先達の窖作君也。彼は、此を揮り照らして、地上に落つる圓影を樂め

り。

●星斗愈輝きて、天上、近き心地す。星の世界に「引越蕎麥」でも配らばや、など言ふ者あり。

●「綿の海」は、波瀾頗る光怪を極む。巨浪、往々、星光に映射して、青白、或は莫大なる雲母岩の燦めくにも似たり。

●「綿の海」の彼岸とも覺しき邊、三日月形の凄光を發するものあり。先達、指示していふ、彼ぞ、皺鎌の空に懸れる如きは山中湖なり。

●眸を放てば、處々、月下の氷の如く光るもの皆、富士の八海也。而して八海の中、山中湖尤も凄絶。

●若し明月天に滿る夜なりせば、清光、湖面に映射して、靈鏡のそれの如く眩ゆくも輝くべきものを。

●富士山に水無しといふこと莫れ、富士の八海は、天下の奇觀也。

●妙義山は石ありて水無し。耶馬溪は石あり水あり、山陽は推して絶景と稱す。

●月下の八海を見るに及ばざりしは、山陽の一大不幸也。

●山陽にして登山せしならば、彼の山水觀は、國體論と調和して。一層の趣味ある文章を爲したらんか。

其七

●時早くして、寢るにも惜しければとて、居士と相携へて、窖の中なる繪葉書店を見舞ふ。夜店を冷やかす心地するも妙也。

●亭主、侍坐して物語る。唯だ、是程の窖なれども、經營一朝にあらず。數年積きて發展して能く今日に至る。

●彼の梁一本と雖も、木は賤しくして運賃は貴し。御殿場より此に至るは、之を新橋より下關に齎らすよりも貴し。

●毎年、開山に先だちて上り、閉山に後れて下る。缺茶碗の外。苟くも物資と名づくべきものは、毎回、悉く之を上下す。

●五十七十の客、淹留旬日を過ぐとも、糧食は餘りあり。窖の前、崖の上なる、石倉は鑵詰と米を以て充て

り。明朝、それがし御案内仕るべし。

●されば、明日より大風雨、續くことあらんとも、心安く籠城あれ諸公。

●居士問ふ、『天に、僞りは無もの』と聞けば、山中、霓裳羽衣の客ばかり、梁上君子などは招くとも來らざるべし。

●亭主曰く、以ての外の仰せにこそ。山上、賊盗の多きこと。心得ぬ沙汰とこそ思召すらんが。隱されぬ事實にぞある。

●惡むべきは彼等鼠盗なれ。閉山の後、窖を堅く鎖ざして去れば、彼等は屋根を引剝ぎ梁を傳つて下る也。

●彼等は、一紙片と雖も拉し去らずんば巳まず。塵も金色なるは爭ひ取るらん。

●山を閉づと雖も、尚ほ秋晴幾日も餘す。此時山上、一の登山者無く、一の査公ある無し。長閑かに、梁上君子の背を曝らすに任かす。

●彼等は、通常二三人位にて事を爲すものとし。其の出處も亦た、揣摩するに足るもの無くんばあらずといふ。

●樂園に蛇あり、天井に鼠あり。富士山の賊、驚くべき無しといふも、吾輩には初耳也。

其八

●山上の茶話會は唐錦にて、時の移るを覺えず、夜は山物語に更けて、星の空は次第に冴えるらし、時計の音の冷たく響く。

●吾輩は、眞綿の上に、スコッチの襯衣を着け、長き冬の外套を襟深く被て、紺足袋を穿つ。

●泰岳居士と仲氏とは、前夜、吾輩の旅裝を北極探檢の、それよりも仰々しとて笑ひたるが、彼等は洋服の上に、ドテラを被り、「冬の手袋」を穿ち、指間に卷煙草を挿みて、吸ふなり。

●「敷島」の煙の中に光る居士の眼鏡と、番茶計り呑む吾輩の赤銅面とを、等分に見分けつゝ、丸き老亭主は徐ろに唇を嘗めつゝ語る。

●「お山」は荒るゝこと無きにも限らず。嵐起らば、窖にだに籠城し玉ひなば、幾日も安穩にましますべし。

如何に元氣能き方とて、ゆめ〳〵風雨に強行軍を試み玉ふ可らず。

●埼玉の人、藤間正之介とか言ひけん、一青年等その同伴と、八合目の窖を、風を衝き出てたる遭難物語こそ、語るも慘ましき限なれ。

●その時は、四日も五日も、「お山」は荒れたるが、一朝、風已みしかば、窖を出て望むに、思ひ掛けぬ彼方此方の岩角に、碎けて散りし、玉の緒の、流血、「お山」を汚して、悲しくも痛ましき光景なる。

●やつがれ則ち人を呼び集めて、六合目と八合目との間、見渡す限りを搜索するに、岩陰に隱れて、九死一生に凍えたる者數人あり。

●正之介といへるは、中學も卒業したる、生意氣なる青年と見えたるが、村長の子とやらにて、多數の村人を引連れて登山したり。

●「お山」の嵐に、彼等は、吹込められて數日を送りたるが、窮屈なるに堪え兼ねて、吾儘の事も言出したるらし。

●『好き酒は無き乎』『ありませぬ』。『美しきお酌は居らぬ乎』「ソンナものは居りませぬ」。『三味線は無い乎』「ありませぬ」『何も食ふものは無い乎』「何もありませぬ。

●血氣の若者の吾儘を、田舍人の單純なる程善くあしらい兼ねて、遂に面膨らして、碌々もてなしもせざりしなるべし。

●正之介は立上り、「諸君聞いた乎、亭主の言ふ通り、何も食ふものも無くば、坐して飢えんより、嵐の隙に下の窖まで冒險するに若かじ、イザ」

●流石に亭主も驚きて諫めたるも聽かばこそ、正之介が騎虎の元氣に、動かされて、一行三十餘人、悉く、――八合目の窖を出てたり。

●彼等は辿り〳〵て、七合目邊まで降りし頃、一陣の猛風、横さまに掃つて、散り〳〵吹き飛ばし、粉碎し畢る。

●彼等の岩角に當つて、死したるさまの、或は眼飛び、或は、胸骨折れ、如何にも『大なる怒の手』もて、取つ

て投げ付けたるかの感無くんばあらず。

●蓋し彼等の吾儕の振舞は、山靈も憎くしと思ひつらん。お山開闢以來、此の如き悲劇は、殆んど聞かざるところ也。

●お山の檢屍の濟むまでに數日を要し、嵐は已みて、安らけき山の懷に、「短慮の犧牲」の、ムザ／＼と横たはりしこと、憐れにも口惜しけれ。

●正之介の父なる人が、其遺留せる所持金の少きことゝの不審を警官に申たるやにて麓の者は、種々、引合に出たるが、遭難生存者の口より、彼が登山前、甲州路にて、遊興したることなど分明になりぬ。

●昔より登山者は、「六根清淨」を唱ふ。青龍寺の和尚が、「吾等より登山したる者の、無事安穩ならざりしはあらず」と言へりし事の思出さるゝ也。

●實に、吾輩、俗根の者、登山前、閑雅なる一夜を青龍寺の仙境に送りしは、思へば、自から登山潔齋の遺意にも叶ひしならん。

●昔の參詣者は、九合目以上は、雨具を脫して登る、「お山」に敬意を表する所以なりといふ。

●吾輩は、下駄を穿ちて、登山するさへも不同意也。此の高山に登るは、勇力を示すにはあらず。偏へに、あやまち無からんことを期すべきのみ。斯意則ち敬虔の態度也。

●先達も、剛力も、皆來りて一座に加はり、當時の噂など、迭に足らざるを補ひなどす。

●亭主はまた語る。彼の遭難の一行中、壯者は皆死し老者は皆助かりたり。此事、其の鄕里にても、六ケしき問題となり、されば、亭主其地に出張して。村人の納得するやう話し聞かせりといふ。

●「お山」に入りて、老者は恭々として愼めり。慕然と襲來する風に、老者は、直ちに俯して地に平伏す。風力も倒草を飛ばさず。

●壯者は則ち、風を凌ぐの氣あり。是れ客氣也。幾分の衒氣もあるべし。

●逆ふものは、喬木と雖も拔き上げるは、風の心也。彼の壯夫は、かくの如くして、其の脚を奪はれ、風意

のまに〳〵運び去られたる也。

●思ふに、「お山」は、赤裸々にして何ものも無き處こそ、尊き所以なれ。日も風も直ちに當りて、雲霧生滅し、星斗撑ゆべし。登山者は、須らく敬虔の心を以て極無き「力」を讃嘆すべき也。

●剛力はいふ、八合目の「室」に七十人許、五六日も吹き込められて、飯米盡き、風の隙に、此窖より借りて一升の米を粥となして七十人にて食べしといふは、二三年前の事なりしか。

●亭主曰く、實にそれよ。彼の一行の遭難は、八月十八日、則ち明日に當る。恰も其の逮夜に、計らずもかゝる物語を爲せしこと、不思議とこそ言ふべけれ。思出多き今夜哉。

●名も無き彼の一青年のみ。吾等が其の遭難を哀み、特に詳かに其の事を傳ふるは、之に由つて後者の戒ともならば、彼の亡靈の供養にもならんかと思へば也。

●一同、明日「お山の晴天」を祈りて、解散し、吾等は相率ゐて、「一帷」の中なる寢室に入る。宛として冬の床也。

●吾輩渇甚し、サイダを呼ぶ。番頭二三本を齎らし來る。居士、起き上りていふ。『此のサイダは善く冷やしたのか』奇句、番頭を慙殺す。此夜掉尾の傑作。

其九

●富士山上にては、吾輩、身死せる如くになりて、心持地に生きたる一夜なることを、此記中に特筆す。

●吾輩、全然熟睡して、心、一念無く、眞箇、無何有の郷に入りたれば也。

●洗心洞劄記に曰く、吾以爲㆓常人熟睡時反生、而明覺時反死㆒矣。何者、熟睡時身雖㆑如㆑死、然心無㆓一念㆒心無㆓一念㆒則心德全焉。吾故以爲㆓反生㆒。而明覺時、身固生活、而心起㆓雜念㆒矣。心起㆓雜念㆒、則心德亡焉。吾故以爲㆓反死㆒。因思、人學而不㆑到㆘覺時如㆓睡時無㆒一念㆒之地㆖則豈大學之定靜云乎哉。豈周子之無極而太極云乎哉。

●吾輩、富士山上の一夜は、唯だ此の如き一夜なりしなり。

其十

●八月十八日、未明、前四時、起床、窓の外に出て、冷水に面を洗つて、下界を望む。再生の心地す。

●天上、氣蕭森として星光微茫たり。見渡せば、身は唯だ「綿の海」の眞只中に在り。「綿の波」は、益湧き立ちて脚下に迫り來る。

●此の刹那、感得す。四面大海にして、懸濤千丈也。夢の世なるらん。

●恍として見る、瓔佩珊々として天樂は隱々香花地を覆ふ。

●瞠目して絶頂を望めば、紫雲の中、神人あり、容儀氷玉の如く、頂に圓光を負ひ、神光人を照らすを。

●蓋し、富士山は、古より神仙の游萃する處といふ。相傳ふ、承和年中、山頂より落來る珠玉、皆小孔あり、仙簾の貫珠也。

●貞觀十七年、十一月五日。天甚だ美晴。仰て山頂を望めば、白衣美女二人あり、山巓の上に雙舞す。巓を去ること一尺餘。土人皆見る。

●斯山、靈あり、人皆知る。崇拜の眼中、神仙を生ずるもの乎。

●豐國の錦繪に、徐福航して日東に來るの海上、舷頭、手を額にして、富士山を望むの圖あり。

●或は傳ふ。徐福嘗て此山に來て仙を求むと。識らす、彼は、潔齋して、山上の神仙を縹緲の中に望みたる乎。否乎。

其十一

●曉光、吾等を逐ふて登り、次第に、當面の石壁に映ず。

●何等の幸ぞ。天は好晴也。吾等かはる〴〵振返りつゝ登る。日出を拜し度き心一杯也。

●「ナメ」に至る。約七合目なるべし。石礫、山を成すの中に、一條の石澗、巖々として懸り、百丈の瀑布を涸らしたる痕の如し。

●「ナメ」は、年々、氷雪の流下する路ならん。人をして「氷河」を想像せしむ。

●「ナメ」は、雲氣之を浸潤して、つねに出水の色澤を

有し、滑落の恐あり。登山第一の難處と稱ふれども、仔細に步調を點檢してゆけば、さほどの事とも覺えず。

●「ナメ」の中程に至る頃、曉氣鮮かに石壁に映ず。即ち金剛杖を停めて、大紅輪の出現を迎ふ。

●「綿の海」は、下界を蔽ひ盡して、限無く廣がり、波瀾重疊の中、遠島二つ三つ見ゆ。

●其の一は足柄山にして、一は天城山也。既にして、此の島の角に、先づ金光の反映するを見る。

◉雲海の盡くる處、茫々として、更に一の海なるよう。旭氣の發する處、上方に羅衣の如き薄き雲、二すじ三すじ搖曳す。

◉此の神聖なる光景に對して、吾等は天國を夢みつゝあり。

◉大紅輪の出現の間際こそ、實に崇高無比のものなれ。吾輩は、つねに天象の美に憧かるゝものなれども、未だ嘗て、此の如き美しき大色釆を夢想せず。

●蓋し、此光景は、下界に在て、想像し得ざるところならずんばあらず。

●大紅輪は、尙ほ未だ地平線上に現はれず。萬古秀靈の氣、爆然として、上下の雲を燒く。

●下の雲は厚く、上の雲は薄く、いづれも、熔けて沸く、うすき銀と輝き、燃ゆる黃金の光に緣取られつゝ、其の眞下より、燒紅の光彩、燦爛として透射す。

●「神の國」なる七寶莊嚴の寶殿、眼前に出現したるなるか。「綿の海」は、大世界を、天上界となして、唯だ吾等一行端然として此山に立ちつゝあるのみ也。

◉既にして、極り無き美しき神采、煥發して、大紅旭は雲端に現はれ來る。

◉堂々として昇る大紅輪は、一轉瞬毎に、神威增し神光加はり、神彩大世界を燒照して、人間をして正視するを得ざらしむ。

◉此の瞬間、吾輩は躍りて拍手喝采す。實に此の時の感興こそ、今迄に知られざる「熱」したるものなりけれ。

◉若し劇曲に「宇宙劇」を作らば、此の一幕こそは、太陽なる大英雄の出現する夢幻劇ならずんばあらざるべ

し。

●吾輩は嘗て、興味深き日出を見たり。初夏、西下の汽車、中京の大平原を過ぐるとき、朝霧茫々、ところ〲喬木、海底の藻の如し。此の時、三尺の大紅輪、朝霧の中に浮び來る。

●吾輩は、此に對して「日吉丸」を聯想せんばあらざりき。

●而して今、壯大極無き日出を拜して、一切の鄙念消滅し、「自然」に隨喜、感憤せずんばあらざる也。

其十二

●絶頂は近く見ゆ。勇氣益加はり、脚も亦た輕し。昨日弱り果てたる泰岳居士も、今日は稍振ふ。

●八合目の窖に憩ふ。此處は、須走口と甲州口との合致點にして、又た甲州領の最高處か。甲州の郵便局あり、崖にのぞみ、小屋の屋根より、軍艦旗に似たる旗をさし出せり。

●此の郵便局は、武田千代三郎山梨縣知事のとき、經營せしむる處、當初は「甲斐、富士山」のスタンプを用ゐしが、今は絶頂局の「富士山」に對して、「富士山北」と押す。

●思ふに、「富士山」の上に、駿後甲斐の文字を冠するは、二州人の共に喜ばざるところなるべし。

●窖には多くのスタンプあり。其の中、富士牧狩のスタンプ去年申の歳の紀念スタンプなど面白し。

●窖の男、「今日のスタンプ」を押して參らすべしといふ。押したるを見れば、八月十九日とあり。明日のスタンプ也と注意すれば、目を丸くして十八日と取替ふ。山中眞に曆日無きもの也。

●倏忽として雨雲湧き、細雨吹き上ぐ。暫らく晴を待ちて上る。

其十三

●八合目以上は天梯漸く攀ぢ盡さんとして、一合の間、頗る短くして急也。

●九合目には、今は窖無し。此に向藥師を安置し、線香を上げて登る。山上、線香を焚くは、此地に限りしとぞ。

●九合目に、靈石あり、「日の御子」と呼ぶ。丸く大なる石にて、色白く、滑澤あり、物の影の映つること鏡のごとし。裂けて五段となれり。「富士山道しるべ」に曰く、旭の地上を離れんとするとき、彌陀三尊の影、此石に映ることあり、是を「來迎」といふ。

●栗本鋤雲、甲州口より登り、八合目に宿す。其日記に、「御來迎」を記していふ。

六月五日、晴、上りて頂上に至る、下界唯白雲を見る。亂絮堆綿の如し。曦光岳影を其上に寫す。宛も谷文晁か墨描の圖に異ならず。唯だ峯光に圓暈を彩す、其色虹の如きあり、衆御來光と呼ぶ、陸游が入蜀記之を記す既に詳か也、而して文晁は蓋し未だ知らず。

●朝にして、岳影といへば、此の「御來光」は「日の御子の事にはあらず。鋤雲の見たるは、絶頂より裏の方を見下したるときなるべし。

●吾輩思ふに古の所謂「御來迎」は、「日の御子」に發現するミレージにして、古來、稀に見得るところならずんばあらざるべし。

●呑雲坊、鐵脚坊の中州横斷記に、白山に登りて、空中に巨人の幻影を見たることを記す。

●鳥居龍藏君も亦た新高山中に於て、夜霧に、己の前をゆく巨人の幻影を見たりといへり。

●此の如き幻影はすべてミレージ也。而して名山に現はるゝときは則ち靈異と呼ぶ。

●今や「御來迎」は轉じて、「御來光」となり、單に日出を指すものゝ如し。

其十四

●九合目以上、所謂「胸突き八丁」といふ。此間、石道壁立し加ふるに空氣の稀薄なるを以てして、呼吸迫促しやすく、絶頂は手に取るやうに見えながらも、急ぎては攀づ可らず。

●八合目以上、裏表の登山者落合ひ、「六根清淨」を合唱しながら、魚貫して登る。

●吾輩の前をゆける甲州は富士講廿餘人、中に弱兵あるが爲に進むこと遲々たるも、陽氣にして如何にも嬉しそう也。

●吾輩に踵を接して登る者、十五六の少女あり。白地の單衣に、白手拭の後鉢卷を爲し、凛々しく歩みて、屢、前なる泰岳居士を凌駕す。

●居士も鉢卷を爲すと雖も、顏色蒼白、腰は海老の如し。

●彼や滿身、「負けじ魂」體盡きて、唯だ氣を以て登山する者ならずんばあらず。

●顧みれば、「綿の海」は尙ほ下界を蔽へども、甲州、信州の口開けて、綠野村落一々指點すべし。

●痛快なりしは淺間山の烟なり。太く黑き煙、眞直に天に騰る。

●古風土記に、甲斐國鶴郡の菊花山あり、流水菊を洗ふ、其水を飲めば人壽鶴の如しといへる地も、富士山の麓にて湖水も多きところと聞けば、吾輩の視界に映ぜしなるべし。

●觀瀾博士は、吾輩を送りて、明日、山上理想的の日和ならば、帝都の凌雲閣も見ゆべく、若しその最高層に、若き人の立ちたらんには與の曲つたところまでも想像さるべく、宵には駿河灣にのぞめる吾家の窓の燈火の海に映れるが星に紛れずして見分けらるべきを。見て來玉へなどゝ言つて共に大に笑ひしことどもを思出して、可笑しかりき。

●前なる登山者は、途を開きて讓りしかば、「お先きに」〳〵を繰返しつゝ、勇んで進み、吾輩の金剛杖を絶頂北口に立てたるはまさに七時五十分。

其十五

●絶頂北口は久須志神社の社前にして、石門石磴自ら關を爲し、頗る趣あり。

●關を入れば、スタンプ番あり、子供也。吾輩の金剛杖を引取りて、「頂上」の鐵印を押す、料一錢。

●直ぐ奥は神社也。神鈴を振ひ一拜して去る。社の側には數家の室、軒を並べ、登山者旁午として、往來し天界の奇しき町に着きたる心地す。

●頂上は平かにして廣し。種々樣々の廣告あり。賣物あり。寫眞師あり。その繁昌。意表に出づ。

●西洋婦人と、日本婦人にても、殊に「婆さん」と子供

との多きも、亦た意外の一なり。

●窖に入る。不取敢、甘酒とお萩を命じ、シャツを脱して汗を拭く。先着者を見れば、いづれも鉢卷して、蒲團を被れり。

●甘酒を吹き〳〵飲む。三人して、連りに十二三杯を飲む。ホツ〳〵湯氣立つも、サホド熱からず。お萩は聞きしに勝さりて佳味也。飯も熟し、案外に甘し。

●次に萬年筆を奔らせて、老母始め妻子、岳父母兄弟姉妹さては親友などの健康を祝して、紀念スタンプを送る。「富士山の絶頂にて」と書す。居士見て微笑す。

●吾輩は葉書百餘枚及び衛著敎育史一冊を神社に送りて、絶頂のスタンプを押さんことを乞ふ。

其十六

●擬さに、「おろら平」令兄の書扇二面を託して、絶頂印を押し來らんことを求む。

●後ち、吾輩「富士山道しるべ」を讀むに、扇面は、風を招くといひ、古來山中に忌むとあるを以て、彼に言ひ遣る。

●頂上に登りて見れば、白扇を翳ぐ者あり。吾輩をして呆然たらしむ。

●即ち二本を購ひ各、絶頂印七種を押し、一本を彼に贈りて、吾輩の「時勢後れ」を彼に愧謝せり。

其十七

●絶頂印を押す葉書の中に、一二三の記すべきものあり。南部富士、豐後富士、及び近ごろ海外より郵致せるタコマ富士等の如き、皆齎らし來るもの。

●繪葉書には、各國さま〴〵の富士ありと雖も、一も吾が富士山に似たる、美しきものを見ず。

●吾輩は、かく、世界のさま〴〵の「富士山」を、此の絶頂に齎らし來りて、スタンプを押し、以て木花咲耶姫命の神靈より洗禮を受けしめんとはせる也。

●其外、亡父の葉書、岳父母、兄弟姉妹の葉書、其の餘親友の紀念葉書、殊に斷脚記の著者の繪葉書は、數葉之を齎らし來れり。

●亡父は、登岳の志を果さずして逝く。白茅居士は年壯と雖も、既に隻脚の人となる。

◎山靈、知ることあらば、冀くは吾輩の志を諒とせん。

其十八

◎新たに結束して、「お鉢廻り」を試み、以て飽くまで絶頂の大觀を管領せんとす。

◎「お鉢は」則ち噴火口也。八峯之を環る。お鉢の底は八合目に達し。周圍五十丁ありといふ。

◎「お鉢」は、斷崖削立、處々萬年の氷帶凄冷の光を放ち、崇巖雄勢、人の心胸を盪かす。之に對して「地の神」巨口を開いて氣を吐くの處たるを想像せずんばあらざる也。

◎「拜所」といふ處にて富士講の行者、「お鉢」にのぞみ珠數押もみ禮拜祈念しつゝあり。昔より「お鉢」は、山神の窟宅する處と言傳へたる也。

◎吾輩幾多の噴火口を見たるも、未だ「お鉢」の如く崇大なるものはあらず。寶永山の噴火口は、沙石深く渦卷いてもの凄けれども、「お鉢」は、巖石劈裂、天工粗樸、宛然天上の大鉈細工かと思はれ、男性美の極致を發揮す。

◎舊火坑の稍卑きものに至つては、七八月の交、草木秀惹、萬花一時に開く。噴火の舊坑に風も妍く香ふ。

◎「お鉢」は、則ち、火に換ふるに雪を以てするのみ。昔しながらの大威力、自から人を威壓す。

◎劍ヶ峰の邊は、地尚ほ微溫を帶び、足も自づから暖を覺ふ。沙を堀て鷄卵を埋むれば、十二分にして優に蒸すべしといふ。

◎彼の後鉢卷の少女に逢ふ。青き顏して、甲斐々々しくあるく。絶頂は寒き也。

其十九

◎富士山の最高峰に立ちて見渡せば、蒼茫萬古の意、坐ろに眼中に湧き來る。

◎此境に立つの刹那、鄙夫の心にも卓勵の氣經綸の念沛然として起らずんばあらず。

◎蓋し壯大にして極無き太虛を呑吐するは、絶頂に於ける感興の最大なるものならずんばあらざる也。

其二十

◎吾輩嘗て思ふ。古人、登岳の感興を有する者、大鹽

平八郎に若く無し。洗心洞劄記一部之れを證して餘あり。

●彼、太虚の説を唱ふ。一たび富士山に登りて、之を驗せんと欲するもの丶如し。劄記一部を携へて登山し之を石室に藏む。

●時に七月十七夜、絶頂に宿して、月明及び日出を拜し、飽くまで彼の太虚を吞吐す。其の詩を見れば、得意想ふべし。

千年雪映千年月。　况攸紅輪未レ曉昇。
下界祇今倘夢寐。　枕頭暗々五更燈。

●平八郎は、劄記の外、一寶刀を携へ登りたるものらし、彼が知人の句に、帶將寶劍山靈泣藏了新書石室深とあるは以て證とす。

●吾輩、嘗て老人に聞くに、武士の登山、太刀を太郎坊に預け、脇差許りにてゆく、或は、ブッ割き羽織を著け、野太刀一本を横ふ。

●彼の平八郎は、一箇の心願あり、特に寶劍を擇び將ちて登りたるもの也。

●天不ニ特在レ上蒼々太虚已一也、雖ニ石間虚、竹中虚一亦天也。といひ、軀殼外之虚、便是天也、天者、吾心也。心葆ニ有萬有一、於レ是焉可レ悟矣といひ、或は、開レ眼俯仰ニ天地一以觀レ之、則壤石即吾肉骨、草木即吾毛髮、雨水川流、即吾膏血精液、雲煙風籟、即吾呼吸吹嘘、日月星辰之光、即吾兩眼之光、春夏秋冬之運、即吾五常之運、而太虚即吾心之蘊也。嗚呼、人七尺之軀、而與ニ天地一齊乃如レ此、三才之稱豈徒然。宜下變化ニ氣質一只復中太虚之體上也といへる如き、登岳を豫期するものたるを思ふ。

●又曰く、心不レ歸ニ乎太虚一心動矣、何則有レ形者、雖ニ凌雲之喬岳、無底之大海一必動搖ニ於地震一也。而地震不レ能レ動ニ太虚一焉。故心歸ニ乎太虚一而始可レ語ニ不動一也已矣と。

●吾輩登山の前、近江大地震あり。餘波、東海に及ぶ。山下に來りて聞くに、山頂地震無しといふ。登岳の前夜、青龍寺にて、また地震に逢ふ。山上の電話によれば、八合目以上地震を感ぜずといふ。

●季八郎をして、如此事を知らしめば、彼が太虚説の一資料たりしならん。

●彼、英氣煥發す。劍ヶ峰の頂に立ちて、太虚を呑吐するの颯爽たる態度、百年の下、想見するに餘あり。

其二十一

●官幣大社淺間神社は大宮口の櫻ヶ丘に在り。山頂に在るは、其の奥宮也。祭神は木花咲耶姫命。

●木花咲耶姫命は天孫の皇妃也。貞烈逞ましき上代の美人にまします。

●一夜にして妊み給ひしを、天孫疑ひ玉ひしかば、姫命憤り玉ひて、御産にのぞみ、戸無き八尋殿を造り、其中に入りまして、土もて塗り塞ぎて、其の殿に火を著けて産み玉ふ。火の盛りに燃ゆるときに生れ玉ひしぞ日子穂々出見命にまします。

●命は、女神にてましませど、屢、猛き神威を顯はし玉ひしことは緣起に詳か也。不義未練をば、些とも假借し玉はぬ勇烈なる神にまします。

●木花開耶姫命と申し奉るは、木の花は櫻也。萬ノ木花ノ中に櫻こそすぐれて美しき故に、開光映の名を負はせて約して、佐久良とはいへるなりといふ。開光映は詠嘆なり。

●姫命は、櫻大刀自神とも申せば、此神は專ら木の精靈に座すといへりし人もあれど、吾輩は「木花開耶」は、絕美なる姫命を詠嘆し奉る義なるべしと思ふ。

●姫命、すでに櫻の名を負ひ玉ふ。日本一の富士山に鎭坐ましますこと極めて適當なるべし。

●而して此神、鎭坐の由來は、御父大山祇命、山を司り玉ひしに女君、國母となり玉ひしかば、第一の山をゆづりて、其の幽宮とはなりし奉りたる也とぞ聞えし。

●姫命の御靈は、此山に權現して、富士山をして、千萬世の後までも、神代ながらの美しさを示し玉ふなるべし。富士山は、中に勇烈憤發の火氣を藏しつゝ、三十二相圓滿せる美しき姿なるぞ。

其二十二

●奥宮の後ろに「鎭國之山」の碑あり。都良香の富士山記を刻す。奥宮の側に、「富士山」郵便局あり。ゴム板

繁く、ブリキの板の上にて、スタンプを押す音、極めて忙はし。

●奥宮に美しき芳名錄を備ふ。吾輩も亦た、禿筆を呵して姓名を留む。其の第一ページを見れば、水野繁太郞と記す。

●奥宮と「拜所」との間の低處、中幡口の上り場に、銀明水の井あり。銀明水も金明水も同じ。只だ金明水は裏口に在るのみ。

●銀明水を一杯呑み、團子を喰ふ。此處にて、「内院」の石をも購く。水一罎十五錢、罎御持參ならば十錢といふ。銀明水はトラホームの妙藥といふに、吹き過ぎたり。

●吾輩は、「拜所」の蔭に坐して、悠々、「内院」を眺めつゝ、一篇の文章を留めて、登岳の紀念と爲さんとし辣思苦吟、一時間に餘りて遂に章を成さず。日、亭午を過ぐ。

●日暖か也。手拭を被り、金剛杖を突き鳴らてて、中幡口に下る。

其二十三

●降時は、圓石を壑に轉ばすが如し。「胸突き八丁」一投足に過ぎ忽ちにして八合目、七合半に至る。回看すれば絶頂なつかし。

●登る時は、憧憬れて登りぬ。降るときは、惜みつゝ降る。別離の情は、滿足の追憶を交ふ。

●七合半より右折して寶永山の噴火口を俯瞰す。此處の窖にて所藏の富士砲彈を讓り受く。富士砲彈といふは、地質學者の所謂火山彈。而して是は、寶永山の噴出せしものなるべし。

●外人夫妻、此處に憩ふ者。帽子著けぬ計りにて、蒲團著て寢たるが、蒲團短く、ズボンも、山靴の嚴めしきも悉く脫出す。

●通辯の洋服男は坐して茶を呑む。端書認めんとて、インキの涸れたる萬年筆を、掌にて頻りに打揮ふ。

●行き逢ひたる商人男に、「お早ふ」と言へば、「此の道は、マアどうです、此の先きはドンナでしよう」と嘆息す。「靜かに御上りなさい、六ケしいことはありませ

ぬ」とて別る。

其二十四

●「沙走り」は、登岳の一奇觀也。本邦の高山、他に比類すべきものなかるべし。

●「沙走り」は七合目より、二合目に至るの間、細沙の峻阪にして、勾配堅板の如く、一歩に七八尺、沙、脚と共に奔る。急行すれば、十分にして一里を過ぐべし。

●吾輩は兎に似て、登るに苦まず、降るに拙、剛力と歩調を合はせて、彼に見習ひつゝ、緩やかに降る。

●仲氏瘦せて駝鳥の如く、居士は脊を枉げて駱駝の如く、共に此の、竪の沙漠を飛び下り煙塵滾々として、忽ち影だも見えず。

●回看すれば絕頂は、早や雲表に在り。なつかしき山光は夢に似たり。二合目より、途堅く、長脚の二仙、忽ち逡巡しつ吾輩を待つ。

●太郎坊に達し、蠅を拂つて飯を食ひ、記念撮影を爲す。絕頂より僅かに、二時間餘にして。茫々として隔世の人となる。

其二十五

●太郎坊にて馬車を僦ひ、裾野を降る。二時間の長さ、ガタヒシとして、顚覆せざるを不思議とする位。命懸けの馬車ぞと笑ひぬ。

●仲氏と飽かず、テニスを談じ、時々、幕を掲げて、富士山を眺めつゝ、新たらしき懷舊談を爲す。

●昨朝見し仙姿は變はらねど、けふよりは、山も亦た、情を含んで見送るの心地せらるゝ。

其二十六

●觀瀾博士の寓居に立寄る。一浴して、御馳走に爲り、浴衣を著け、木履を穿ち、登山の裝を風呂敷に包みて、青龍寺に歸る。

●和尙、「十七八の頃登山しました」といふ樣子なりとて大に笑ふ。

●又曰く、諸君、山中の消息は、度々、警察の電話にて安心せり。今日は、自ら町に出て、[1]南爪と薩摩芋と購ひ來りて、歡迎の準備怠り無しと此二者は吾輩の大好物也。我輩の喜知るべし乍併かゝる善智識に、南爪

を提げて歸らしいと思へば、冥加の程恐ろし。

●翌朝彼の黒羅漢の三君は、登岳の行を爲すとて、手を分つ山靈は定めて此の清淨なる客を歡迎するならん。

其二十七

●吾輩、須走口に採集し、ポケットに入れて歸り來れる、破魔梨數株及び石楠木二本を土鉢に移して、花壇の中に植ゆ。

●山を下り、帝都に歸りて既に四十日。富士山を望めば嬉しく、見るを得ざれば「友人の病」を憂ふるが如し。

●而して吾家の破魔梨と石楠木とは、生々として、翠光、日々、慈顔に映ず。

（完結）

新史劇の試み

島村抱月

史劇を作つて見やうとする諸家に一つの希望を述べて見る。

若しそんな物が何て舞臺に上るものかと言ふなら、何うせ新作が眞面目な意味で舞臺に上るのは容易の事でないのだから、上らないとして置いて先づ試にさういふものを見せて貰ひたいと思ふ。それが作として佳かつたら、結局は其の方式が舞臺を征服し得ると私は信ずる。

元來歷史物といへば、たゞ史上の色彩や人名を古に借ればよいのだなどゝいふ議論も、一昔前にはあつたものだが、今日さういふ亂暴な事を言ふものはあるまい。それかと言つて、一方、彼の學海翁などの當年の作意と同じく、歷史を舞臺の上に展覽して見せるといふのも無意義であるのは論を待たない。歷史小說、歷史劇、歷史書、何れにしても古實史實の智識が或程度まで必要なのは勿論であるが、其の古實史實の陳列が藝術でないことも勿論である。又二十世紀の感想にわざ／＼十六世紀の甲冑を被せて現はす必要のないことも見易い道理だ。何となれば二十世紀の感想は最もよく二十世紀の世相によつて具體せらるべきであるか

ら。

だから史的藝術の第一目的は其の描く時代即ち過去の一人生期を當時在つたまゝの姿で圓現して來る點にある。現在の人生を描くものに對して、過去の人生を描く。どちらも現實であるが、たゞ一は久しい以前に起こり、一は間近に起こつた人生といふだけの差に歸する。而して歴史物に關する從來の誤解はこの平凡な結論から生じてゐる。過去の人生を其のまゝ圓現するといふ所から、舞臺を例の史實の展覽場にしたり、歴史の文句を人間にしたやうな馬鹿々々しい眞似をする。眞に過去の人生を圓現するとは、むしろ其の事柄よりも空氣を描くの謂であらう。時代の觀念、場所の觀念を鮮かに空氣によつて描き出せば、それが即ち其の過去の生活の圓現である。幾ら過去の事柄を細かに陳列したからと言つて、それで過去の人生を活現して來るものでないことは、言ふまでもない。此の點は現在を描く世話物と少しも違つたことはない。此の意味て的確に時代を描き場所を描くといふ用意は、双方に通じた精神でなくてはならぬ。唯それだけの精神で過去を取り扱へばよいのだ。

現代の感想を過去の色彩に包んで出すのだから、過去はたゞ借り物、手段たるに過ぎないといふ僻論は、また違つた源から發してゐる。是れも據り所のない說ではないが、其の據り所が誤解されたのだ。即ち例の藝術に見はれる主觀といふ問題が斯んな風に外れたのである。作品の最後の價値は主觀の深淺によつて極まる。主觀とは其の作家が人生を解釋する力、若しくは人生を觀且つ想はしめる力である。此の力は勿論作家ごとに新鮮であり、深刻でなくてはならぬ。現代の人に現代の主觀があるのは當然の事だ。けれ共同時にそれによつて觀られ、想はれ、解釋せられる人生を主觀が勝手に構造してよいといふ理由は何處にも無い。描かれる人生は必ず現實でなくてはならぬ。現實とはアクチユアルといふ意味ぢやない、リアルといふ意味である。造化が既に與へた人生といふ信仰に立つて、其の人生を觀、想ひ、解釋する。既に現はれたものに就

て未だ現はれないものを想はせる。たゞ想はせて與れればよい。現はれて居ないものを無理をして現はして與れるには及ばない。無理をして現はせば捏造の人生になり、捏造の人生になれば、可い加減な事を言ふといふ破壞的觀念が竄入して來て、其の藝術を亡して了ふ魔醉劑を用ひて一時假りに其の無理や破壞的觀念を防ぐのでは、時間といふものに生きてる人間は滿足しない。醉つてる時間と醉の醒めた時間の、矛盾を何うする。醒めて馬鹿々々しくなるものは、醉中に何程の意味があらうとも、現代の人には無効力である。續かない眞理、時間の保證のつかない眞理は役にたゝぬ。

そこで此の破壞的觀念の竄入を防いで、而も最も多く醉醒二つの心に確實と信ぜられる方法は現實といふことになる。現實とは畢竟可い加減な拵へ事といふ破壞的觀念の竄入しないといふこと、プラス、それが醉醒兩時に亘つて永續するやうにといふことを條件とする狀態に外ならない。※だから其の最好方法として結局は實經驗にまで根據を求めて行く。こゝまで來れば、實はリアルとアクチユアルとは別かつことは出來ない。成分の個々感情について言へば、みんな實際に經驗したものでなければ實は駄目なんだ。たゞそれを組み立てゝ連續した人生にするとき、必ずしも全部アクチユアルであるを要しないだけの自由を有する。此の自由の用ひ方でまた現實とぬ非現實ともなる。

過去の現實、それを空氣によつて描く、描くことの深淺は作者の主觀による。是れだけを史的藝術の要義と假定して、此の假定に達するために稍や細かい議論をしたのであるが、讀者は是れまでを此の文の背景若しくは豫備智識として讀まれたい。そして本文は極めて簡單である。

既に小説に於いてあれだけ大膽な試みの行はれる以上、劇とても同じ事のやつて見られない理由はない。即ち先づ史劇の中からヒロイツクな分子を、拔き去つて見たら何うであらう。ヒロイツクの分子を去るといふのは、何も人物を平凡の人のみにするといふ意味ではない。人物には史上の有名な人も出て來やうし、平凡な架空の人も出て來やう。たゞ筋をヒロイツクでな

くするのである。人生の興味を、むしろ平凡瑣屑な一齣から取り出すがよい。そしてそれを纏まつたお話しに拵へ上げないで、前から後への長い人生の一節を生きた血や肉のついたまゝ切り出したといふ形で置いて見る。固より現實である限りは、大事件を材料にしたからと言つて、不都合はない譯だが、是れには少なくとも二つの弊が伴ふ。一つはそれが大事件であるだけに動々もすると作者までが其の事柄に釣り込まれて、無闇とそれを落ちにしたり、際立つたものにしたがる。即ち昔の人生は素晴らしい稀有の人物や事件ばかりごろ〳〵してゐたものゝやうに見え且つ起承轉結の合つたお話式に出來上がつて了ふ。恐れがある。今一つは作者が何か面白い材料をと歴史を漁るときの氣持をして、微妙な點で邪道に外れしめる恐れがある。初からアクセントの強い大事件を々々々と目をつける癖がついて、世話物の場合に材料を選定する時の氣持と丸て違つたものになる。其の結果細かく深い人世の味ひを拾ふことを忘れて、仰山な事柄の興味にのみ氣を取られて了ふ。即純藝術の味が出なくなる恐れがある。今のバーナード、ショー氏などが書く歴史物の呼吸を參考するとおもしろい。

要するに過去の人生の一區域を、一區域のまゝ空氣によつて舞臺の上に復活せしめる。我等をして眞に其の人生の中にあつて回顧し瞑想する心にならしめる。本當の意味で過去の人生を觀且つ想はしめて貰へば、それでよい。何も史上の大事件大人物乃至當時の人情風俗を見せて貰ふために史劇を觀る必要はない。

以上の希望と舞臺に上る上らぬの論とは無關係である。對話の長短應接などにこそ舞臺的約束といふものがあつても差支あるまいが、事件の上には舞臺といふことが何等の抑制權を有する筈はない。

小説なら無脚色も平凡もよいが、脚本はさうは行かぬなどゝは、今日まさかに言ふ者もあるまい。舞臺即脚色、舞臺即非凡とは、餘りに滑稽な命題である。此の意味に於いて、現代を小説にすると歴史を脚本にすると全く同じ態度でやつて見たら、面白いものが出來

はしないか。是れが私の提出する希望である。私なども其の內やつて見たいと思つてゐる。

現代人物評論（二十一）

益田孝論

△益田孝の人格

法學博士　江木衷

益田氏は先づ一番實業家中の德義家であろう、終始一貫三井家の爲に精神を費し、それを以て一生を終る考て居るのだからね、他のものならば彼れ程になれば自分ても色々の方面に手を出すのだが、氏はそれをせぬ、氏の實業界に投じて以來既に幾十年、而かもまだ一度も自身て或る事業に携はつたといふ事を聞かぬ、此事は氏自らも公言して、身の三井に居る以上は、全力を三井に用ふる積りて、力を他に割く樣な事はせぬと稱して居る、之が仲々他人の企て及ばぬ處、立派な德義家と推稱すべきであらうと思ふ、大抵のものが初は人に仕へて忠實にやつて居ても、主家と共に自分も或る程度迄大きくなると、忽ち離れて一仕事をやる氣になる、好しそれ迄に至らずとも傍ら手を有利の事業に投じて別に貨殖の道に出る位は誰てもして居る、人情の自然から考へればそれも强ち無理のない事だ、若し益田氏にして他の類に倣ひ、氏の今日の資力、今日の地位、今日の信用を利用するに於ては、優に主家以外に大を成し、以て實業界に一勢力を作り得るのだが之を敢てせぬ、何處迄も三井に居る間は云々といつて一身を三井に捧ける氣て居るのは甚だ感ずべき事と思ふ。

此度の制度の改革なども餘程益田氏は考へたてあろうね、自分も追々年は取るし、三井家の子々孫々の末までも案じられたのだろうね、自分に萬一の事でも有るなら、誰が後を引受けるてあろう、三井一門人は多い樣だが、扨て後事を托するとなつたら誰て有ろう、見廻して見ても其人がない、それは頭の善い、腕の利く、

所謂善謀多策の辣腕家といふなら得られもしやうが、後事を託するにはそれ計りではいかぬ、更に誠實な人を要するのだが、扨て徳義家となると容易に得られぬ、それやこれやが心配で、遂、一番安全と信ずる方法を取つたのだろうね、何しろ三井だ、彼れだけの大家だ、合名組織を改めて株式組織にするからとて、全部改革整理し、一々その結末を着け終る迄には多大の勞力がある、そればかりでも一仕事である。

明あつて勇足らずとの世評が有るとのお説だが、左樣あるべきだ、由來此二つは兩立し難いものの樣で、明識のものには斷が缺け、勇斷のものには識が足らぬ傾が有る、が益田氏には果して勇氣が無かろうか、左樣とは強ち斷じ兼ぬる、否一見勇斷の無きが如き處、其處が即ち氏の氏たる面目が現はれ美德の潜む處であろう、金は人の金だ、三井の金だ、損をしやうと得をしやうと自己に直接多大の影響は無いといふ氣でやるなら如何樣な大膽な眞似も出來るが、益田氏には其樣な氣を持つことが出來ぬ、否反對に、自分の金なら心行くばかりにやつて、それで伸ろうと反ろうと如何なり諦めも付くが、他人のものとなると左樣は行かぬ、責任が重大である、と感ずるので十分に思慮を盡した後萬遺算なき處で初めて行ふといふ手順を取る、それ故誤は無いが、詠める方の世間には不決斷にも見え不活潑にも思はれやう、從つて兎角の評も起るであろう、が若し假に益田氏が三井と何等の關係なき身であつたなら、或は思ひ切つてやるも知れぬ、時には乾坤一擲の事業を試みるのかも知れぬ、氏を評するには先づ氏の立場から初めてその心事をも察せねばならぬ、他のものは自分が大抵に資産、位置、勢力を作ると、忽ち傲然として眼中主人なく、全く對等の應對振をするにも至るのだ、其處が益田氏は全く違ふ、飽く迄人の下手に出るを勉めて他を凌ぐなど言ふ事をせぬ、主家は何處迄も主家に立てて行く方である、此點が敬すべき處と思ふ。

中上川は如何にとの御尋なれど、彼れは仲々切れの宜い所謂辣腕家には相違ないが、益田氏を待つて始め

て三井家の用をなしたのじや。益田氏は三井の全體の責任を負ふて色々の事に當る、就中氏の心血を注ぎ、又最も成効し、爲に三井をして今日あらしめたものは物産の方であろう、此方こそは本當の營業的で、仲々相場の變動の注意に一寸も目の離されぬ一番六つかしい處である、それを氏自身で經營して彼れ丈にしたのである、今日でこそ最早や基礎は磐石の上に据つたが、一時は仲々動搖して已に危からんともしたもの、當時の氏の苦心と言つたらない、氏は井上侯に知られて早く官に擢んでられた關係から、當時政府に居た侯に賴み入る、侯も大に憂慮し、何しろ三井物産は我國海外貿易の先驅で、それが今破産するにも至らば、即我海外貿易が全く地に墜ちる結果となる、私人の經營とて棄てては置けぬといふ考から、益田氏共々大に心配して助力を與へて吳れる、即ち政府と內外で呼應して必死の力を盡したので、漸くに頽勢を挽回して今日に至り、大に海外に發展して多大の信用を博し、倫敦の市場でも他の所とは違ひ三井物産丈は評價を受けぬといふ程になつて居る。又三池鑛山の經營。彼れも政府から買ひ入れる時には馬鹿に高買ひしたといふ評を受けたもの、剩へ買ひ入れるや否や、洪水の爲に山崩れがあり、其損害は七十萬圓にも上る、當時三井對大藏大臣の一大訴訟が起り、今日でも凡ての法律の教科書にその判決例が非難すべき例として載せられて居る始末だ、それは三井では三池鑛山買入の約束を濟ました丈で、まだ所有權は政府の手に止まつて居るが、其間の損害は孰れに於て負擔すべきかといふ問題になつたのである、三井は無論所有權の現存する所に在りとし、政府は之を買入契約者に在りとした、此相反せる兩樣の解釋が遂に可否を法廷に爭ふ樣になり、私は三井より辯護を依賴さるゝに至つた、其結果一度は勝つたが、再審に及んで遂に時の判官は羅馬法に準據し、三井をして敗訴者たらしめた、此判決は法理上甚だ不當なものであつて、今日では一般に誤れるものと認定され、教科書に迄必ず引用さるゝ次第である、只さへ高買ひしたといふ惡評に續いての天災だから益田氏も大

分此訴訟には力を用ひたのだがそれが又此始末である、尤も彼の判決の內面には又色々の事情が伏在して居た樣である、七十萬圓といへば今聞けば左程でもないが、當時に於ては容易な事では無い、が其後氏の見込通り三池は着々利益を見、今日では實に三井の一大資源となつて居るから、其樣な痛手も最早何等の創痕をも留めぬ。是れ亦氏の三井家に盡した一大成効といはねばならぬ。

益田氏の頭腦は實に驚くべき程明晰である、餘り分り過ぎて却つていけぬと言ふ位、それが爲下に遣ふものなどにも、日々の仕事に就いて能く癇を起すことがある、癇を起されるも亦無理はない、氏の明晰なる頭腦からして見れば缺點ばかりだから、一昨年洋行したが、行く時には唯の遊びといふ事であつた、が行つて見ると左樣は行かぬ、海外の商況が親しく目に入る、それに處する三井物產の支店員の遣方がまどろしい事ばかりであるとて大に叱り付け大に怒つて戻つて來た。此頭腦を以て彼の今日の信用である、爲さんと欲すれば獨立して能く大勢力を作り得るのだが、それを敢てせる處、そして三井家の爲に子孫の計を迄する處、我實業界希に見るの德義家であると思ふ。而かも亦趣味の人で、一面に茶の湯骨董謠曲等をも好んで居る。

（座談筆記校閱濟）

△益田孝

無何有子

益田は最初岡田平馬の手代であつたよ、岡田といへば才幹あり胆力あり、澁澤未だ起たず五代未だ現はれざる當時に於ける傑物で、早く既に我實業界に覇を稱した頗る前途有望なる男であつた、不幸にして夭折してしまつたが益田は實に其手代として使はれたものだ、それ故毎時岡田の用で金銀塊を持つて大坂の造幣局へ行つたものだが、益田の才氣は夙にその頃から現はれて居たと見え、井上侯が大藏大輔と爲られた時、直に此一手代に目を着けて一擢造幣權頭としたのであ

る、それに就いては今でも殘る一笑話がある、當時の大阪の造幣局といへば、輪奐嚴めしく凛々しい門構の處て有つたが、突然益田は、一日肥馬の轡を取らせて大威張で正門から入つて來た、之を見た造幣局のものどもは皆驚いた、オヤ々々何時も通用門から辭を卑うしてやつて來る平馬の手代が今日は大威張りで正門からなぞ入つて來たぜと、何しろ今とは違つて官尊民卑の甚しい當時の事だから其驚は一層怪んで居ると、聽て馬から下りた益田は造幣權頭の辭令を懷から出したので、二度吃驚したとの話である。

所が明治六年には有名な大藏と大政官との大衝突が起つた、といふのは時の大藏には井上の外に澁澤が居る、共に洋行歸りで海外の狀勢に通じ、鼻息が荒くて飛ぶ鳥も落さんず勢の有る人物、で歳出の豫算は先づ總額を大藏で定め、それを各省に割り當て樣としたのを、大政官では大反對、三條公岩倉公を大臣として居並ぶ面々には大久保、山縣、大隈、江藤等の人々、何れも剛情な連中が、只もう此樣なケチな遣方ではいけぬ、御維新匆々百政大釐革を要する際に之では何が出來るものか、己の方では何百萬圓、己の方では何百萬圓と、所謂今日に於ける各省豫算分割主義の弊は已に端を此處に啓いて居たので、これ丈是非なくては困るといふ樣に大藏に迫る、それを通計すると尨大な額になる、目下の財政上迚も引受兼ぬると大藏では拒む、兼ぬる事が有るものかと一方では躍氣となる、如何した譯か、江藤(新平)と井上とは非常に仲悪く、丸で犬と猿との間柄であつたから其爭は特に猛烈、遂に井上澁澤等は冠を大藏省の門に掛けてしまつた、その時の辭表は實に堂々たるもの、時の大藏省の書記官故那珂通高(故文學博士那珂通世の父)の手に成つたもので、今見ても千古の名文である。此時益田も進退を共にして、官を辭して在野の人となつた。其中に井上も安閑として無事に居るべきに非ずと考へたので有ろう、新に先收社なるものを建てゝ益田を引いて共に輸入業を創めた、之が抑も益田の再度實業界に携はる初陣と思ふ。がそれも暫し、その後井上が再び明治九年に政府

の人となるに及び、先收社には葬式を出し、益田は三井に轉じて其處に三井物產を始め、專らその經營に任ずる事となつた。初は只先收社の後身で規模も甚だ大ならぬのであつたが、段々に發展し擴張して內地に多く支店を設くる、追々海外にも手が伸び行き、今日ては大發展大擴張を爲して、倫敦、紐育、ハンブルグ、世界の重なる都府に殆んどその支店を見ざるは無き有樣に至つた、これ迄に至る經營の苦心は尋常ては有るまい、又今日と雖も一條の電線によつて此等の支店と脈胳を通じ、諸方の報告を一處に集めて、之によつて變幻極りなき世界の相場に目を透し、日々に劃策し日々に又電線によつて諸方の支店に命令する。斯ゝる大局面の仕事を遺算なく總括して立つ丈が既に尋常の手腕ては行けまい、餘程頭腦の働く面積の廣い人て無くてはならぬ。正金銀行は元と私立とは雖も政府の保護によつて立つもの、爲に監督官迄も入れてある始末だ、此正金銀行も亦三井物產と同じく普く海外に支店を有して居るもの、予も曾て官邊に居たる緣故を以て多少此間の消息を心得て居るが、世界の市場といふ大局面を一身に絡げて立ち、凡ての所置を萬遍なくやつて誤らぬといふ事は容易ならぬ事て、尋常の頭腦ては仲々隅々に迄目の透らぬものだ、それ故正金銀行の頭取の人選となると非常に骨の折れるもの、適當の人物の見付からぬを常とする。之は只一銀行丈の仕事てほか無いが、特に況んや三井の如きは、何てもやる、銀行もやれば物產もやる、鑛業もやる、局面は更に廣く其事は更に複雜てある、それを高等商業出あたりの少壯有爲の八釜しき人物を使役し、操縱して遺憾なく總括をして行く益田の、頭腦手腕共に甚だ尋常で無い事は、予自身の小經驗から推しても十分に推察出來る、益田には兎角の非難もある、時には冷酷などとの世評をも耳にするが、兎もあれ彼れの才幹は甚だ及び難きものだ。

彼れ程の位置に爲り彼れ程の仕事を果すには必然に敵者も出來やう、從つて幾多の非難も出やうが、併し冷酷といふ樣な事は、大經營に當るものには已むべか

らざるものでも有ろう、感情が冷てなくては何事も出來兼ぬる處がある、頼朝でも秀吉でも、家康でも、一世の英雄と仰がるゝ人の半面には隨分其處此處に幾多冷酷と見らるゝ行爲が有る。好しや現在の總理大臣となるにしても幾分冷酷の處を有せなくては群才を駕馭して大政を燮理し行く事は出來ぬ、一點冷酷の處なき人物は即ちお心善してある、而して失敗は常にお心善しから起る、お心善しては到底總理大臣たる事は出來ぬ、一國の政事に當ては假令平昔親善の問柄と雖も其人に因り其時に應じて全く情を掛ける譯に行かぬ場合もある。斯ゝる場合に斷じて行へば、其人には冷酷として見られ怨まれもされ、惡評も流布され樣が元と巳む可からざる事だ、此等を思へば其冷酷といふ評も左迄氏の心を動かすに足らぬも知れぬ。

益田は自分一私人で直接他に指を染め居る事業は無い、名はチョイ々々々貸して在る樣だが考へて見れば皆三井本位で、直接間接に其利害は皆三井に集中し來るもののみの樣だ、此態度を取る益田の眞意は如何か、ほんの揣摩臆測でほか無いが、彼に取つては眼中三井無きもので有ろう、一見三井本位の樣であるが更にそれを推ししむれば國家本位なので有ろう、何も三井そのものが主であるてはなく、三井によつて遣る彼の大事業が即ち主たるもので、從つて自己の志望と事業とは現在に於て十分一致し居る事だから、何も一身の貨殖のみの爲に別に勢力を小處に用ふる必要は無いのであろう、井上侯が矢張り左樣だ、三井に肝煎つて色々心配されるから世間では三井の爲にのみ誠實に劃策する事とほか思つて居ぬ樣だが左樣ではない、その眞意を叩けば重きは三井そのものより國家に在る、が三井の事業は國家の上に大關係がある、三井は兎に角我國海外貿易の先驅者であると共に、現在の狀勢ではその大隆運の結果世界各國に支店を有し、一寸亞米利加へ行つても三井ならざれば只森村位のもの他に接踵者は無い、否只我國人に接踵者が無いばかりでなく、之を世界の市場に求めても餘り類を聞かぬ程の勢で、我國輸出入總額の過半は先づ三井一軒で占めて居ると

いふ有様である、即ち一面に於て三井の事業は即國家の事業なりとも言ひ得べき觀がある、然らばそれの一起一仆は直に我國家の經濟に至大の關係があるではないか、これが抑も井上の大に三井の爲に肝膽を碎からるゝ所以て、決して小なる三井一家が直に眼中の梁たるものては無かろう、言ひ換へれば三井は偶ま井上に利用され、國家經營の上に使役され居るに過ぎぬもの、而かも利用され使役さるゝ事が又大に自家を益する結果と爲り居るのである、三井は甚だ倖なる哉である。而して益田も亦偶ま志を井上と同くするものては無かろうかとも思ふ、併し之は當て推量に過ぎぬ。

それは三井なくても日本の海外貿易は代つてやるものがあろう、三菱なくても日本の航海事業は衰へぬてあろうとも言へば言へるが、兎に角三菱は彼れ丈に發展し、殆んど海上の權利を一手に籠罩し居る位地に居る上に、又彌之助彌太郎二氏の非凡なる才力がその事業を籍りて發揮され、適處を得て世用を爲した譯なのだから一朝にしてそれの仆るゝは國家に取つて損害である如く、三井も亦前述の如き位置に立つ上に、益田等の技倆腦力が其處に適處を得て用ひられ發揮されて居る事だから、それの仆るゝは矢張り國家の損害てある、それに過去の歷史を顧れば三井三菱共に我國の實業に人の知らぬ貢献を爲して居る、外國貿易の開けた初には、慾に目の無き小商人原が、外人を相手に詐百出以て奇利を一時に占めんとした、横濱で蠶種紙の歡迎され高價になる儘に、罌麥粒を糊着けして賣付けた奸商の話も當時に於て耳にしたこと、此の如き有樣て大に信用の危き處を、三井物産が起つて眞面目なる商業を營み、次第に其手を擴げて他の奸商等を壓倒し、信用を回復して、以て我貿易界に今日の如き前途の光明を認めしめて來たのである。岩崎などにも人の知らぬ貢献がある、昔は廻船問屋、親船々頭なるものが有つて拔く可からざる弊竇が牢乎として其處に存在し、荷物が一度び荷主の手を離れて問屋に預けられ船頭に渡れば、最早や荷主の權利は失はれて自由に處置されるといふ不思議な陋習があつた、而かも此種の陋習た

るや船頭漁師の如き者の間には譯もなく頑守されて容易に改められぬものである、例へば灘の酒を江戸へ廻すに必ず途中で浦賀へ着けて口を拔く、殆んどその拔き取る桝目迄定まつて居たとは驚くの外ない、ズット後迄も其習風が殘つて居り、保津川を下る船に積むステッキ材が百本のものなら何本は屹度拔かれるに定まつて居たといふ話だ、それを三菱が航海を創めてから弊竇は漸次に一掃されて、最早や今日ではその憂を見ぬに至つたのである、昔の陋習で今日に改つたものはまだある、鹽專賣が創まつて鹽濱の情弊が刷新された如きもそれだが、まだ惰力を有して不正なる行爲の潜むものもある、即ち鐵道會社と荷主との間に更に運送會社なるものが介在し居り、幾多の私を營んで居る、例へば鐵道の方では割引のあるにも拘らず運送會社は知らぬ顔で普通の料金を算入して荷主より運賃を取るの類其他言ひ知らぬ雜多な事をして居る、此方面は鐵道國有となつた今日大に改善せらるべき事であらう。此の如く餘弊はまだ隨所に存在して居るが、而かし大なる弊竇に先づ打撃を加へて我國の通商貿易に一大改革を與へ一大光明を齎した三井三菱の功は沒すべからざるものがある、即ち三井は三菱と共に過去に於て國家の事業に至大なる關係を成して來たもの、又現在に於ても爲しつゝあることを思はねばならぬ、すれば井上侯の助力は言ふに及ばず、益田と雖も十分三井の事業を國家的事業と心得、それに甘んじて献身し得べき所以もあると思ふ。

益田の頭腦の透徹て先見の明あるの證すべき事は彼の率先して支那貿易に氣付きその將來大に起らざるべからざるを悟り、色々劃策した事や、又一般が金貨本位を認むるに至らず、皆それを危んで居た時に獨り世說を妄とし、金貨本位說を主張して已まなかつた事等に見られる、殊に臺灣銀行を起す時に氏はその創立委員の一人に擧げられたが、當時支那は銀貨本位だからそれに對しては矢張り我國でも銀貨で無くては不便であらうと、大藏大臣先づ爾く考へ、自餘の創立委員亦爾く考へたにも拘らず、益田は此處にも飽く迄自說を

固守してその金貨ならざる可からざる事を主張した、が遂に銀貨を鑄る事になつたので、氏は早速委員を辭してしまつた、處が今日に於ては如何か、時運は默移して臺灣でも金貨本位を採るに至り、當年の益田をして獨り先見の明を誇らしむる事となつたては無いか。それは兎も角此に於て亦益田の志操の甚だ堅實なるものあるを見得る。一概して益田に勇なしといふの説は予は信じ兼ぬる(座談筆記校閲濟)

△益田孝君

文學博士　高楠順次郎

益田孝君の事はその全斑を知つて居る譯でもありませんから、小生の話によつて同君の性格、履歴、趣味、思想、手腕などを皆知り盡さうと思はれては甚だ迷惑する。唯小生の見て知つて居る益田君の一部を紹介する計りである。君は余程の先輩て、幼少の時に官員錄の中に君の名が有るを見、又その後新聞て三井物産の人てあると云ふ位を知つて居たのてあつた。

小生が英國に居つた頃、ケーンブリッヂに益田太郎君が居られた、同氏には一二回會つた事があつた、所がその當意即妙の口藝には余は驚いた、小生は乾度此人は如此方面に發達する人だと思つて居たが、同氏の新作の喜劇などを見ては果せる哉の感がして益々獨り首肯するのてある。

小生は太郎氏に先つて英國を辭して歸朝したが、その歸舟も實に愉快の旅行てあつた、今の田中銀行の田中銀之助君、益田君の義弟海軍中將瓜生外吉君、旅順て名譽の戰死を遂げた砲兵大佐酒井甲子郎君、發明家として名譽の勳章を受けた故砲兵少佐松本重太郎君などといふ、何れも一騎當千の英雄斗りの乘組、滿船の乘客を眼下に睥睨して盛に氣焰を吐いたもの、今も當時を忍ぶ爲に、生殘るものは三人だけになつても時々同船會を開いて居るといふ程てある、斯くてその瓜生中將からの緣故て折々益田君にも面會した、

處が初對面の時に先づ驚かれたのは、豫想とは違つ

て實業家の臭味の少しもない人物であつた事だ、それもその筈、段々話して見ると、英語の教育も十分あり美術の趣味もあり、宗教の妙味も知つて居る人で、英國歸りのハイカラ眼から見て、日本の紳士と云ふは此樣な人であらろうと思ふた、その後當時第一流の實業家を集めて宗教の話が聞かせたいとのことてあつたが、小生はその人て無いといふので辭退した事もあつた、

兎に角それから後は年々益田邸の大師會に招かれた、唯之は大師自筆の掘出し物の自慢會かと思つて居たが、段々意向を聞いて見ると、美術の趣味の大部分を占めて居るは無論てあるが、根本は宗教的思想の發表てあることが明白となつた、益田君は宗教と美術とを打つて一丸とした理想を有して居るのてある、そこてその顯現せんとすることもこの方面に向つて居る、曾て三尊を撰つて、大師會の中心とせんと欲し、主尊は弘法大師て、右脇を聖德太子として見たが、さて左脇に入るる人物が無いと云ふので、それには非常に苦心せられた、遂に今以てそれが見付からないので、大師一人を中心といふ事になつたといふ話てある、此邊が餘程着意點の他と違ふ處と思ふ、人格ある宗教家なるが上に且つ美術家であり、藝術の對象ともなれば又藝術の進歩をも助けたといふ理想的人物となつたら仲々ない、惠心僧都ては如何やら人物に不足がある、雪舟ては宗教家として不足がある。周文も抱一も御話にならぬ、されば到底此三尊は成立たないものと思はれる、そうして見ると弘法大師は大立物で、諸藝術の中心として古今无比といつても宜いのてある、之が即ち益田君の理想て、宗教の眞髓を美術に依つて表現せんとしたのが彼の御殿山の大師會てある、多聞店の經營を司る、凝り性の榮作君といひ、園藝意匠に妙を得たる太郎君といひ、英文學に長じたる瓜生男爵夫人と云ひ、一家は盡く藝術の人てある、そして之を總括した樣な人が益田孝君てある、君は凡べての方面て理想の人たるを失はない、實業家としての君の手腕は小生には分らない、が思ふにその經營せられた事は理想的の

事も多いだろう、或は此理想實現の希望が君を終生三井物產の支配人に引留めたものでは無いかと思はれる。

小生は明治卅二年に外國語學校長となつた、その年は卒業生は何處へも一人賣れない、新經營の學校ではあるし賣口に困つた、そこで君に賴んで每年幾人か必ず採つて貰ふ事にしたが小生は新任匆々之によつて大に面目を施した、それから段々卒業生の賣口も宜くなり、近年の實業界の緊縮迄は左迄賣口には困らなかつた、何年であつたか益田君は、高商の卒業式に演說したが、その中に「外國語に熟達した人は外國へ行つて實業を練習するが必要である、農商務省の實業練習生は我々が賴みとするには甚だ不足である、此に於て三井物產で自ら實業練習生を海外に出さうと思つて居る、その希望の人があるならその方針に向つて進まれたい」といふ樣な意見があつた、三井物產の當事者としては隨分思ひ切つた演說であつた、兎もあれ此演說の實現として最初に先づ三井より海外に派遣されたものは此外國語學校の卒業生であつた事も常に感謝して居る所だ、憾むべきは此卒業生が年少氣銳の過から遂に實業に失敗し、その後の卒業生に迄影響を及ぼした事である、之は今にも殘念に感じて居る。旣に此一事を以てしても君が實業界に於ても矢張り理想の人たるを失はぬ樣にして居られると思ふ、

尙ほ君が學術研究の爲に注意し居らるゝ點に就いて一つ感謝し居る點がある、それはパーリー語の古經で角文字の寫經になつて居るのを或る人が所持して居るそれが君の所にあつたのを非常に珍しいものだからとて借用して來たが、爾來小生の手に在ること五年ばかり、所有主の方からは非常に催促されるにも拘らず、君は學術の爲だからとてその儘今に尙ほ貸してある、實は一々之を費用を掛けずに寫眞に取るので、今春京都大學の友江田助教授の上京した折、同君に賴んで從來寫し取つた外に、不足の分二三葉を寫眞したが、その二三葉が極めて必要な部分であつたのに、現像を寫眞屋に送つた所が寫眞屋が過つて之を損じて仕舞つ

た、それて又再び寫さねばならぬ樣になり、今以て返却が出來ずに居る、處が君のいはるゝには五年も忍耐して來た事だから、序の事に一層最後まで御使用なさいと、斯かる好意を寄せられたのが此寫經に對する最近の消息である、近頃病氣の相だが尙ほ靜養し健在して藝術の爲に十分力を盡されんことを希望する、

（座談筆記）

△私の見た益田さん

森村市左衛門

三井で今度株式組織に改められましたが彼れは益田さんの洋行の結果てす、私は其頃から聞いて大層宜い事に思ひました、彼樣いふ大きな御家には無責任に大きな事をやりますと……それは危險は有りますまいが、事業といふものは永久に崩れぬとばかりも限られません、物に盛衰あり、それに當る人の力によつて又興敗ありてすからね、主人、旦那樣といふ方ては大きな處をやるから自然小事には目が屆かぬ、兎もすれば過が起る、益田さんはそれに就いて態々列國を視察なさつたのだが、倫敦でも亦獨逸の方へ廻られましても、何處も同樣に追々組織を改めて株式にする傾になつて居る、自分の考に一致して居るとの事て、愈よ決心なさつて此度の斷行を敢てせられたのであります、彼れて銘々の責任が明になり一層精勵し競爭して出るといふ事になろうから益々活氣を生じて來やうし、若し又一旦蹉跌あるとも響が全部に行かずに濟むから最も安全の道と思ひます。

兎に角益田さんが永い間、即ち三井家に入つて事業を創められてから幾十年、一身を全くそれに委ねて熱心に思慮し劃策し來られた事は敬服の外ありません、それに學問もあり、智識もあり、支那貿易などいふ事も、私等の歐米をのみ的にして何とかして其方面の發展をと心懸けて居る間に、早くも東洋といふ事に着眼し、先づ支那に販路を開かうとて、横濱に店を開き追々經營を試みられたのは、實にその先見の明に服せな

ければなりません、

えゝ左樣です、始め個人で横濱邊に店を出されたのでしたが、その後その方は止して三井へ入られたのです、小資本から築き上げるといふ事は仲々容易でない、大きい事をするには初から大資本によるが宜い、それには大家に入つて手腕を揮ふ方が、より早く快心の事業が出來るとお考になつたのでせう、最もそればかりでは無い一方には井上侯などといふ有力な方が御誘ひにもなつたのですから、それやこれやで愈よ三井入りの御決心になつたんでせう、

益田さんの遣口が消極的など、そんな事は有りません、只深謀遠慮で一事苟もせぬといふ丈例へば茲に十のものがある、それを計算して見て五分は確に握り止められる、すれば後の五分は如何なろうと宜いといふ時には進む、十分が十分ながら如何なるか、如何樣なる度までが慥に握り止め得られるか、それが明確にならねば進まぬ、大局に當つて遣るものには如何しても斯う考へて行かなくてはならんのです、いや近來私等の見る所では、三井物產は如何して消極どころぢやない、內外共に非常な勢力を以て邁進して居ます、特に日露戰爭以來が左樣なのです、若い元氣な人達が此頃澤山入り込んで盛にやりますので、深謀遠慮の益田さんにも少々抑え切れなくなつたんでせう、でもやれば儲かる、儲かるからまあ聽いて置いてやろうと言ふんでせう、現在の武者振は實に敬服の至です、がもう善い加減な處で御扣えになつたがよいかと思ひます、其處へ行くと私は益田さんより老人だけに一層消極であります、今が關の山、それよりお進みになつては危險かと考へて居ます、三井としては今少し靜かに自重なさつた方が宜かろうかと潛に思つて居る次第です。併し三井は已に基礎の据はつた上に又此度の改革も有りました事故も一層堅固に行くでせう。

それは三井を色々非難する側も有ります、併かし彼れだけの事業をやれば元と巳むを得ぬ事でせう、政府と結托して云々とも申しますけれど、それは歷史の有る事で、何も益田さんが入られて新にといふ譯ではな

く、三井は昔から官邊と因緣があるので、舊幕時代から德川と相結托して發達して來て居るのです、それに結托するからとて政府にも結托せざるを得ぬ理由もあるので、御維新の時の如き、大藏省はから一文無しなのですから、勢ひ三井あたりと親んで金策を付けねばならぬのです、つまり互に救ひ救はれて來て居る譯です。三井には三浦利左衞門といふ非常の敏腕家が以前に有りまして、元は三河町邊の小賣商人から、認められて三井の番頭にされたのですが仲々機略縱橫の商才に富んだ人で、今日の益田さん以上にも重用されたでせう、三井銀行の基礎は實に此人が据えたのです、即ち日本銀行の總裁をやり居る利助といふ人の父であります、此父にして此子あり、利助さんは小僧の時から此利左衞門さんに躾けられた事だから、天禀の經濟の才を發揮して今日迄日本銀行を過たずに經營し得る程の技倆となられたのでせう。

益田さんを兎や角言ふ人はそれは有りもしませう、が無理のない事です。三井物產といつても元は百萬に足らぬ小資本で經營して居たもの、それが今日の優勢を見るに至つたのだからその間には幾多の難戰苦鬪も有ろう、商機の轉變の迅速なる、此處伸るか反るかの岐れ道一寸の猶豫が大事の破れとある樣な時には、隨分餘波の如何を思ふの暇なく一刀兩斷を要する事が有るのだから、その餘波を受けたるもの若くは戰つて破れたるものより怨言の出るも已むを得ぬ事、又內部に於ても多くの人の使役さるゝ時には我知らずに恩に厚薄が出來て居るも知れぬ、或は鑑識を誤つた結果で起る事も有るも知れんがそれは已むを得ぬ、ともあれ好しや益田さんに幾多の怨言に値する實蹟ありとするも、益田さんは主家の爲に盡すのであつて直接自己の爲にはならぬ、勢力に對する報償は別問題として直接何等の私を營むのでない限りはそれを以て甚しく益田さんを累する譯にはいかぬ、極端に言へば日々に人の首を刎ねて累幾百といつても國家の爲なら仕方がない、殺人罪を以て乃木大將を論ずべきでないと同樣でせう、一體今の實業界などに表裏幾回も打返して一點

汚點の無い人間が有るてあろうか、いやその他の社會とても左樣てす、私の知つた限りては故人福澤(諭吉)小幡(篤次郎)の二氏位のものてす。が之は甚が遺憾てある、何とかして國家の爲人類の爲といふを自覺し、それから實業をやる人の殖えることを希望します、私は十三計の時まだ小僧をして居た時に、「貴樣は馬鹿正直ていかん」とてひどく叱られた事がありましたが、その時ばかりてなく、今ても思ひ出されて馬鹿正直と言はれた折の嬉しさが胸に浮びます、又菅公の御歌と聞き及ぶ、彼の「心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん」といふのを唯一の格言、處世の道と心得て益々進みたいと思ひます、が私の樣なものから言ふも如何てすけれど、擧世滔々まだ自覺の眼が十分開けて來ぬ間は、人樣の事は表裏打返して論ずる必要は無いと思ひます、益田さんの事は少しも知らぬが、何も今の處强いて一人二人の汚點を探さずも哉と思ひます。(座談筆記)

△益田君

伯爵 大隈重信

益田君と能く會つたのは早や幾十年の昔、それからは薩張り遇はなくなつた、澤山實業家も知つてるが益田君位に才幹ある人は先づ少い、最う三十年以上も三井に關係して居る、その前には井上聞多さんの手下になつて先收社を興し商賣を始めたが、それから三十六年程にもならう、何しろ優れた才幹の人だ。

それに英語も出來る、今の若いものなら幾らも語學に達者なものもあるが、益田君は彼の當時から、大分よくやつて通辯位は出來る、新聞位は讀める、從つて外國の事情にも精通して居た、併し唯語學が出來た丈ては大した事は出來ぬが氏は更に常識に富み、それに加ふるに鋭敏なる頭腦を有して居た、それが抑も今日有る所以、何しろ暫く遇つて見ぬから近來の事はトンと分らぬが、彼の鋭敏な頭腦彼の才幹を以て、更に實業界に投じて三十六七年の經驗を積んだから其方には

一層知識が圓熟して來た事と思ふ。

益田は又趣味の有る人て骨董を愛し茶の湯を好む、それだから太郎冠者などいふ文學好きの子息も生れたのだ、壯士役者のやる喜劇物などを作る、日外も矢張り脚本を書いたといつて序文を貰ひに來たがまだ若い樣だけれど仲々才幹があるらしい、一體益田の一族は善い一族て皆才幹あり趣味のある人達だ益田君の弟の克德も才幹が有つたし、英作も亦才幹が有る、矢野次郎の兄弟が益田君の妻になつて居るが、彼の次郎といふ人が又面白い人物、その叔父さんに判事が有つたが、之も面白い滑稽的の趣味のある人、美術家て建築などの事にも目が明いて居た、父の一族、母の一族揃ひも揃つて斯樣なのだから、太郎は生れざるを得んのだらう。

益田君は如何したのか此頃は餘り實業家などの集會にも顏を出さぬ樣だ、之は身體の關係も有るか知れん、年齢は澁澤君よりは若い、澁澤君は彼の通り活動して居るのに益田君は如何も近來風流をのみ樂んて居らるゝらしい。三井にばかり閉ぢ籠つて一般交際社會には固より、更に又商工業家社會にも顏を出さぬ樣だ、最も私とても餘り顏を出すても無いから、妙に掛け違うのかも知れぬけれど、でも偶々顏を出せば澁澤君にだけは逢ふ、が益田君には薩張り近來逢ふ事がない、

一昨年あたり三井三郎助氏に就いて洋行したが、その後益田君の談話なるものが時事新報に載つて居た、讀んて見たらそれが即ち今日の改革に對する意見なのて、極めて時勢に適した賢い考の樣に思つて居た。君は物に觸れ機に應じて頗る他に優れたる意見を出す人て此度の事も偶ま以てそれを證する一助になつて居る、

勢力の有る處には敵が有る、所謂喬木に風多して益田君も亦免れぬ、それに井上侯が親切で能く人の爲に謀す人だけれど亦敵が多い、益田君も早く侯と結托し居るだけに尙ほ色々の評があり、餘り喜ばぬ者も有るかも知れぬ、

益田君は獨力て有つたならまだ力が伸びるも知れ

ぬ、多少の信用を作り多少の勢力の出來た所で敢て身を三井より引き、孤立してウンとやつて見たなら隨分大なる富も出來るも知れぬ、がこれ迄君が三井に盡した代りに又三井から世話になつた所も少くなからうし、それ等の因緣相絡はりて、左樣な態度になる譯にも行かぬ、先づ三井の番頭を以て一生を終らうといふ考だらう、古來才子輕薄といふが、此に於て益田君には才子輕薄ならずといふ異例を見るのである。

何といつても君は實業界稀に見るの偉才である、それは三井の事業には三井に固有の資産もあつたらう、又井上侯の援助も少からざるものが有るであらう、三井の事業なるものは盡く君の手腕君の功績とは斷じ難いでもあらうが、併しそれ等の凡てを一切消除して見ても尙ほ私は別に君が斯界稀に見るの偉才たる事を確認して憚らぬのである。（座談筆記）

△影武者

風滿樓

▲益田孝氏は井上侯の影武者として、侯の勢力を三井家に代表する人である。井上侯と三井家とは何んな關係があるか、それはこゝに詳述する暇がない。

▲日本の經濟組織が幼稚で、政治が經濟の隷屬にならん前、即ち維新後間もない時に在つては、富豪が有力なる政治家の歡心を求め、巧みに其の御機嫌を取り結んで、自個の富を增し、富を維持しやうとしたものである。三井家の井上侯に於ける、岩崎家の大隈伯に於ける皆其の例であるのだ。

▲ところが、經濟組織が進歩して、資本家の勢力が增大するに從ひ、富豪と政治家との關係は主客が顚倒して、（政治は經濟の隷屬となり、）前には富豪が政治家の歡心を求めたるもの、今は政治家が富豪の歡心を求むるやうになつた。桂總理大臣が翌年の豫算を內示するに當つて、貴衆兩院の有力者を後にし、二三富豪を兵

ッ先きにするのは即ち之れが爲めてある。

▲されば三井家と井上侯との關係も今ては主客が顚倒してゐる筈だ。ところが事實はさうてなく、井上侯の勢力は倘三井家に向つて赫々の光を放つてゐる。——それは何故てあらうか。——

▲他無し、三井家の財産の名義上の所有者、即ち本家分家の主人が皆凡庸て、井上侯の勢力が多年の間に三井家の要部に植ゑ付けられ、今は既に牢として拔くべからざるものとなつたからてある。同じ政治家對富豪の關係ても、大隈伯の岩崎家に於けるのは、井上侯の三井家に於けると全く反對て、何等の勢力をも扶植しなかつたから、岩崎家の大隈伯を見ること、只昔の恩人——今の厄介者と云ふに止まつてゐる。

▲斯くの如く多年の間に扶植した、井上侯の三井に於ける勢力を代表して、統監とも云ふべき位置に坐つてゐるのは即ち益田孝氏てある。

▲益田氏の三井に於ける關係は、明治三年から始つてゐるさうな。彼れは一種の才人て、華美好きて、骨董癖の膏肓に入つた人てあるが、昔しフランスに留學(と云ふほどてもあるまいが)したことがあるさうて、一寸フランス氣質らしいものを持つてゐる。

▲但し達觀すれば、彼れの三井家に於ける、只四十年の間をヌーッと暮らして來て、三井の富は自然に增加し、自個の富もまた莫大なものとなつたのだ。無論其の間には三井家の各事業に消長あり、時に沈滯し、時に刷新し、時に發展したが、沈滯必ずしも彼れの過ちては無く、刷新必ずしも彼れの決斷ては無く、發展必ずしも彼れの功蹟ては無い。

▲今は昔と違つて個人の獨力に重きを置くことが出來ぬ。益田孝と云ふ人は三井と云ふ一有機體の細胞て、三井の繁昌は即ち無數の細胞の活動に因るもの、名は三井の總番頭てあらうが何てあらうが、吾人は到底益田と云ふ一細胞の働きなり、過ちなりを大なるものとして見積ることは出來ぬ。個人の力を過信し、人物崇拜の古い夢に捉はれてゐる實業雜誌の記者か何かならばイザ知らず、吾人は遂に技術家學藝家以外に於ける

人物評論なるもの〻無意義を思はざるを得ない。

▲幾ら金があつても、個人の力では大なる仕事が出來ぬと云ふことは、富豪獨力の事業が合資會社となり合名會社となり、遂に株式會社となるの趨勢と徑路とを見れば分る。

▲現に三井の二大事業たる物產會社及び銀行も、いよ〱株式組織に改められると云ふてはないか。

▲人はこの組織變更を以つて、益田氏が先頃歐米を巡遊して來た土產の如くに云ふが、吾人は矢張り抗すべからざる時代の一大潮流、即ち科學の進步に伴ふ民主的空氣の影響であると信ずる。

▲組織變更と云ひ、民主的空氣と云ふも、今の經濟界の動靜は一に資本家社會のことに止つてゐるが、之れに若し勞働者の勢力を加味するやうなことがあるならば、問題は更に擴大せらる〻てあらう。

▲常に時勢の潮流に漂ひながら、三井と云ふ一大資本家のピロツトの如くに云はれ、居ながらにして、富と權力とを擅んだ益田氏は、要するに一個の幸運翁てが

なあらう。

△觀濤居士（益田氏の半面）

雨聲

益田氏は實業家であるのに私は御承知の通り丸で專門が違つて居ますから、其方面に於ける益田氏の事は薩張り知りません、只氏は普通の商人肌でなく仲々美術思想も有り、學問の趣味もあるやうです、平生此點を感服して居ります併し大して深く交つて居るといふ關係でも有りません、それ故十分な御話は無論出來ません氏は弘法大師が好で、大師の遺墨を所藏して居ります、その中でも氏の最も珍として重襲し居るものは座右銘です、大師の筆になると稱せらる〻有名なものて前後に探幽の畫の加へてある、之は一纏めにはなり居らず、散り々々破亂々々になつて、一半は高野山にあり、そして又益田氏にも在るといふ有樣て、益田氏所有の分が十六字だけです、宗旨は眞言宗か眞言宗て

無いか、其點は一向知りませんが、何しろ弘法大師は、好の樣です、それで年々三月二十一日大師の忌日に必ず大師會を催し、多くの知友親戚を招いて彼の品川の八つ山裏の本邸、碧雲臺と申しますが、その碧雲臺で盛な園遊會を致します、その時には實に貴顯朝野を擧つて御役人も居れば會社員も居る、學校敎員も居るといふ譯で有らゆる階級有らゆる種類の人物が一邸内に集る其數は何れ程であらうか、一日の中幾たてにも幾たてにも來るのですからね、今年の三月にも參りましたが、いつもは只大師の遺墨は勿論更に氏の愛藏し居るもの、偶には他から借り來つた珍品等をも交えて澤山一室に陳列し、それを來客の觀覽に供へます今年は初めて講演も有りました大師に對する敬虔なる信仰から來て居るかとの事ですか、さあそれは如何か分らぬ私の見る所では左樣では無い樣ですね、第一に珍品を持つて居るから機會を作つて普く人に見せ樣といふのても有りませうし、一方に又その會が交際の目的にもなつて居ると思ふのです、彼れを利用して多くの知友親戚に對する交情を溫め樣といふのかとも思ひます、

益田氏は打見た所から何處か悠揚迫らぬといつた樣な落ち着いた所の有る人で先づ人の氣を柔げ近づかせる十分の力を持つて居る、仲々交際上手で園遊會などに於ける客の扱ひ振りを見ると實に萬遍なく此方彼方へと氣を配り一樣に話敵になつて廻る、華族女學校邊の年若き處女達も見えるが、それ等の人に迄伴なつて色々説明して聞かせるといふ鹽梅何人の感情をも傷はぬ所は實に巧な交際家です、それに一寸妙な趣味を持つ人で同じ大師會の折の事、料理を鐵鉢に入れて出す、又園遊會の事ですから所在に御茶屋もかゝる、其處には極めて朴實な田舍もの體に扮裝した女を出すといふ樣な事をした、その爲に餘程正直な世馴れぬ新聞記者もあると見えて、すつかり烟に捲かれたらしく、或る新聞記事を見ると、簡易質素を旨とし、精進料理を鐵鉢に盛り云々と書き立てたが、實に噴飯に堪えないてした、何くんぞ知らんその田舍もの體に扮裝した女は盡く江戶の水に其肌を玉にする藝人なのである、亦精

進料理でも何でも無い、只鐵鉢に盛つた丈の話だ、兎に角何と言はうか、一種此樣な風の趣味を持つて居る一言で言へば凝るとでも言ふのでせうか、一亭一室の設け一木一石のたゝずまひにも仲々その取合せに面白い用意が潜む、茶の湯趣味から來て居る一種の寂。左樣です、先づ其樣な好みかと思ひます。茶の湯は好きで自らも立てられる、碧雲臺の庭園には松風菴妙喜菴禪居菴など云ふ五山の塔頭の樣な名を附けた茶室が三ツ四ツもあつて數奇を極めてありますそれに骨董を好むといつても先づ書畫、彫刻、漆器、陶器の類で刀劍などといつた樣な種類は集めません、而かも時代でいへば、多く鎌倉朝とか室町朝とかいつたもので、不思議にも德川時代のものには餘り多く目を向けられぬ樣です、その中にも特に利休珠光といつた如き茶事に關係あるものの遺物遺墨などは愛せられる樣です、批評眼ですか、左樣ですね、元來智識を愛する人で專門の人に遇へば始終說明を求め智識を得るといふ態度の人でその方に先づ勉めて居るといふ風ですね、仲々それは用意周到ですから、數ある藏品中だから或は一二無いとも限るまいが先づ贋物を所持して居らぬ人です、だが此間國民新聞かなどに見えて居ました彼の宗湛日記ですね、彼れは故平岡浩太郎氏の手から益田氏に傳はつたものですが豐太閤の行狀などが事細かに記されて居る珍本の樣だ、けれども歷史家の眼からは批評の限りでありませんね併し神屋善四郎が普通の商人肌でなく一面宗湛居士と云ふ茶人であつたことは益田氏が大に私淑しておらるゝ所であらう益田氏所藏品中の逸品は、畫では源氏物語鈴蟲の卷一卷、地獄草子二卷、以上は平家時代のものです、それから鎌倉時代のもので過去現在因果經繪卷一卷でせう、共に時代を代表した紛れなき天下の逸品と思ひます。(座談筆記校閲濟)

△益田さん

大倉喜八郎

えい、私よりは遲いが隨分早くから東京へ出た人で

す、家は幕府の役人で、お父さんの義方といふ人は佐渡の金山の掛りでした、それで益田さんも初は幕府の騎兵でしたから馬に騎ることは上手です、能く馬に騎つて散歩に出ては鰻飯などを喰べたのです、昔の事ですから鰻飯を喰べるのが非常な愉快であつたのです、それで何でも騎兵隊の連中は、榎本さんに附いて北海道へ行つて戰爭しましたが、其時益田さん等は殘つたのですよ、つまり賢かつたんですね、殘つた連中には益田さんの外にまだ矢野(次郎)、富永(市藏)などいふ人がありました、益田さんは外國語も話せるし書物も讀める、それで井上(伯)さんに通辯として知られて用ひられ、井上さんの大藏大輔になつた時益田さんは造幣權頭になりましたが井上さんの掛冠と同時に身を引き、尙ほ井上さんに就いて共に先收社といふを創め、初めて民間に降つて實業に從事したのです、此先收社といふが後の三井物産の前身です、即ち井上さんが又官に就かれるに及んで、益田さんは先收社を持つて三井に投じたのです。益田さんの造幣權頭であつた頃泊つて居た宿屋が今の馬越恭平さんです、馬越さんは其頃は旅籠屋をして居たのですて、それからの緣故で後に益田さんが三井へ行かれた時馬越さんも亦三井へ入つたのです、何しろ益田さんは三井には非常に力を盡しましたでせう、三井といへば仲々盛なものだが、元は只一商賈でしか無いのですからね、それは老舗は老舖に相違ないのですけれど、只三井組といつてね、本業は呉服屋で金貸をする、兩替もしました、地所持て東京、横濱から神戸大阪へ掛けて澤山所有して居た、その頃三圓位の處が後には百圓にもなるといふ樣な譯て、大分其方でも儲かりは儲かつたが、併し今と競べたらズット小さいものでしやう今と昔と比較を取つたら、さあ何れ程のものになるか、其樣な細かい處は知らぬが何十倍になつて居るか何百倍になつて居るか、何しろ大した膨脹でしたでせう、其膨脹には誰が與つて力あるかといへば皆益田さんですからね。三井も今でこそ盤石の樣な基礎になつたが、隨分此迄何遍も危殆に迫りましたからね、其度奔走し劃策し、防ぎ止めて

來たのは誰の力からといへば皆益田さんなんです、三井に取つては大層功勞のある人です、英語は前に習つた、富永といふ人に習つたのです、此富永といふ人は彼の冬樹さんの父、又矢野次郎さんの父ですよ。益田さんは仲々子供の時から才氣の有る人でしたが師匠の眼にも認められたと見えて聟にされました、即ち益田さんの夫人は富永さんの娘で矢野次郎さんの兄弟になる人です。益田さんは商才に掛けての傑物だが、又一面に趣味の人です、私は幾十年來若い時から交つて來て居ますが仲々美術心に富んだ人でしてな、書畫骨董を盛に集められろ、そして又目があいて居ります、それに茶の湯も立てます。商才はあつても勇氣が足りぬと人が申しますつて、私は左樣は思ひません、其樣な事をいつて彼の人を除いたら三井に如何樣な人が居りますか、私等の眼には格別偉らい人が有るとは思ひません、それに益田さんも隨分思ひ切つた事をやつてゐますぜ、三池の鑛山など仲々積極的に大した坑を掘つて居ります、彼處等のやり具合を見ると、勇氣の無い人の出來る事とは思ひません。今度の改革ですか、合資株式になつて合名組織の時より信用は落ちるつて、なかなか、それは理屈の上であつて實際には左程差響きのある事ではない、それで一部の失敗が起きても全體に動搖が行かぬから極めて思慮ある安全の方法と思ひます、第一税の上からいつても合名と株式では非常の違がありますからね、株式となれば隨分安くて濟むのです。三井は先づ「物產」で成効して居る、益田さんが早く海外の會社と連絡を着けましたからね、今日我國に輸入する紡績機械などでも皆三井の手へ來るのですからね。其れや此れやを思へば益田さんの努力も仲々大したものです。(座談筆記)

△益田孝論

草莽の人

一言にしていへば益田といふ人は、レファインド、アンド、カルチユアド、ゼントルマンであつて、缺點

といふべき程の缺點は何にも持てゐない。英吉利へ行ても、亞米利加へ行ても、何處へ行ても紳士として立派に通つて行く人である。語學などもいろ〳〵出來て英語は一通り達者に話せるし、諸語なども何とか間に合ふ位は話す。又極めて利巧な人で何でもよく分る。計畫などもなか〳〵ある。ちよつと人と逢つても顏色や物越を見て直ぐ對手の心を推す。妾にはかう、妻君にはあゝといふやうな事までも考へる。又何でもよく出來る。茶の湯もやれば謠もやる。書畫骨董の嗜みも淺くない。鑑識から云つても、大倉、淺野などの連中より無論確かであらう。只いはゞ毛の生えた手を持たぬやうな人で、何でも握り得るといふ人ではない。若し又强て缺點を拾へば、そは勇氣がないといふ事であらう。憶病といふてはないが、大膽といふ點はない。大倉などのやうな蠻勇がない。若しあれて勇氣があつたら大したものであらう。あの人は經歷からいへば、夙くに大臣位になつてゐなければならぬ人だが、終始三井の番頭としてやつて來た。今度の組織變更ては恐らく退隱するであらう。友人に對しても輕薄ではないが然しそれは町人としては輕薄でないといふ丈で、町人は矢張り町人である。若し勇氣があつて、何かやらうとしたら、單に番頭として終らず、安田善次郎などよりも遙かにエラクなつたらうと思はれる。

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

豫約出版廣告

早稲田大學漢文科諸講師校訂

先哲遺著・漢籍國字解全書

菊判印刷二段組 本文三號活字句讀訓點付、講述文平假名交り五號活字傍訓付 全部拾貳冊 紙數七千餘頁 總洋布製頗美本

本書全卷目錄

豫約申込要項

甲種　申込と同時に　金拾貳圓

乙種　申込同時に壹圓廿錢附後毎月壹圓廿錢宛十一回拂込　金拾四圓四十錢

送本費　東京市內一回分四錢　全部四十八錢
　　　　內地一回分十二錢全部壹圓四十四錢
　　　　清韓樺太台灣一回分卅五錢全部四圓廿錢

申込期限　本年十月三十一日限

送本期　本年十一月ヨリ毎月一冊宛

◎官廳府縣立學校は前金を要せず
●但し乙種豫約價に依る

▲本書全部の外選擇分賣に應せず▲

內容見本　申込次第送呈

漢書は東洋の古典教育上、文學上、特に人格の修養上に於て最も切實の寶典たるに拘らず之れが**注釋**書類の概して**難解**の**漢文**に成り今日の時勢に適せざるは江湖の久しく憾める所たり然るに徳川時代に於て雷名高き**老大家**が文教普及の爲に特に**平易の假名文**を用ひて著せる國字解書は**講述懇篤、意義明瞭**にして今日の時勢に適し**漢文の捷徑**として**家庭の讀物**として最も切要のものたり、故に本部は其の最も優秀なるものを選拔して之を發行せんことを思ひ之れが蒐集に努むるもの多年、其得難きものは名門大家の**珍藏本**を謄寫し今や必須なる漢籍全部を網羅し得たるを以て豫約方法に依り低廉の價格を以て廣く之を江湖に頒たんとす

◉豫約申込所　東京牛込早稲田　振替東京壹壹貳參番

早稲田大學出版部

豫約取次　全國書肆

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

早稲田大學

政治經濟科講義

政治原論 法學博士 浮田和民
帝國憲法 法學博士 副島義一
行政法總論 法學博士 清水澄
行政法各論 法學博士 清水澄
植民論 講師 石黒定美
自治制論 法學博士 井上友一
比較市政論 講師 安部磯雄
社會政策論 法學博士 桑田熊藏
經濟原論 法學博士 井上辰九郎

財政學 マスター・オブ・アーツ 田中穗積
銀行論 法學博士 山崎覺次郎
貨幣論 法學博士 河津暹
豫算論 マスター、オブ、アーツ 田中穗積
公債論 マスター、オブ、アーツ 田中穗積
會計法 法學士 工藤重義
東洋近世外交史 講師 巽來治郎
近世商業史 文學士 平沼淑郎
社會學 文學博士 建部遯吾

法學通論 法學士 飯島喬平
刑法要論 法學士 牧野英一
民法要論 法學士 飯島喬平
商法要論 法學士 柳川勝二
平時國際公法 法學博士 中村進午
戰時國際公法 法學博士 中村進午
簿記學 商學士 松村吉則
講義錄研究法及辭解、質疑應答其他有益ナル記事ヲ掲ク

第一號 十月初旬發行

法律科講義

法學通論 法學士 飯島喬平
帝國憲法 法學博士 副島義一
行政法總論 法學博士 清水澄
行政法各論 法學博士 清水澄
民法總論 法學博士 仁井田益太郎
物權法 一部二部 法學博士 横田秀雄
債權總論 法學博士 横田秀雄
親族法 ドクトル・ユーリス 阪本三郎
債權各論 法學博士 横田秀雄

商法總則 法學士 岩田一郎
會社法 法學士 柳川勝二
商行爲法 法學士 須賀喜三郎
保險法 法學博士 粟津清亮
手形法 法學博士 小山温
海商法 法學士 市村富久
刑法總論 法學士 牧野英一
刑法各論 法學士 牧野英一
相續法 法學士 柳川勝二

民事訴訟法 一、二編 法學士 岩田一郎
同 自三編至八編 法學博士 仁井田益太郎
刑事訴訟法 法學士 豐島直通
破産法 法學士 岩本勇次郎
平時國際公法 法學博士 中村進午
戰時國際公法 法學博士 中村進午
國際私法 法學博士 山田三良
講義錄研究法及辭解、事實問題ノ解釋、質疑應答、其他

第一號 十月初旬發行

文學科講義

第一號 十月初旬發行

秋漸く闌にして本誌更に活躍す

毎月一回

文藝倶樂部

増刊年四回

第十五卷第拾參號 十月一日發行 正價貳拾五錢 郵稅二錢半

◎小說 里の女 徳田秋聲

◎小說 念力 山岸荷葉

◎小說 エトナの雪 佐野天聲

◎小說 腰かけられぬ人 黑田潮山

◎脚本 學者の血 山崎紫紅

△演藝界 △活社會 △講談 △長廣告 △落語 △新流行

本誌前金表

四冊（三ヶ月分）九十五錢

八冊（半ヶ年分）一圓八十錢

十六冊（一ヶ年分）三圓五十錢

東京本町 博文館

振替貯金口座二百四十番

賣捌 全國到處書店

著者	版	書名	冊數	定價・送料
瀬川博士	増訂十一版	西洋通史	全一冊	定價貳圓卅錢 送料金十六錢
星野博士		史學叢說 第一巻 第二巻	全二冊	各金二圓廿錢 送料金十二錢
田中講師		ドーソン 蒙古史 第一巻 成吉汗傳	全一冊	定價一圓七十五錢 送料金十二錢
冨山房	増訂十一版	最新日本地圖	全一冊	上製一圓廿錢 並製九十五錢 郵稅八錢
兒島教授		支那大文學史	全一冊	定價二圓八十錢 送料金十六錢
坪内博士	再版	倫理と文學	全一冊	定價一圓五十錢 送料金十二錢
坪内博士	七版	通俗倫理談	全一冊	定價一圓廿錢 送料金八錢
遠藤博士	四版	支那思想發達史	全一冊	定價一圓六十錢 送料金八錢
吉田博士	増訂再版	西洋倫理史講義	全一冊	定價二圓廿錢 送料金十六錢
井上博士	六版	日本陽明學派之哲學	全一冊	定價一圓四十錢 送料金十二錢
井上博士	四版	日本古學派之哲學	全一冊	定價一圓六十錢 送料金十二錢
井上博士	三版	日本朱子學派之哲學	全一冊	定價金二圓 送料金十六錢
溝淵博士	再版	教育學講義	全一冊	定價一圓九十錢 送料金十二錢
芳賀博士	三版	國民性十論	全一冊	定價金七十錢 郵稅金六錢
杉谷代水	四版	希臘神話	全一冊	定價一圓五十錢 送料金十二錢

發行所 東京神田 合資會社 冨山房 （振替貯金東京五〇一 電話本局一〇三六番）

賣捌所 全國各書林

和歌

[illegible]選

○

三浦曉村

われのほかなほいく億(おく)の人々の此の天地(あめつち)によれ
ばやすけし

かなしみてなく人々のうらやまし涙ももたぬ身
と生れては

あまき實(み)にとりはあつまるさは云へど林のおく
に鳴く鳥もあり

わが前に大浪くづれ大海の荒るゝ日あらばわれ
いかにせむ

笛吹けばはるかに遠き山ぎはの雲もゆらめくよ
つきの日かな

さは云へどまたおろかなる疑ひにおもてくもら
す夜も有りぬべき

○

三浦曉村

放たれて青きみそらにかへりゆく小鳥のむれの
よろこびに似る

うす青き木の間に見ゆる家々の窓にたゞよふ白
日のさびしみ

かへり來る船のあかりのふと見えて眠るが如し
夜の大海

鐘は鳴る鳥は木の間になきなげく此の夕ぐれの
ものゝかなしき

○

關本梁村

人の世の運命(さだめ)のまへに云ふことも問ふこともな
くもだしてありぬ(友の死に)

やはらかきものゝ來りて今われを包めるごとし
朝の霧ふる

そそかしくわれにもの問ふ旅人をさびしみてあ
る秋の夕ぐれ

夕風や大野の原を牧の牛弱き歩みをなし牽かれ
ゆく

月光は青き木立の上を行く胸のおもひは今君に
ゆく

味方ともあるは敵ともおもひつゝありける人に
遠ざかり來し

幾度か考へたれど生くといふ事より外に道はな
かりき

天地に一人の友もゆるし得ずさびしく過ぎし此百日かな

○　　　指田白縫

泣きぬれし瞳に見れば五分心のほそき灯影もいとまばゆかり

人の前見えも透くべきいつはりを憚らず云ふほどに世なれぬ

大空の青きをうつしさはうるむ瞳と思ひあやしまで居ぬ

何と云ひて讃へむ國ぞうるはしき山のおもわよ日のかゞやきよ

如月のありしゆふべの君が香にやゝ似て悲したちばなのはな

○　　　指田白縫

向ひ屋の屋根にさくなる一八の紫の花に雨ふりて居ぬ

野は暮れぬこのまゝあれば安らかにわれは死にうるごとく思はる

わが心われみづからも恐ろしと思ふことをばたくむ日もあり

思ひすてねむとすれどもあだなりき思ひつかるゝまで思はなむ

雨の日を獨しあれば睡うるむほどの愁ひはあるもなつかし

○　　　善波白衣

ふと思ひとだえぬ膝の手を額にあてたる儘におもひつぎえず

ああ今日の日昨日のまゝのわれに照る涙の眼もて空を仰げば

潸として涙こそ湧け夜となればまた一日の罪をかぞへて

歩みつゝふともおびえぬわれ世より突き放されてこゝに來つると

若き日は若き日として葬らむまた罪をあげ君は泣けども

明日は日曜なれば聊かは安き心にくつろぎて寢む

くつろぎて人は眠れる夜の汽車に寒くゆらるゝわが心かな

○　　　梶原重雄

海の鳥一つ近よりふと鳴きぬ初秋の海の青きしづけさ

秋近き空のうるほひしめやかにもの言ひたげの星のまなざし

さわがしき風をいだきてしづかにも日に向ひ立つ山のかなしみ

野の石のかたらざるこそさびしけれまれには動く事のあれかし

夜の蛾をあまり多くも殺しける果はありけり君ついに來す

すがりたる野木を離されはかなくも矢の如はやき月の落ちやう

曉の神戸のうみに咆哮すさ霧にうかぶ鐵の海獸

○　山村龍子

神をわれさまで尊く思はねどおのづからにも額づかれける

美くしき黑髮あたへ泣く性をあたへて神は地に住ましめぬ

石切りの男鑿とぐ朝霧の谷に來て聞くうぐひすのこゑ

あゝ蟲等世のさま〳〵の悲しみをおの〳〵啼くか月光の下

犬の子は美き少女子にひろはれぬ我が捨て心誰にひろはる

○　眞香朗

我が少女うすくれなゐの頬をほてる王がいたゞくかむりのやうに

つれなきもはたやよからむ人形は愛づれど物は云はてたゞあり

冬となれば山は鉛の雲をはく木枯すさむ大空のもと

雲の上かみが御手の白玉の中より出てし少女とぞ思ふ

夕まくれ寺の鐘なるかはほりは人のたましひ取らむとや來る

○　佐野翠坡

點々とあゆみ來しわれふと前にひらけて海のあるにおどろく

左しつ右しつむくろけふもまた檘のうへによこたへてあり

わが胸に針する如き言の葉をうむとしもなきその唇よ

おのづから枯れはてんまで生きぬべき餘義なさにより糧をもとむる

なにゆゑにさびしうなりしものかともおもうおもひのはてしなき日よ

○ 法月紫星

いくばくの幸(さち)をかもてるなべて世のなべての人の冷笑に逢ふ

ものたらぬきたなき心數十日(すうじふじつ)かくし來りて別るゝはうき

○ 法月紫星

心いまなにゝ滿つるかみたざるかみづからわかず考へもせず

○ 森園天涙

初秋の月あかき夜に漂へる森の上なる靑き愁よ

覗線みな中なる吾に集りてあるがやうにも心元なき

疲れたる蒼空のもととぼ〳〵と馬車は夕の高原をゆく

長う鳴る汽笛の音に夕暮は涙ぞおつる何となけれど

海にゆけば海のとゞろき街にあれば街のとゞろき安き日もなし

○ 鈴木鳴象

夏來れば紺の森に水色の帶して涼む子を思ふ哉

我が胸のなげかひきこゆ樂果てし眞闇にひとりものを思へば

君思へば博打つ父や病む母や淋しき家の樣ぞ眼に浮く

○ 鈴木鳴象

日ひと日成す事もなく茫然と天井の節を數へてありぬ

林檎むけば言葉少くなにほゝゑめる君の面わのほのに浮びぬ

○ 伊達まつ子

おん胸の奥につづける一すぢの道をばつねにわれゆきゝする

混々とつくることなく湧き出づる泉の如きわがよろこびよ

○ 萩原靜枝

大海も白鳥もこの大いなる日の夕ぐれは靜まりてあり

すさみたる心に觸るるものぞなき夕べ〳〵を丘に立てども

○ 藍原凌霄花

静かなる心に今日も野にたちぬ正しき道をゆく心地して

厳かに「死てふ」事を思はざるその日しもこそ戀しかりけれ

○　西内白穂

曇り日ややぶれし人ら愴惶と悲しき顔に巷をばゆく

胸にみつなべての思ひうたひえし日のよろこびに如くものはなし

○　小池相良

かぎりなき平野ひらけぬ吾前に吾をさへぎる何ものもなし

灰色の霧のなかよりいとかすかいとかすかにも物の音ぞくる

○　宮本泣夢

大地の下ひた馳する電車てふ小さきなかに物を思ひぬ

心ふと電車のなかの釣革にたよりて白き顔ひとつ見る

○　入尾洋々

なまなかに強さほこりて過ぎし日のおろかさおもひくるしき日かな

泣けばたゞ弱しといふか泣くゆゑに笑ふ男の子の意氣を見よをみな

○　橋口暮山

囚はれしわれあざけるにあらざるやこのごろ君が冷やけさ見ゆ

高き野にひとり上りて塵立てる街のどよみを草にねてきく

○　岡積臥牛

落日は野に立つ我と疲れたる牛とをてらしやゝに沈みぬ

○　松永翠蔭

呪咀はれてありと悟りしその日より常に知らざる安けさをみる

▲懸賞和歌原稿は必ず小石川原町百三十三尾上柴舟宛たるべき事



綿摘

綿摘やから神鳴の南晴れ　へき
綿摘むや姉も妹も猶嫁せず　同
綿摘むや西風晴れを渡り鳥　同
綿摘むや葛城山にかゝる雲　鶯溪
大籠を背に綿摘の渡舟かな　雨萍
帆船行く川遙かなり綿を摘む　烏城
綿摘むや此の畦かぎり明日の事　青雲
綿摘むや鵙鳴くに明日も晴と見る　小蔭
綿摘むや日和幾日の畑埃　不寝庵
綿摘むや說教寺に打つ魚板　明兮
綿摘むや斑鳩寺の前後　句樓
綿摘むや小いさき春戸の畑より　起堂
綿摘むや芋の太葉を籠の底　月舟
綿摘むや汽車から投げし物の殼　其蜩

夕風や搖るゝ木綿の取り殘し　燕石
綿摘んで大風呂敷に包みけり　水竹
綿摘や畑に吹き込む濱の砂　芳椰
綿つむや排水溝の干も久し　黑佛
村が泣くじめ〱雨や木綿時　ふせつ
海鳴りを聞く日續きや綿を摘む　湟南
漁歌樵歌綿摘むに唄なかりけり　狠子
綿摘みやねぎらひごとに新蕎麥も　半醉
綿の出來明日摘むことに見廻りぬ　竈馬
山晴れて輪に飛ぶ鳶や綿を摘む　馬鼓洞
新綿を積むや在所の勝手廣　青可
綿摘むや亞米利加種の莖の丈　慘冬
唐絲の値知らぬ村や綿を摘む　三聲
綿取りに淺間の灰のふる日かな　小々
煙吐く山目に遠く綿を摘む　風來子
綿摘むや淋し田舍へ嫁に來て　同
綿を摘む日每や湖の凪行く帆　愈青
此頃の夕燒癖や綿をとる　同
新綿を師の御料もと摘みわけし　桃紅
桑畑と減る綿畑や閑に摘む　同
地ぼてりにほしき一雨や綿を摘む　鬼洗

空繰もして掃く煤や綿車　同

歸るさや負ふ綿籠に月出たり　洛燕居

前垂に捜し殘りの木綿かな　同

蜻蛉や日和見越して摘まぬ綿　太郎

綿摘むや出水に遠き麓畑　同

綿摘むや凪ぐ宍道湖に傾く日　雪楊

綿摘むも屯田兵の規律かな　同

柿の木に下に晝餉や木綿取　春溪

住吉を一目の里や木綿摘む　同

綿摘むや籠に餘るを風呂敷に　同

摘むは女運ぶは男綿所　同

綿摘の雨降りければ藁仕事　總子

須磨人の綿摘む里に嫁ぎけり　同

柿膾綿摘里の宿りかな　同

仁和寺の墓守も來ぬ木綿摘み　同

摘み綿を撰る姉砧うつ妹　同

本號應募者七十八名、句數千二百七十一句、好句の少かりしは甚だ遺憾なりき。

募集課題

小鳥網　十月十五日締切

春を待つ　十一月十五日締切

謹告

選者儀多年本誌の俳壇を擔當し、昨秋加賀國金澤へ轉任後も乞はるゝまゝに引續き句選も致し來りし處今秋更に英國倫敦へ轉任することゝ相なりしにつき本月限り選者たることを辭退致し候此段應募者諸君に謹告仕り候終に臨みて諸君の健康を祈り候

九月二十日　繞石識

本誌前號選句中

鉋屑かさばり踏むや秋暑き

サボテンの子に子の秋の暑さ哉

草の戸の厨かくさぬ殘暑哉

の三句は雜誌ホトトギス第十卷第十二號に羊我、鹿語生、梧月の句として掲載しあることを見出したるにより抹殺す。

定め

一、應募句は今後は東京市本郷駒込西片町十番地反省社宛の事。

一、一人十句以上三十句以下の事。



下宿屋と火事

野逸道人

東京の下宿屋、殊に學生の巣窟といはるゝ神田、本郷邊の下宿屋は随分家込(やごみ)の中に建てられたるもの多し。俥二臺並んで通ることの出來ぬ細き露路の中に四五軒の下宿屋あり、而かもそれが殆んど三階造りなるやうな所もなきにあらず。斯樣の所に止宿する人は、勿論平常より注意し、一旦地震又は火事などのある節には如何にして何處より免るべきかを考へ置くこと須要なれども、下宿屋にも相當の設備をなさしめ、惶てふためける餘り大いなる怪我をなし、又免(のが)るべき術なくして、あたら身命を喪ふなどいふことを防止せざるべからざる也。

地震の事は暫らく措く。火災について見るに、現に先月上旬本郷駒込の學士學生燒死事件の如きは全く火災の時に逃るべき設備なきより起れるもの、當局者はかゝる機會を利用して、各下宿屋にかゝる危難を免るゝの設備をなすことを强制すべきなり。勿論今日に於ても、下宿屋は必らず消火器を備ふること、二つ以上の階子を有すること等一種の制裁の下にあり、又本郷邊にては金製の油入のランプを用ふることを勵行する模樣ありとか聞けど、金製のランプ必らずしも火を失することなしと限らず、已に火を失すれば消火器を以て必らず消し止め得ると限らず、消し止め得ざる時、二つ以上の階子も物の役に立たぬことあるを豫想せざる能はずかゝる時、二階又は三階より飛び下りて何等の怪我をせざるやうの人は珍らしき事にて、多くは死傷の厄を免るゝこと能はず。專問家をしていはしむれば、いろ〳〵の妙工夫もあるべく、又金をかければ如何な

る完全の設備も爲し得べけんも、差當り簡單に實行し得べき方法としては、二階又は三階の室には、室の外に丈夫なる折釘を打ち其傍らに必らず一本の細引を備へ置かしむべし。階子段より逃れられぬ時は細引の端に作れる輪（これは平常より輪を作り置かしむべし）を釘に引掛け、其れに下りて、スル／＼と地面まで下り得るやうにすべきなり、これ位のことは金もかゝらねば下宿屋にとつて決して苦痛とはならざるべく、而かも下宿人の爲めには至極の便利あり、夜もいくらか安眠を助け得ることゝなるべき也。駒込燒死事件より下宿屋をして此平凡簡單なる設備をなさしめんことを當局者に勸む。



噂の種

醉美生

○八月廿五日？の夜池邊吉太郎氏の宅へ泥棒が入つて、其日受取つて來た俸給二百五十圓？をペロリとしてやられた。氏が舊藩主細川侯から頂戴した金時計は台所とかに捨てゝ行つた相だ。これは一旦取つたけれども、此頃は掏兒や泥棒の檢擧が矢釜しくつて、ツブシタ所で直ぐ足がつくと思うたからであらう。之に對する氏の言ひ草が面白い。「どうも金は惜しい事をした。而し時計を捨てゝ行つた其克己心には全く感心した」といつてさも／＼感心した樣子だ。「イヤ、いろ／＼な事を研究しましたよ、あゝいふ風に物品を取らずに現なまばかりを持て行くのをなま師といふんだ相だ。何でも二人で來て、久しく寢息を窺つてゐた樣子だ。其晩、家で筑前琵琶をやらせて十一時頃に床に就いたものだから、疲れを覗つて來たのらしい。惜しい事をした。」といふやうなことも話された。

○先月の本誌に「森鷗外論」が載つたことは讀者の御承知の通りだが、あの論が出る前に鷗外氏は頻りに「僕の本當の弱點を衝くのがあるか知らん」といつて居られた相だ。其話を某氏の所でずると、あの論を見て、「弱點が書いてないから知らないのだなど、思うて居れば大間違だ」と笑つてゐた。

○永井荷風氏は先月一寸京都に遊んだが、「彼處こそ眞に藝術家の住むべき所と存じ候」と手紙をよこした相だ。又近い中に遊びに行くといふ。

○臺灣の彩票事件の時にいろ／＼檢べ／＼て見るとあれが三井家に深い關係のある事が分り、佐久間總督が上京するや何かして大騷ぎとなつたが、時の司法大臣松田正久が部下のものを諭して辛やく事なきを得たとの噂がある。

○益田孝といふ人は自分の年齡を云ふ事が大嫌ひな人らしい。何か昔の話を聞くと、「ヤアそれをいふと我輩の年齡が分るから、まア廢さう」といふやうな事をよく／＼いふ相だ。

○岡崎邦輔などは星亨の居た時ばかりは役に立つたらうが今日などは誰も相手にするものはなからう。ナぜなれば星といふ奴は鉈のやうな奴で、大きなものをザクリと破るにはよいが、細かい處は出來ない男だ。岡崎は小刀のやうな奴だから、星にはどうしても必要であつた。が、原敬などは庖丁のやうな奴で、星ほどの大味な處はないが、然し小刀の代用も出來るので岡崎などの必要は毛頭ない。それに室の中に引込んで頭をひねつて策を考へる策士などの必要な時代は、もう狹くに過ぎたよ」と某大家がいつてゐた。

○ジヤバでは大抵裸體で眠るものだから、腹が冷えないやうにとて長い括り枕を抱いて寢る。之をダッチユ、ワイフといふ。俳句にある竹夫人とよきコントラストであると、竹越與三郎氏が話して居た。

○電車の回數切符の切口が、よく切れて居らぬ爲めに横裂けするのか可なりある。事小なるに似たれども、會社の人民に對して親切ならざる事が分る。

○此頃電車の乘換場所の所に立て、神奈川に行くにはどう行きませうとか品川はどの方角に當りませうなど、聞く男がある。そして、此れ／＼と敎へると、電車の切符はありませんがといつて暗に一枚貰ひたいといふ風を示す。よく觀察して見ると、同情を起させて、切符若くは切符代を卷上げんとするものらしい。僕ばかり己に二度其目に逢つた處を見ると、諸所に可なり居るだらうと思ふ。こういふ奴は嚴重に取締つて欲しい。

新刊批評

▲愕堂集

尾崎行雄著
讀賣新聞社發行

「東京市長としての尾崎行雄氏は、世間に餘り評判がよくなき様なり。多くの人は彼は無能なり、仕事の餘り出來る男にあらずと惡評す。責任の地位に立つ人を惡口するは日本人の通弊なれば只之を聞流して可ならん歟。尤も仕事の出來る人か出來ぬ人かは吾人の保證の限りにあらざれども、少くとも彼は惡事を爲さぬ人なり。爲すを好まざる人なり。潔白を尊び、清廉を重んじ、現に角國士を以て任ずる人也。此點今の滔々たる政清界の人物に一頭地を抽んず。仕事は彼よりも多く爲し得る人あるべし。而かも惡事をなさぬ點に於て彼よりも安心し得べき人物果して幾何かあるか。吾人は彼に對する評論を聞く毎に、邦人の人を容るゝ雅量なきを嘆ぜざるを得ず、そは別論として、彼の文章、及び辯論に至ては天下何人も之を惡評し得るものなく、文章の士、辯論の士としては敵も味方も等しく讚譯する所にして最早や保險附なりといふべし。否、彼を惡評せんとするものも、彼は只文章の士、辯論の雄なりといふを以て見ても其方面に於ける彼の才の尋常ならざるを知るに足らん。此集即ち彼の既往廿七八年間（明治十三年―四十年）に於ける言論文章を集めたるものにして彼の有する最良の特質は皆此篇の中に收めらる。伊藤公が題して「滿賢戰車」といひ、大隈伯が序して「片言隻句の裡に彙圍すべき君の人格の躍如として現はれ、其一篇の小説中にも、國家國民を思ふ君の精神の充溢」すといふもの、啻だ普通の所謂、文章の士、言論の雄以外彼の本領のある所を察すべき也。「尚武論」を卷頭とし、次にジスレリーを評傳し、兼て著者の主張抱負を披瀝して當時人口に膾炙せる「經世偉勳」の如き四百頁に餘る大册、「新日本」「少年論」「退去日錄」「遊清記」「歐米漫遊記」「朝野人物評」一「洗塵記」「支那處分案」其他、新聞雜誌に公けにせる論說。議會及其他にての演說等を收め、殆んど二千頁に近き大册子なり。著者の人格見識文才抱負を遺憾なく發揮し、且つ其半面には明治政局の變遷を反映せる書籍として極めて面白く、殊に少年子弟志を起つるの動機をなすべきものとして、治く之を江湖に推奬す。（定價金五圓）

▲日本類語大辭典

志田、佐伯兩學士編
晴光館發行

志田學士主任となり、佐伯學士之を補助し、芳賀博士大體を校閲して本書の成れることは序文に明記せらる。西洋に所謂シノニムの辭典にて或一つの言葉の下に之に類似したる若くは關係ある言葉を蒐集したるものにして、我國に於ては新たなる企てなれば、著者の苦心もさこそと思遣らる語數約四十萬と註せられ、頁數約千八百。學界を益すること尠少ならざるべし。附錄として地名人名異名類聚を添ふ。（定價金五圓五十錢）

▲新片町より

島崎藤村著
左久良書房發行

文藝入門第一編として發行せられたるものにして、著者が近年公けに

せる論說及び感想等を集めたるもの。著者の眞摯にして沈着、事物の眞髓を捉り、人生の眞相を究めんとするの意氣何れの篇にもあらはる。著者の人物及び作物を究むるの關鍵となり、兼て人生研究の途に上らんとする人に深き暗示と啓發とを與ふ。(定價五十五錢)

▲歡樂

永井荷風著
易風社發行

「短篇小說集歡樂は千九百八年七月外國より歸りて後一年間の創作を集む。千九百九年九月。永井荷風」といふ序文があつて中には「歡樂」「監獄署の裏」「牡丹の客」「花より雨に」「狐」「曇天」「深川の唄」「春のおとづれ」「祝盃」の九篇を收めてある。何れも著者獨得の情調と感想と觀察とを見るに足るべく、現下の我文壇に於ける最も注目すべき作物であるが、全篇を貫く情調の最も勝れたるものとしては余は「春のおとづれ」(小品文)と「歡樂」を推し、寫實的描寫の勝れたるものとしては、「深川の唄」を取り、時代に反抗した大膽な著者の告白として「監獄署の裏」と「祝盃」を面白しと感じ、「牡丹の客」は均整の作と思ひ、「曇天」の書出しと「狐」の結末とが振つてゐると思ふ。只「花より雨に」丈けは左程感心した處がない。著者の傾向の全體について評論したら面白いと思ふが、それは改めて近い中に論ずることにする。(定價七十錢)

▲常識之基礎

加藤咄堂、大住舜共著
東亞堂書房發行

「宇宙、地球、生物人生に亙れる進化の精神を會得せしめんが爲めに編述」せられたるものであつて、宇宙篇、地球篇、生物篇、人類篇、社會篇等に分ち、更らに之を小分として、詳細なる說明を施し、卷末には索引があつて至極便利である。(定價金壹圓)

▲二葉亭四迷

坪内逍遙、内田魯庵編
易風社發行

文壇及び其他の各方面より、故長谷川二葉亭氏に關する、評論、感想等を蒐集せるものにして、氏の友人知己は勿論、文壇の名家は略ぼ殘りなく之を網羅したれば、二葉亭氏に關する研究には最もよき材料といふべく、永く明治文學史料の一として殘るべし。余の讀める中にては正宗白鳥氏の忌憚なき批評、島崎藤村氏の含蓄ある批評最も面白く、内田魯庵氏の長文は故人の一生を語つて餘蘊なかるべきを感ぜしむ。(定價一圓五十錢)

▲人物畫傳

珍游子編
樂山堂發行

「大阪朝日」に連載せられたるものにして其の名の示す如く各方面の奇人物を集め、其肖像を掲げて其奇人物たる所以を記述してある。定價五十錢)

▲文名嘖々

青柳有美編
大島商會發行

「秋田みやげ、文名嘖々」は秋田縣出身の文士畫家廿餘名の作を掲げたるものにして、秋田が大いに世間に賣り出したる際を利し、更らに大いに賣り出さんとして出版せられたるもの也。由來、秋田は文士國を以て名あるもの、少年文士の一讀の價あるべし。

▲江戸年代記

笹瀬玄策編
吉川弘文館發行

家康公江戸へ入府してより慶喜公大政を奉還するに至るまで二百八十七年間に江戸府内に起りたる事實の大要を記したるものにて官事、雜事、知名の士の忌日の三段に分ちたり。便利なる書也（定價五十錢）

▲新撰俳諧辭典　岩本梓石宮澤朱明著　大倉書店發行

俳諧の季題を初として、古語、俗語、俚諺、風俗、人名、地名、佚話、等、凡て俳諧に用ゐられたる事物について說明を加へたるものにして、俳諧を學ばんとするものには極めて便利なるべく、又卷末俳諧人名譜も備にして要を得たりといふべし（定價二圓五十錢）

▲蟲之研究　西村醉夢著　博文館發行

鳴く虫の研究に熱心なる西村醉夢氏の新著、主として科學上の記述にして、文學上のことは此書には省きたり。かゝる虫に付て科學的知識の絕無なる、一般日本人にとつてよき讀物といふべし（定價六十錢）

▲吊花小品　齋藤吊花著　隆文館發行

齋藤吊花氏の小品を集めたるものにして、文章なだらかなれども中にはくだらぬものもあり（定價五十錢）

▲鏡花小品　泉鏡花著　隆文館發行

こういふものを書かせては旨いものなり、小說には却て煩をなす文の一種の調子も、書かれたる事としつくりと合ひて些のたるみなし、吊花小品などとは殆ど比べものにならぬ程面白し（定價五十錢）

▲廢園　三木露風著　光華書房發行

三木露風氏の新體詩集にして、清新の詩情掬すべきものなきにあらず然れども我等は今日多く出づる詩集を見る毎に、我等の詩情が悉く現代の詩人に歌ひ出でられざるを認みざる能はず（定價九十錢）

▲新婦人　藤澤古雪著　弘道館發行

ズーデルマンの「ハイマート」を譯したるものなり。原著はズ氏の傑作なれば一讀の價値充分なれど譯筆は未だ隔靴搔痒の嘆あるを免れず（定價八十錢）

▲大日本歷史　靑木武助著　寶文館發行

文部省公布の中學校教授要目本邦歷史部の示す所々準據し、其第一、二年の分と第五年の分とを適宜に配合して編纂したもので、其目的は專ら中等敎育に於ける教授若くば中等教員檢定受驗者の參考に供するにある、彪然たる千二百頁餘の大冊、材料豐富記事着實加ふるに文學博士星野恒氏の嚴正なる校閱をも經た事とて所說亦甚だ穩健、敢て新說の耳目を新にするものなき代に、又輕浮なる獨斷の人を誤るものはない。時代の觀念を明確にする爲に、皇室勢家に關する重大なる出來事には必ず時日を詳記し尙ほ讀史の理解を助くる爲に同じく皇室勢家の系譜を繫く揷める等は其多とすべき點である。（正價貳圓八十錢）

▲斷脚記　田中白茅著　吉岡寶文館發行

讀んで字の如く鐵路に脚を轢かれて遂に其脚を斷つに至つた著者病床

想の記錄である。病床の沈思には現實哲學宗教の問題所謂生死神人の事なぞが多いのだが、それは近藤常次郎氏の「仰臥三年」若くは綱島梁川氏の「病間錄」等に見るべくして此には只一篇の好小說を見るのである、勿論全體が日記である、斷片的感想錄である、又勿論其中には歐論を經として所謂生死神人の問題、群芳優劣論、それに絡んで民族性論、師道論、士風論俗に碎けた運動談旅行中の滑稽談等、色々のものが緯として織成されて居るが吾人はそれ等の一々に就いて教えられたの、諭されたの、若くは笑はせられたのといふよりも、寧ろ現代の小說的興味に上り多く動かされた事を言はんと欲する。著者は大死一番絶後に辛ふじて甦つたもの身親しく大苦に沈み大苦を味ひ、而かも其大苦の底に僅に慰藉を一管の筆に求めて此大苦の描寫をなしたものである、直攄二性情一作我詩と意識するに於てはまだ底一枚の隔ては有るのだが、左樣の意識もあらぬ場合に記されたる日々の感想とて文字に、一々血肉がある、血肉の組織せる自然の感情の流露がある、而かも日頃の素養の程も床しく、其詞は清秀其句は素錬其調は暢達それ等の力も有ろうが一讀先づ肺腑に歷々たらしめらるゝものは病床苦悶の著者の面目で、從つて如上幾多の話材は唯病苦の一高一低一進一退と步調を合せて波動しつゝある者とほか見えぬ著者は現代の小說を厭だといふ、然るに予は足下の此著を現代の小說だといふ、著者に取つては聊か不服か知らぬが、蓋し現代小說の趨勢は虛飾を避けて質實を取る、質實を取るは緻密なる現代人の感情に最早や虛飾なる者が沁まぬからである、從つて自己の經驗を多く題材とすることたもなるのだ、然らば此著の如きは實に其要求に合するもので、心深き者をして讀ましむれば亦是れ一箇の好小說たるを假する、終に一句。著者が自ら怪い事を怒鳴つたといふ一句を紹介しやう。

富士の根の雪に臥さばや轉ばばや

以て著者の人格と病苦とを併せ示すに足るべく、又自然本書の全內容を代表すべきものとも思ふ。尙ほ著者に向つて言ふ、雙脚天下を橫行すといふ事は、双脚天下をといふよりも景氣がよい、俗用の文字通に大に文界に於て奮鬪されん事を望む(定價金五十錢)

▲新桂川

伊原青々園著
都報社發行

題して新講話とあるからは普通の小說とは違ふ事を先づ意識せればならぬ、左樣思つた上て見れば事件に變化錯綜あり筆も頗る暢達といふ處に價を付けて宜からう(正價金五十錢)

▲東遊記

橘南谿著
富山戶方發行

著者が天明五六年の間に東海、北陸、東山の諸道を遊びて名所古跡を探りたる記錄を此度饗庭篁村氏の校訂を經て出版したるもの異聞珍說讀むべきものが多い(上製金參拾錢並製金廿三錢)

▲作文敎授の理論と實際

支田宜剛著
晚成所發行

理論と實際の兩方面より周到の用意を以て極めて組織的に構成し、懇切叮嚀に說明したるもの、任に中學程度の學校の同科敎授に在るものには、蓋し欠くべからざる好個の參考書であろう、(定價金壹圓五拾錢)

附録小説

芽生

歸朝者の日記

民

島崎藤村

永井荷風

田山花袋



芽生（めばえ）

島崎藤村

淺間の麓へも春が近づいた。いよ〳〵私は住慣れた土地を離れて、山を下りることに決心した。

七年の間、私は田舍敎師として小諸に留まつて、山の生活を眺め暮した。私が通つて居た學校は貧乏で、町や郡からの補助費にも限りがあつたから、隨つて受ける俸給も少く、家を支へるに骨が折れた。そのかはり、質素な、暮し好い土地て、月に僅かばかりの屋賃を拂へば、粗末ながら五間の部屋と、廣い臺所と、大きな暗い物置部屋と、櫻、躑躅、柿、李、林檎などの植ゑてある古い屋敷跡の庭を借りることが出來た。

私はまた、裏の流れに近い畠の一部を仕切つて借りて、學校の小使に來て手傳はせたり、自分でも鍬を執つて耕したりした。そこには、馬鈴薯、大根、豆、菜、葱などを作つて見た。

斯ういふ中で、私は別に自分の氣質に適つたことを始めた。それは信州へ入つてから六年目、丁度長い日露戰爭の始まつた頃であつた。町から出る學校の經費はます〳〵削減される、同僚の體操教師も出征する、卒業した生徒の中にも兵士として出發するものがある、よく私はさういふ人達を小諸の停車場に見送つて、悲壯な別離を目撃した。東京にある知人も多く從軍した。一年の間、斯の大きな戰爭の空氣の中で、私はある著作に從事した。

種々な困難は、猶、私の前に横たはつて居た。一方には學校を控えて居たから、思ふやうに自分の仕事も進捗らなかつた。全く教師を辭めて、專心從事するとしても、猶一年程は要る。私は既に三人の女の兒の親である。その間、妻子を養ふだけのものは是非とも用意して掛らねばならぬ。

兎に角、小諸を去ることに決めた。山を下りて、そして自分の仕事を完成したい、と思つた。

岩村田通ひの馬車の喇叭が鳴つた。私は小諸相生町の角からその馬車に乘つた。引越の仕度をするよりも、何よりも、先づ一人の友達を訪ねて、その人の助力を得やうと思つたのである。其日は他に同行を約束した人もあつたが、途中の激寒を懼れて見合せた。私は獨りで出掛けた。雪はまだ深く地にあつた。馬車が淺間の麓を廻るにつれて、乘客は互に膝を突合せて震へた。岩村田で馬車を降りて、それから猶山深く入る前に、私はある休茶屋の爐邊で凍えた身體を溫めずには居られなかつた位である。一里

半ばかりの間、往來する人も稀だつた。谷々の汎濫した跡は眞白に覆はれて居た。
訪ねて行つた友達は、牧野君と言つて、斯ういふ邊鄙な山村に住んで居た。ふとしたことから、私は斯の若い大地主と深く知るやうに成つたのである。こゝへ訪ねて來る度に、斯の友達の静かな書齋や、樹木の多い庭園や、それから好く整理された耕地などを見るのを私は樂みにして居たが、其日に限つては心も沈着かなかつた。主人を始め、細君や子供まで集つて、廣い古風な奥座敷で、小諸に居る人の噂などをした。斯の温い家庭の空氣の中で、唯私は前途のことばかり思ひ煩つた。事情を打開けて、話して見やう、話して見やうと思ひながら、翌日に成つてもついそれを言出す場合が見當らなかつた。
到頭、言はず仕舞に、牧野君の家の門を出た。そして、制へがたい落膽と戰ひつゝ、元來た雪道を岩村田の方へ歸つて行つた。一時間あまり、乘合馬車の立場で待つたが、そこには車夫が多勢集つて、戰爭の話をしたり、笑つたりして居た。思はず私も喪心した人のやうに笑つた。やがて小諸行の馬車が出た。沈んだ日光は、寒い車の上から、私の眼に映つた。林の間は黄に耀いた。私は眺め、且つ震へた。
小諸の寓居へ歸つてからも、私はさう委しいことを家のものに話して聞かせなかつた。
南向の障子に光線をうけた部屋は、家内や子供の居るところである。末の子供はお繁と言つて、これは私の母の名をつけたのだが、その誕生を濟ましたばかりの娘が、胡燵へ寄せて、寢かしてあつた。暦や錦繪を貼付けた古壁の側には、六歳に成るお房と、四歳に成るお菊とが、お手玉の音をさせながら遊んで居た。そこいらには、首のちぎれた人形も投出してあつた。私は胡燵にあたりながら、姉妹の子供

を眺めて、奈何して自分の仕事を完成しやう、奈何してその間この子供等を養はう、と思つた。

お房は――私の亡くなつた母に肖て――頰の紅い、快活な性質の娘であつた。妙に私はこの總領の方が贔屓て、家内はまた二番目のお菊贔屓てあつた。丁度牧野君から子供へと言つて貰つて來た葡萄ジヤムの土産があつた。それを家内が取出した。家内は、雛でも養ふやうに、二人の子供を前に置いて、そのジヤムを嘗めさせるやら、菓子麵包につけて分けて呉れるやらした。

私が奈何いふ心の有樣で居るか、何事もそんなことは知らないから、お房は機嫌よく私の傍へ來て、斯樣な歌を歌つて聞かせた。

『兎、兎、そなたの耳は
どうしてさう長いぞ――
おらが、母の、若い時の名物で、
笹の葉ッ子嚥んだれば、
それて、耳が長いぞ。』

それは家内が幼少い時分に、南部地方から來た下女とやらに習つた節で、それを自分の娘に教えたのである。お房が得意の歌である。

私は力を得た。其晩、牧野君へ宛てた長い手紙を書いた。

幸にも、斯の手紙は私の心を友達へ傳へることが出來た。その返事の來た日から、牧野君は私の仕事

に取つての擁護者であつた。しかも、それを人に知らさうとしなかつた。私は牧野君の深い心づかひを感じた。そして、自分のベストを盡すといふことより外に、斯の友達の志に酬ふべきものは無い、と思つた。

四月の始から一週間ばかりかけて、私は家を探しがてら一寸上京した。澁谷、新宿――彼邊を探しあぐんで、ある日は途中で雨に降られた。角筈に住む水彩畫家は、私と前後して信州へ入つた人だが、一年ばかりで小諸を引揚げて來た。君は佛蘭西へ再度の渡航を終へて、新たに畫室を構えて居た。そこへ私が訪ねて行つて、それから大久保邊を尋ね歩いた。

郊外は開け始める頃であつた。そこらの樹木の間には、新しい家屋が光つて見えた。一軒、西大久保の植木屋の地内に、往來に添ふて新築中の平屋があつたが、それが私の眼に着いた。まだ壁の下塗もしてない位で、大工が入つて働いて居る最中。三人の子供を連れて來てこゝで仕事をするとしては、あまりに狹過ぎるとは思つたが、いかにも周圍が氣に入つた。で、二度ほど足を運んで、結局工事の出來上るまで待つといふ約束で、そこを借りることに決めた。

斯の話を持つて、小諸をさして歸つて行く頃は、上州邊は最早梅に遲い位であつた。山一つ越えると高原の上はまだ冬の光景で、それから傾斜を下るに從つて、いくらかづゝ温暖い方へ向つて居た。小諸へ近づけば近づくほど、岩石の多い谷間には、淺々と麥の緑を見出すことが出來た。淺間、黑斑、その他の連山にはまだ白い雪があつたが、急にそこいらは眼が覺めたやうで、何もかも蘇生の力に滿ち溢

て居た。五箇月の長い冬籠をしたものでなければ、殆んど想像も出來ないやうな斯の嘻しい心地は、やがて、私を小諸の家の方へ急がせた。

漸く春が來た。北側の草屋根の上にはまだ消え殘つた雪があつたが、それが雨垂のやうに軒をつたつて、溶け始めて居た。子供等は私の歸りを待詫びて、前の日から汽車の着く度に、停車場まで迎へに出たといふ。東京の話は家のものゝ心を勵ました。私は郊外に見つけて來た家のことを言つて、第一土地の閑靜なこと、樹木の多いこと、地味の好いことなどを話して聞かせた。女子供には、東京へ出られるといふことが何よりも嘻しいといふ風で、上京の日は私よりも反つて家内の方に待遠しかつたのである。

其晩、お房やお菊は寢る前に私の側へ來て戯れた。私は久し振で子供を相手にした。

「皆な温順しくして居たかネ。」と私が言つた。「サー――二人ともそこへ並んで御覧。」

二人の娘は喜びながら私の前に立つた。

「いゝかね。房ちやんが一號で、菊ちやんが二號で、繁ちやんが三號だぜ。」

「父さん、房ちやんが一號?」と姉の方が聞いた。

「あゝ、お前が一號で、菊ちやんが二號だ。父さんが呼んだら、返事をするんだよ――そら、やるぜ。」

二人の娘は嘻しさうに顔を見合せた。

「一號。」

「ハイ。」と妹の方が敏捷く答へた。

「菊ちやんが一號ぢやないよ、房ちやんが一號だよ。」と姉は妹をつかまへて言つた。大騷ぎに成つた。二人の娘は部屋中を躍つて歩いた。

「へい、三號を見て下さい。」

と山浦といふところから奉公に來て居る下女も、そこへお繁を抱いて來て見せた。厚着をさせてある頃で、斯の末の兒はまだ這ひもしなかつたが、チヨチ〳〵位は出來た。どうやら首のすわりもシツカリして來た。家の内での愛嬌者に成つて居る。

「よし。よし。さあもう、それでいゝから、皆な行つてお休み。」

斯う私が言つたので、お房もお菊も母の方へ行つた。家内は一人づゝ寢衣に着更へさせた。下女はまた、人形でも抱くやうにして、柔輭なお繁の頬へ自分の紅い頬を押宛てゝ居た。

やがて三人の子供は枕を並べて眠つた。急に家の内はシンカンとして來た。家内などは、子供の眠つて居る間が僅かに極樂だと言ひ〳〵して居る。

「一號、二號、三號……」

斯の自分から言出した串談には、私は笑へなくなつた。三人の子供ですら斯の通り私の家では持餘して居る。今から斯樣に生れて、このうへ出來たら、奈何しやう、と思つた。私の母は八人子供を產んで居る。家内の方にはまた兄妹が十人あつた。その總領の姉は今五人子持で、次の姉は六人子持だ。何方を向いても、子供の多い系統から來て居る。

翌日、私は學校の方へ形式ばかりの辭表を出した。其日から私の家ではそろ〳〵引越の仕度に取掛つた。よく大久保の噂が出た。雨でも降れば壁が乾くまいかとか、天氣に成れば何程工事が進んだらうとか、毎日言ひ合つた。私達の心の內には、新規に家の形が出來て、それが日に〳〵住まはれるやうに成つて行くやうな氣がした。

二週間ばかり經つたところで、大久保の植木屋から手紙を受取つた。見ると、月の末まで待たなければならなかつた。斯うなると一度纏めた道具のうちを復た解く必要がある位で、ある荷物は會社に依頼して先へ送り出した。私は、本町の角にある茶店から、大きな茶箱を二つ求めて來て、書籍のたぐひはそれに詰めた。簞笥でも、本箱でも、空虛にして送らなければ壞れて了ふと言はれた。

斯の混雜の中で、幾度か町の人は私を引留めに來た。『夜逃げにでも逃げやうかしらん。』どうかすると私は家のものに向つて、譃語半分に斯樣なことを言ふこともあつた。あまりに長く世話に成り過ぎた、と私は思つた。いざ斯の土地を見捨てゝ行くとなると、私達の生涯は深く根が生えたやうに成つて居た。とはいへ、町の人は私の願を容れて呉れた。そして餞別を集めたり、いろ〳〵世話をしたりして呉れた。日頃親しくして、『叔父さん』とか『叔母さん』とか互に言ひ合つた近所の人達は、かはる〴〵訪ねて來た。

いよ〳〵出發の日が近づいた。三人の子供には何を着せて行かう、と斯う家內はいろ〳〵に氣を揉んだ。

『房ちやん、いらツしやい、衣服を着て見ませう――溫順しくしないと、東京へ連れて行きませんよ。』

と家內が言つて、寫眞を撮した時に一度着せたヨソイキの着物を取出した。それは袖口を括つて、お房

の好きなリボンで結んである。お菊のためには、黃八丈の着物を擇ぶことにした。

「菊ちやんの方は色が白いから、何を着ても似合ふ。」

斯う皆なが言ひ合つた。

五月の朔日は幸に天氣も好く、旅をするものに取つて何よりの日和だつた。子供は近所の娘達に連れられて、先づ停車場を指して出掛けた。學校の小使が別れに來たから、この人には使用つて居た鍬を置いて行くことにした。私は毎日通ひ慣れた道を相生町の方へとつて、道普請の爲に高く土を盛上げた停車場前まで行くと、そこで日頃懇意にした多勢の町の人達だの、學校の同僚だの、生徒だのに出逢つた。そこまで追つて來て餞別のしるしと言つて、物を呉れる菓子屋、豆腐屋のかみさんなどもあつた。同僚に親にしてもいゝやうな年配の理學士があつたが、この人は花の束にしたのを持つて來て、私達の乘つた汽車の窓へ入れて呉れた。其日は牧野君も洋服姿でやつて來て、それとなく見送つて呉れた。

「困る。困る。」

斯う言つて、お菊は泣出しさうに成つた。斯の兒は始めて汽車に乘つたので、急にそこいらの物が動き出した時は、私へしがみ付いた。

やがて、ウネ〳〵と續いた草屋根、土壁、柿の梢、石垣の多い桑畠などは汽車の窓から消えた。小諸は最早見えなかつた。

斯の旅には、私は山から種々なものを運ばうとする人であつた。信州で生れた三人の子供は言ふまで

もなく、世帶の道具、衣類、それから毎日の暮し方まで、私は地方の生活をソックリ都會の方へ移して持つて行かうとした。楊、楓、漆、樺、楢、蘆などの生ひ茂る千曲川一帶の沿岸の風俗、人情、そこで呼吸する山氣、眼に映る日光の色まで——すべて、さういふもの丶記憶を私は自分と一緒に山から運んで行かうとした。

汽車が上州の平野へ下りた頃、私は窓から首を出して、もう一度山の方を見やうとした。淺間の煙は雲の影に成つてよく見えなかつた。

高崎で乘換えてから、客が多かつた。私などは立つて居なければならない位で、子持がそこへ坐つて了へば、子供の方は一人しか腰掛ける場處がなかつた。お房とお菊は、かはりばんこに腰掛けた。お繁はまだ母に抱かれたまゝ泣出して、乳をあてがはれても、搖られても、どうしても泣止まなかつた。何故斯様に泣くんだらう、と家內はもう持餘して了つた。仕方なしに、お繁を負つて、窓の側で立つたり坐つたりした。

四時頃に、私達五人は新宿の停車場へ着いた。例の仕事が出來上るまでは、質素にして暮さなければならないと言ふので、下女も連れなかつた。お房やお菊は元氣で、私達に連れられて大久保の方へ歩いたが、お繁の方は酷く旅に萎れた樣子で、母の背中に頭を持たせ掛けたまゝ、氣拔けのしたやうな眼付をして居た。

時々家內は立止つて、郊外のありさまを眺めながら、

「繁ちやん、御覧。」

と背中に居る子供に言つて聞かせた。お繁は何を見やうともしなかつた。

私達親子のものが移らうとした新しい巣は、着いて見ると、漸く工事を終つたばかりで、まだ大工が一人二人入つて、そこゝを補つて居るところであつた。植木屋の亭主は早速私を迎へて、澤山盆栽などの置並べてある庭の内で、思ひの外壁の乾きが遅かつたことなぞを言つた。庭に出て水を汲んで居た娘は、家内や子供に會釋しながら、盆栽棚の間を通り過ぎた。めづらしさうに私達の様子を眺める人もあつた。斯の廣い、掃除の届いた庭の内には、植木屋の母屋をはじめ、まだ外に借屋建の家が二軒もあつて、それが私達の住まはうとする家と、樹木を隔てゝ相對して居た。兎に角、私は植木屋の住居を一間だけ借りて、そこで二三日の間待つことにした。

「房ちやんも、菊ちやんも、花を采るんぢやないよ――叔父さんに叱られるよ。」

と私は二人の子供に言ひ聞かせた。

日の暮れる頃、會社から來た一臺の荷馬車が植木屋の門前で停つた。私達は先に送つた荷物と一緒に大久保へ着いたことに成つた。斯の混雑の中で、お繁は肩掛に包まれたまゝ、取散らした手荷物などの中に寢かされて居た。稀にアヤされても、笑ひもしなかつた。其晩は、遅くなつて、一同夕飯にありついた。

翌日は、荷物の取片付に掛かるやら、尋ねて來る客があるやらで、ゴタ〳〵した。お繁は疲れて、眠り

勝てあつたが、どうかすると力のない眼付をしながら、小さな胸を突出すやうな眞似をして見せる。斯の兒はまだ「うま、うま」位しか言へない。抱かれたくて、彼樣な眞似をするのだらう、と私達は解釋した。て、成るべく顔を見せないやうにした。温順しく寢て居るのを好い事にして、いくらか熱のあつたのも氣に留めなかつた。思ふやうに子供を看ることも出來なかつたのである。

大久保へ來て三日目に、私は先づ新しい住居へ移つて、四日目には家のものを移らせた。新築した家屋のにほひは、不健康な壁の濕氣に混つて、何となく氣を沈着かせなかつた。壁はまだ乾かず、戸棚へは物も入れずにある。唐紙は取除したまゝ。種々なことを山の上から想像して來た家内には、斯の住居はあまりに狹かつた。

「家賃を考へて御覧な。」

と私は笑つた。

歩調を揃えた靴の音が起つた。カアキイ色の服を着けた新兵はゾロ〳〵窓の側を通つた。金目垣一つ隔てた外は直ぐ往來て、暗い土塵が家の内までも入つて來た。

お房は物に臆しない方の娘て、誰とでも遊んだから、斯の住居へ移つた頃には最早近所の娘の中に交つて居た。そして、小諸訛の手毬歌などを歌つて聞かせた。短い着物に細帯ではをかしいほど背丈の延びた學校通ひの姉さん達を始め、五つ六つ位の年頃の娘が、夕方に成ると、多勢家の周圍へ集つた。お菊はなか〳〵用心深くて、庭の樹の下なぞに獨りて遊んで居る方て、容易に他の子供と馴染まうともし

なかつた。

『房ちやん、大手のお湯へ行きませう。』

斯うお菊は母に連れられて入浴に出掛ける時に言つた。斯の娘は小諸の湯屋へ行くつもりで居た。

漸く家の内がすこし片付いて、これから仕事も出來ると思ふ頃、末の兒は意外な發熱の狀態に陷入つた。新開地のことて、近くには小兒科の醫者も無かつた。村醫者があると聞いて、來て診て貰つたが、子供を扱ひつけたことが無いと見えて、兎角ハツキリしたことも言つて異れなかつた。斯の醫者を信ずる信じないて、家ては論が起つた。生憎また母の乳は薄くなつた。私は町へ出て、コンデンス、ミルクを賣る店を探したが、それすらも見當らなかつた。

其晩は牛込に住む友達の家に會があつた。私は途中でミルクを買ひしな斯の友達にも逢つて、小兒科醫の心あたりを聞いて見る積りてあつた。村醫者は二度も三度も診に來た。最早駄目かしらん、斯様な氣が起つて來た。

『最後の晩餐！』

と、不圖、私は坂の途中て、鷹印のミルク罐を買ひながら思つた。牛込の家ては、種々な知人が集つて居た。そこて戰地から歸つて來た友達にも逢つた。君は、私がまだ信州に居た頃、從軍記者として出掛けたのてあつた。

『電話て一つ聞き合はせてあげませう。皆川といふ醫學士が大學の方に居ますが、この人は小兒科專門

ですから。」

斯う主人は氣の毒がつて言つて呉れた。

丁度戸山には赤十字社の假病院が設けてある時だつた。皆川醫學士が、臨時の手傳ひとして通つて居ると言つて、戸山からわざ〳〵私の家へ見舞に寄つて呉れた頃は、お繁は最早床の上に冷たく成つて居た。

東京の郊外へ着く早々、私達は林の中にでも住むやうな便りなさを感じた。同時に、小諸でよく子供の面倒を見て呉れた近所のシッカリした『叔母さん』達を戀しく思つた。あのお繁が胸を突出すやうな眞似をして見せたのは、漸く私達にその意味が解つた。口のきけない子供は、死んでから、苦痛を訴へ始めた。

今更仕方がなかつた。そして口說いてなぞ居る場合では無い、と私は思つた。幼兒のことだから、埋葬の準備も成るべく省くことにして、醫者の診斷書を貰ふことだの、警察や村役場へ屆けることだの、近くにある寺の墓地を買ふことだの、大抵のことは自分で仕末しやうとした。棺も、葬儀社の手にかけなかつた。小諸から書籍を詰めて來た茶箱を削つて貰つて、小さな棺に造らせて、その中へお繁の亡骸を納めた。

「房ちやん、來て御覽なさい――繁ちやんは死んぢやつたんですよ。」

斯う家内が言つた。

「菊ちやん、いらッしやい。」
とお房は妹を手招きして呼んで、やがて棺の中に眠るやうなお繁の死顔を覗きに行つた。急に二人の子供は噴飯した。
「死んぢやつたのよ、死んぢやつたのよ。」
とお菊は譯も分らずに母の口眞似をして、棺の周圍を笑ひ乍ら踊つて歩いた。
「馬鹿だねえ…御覧なさいな、繁ちやんは最早ノヽサンに成つたんぢやありませんか…」
と復た母に言はれて、お房は不思議さうに、泣腫らして居る母の顔を覗き込んだ。丁度そこへ、家内の妹も學校の方からやつて來たが、この有樣を見ると、直に泣出した。終にはお房も悲しく成つたと見えて、母や叔母と一緒に成つて泣いた。
　蠟燭の火が赤く點つた。
「兎の巾着ても入れてやりナ。」
と私が言つたので、家内や妹は棺の周圍へ集つて、毛絲の巾着の外に、帽子、玩具、それから五月の花のたぐひで、死んだ子供の骸を飾つた。
　墓地は大久保の長光寺と言つて、鐵道の線路に近いところにあつた。日が暮れてから、植木屋の亭主に手傳つて貰つて、私は斯の大屋さんと二人で棺を提げて行つた。同じ庭の内の借家に住む二人の『叔父さん』、それから向の農家の人なぞは、提灯を持つて見送つて呉れた。斯の粗末な葬式を濟ました後で、

親戚や友達に知らせた。

斯うして私の家には小さな新しい位牌が一つ出來た。そのかはり、お繁の死は、私達の生活の重荷をいくらか輕くさせた形であつた。まだお房も居るし、お菊も居る――二人もあれば、子供は澤山だ、と私は思つた。

どうかすると私は串戲半分に、家のものに向つて、

「お繁が死んで呉れて、大に難有かつた。」

斯様なことを言ふこともあつた。私は、唯、自分の仕事を完成することにのみ心を砕いて居た。

「子供なぞは奈何でも可い。」

多忙しい時には、斯様な氣も起つた。何を犠牲にしても、私は行けるところまで行つて見やうと考へたのである。

郊外には、舊い大久保のまだ澤山殘つて居る頃であつた。仕事に疲れると、よく私は家を飛出して、そこいらへ氣息を吐きに行つた。大久保全村が私には大きな花園のやうな思をさせた。激しい氣候を相手にする山の上の農夫に比べると、斯の空の明るい、土地の平坦な、柔い雨の降るところで働くことの出來る人々は、ある一種の園丁のやうに私の眼に映つた。角筈に住む水彩畫家の風景畫に私は到る處で出逢つた。

「房ちやん、いらッしやい――懐古園へ花取りに行きませう。」

と、ある日、お菊は姉のお房を呼んで、二人して私の行く方へ随いて來た。

私は子供を連れて、ある細道を養鶏所の裏手の方へ取つて、道々草花などを摘んで呉れながら歩いた。お房の方は手に一ぱい草をためて『隨分だわ』だの『花ちやん、よくッてよ』だのと、そこに居りもしない娘の名を呼んで見て、しきりに會話の稽古をしたり、あるひはお菊と一緒に成つて好きな手毬歌などを歌ひ乍ら歩いて行つた。

行つても、行つても、お菊の思ふやうな小諸の古い城跡へは出なかつた。桑畠のかはりには、植木苗の畠がある。黑ずんだ松林のかはりには、明るい雜木の林がある。そのうちに、木と木の間が光つて、高い青空は夕映の色に耀き始めた。

急にお菊は勝手の違つたやうに、四邊を眺め廻した。そして子供らしい恐怖に打たれて、なんでも家の方へ歸らうと言出した。

「母ちやん……母ちやん……」

お菊は、大久保の通りへ出るまでは、安心しなかつた。

「菊ちやん、お遊びなさいな。」

斯う往來に遊んで居た娘がお菊を見つけて呼んだ。お房の友達もその邊に多勢集つて居た。

夕餐の煙は古い屋根や新しい板屋根から立ち登つた。鍬を肩に掛けた農夫の群は、丁度一日の勞働を終つて、私達の側を通り過ぎた。それを眺めて、私は額に汗する人々の生活を思ひやつた。復た私は長

い根氣仕事を續ける氣に成つた。

熱いうちにも寂しい感じのする百日紅の花が咲く頃と成つた。やがて、亡くなつた子供の新盆、小諸の方ではまた祇園の祭の來る時節である。冷しい草屋根の下に住んだ時とは違つて、板屋根は日に近い。壁は乾くと同時に白く黴が來た。引越以來の混雜にまぎれて、解物も、洗濯物も皆な後れて了つたと言つて、家内は緣側の外へ張物板を持出したが、狹い廂の下に日蔭といふものが無かつた。

庭の隅には枝の細長い木犀の樹があつた。まばらな蔭は僅かにそこに落ちて居た。軒からその軒へ簾を渡して、熱い土のいきれの中で、家内は張物をしたり、洗濯したりした。

「あれ黑がいけません。」

斯う言ひながら、お菊は穢い宿無しの犬に追はれて來た。

「菊ちやん、早く逃げていらッしやい……なんだつて其樣な大きな下駄を穿くんですねえ。」

と言つて、家内は腰を延ばした。そして苦しさうな息づかひをした。高く前掛をしめては居たが、最早醜く成りかけた身體の形は隱されずにある。

お房の泣く聲が聞えた。家内は取縋る妹の方をそこへ押除けるやうにした。「あ、房ちやんが復た溝へ陷落ちた。」と言つて、顏を澁めて居ると、お房は近所の娘に連れられながら、着物を泥だらけにして泣いてやつて來た。

「どうして左樣毎日〱衣服を汚すんだらう。」

と家内が言つたので、お房はもう身を竦めるやうにして、無理やりに緣側の方へ連れて行かれた。

『母さん、御免……』

斯うお房は拜むやうに言つた。家内は又、この娘を懲らさないうちは置かなかつた。

『房ちやん、奈何なさいました。』

と、お房の泣聲を聞きつけて、そこへ井戸を隔てゝ住む『叔母さん』が提げにやつて來た。この人はこゝから麹町の小學校へ通ふ女教師である。最早中學へ行くほどの子息がある。

『衣服を泥になんか成すつちやいけませんよ。これから母さんの言ふことをよく聞くんですよ。』

と裏の『叔母さん』は、沈着いた、深切な調子て、生徒に物を言ひ含めるやうに言つた。お房は洗濯した單衣に着更へさせて貰つて、やがて復たぷいと駈出して行つた。

『母さん、何か……母さん、何か……』

とお菊はネダリ始めた。何か貰はないうちは母の側を離れなかつた。

『泣かなくても、進げますよ。』と家内は叱るやうに言つた。『お煎餅ですよ。』

『お煎餅、嫌――アンコが好い。』

『アンコなんか不可ません。あんまり食べたがるもんだから、それて蟲が出るんですよ――嫌ならお止しなさい。』

と母に言はれて、お菊は不承々々に煎餅を分けて貰つた。

其晩は早く夕飯を濟ましました。藪蚊の群が佗しい音をさせて襲つて來る頃で、緣側には蚊遣を燻らせた。蛙の鳴く聲も聞えた。家内は、遊び疲れた子供の爲に、蚊帳を釣らうとして居たが、

「父さん、奈何したんでせう……まあ、をかしなことが有る……」

斯う言ひながら、ボンヤリ釣洋燈の側に立つた。

「私は物が見えなくなりました……」

と復た家内が言つて、洋燈の灯に自分の手を照らして見て居た。

「オイ、オイ、馬鹿なことを言つちや困るぜ。」私は眞實にもしなかつた。

「いゝえ、串談ぢや有りませんよ、眞實に見えないんですよ……洋燈の側なら何でも能く分りますが、すこし離れると最早何にも分りません……」

「俺の顏は？」

私は笑はずに居られなかつた。

其時、家内は手探り／＼暗い押入の方へ歩いて行つた。しばらく私もそこに立つて、家内の樣子を眺めて居た。

「早く醫者に診て貰ふサ。」

と私は勵ますやうに言つて見た。

翌日になると、明るい光線の中では別に何ともないと言つて、家内は駿河臺の眼醫者のところまで診

て貰ひに行つた。滋養物を取らなければ不可(いけない)――働き過ぎては不可(いけない)――眼を休ませるやうにしなければ不可(いけない)――種々(いろいろ)に言はれて來た。

「一つは粗食した結果だ。」

斯の考へが私の胸に浮んだ。私は、信州にある友達の厚意を思つて、成るべく斯の仕事をする間は、質素に、質素に、と心掛けたが、それを通り越して苛酷であつた、とは其時まで自分でも氣が着(つ)かなかつた。

日の暮れないうちに、と家内は二人の娘を連れて買物に出掛けた。

其日は、私も疲れて、一日仕事を休むことにした。緣側に出て、庭の木犀に映(あた)る日を眺めて居ると、植木屋の裏の畠の方から、寂しい蛙の鳴聲が夢のやうに聞えて來る。祇園の祭も近づいた、と私は思つた。軒並に靑簾を掛け連ねた小諸本町の通りが私の眼前にあるやうな氣がして來た。その邊は私の子供がよく遊び歩いたところだ。

「ヨイヨ、ヨイヨ。」

御輿を舁(かつ)いで通る人々の歡呼は私の耳の底に聞えて來た。何時の間にか私の心は山の上の方へ歸つて行つた。

宿無し犬の黑は私の前を通り過ぎた。斯の犬は醜くて、誰も飼手(かひて)が無い。家の床下からノソノソ這出(はひだ)して、やがて木犀の蔭に寢た。

そのうちに、暮れかゝつて來た。あまり子供等の歸りが遲いと思つて、私は門の外へ出て見た。丁度二人の娘は母の手を引きながら、鬼王神社の方から歸つて來るところであつた。

「父さん。」とお房が呼んだ。お菊も一緒に成つて呼んだ。

「遲かつたネ。」と私は言つて見た。

「今しがたまで、繁ちやんのお墓でさん〴〵泣いて來たんですよ。」斯う家内はそこへ立留つて言つた。「歸りに八百屋へ寄つて、買物をして居ましたら、急にそこいらが見えなく成つて來て……房ちやんや菊ちやんを連れて居なからうものなら、眞實に私は奈何しやうかと……」

「最早見えないのかい。」

「街燈の火ばかし見えるんですよ……あとは眞暗なんです。」

「さあ、房ちやんも、菊ちやんも、お家へお入り。」

暮色が匍ふやうにやつて來た。私達は子供を連れて、急いで門の内へ入つた。

斯ういふ私の家の光景は酷く植木屋の人達を驚かした。斯の家族を始め、舊くから大久保に住む農夫の間には、富士講の信者といふものが多かつた。翌日のこと、切下髮にした女が突然私の家へやつて來た。斯の女は、講中の先達とかで、植木屋の老爺さんの弟の連合にあたる人だが、斯う私の家に不幸の起るのは――第一引越して來た方角が惡かつたこと、それから私の家内の信心に乏しいことなぞを言つて、しきりに祈禱を勸めて歸つて行つた。

「御祈禱して御貰ひ成すつたら奈何です——必と方角でも惡かつたんでせうよ。」

と植木屋の老婆さんは勝手口のところへ來て言つた。義理としても家內は斷る譯にいかなかつた。

其日から家內は一人ヅヽ子供を連れて駿河臺まで通つた。暑い日ざかりを歸つて來て、それから晝飯の仕度に掛かつた。信州の牧野君からは手紙の着くのを待つ頃であつた。それを手にして見ると、自分の子供の泣聲を聞いて急に手紙を書く氣に成つた——約束のものを送る、としてあつた。私は斯の友達の志に勵まされて、あらゆる落膽と戰ふ氣に成つた。家內には新宿の停車場前から鷄肉だの雜物だのを買つて來て食はせた。この俗にいふ鳥目が舊の通り見えるやうに成る迄には、それから二月ばかり掛かつた。

翌年の三月には、界隈はもう驚くなど開けて居た。斯の郊外へ移つて來て、近くに住む二人の友達もあつた。私の家では、四番目の子供も產れて居た。はじめての男で、種夫とつけた。姪も一人鄉里から出て來て、家からある學校へ通つて居た。斯の月に入つて、漸く私は自分の仕事を終つた。

私も勞作した。斯の仕事には、殆んど二年を費した。牧野君からは、早速便りがあつて、一緒に心配した甲斐が有つたと言つて、自分のことのやうに悅んで呉れた。骨休めに、遊びに來い、斯うも言つて寄した。私も何處か靜かなところで斯の疲勞に耽りたい、と思つた。世帶持のかなしさには、容易に家を飛出すことも出來なかつたのである。急に私の家では客が增えた。訪ねて來る友達も多かつた。

「母さん、犬殺しよ。」

斯うお菊は母の傍へ來て言つた。近所の『叔父さん』達が總掛りで何故庭の內を馳け廻るか、彼方是方から飛んで來た犬が何故吠え立てるか、それを知らせに來るほどお菊も物が解つて來た。

お房やお菊ははにはかに大きくなつた。姉は最早前髮をとつて吳れと言ふやうに成つたし、妹は前の年まで歌へなかつた唱歌を最早自由に歌へるやうに成つた。しかし、黑の發達とは比較に成らない。黑が近所へ捨てられた時分は、痩せた、ひよろ長い小犬であつたが、一年經つか經たないに、最早一ッぱしの女犬だ——乳房は長く垂下つて居た。

黑も逃げおほせた。犬殺しが手を振つて、空車を引いて行つた翌々日あたりから、復た私の家の床下では、每晚斯の犬のゴッ〳〵寢に來る音を聞くやうに成つた。

私の仕事が世に出る頃、種夫は新宿の醫者に掛かつた。斯の大久保で生れた兒は兎角弱かつた。ある日、家內が種夫を負つて、藥を貰ひに出掛けやうとすると、それをお菊が、見送ると言ひ乍ら、植木屋の橫手にある小徑を通つて、畠の方までも隨いて行つた。

『彼處まで、送ッてつて上げませう。』

とお菊は向に光る新しい家屋を指して見せて、やがて母と一緒に畠の盡きたところへ出た。新開地らしい道路がそこにあつた。

『菊ちやん、こゝから獨りで歸れるの?』

と母が立留つて言つた。

お菊は獨りて歸れると言つて、桐の若木がところ〳〵に立つて居る畠の間を歸りかけた。

「母さん。」

斯うお菊は振向いて呼んだ。そして、母と顏を見合せて微笑んだ。

母は乳呑兒を負つたまゝ佇立んで居た。お菊は復た麥だの薩摩芋だのゝ作つてある平坦な耕地の間を歸つたが、二度も三度も振向いて見た。

「母さん。」

斯の呼聲が通じなくなつた頃、お菊はサッサと家の方へ戻つて來た。

翌日も復たお菊が同じやうに後を追つて行くので、家内も可愛さうに思つて、其日は一緒に連れて行つた。種夫の爲に新宿の通りて吸入器を買つて、それを家内が提げて歸つたが、丁度菓物の變りめに成る頃て、醫者の細君のところからは夏蜜柑を二つばかりお菊に呉れてよこした。

私の家ては、飯を出す客などがあつて、混雜した日のことてあつた。夕方に、お菊は惡い顏をして、遊び友達の方から歸つて來た。そして、乳呑兒の襁褓を溫める爲に置いてあつた行火に凭れて、窓の下のところて橫に成つた。

「菊ちやんはどこか惡いんぢやないか。」

斯う私は客を前に置いて、家のものに訪ねて見た。お菊はお腹が痛い〳〵と言ひつゝ遊びに紛れて居たとのことて、家のものもそれほどには思はなかつたのてある。姪は熊の膽を盃に溶かしてお菊に飲ま

せたりなぞした。

急に熱が出て來た。子供の持藥だの、近所の醫者に診せた位では、覺束ないといふことを私達が思ふ時分は、最早隣近所では寢沈まつて居た。お菊は吐いたり下したりした。それが沈着いて、すこしウト〳〵したかと思ふと、今度はまた激しい渇の爲に、枕元にある金盥の水までも飲まうとした。私は空の白むのを待兼ねて、病兒を家内に託して置いて、車で皆川醫學士を迎へに行つた。まだ夜は明けなかつた。町々の疲れた燈火は暗く赤く私の眼に映つた。

「菊ちやん、御醫者樣が入來ッしやるよ。」と私が子供の枕元へ歸つて來て呼んだ時は、お菊もまだ氣がタシカだつた。お繁の時のことも有るから、醫學士も氣の毒がつて、早速來て呉れた。

家内は蔭の方で、

「貴方がたが入來ッしやる鳥渡前に、房ちやんが肩掛を冠つて踊つて見せたんですよ。其時菊ちやんも可笑しがつて笑つて――「可笑しな房ちやん！」なんて。まだ其樣に正氣だッたんですよ……「お水！お水！」ッて困りました……「御醫者樣が入來ッしやるとお水を下さる、」そんなことを言つて欺しましたら、漸くそれて溫順しく成つたところなんですよ……」

お菊は大きな眼を開いて醫學士の方を見たが、やがて泣出しさうに成つた。

「菊ちやん、御醫者樣に診て頂くんですよ……ね、お水を頂くんでせう……さうすると直に癒りますよ。」

と母に言はれて、お菊は漸く學士の方へ小さな手を出した。

少壯ではあるが、篤實な、そしていかにも沈着いた學士の態度は、私達に信頼する心を起させた。學士は子供の膓を洗つてやりたいと言つたが、不便な郊外のことて、近くに洗滌器を貸すところも無かつた。家内は二三の醫者の家を走り廻つて、空しく歸つて來た。

「一つ注射して見ませう。」

斯う學士が、病兒の顏を眺めながら、言出した。

家内はお菊の胸の邊を展げた。白い、柔かい、そして子供らしい肌膚が私達の眼にあつた。學士は洋服の筒袖を捲し上げて、決心したやうな態度て、注射の針に藥を滿たした。

「痛いッ。」

お菊は泣き叫んだ。鋭い注射の針は二度も三度も射された。

間もなく私は斯の病兒を抱いて、車て大學病院へ向つた。學士も車て一緒に行つて吳れた。途次、小兒科醫の家の前を通る度に、學士は車を停めて、更に注射を加へて行かうかと考へて、到頭それも試みずに小兒科へ着いた。車の上てお菊の蒼ざめた顏を眺めて行つた時に、斯の兒は最早駄目だ、と私は思つた。

病名は消化不良といふことてあつた。斯の急激な身體の變化は多分夏蜜柑の中毒てあらうと言はれた。私達の後を追つて、大久保に住む一人の友達も、家のものも急いて來た。一刻一刻にお菊は變つて行つ

た。それから二時間しか斯の兒は生きて居なかつた。

大久保の家では留守居して吳れた人達が樣子を案じ顏に待つて居た。私はお菊の死體を抱きながら車から下りた。最早呼んでも返事をしない子供に取縋つて、家内や姪は泣いた。お房も、お繁の亡くなつた時とは違つて、姉さんらしい顏を泣腫らして居たが、其姿が私にはあはれに思はれた。

お菊は矢張長光寺に葬つた。親戚や知人を集めて、斯の娘の爲には粗末ながら儀式めいたことをした。狹い墓地には二人の子供が斯樣な風に並んだ。

菊　子　の　墓

繁　子　の　墓

愛して居た娘のことて、家内はよくお房を連れては斯の墓へ通つた。

私の家に復た斯樣な不幸が起つたといふことは、いよ〳〵祈禱の必要を富士講の連中に思はせた。女の先達は復た私の家へ訪ねて來て、それ見たかと言はぬばかりの口調て、散々家内の不心得を責めた。

『度し難い家族』――これが先達の後へ殘して行つた意味だつた。

お菊が生前の遊び友達は、小さな下駄の音をさせて、朝に晩に家の前を通つた。家内は窓の格子にとりついて、さういふ子供の姿を眺める度に、お菊のことを思出して居た。

『菊ちやんが死んぢやつたんては、眞實にツマラない。』

斯う家内は口癖のやうに嘆息した。

私も、散々仕事で疲れた揚句で、急にお菊が居なくなつた家の内に坐つて見た時は、暴風にても波はれて持つて行かれたやうな氣がした。山を下りてから、私には安い思をしたといふ日も少なかつた。私の生命は根から動搖られ通しだ。

「ナニ、まだお房が居る。」

と私は言つて見た。

痲疹後、兎角お房は元氣が無かつた。亡くなつた私の母親を思出させるやうな斯の娘は、髮の毛の濃く多いところまでも似て來た。信州の牧野君からは子守を一人心配してよこして呉れた頃で、いくらか私の家でも沈着き、手も增えた。二人まで子供を失くしたことを考へて、私達は斯の殘つた娘を大切に見なければ成らないと思つた。上野に玩具の展覽會があつた日には、お房も皆なに連れられて出掛けたが、何を見てもさう面白がりもしないし、象や猿の居る動物園へ寄つても『早く吾家へ歸りませう』とばかりて、新宿の電車の終點から大久保まで疲れたやうな顏をして步いて歸つて來た。

草木も初夏の熱のために蒸される頃と成つた。庭には木犀の若葉もかゞやいたし、植木屋の盆栽棚には種々な花も咲いたし、裏の畠の方には村の人達が茶を摘んで居たし、何處へ行つても子供に取つては樂しい時であつた。お房は一寸遊びに出たかと思ふと、直に歸つて來てゴロ〳〵して居た。お繁やお菊て、私達も懲りたから、早速、新宿の醫者に見せた。牛込の醫者にも見せた。早く藥を服ませて、癒したいと思つて、醫者の言ふ通りに、消化の好い物だの、牛乳だの、山家育ちて牛乳が嫌だと言へばミルク、

フッドだの、と種々にしていたはつた。お房は腸が惡いとのことであつた。不思議な熱は出たり引いたりした。

五月の下旬に入つても、まだお房は藥を服んで居た。勸めて呉れる人があつて、私はある醫者の許へ斯の娘を見せに連れて行つた。其時は、大久保に住む一人の友達とも一緒だつた。强健さうな年寄の醫者は、熱のために萎れた娘を前に置いて、根本から私達の衛生思想が間違つて居ることを説いた。他の醫者が腸の惡い子供に禁物だといふやうなものでも、すべて好いとした。牛乳のかはりに味噌汁、粥のかはりに餅、ソップのかはりに澤庵の香の物……それから、斯の慷慨な老人は、私達が日本固有の菜食を重んじない爲に、それで子共が斯う弱くなると言つて、今日の醫學、今日の衛生法、今日の子供の育て方を嘲つた。私は娘を連れて、スゴ／＼醫者の前を引下つた。煎じ藥を四日分ばかりと、菜食の歌を貰つて、大久保へ歸つた。

何となくお房の身體には異狀が起つて來た。種々な醫者に見せ、種々な藥を服ませたが、どうしても熱は除れなかつた。時とすると、お房の身體は燃えるやうに熱かつた。て、私も決心して、復た皆川醫學士の手を煩はしたいと思つた。月の末に、學士の勸めに隨つて、私はお房を大學の小兒科へ入院させることにした。

「母さん、前髪を束つて頂戴な。」

熱のある身體にも斯樣なことを願つて、お房は母に連れられて行つた。私も、姪に留守居させて、別

に電車で病院の方へ行つて見た。

病室は靜かな岡の上にあつた。そこは、三つばかりある高い玻璃窓の一つを通して、不忍の池の方を望むやうな位置にある。私は本郷の通りでお房の好きさうなリボンを買つて、それを土産に持つて行つたが、室へ入つて見ると、お房は最早高い寢臺の上に横に成つて、母に編物をして貰つて居るところであつた。丁度池の端には競馬のある日で、時々多勢の人の騷ぐ聲が窓の玻璃に響いて來た。

お房の枕許には、小さな人形だの、箱だのが、藥の瓶と一緒に並べてあつた。家内は、寢臺の柱にリボンを懸けて見せて、病んで居る子供を樂ませやうとした。

『仕舞つて置くのよ。』

とお房は言つた。

私達は、部屋付の看護婦の外に、附添の女を一人頼むことにした。斯の女は私達の腰掛けて居る傍へ來て、皆川先生の盡力でゞもなければ、一人で斯ういふ角の室を占めることは出來ない、これは餘程の優待である、と話して聞かせた。

肩の隆つた白い服を着て、左の胸に丸い徽章を着けた、若い、肥つた看護婦が、室の戸を開けて入つて來た。斯の部屋付の看護婦は、白いクロオバアの花束を庭から作つて來て、それをお房に呉れた。

『房子さん、好いリボンを頂きましたねえ――御土産ですか。』と看護婦が言つた。

『仕舞つて置くのよ、仕舞つて置くのよ。』

斯うお房は繰返して居たが、やがて看護婦から貰つた花束を握つたまゝ眠つて了つた。
夕方に私は皆川醫學士に逢つた。お房の病狀を尋ねると、今すこし容子を見た上でなければ、確めかねるとのことであつた。其晩から、私達はかはる〴〵子供の傍に居た。
「父さん……父さん……父さんの馬鹿……」
斯う呼ぶ聲が私の耳に入つた。私は、奈何なつて行くか分らないやうな子供の傍に、疲れた自分を見出した。それは病院へ來てから三日目の夜で、宿直の人達も寢沈まつたかと思はれる頃であつた。
「父さん、房ちやんは最早駄目よ。」
熱の譫語とも聞えなかつた。と言つて、子供の口から斯樣な言葉が出やうとも思はれなかつた。私は夢を辿る氣がした。
「父さん、房ちやんは……ねえ……」
その後が聞きたいと思つて居ると、バッタリお房の聲は絶えた。其晩は私も碌に眠らなかつた。
次第にお房はワルく成るやうに見えた。山で生れて、根が弱い體質の子供で無いから、病に抵抗するだけの力はある筈だ、とそれを私達は頼みにした。どうかして斯の娘ばかりは助けたく思つたのである。入院して丁度一週間目に成る頃は、私も家のものも子供の傍に附いて居た。大久保の方は人に頼んだり、親戚のものに來て泊つて貰つたりした。幾晩かの睡眠不足で、皆な疲れた。附添の女と私達とは、三人かはる〳〵起きて、夜の廊下を通つて、看護婦室の先の方まで氷塊を砕きに行つては歸つて來て、お房

の頭を冷した。そして、交代に眠つた。疲勞と心配とで、私も寢臺の後の方に倒れたかと思ふと、直に復た眼が覺めた。一晩中、お房は『母さん、母さん』と呼びつゞけた。

まだ夜は明けなかつた。私は手拭を探して、廊下へ顔を洗ひに出た。いくらか淸々した氣分に成つて、引返さうとすると、お房の聲は室を泄れて、廊下の外まで響き渡つて居た。

『母さん……母さん……母さん……』

烈しい呼聲は私の頭腦へ響けた。その焦々した聲を聞くと、私は自分まで一緒に奈何か成つて了ふやうな氣がした。

お房の枕頭には黒い布を掛けて、光を遮るやうにしてあつた。お房は半分夢中で、下口唇を突出すやうにして、苦しさうな息づかひをした。胸が痛み、頭が痛むと言つて、母に叩かせたが、もつと元氣に叩いて呉れなどゝ言つて、どうかすると掛けてあるショウルを撥飛した。

日の出が待遠しかつた。私は窓のところへ行つて見た。庭はまだ薄暗く、木立の下あたりは殊に暗かつたが、やがて靑白い光が朝の空に映り始めた。梢に風のあることが分つて來た。テニスの網も白く分つて來た。斯の靜かな庭の方へ、丁度私達の居る病室と並行に突出した建築物があつて、その石階の鐵の欄までも分つて來た。赤く寂しい電燈が向ふの病室の廊下にも見える。顔を洗ひに行く人も見える。お菊の亡くなる時に世話をして呉れた若い看護婦も通る。

『母さん……母さん……馬鹿、馬鹿……』

と復たお房が始めた。『母さん、あのねえ……』などゝ言ひかけるかと思ふと、消えて了ふ。

上野の鐘は不忍の池に響いて聞えた。朝だ。ホッと私達は溜息を吐いた。

小兒科のことて、隣の廣い室には多勢子供の患者が居た。そこには全治する見込の無いものでも、世話するとかて、死後は解剖されるといふ約束で來て居るものもあつた。晩に來て朝に歸る親達も多かつた。

斯の聲は私達の耳について了つた。どうかすると、それが歌ふやうに、低い、柔かな調子に成ることもあつた。

『母さん……母さん……母さんさん……母さん――ん――』

友達や親戚のものはかはる〴〵見舞に來て呉れた。午後に、私は皆川醫學士に呼ばれて、大きなテエブルの置いてある部屋へ行つた。他に人も居なかつた。學士は私と相對に腰掛けて、私に煙草をすゝめ自分でもそれを燻しながら、醫局のものは皆な私の子供のことを氣の毒に思ふと言つて、そのことは病院の日誌にも書き、又、出來得る限りの力を盡しつゝあることなぞを話して呉れた。

其時、學士は獨逸語の醫書を私の前に披いて、小兒の病理に關する一節を私に譯して聞かせた。お房の苦んで居る熱は、腸から來たものではなくて、腦膜炎であること――七歳の今日まで、お房はお房の生き得るかぎりを生きたものであること――斯ういふ宣告が懇切な學士の口唇から出た。私は、嚴肅な、切ない思に打たれた。そして、あの子供を救ふべきすべての望は絶えたことを知つた。

室へ戻つて見ると、お房は一時氣の狂つた少女のやうで、母親の鼻の穴へ指を突込み、顏を掴み、急に泣き出したりなぞして居た。

「房ちやん、見えるかい。」と私が言つて見た。

「あゝ――」とお房は返事をしたが、やがて急に力を入れて、幼い頭腦の内部が破壞し盡される迄は休めないやうに叫び出した。「母さん――母さん――母さんちやん‥‥ちやん‥‥ちやん‥‥ちやん‥‥」

斯の調子が可笑しくもあつたので、看護のもの一同が笑ふと、お房は自分でも可笑しく成つたと見えて、めづらしく笑つた。それから、ヒヨツトコの眞似なぞをして見せた。

寢臺の側に附添つて居た人々は、喜び、笑つた。お房も一緒に笑ふうちに、逆上せて來たと見えて、母親の鼻といはず、口といはず、目といはず、指を突込まうとした。枕も掻毟つた。人々は皆な可懼しく思つた。終には、お房は大聲に泣出した。

斯ういふ中へ、牛込の法學士から私の子供が入院したことを聞いたと言つて、訪ねて來て呉れた畫家があつた。君は浮世繪の方から出た人であつた。君の女の兒は幼稚園へ通ふ途中で、あやまつて電車のために引き殺されたといふことで、それを私に泣いて話した。斯の可傷しい子供の失ひ方をした畫家は、絶えず涙で、お房の苦しむ方を見て居た。

今はたゞ幼いものゝ死を待つばかりである。斯う私は二三の友達の許へ葉書を書いた。翌日はお房の呼ぶ聲も弱つて來て、「かあちやん、か――」とか、「馬鹿ちやん、馬――」とか、きれ〴〵に僅かに聞える

やうに成つた。家の方も案じられるので、私は皆川醫學士に子供のことを賴んで置いて、それから烏渡大久保へ歸つた。

放擲して置いた家の中はシンカンとして居た。裏に住む女教師なども病院の方の樣子を聞きに來た。寂しさうに留守をして居た姪は、留守中に訪ねて呉れた人達だの、種々な郊外の出來事だのを話して、ついでに、黑が植木屋の庭の裏手にある室の中で四匹ばかりの子供を產んだことを言出した。幾度饑え幾度殺されさうにしたか解らない斯の死に損ひの畜生にも、人が來て頭を撫てゝ、加に、食物までも宛行はれるやうな日が來た。

私は庭に出て、子供のことを考へて、ボンヤリと眺め入つた。樹木を隔てた植木屋の勝手口の方では、かみさんが障子を開けて、

「黑――來い、來い、來い。」

斯う呼ぶ聲が聞えた。

二晩ばかり、私は家の方に居た。その翌る晚も、知らせが有つたら直に病院へ出掛ける積りで、疲れて眠つて居ると、遲くなつて電報を受取つた。

「ミヤクハゲシ、スグコイ。」

とある。

九時半過ぎた。病院へ着く前に最早あの嚴重な門が閉されることを思つて、入ることが出來るだらう

かとは思つたが、不取敢出掛けた。追分まで車で急がせて、そこで私は電車に移つた。新宿の通りは稲荷祭のあるころで、提灯のあかりが電車の窓に映つたが、そのうちに雨の音がして來た。濡れて光る夜の町々の灯――白い灯――紅い灯――電線の上から落ちる青い電光の閃き――さういふものが窓の玻璃に映つたり消えたりした。寂しい雨の中を通る電車の音は餘計に私を疲れさせた。車の中で私は前後を知らずに居ることもあつた。時々眼を覺ますと、あのお房が一週間ばかり呼びつゞけに呼んだ焦々した聲が耳の底にあつた。

「母さん……母さん……」

私は自分の頭腦の中で彼の聲を聞くやうに成つた。同時に、病院へ行けば最早お房はイケナイか知らん、と思ひやつた。須田町で本郷行に乘換えた。萬世橋のところに立つ凱旋門は光つて見えたかと思ふと復た闇に隱れた。

暗い時計臺の下あたりには往來する人もなかつた。私は門の外から呼んで見た。其時、門番が起きて來て、私の名を呼んで、それから嚴しい門を開けて與れた。

「どうして私のことを御存じでしたか。」と私は嬉しさのあまりに聞いて見た。

「ナニ、斷りが有りましたからネ。」と門番が言つた。

小兒科の入口も堅く閉つて居た。内の方で當番らしい女の聲がして、やがて戸が開いた。分室へ通ふ廊下のあたりは、亜鉛葺の屋根にそゝぐ雨が寂しい思を與へた。看護婦室の前で年をとつた看護婦に逢

つたきり、外には誰にも逢はなかつた。やがて私は長い廊下を突當つたところにある室の前に立つた。

「駄目かナ。」

と戸の外で思つた。

妙に私は手が震へた。一目に子供の運命が見られるやうな氣がして、可恐しくて、戸が押せなかつた。思ひ切つて開けて見ると、お房はすこし沈着いて、スヤ〳〵眠つて居る。

翌朝は殊にワルかつた。子供の顔は火のやうに熱した。それを見ると、病の重いことを思はせる。

「母さん、何處に居るの?」とお房は探すやうに言つた。

「此處に居るのよ。」と母は側へ寄つて、お房の手に自分のを握ませて見せた。

「さう……」とお房は母の手を握つた。

「房ちやん、見えないのかい。」

と母が尋ねると、お房は點頭いて見せた。其朝からお房は眼が見えなかつた。

斯の子供の枕して居る窓の外には、根元から二つに分れた大きな椎の樹があつた。それと並んで、二本の樫の樹もあつた。若々した樫の緑は髮のやうに日にかゞやいて見え、椎の方は暗緑で、茶褐色をも帶びて居た。その青い、暗い、寂びきつた、何百年經つか解らないやうな椎の樹蔭から、幾羽となく小鳥が飛出した。其朝まで、私達は塒とは氣が付かなかつた。

燕も窓の外を通つた。田舍者らしい附添の女はその方へ行つて、眺めて、

『アー―燕が來た。』

と何か思ひ出したやうに言つた。丁度看護婦が來て、お房の枕頭で溫度表を見て居たが、それを聞咎めて、

『燕が來たつて、其樣にめづらしがらなくても可からう。』と戯れるやうに。

『房ちやんのお迎へに來たんだよ。』と附添の女は窓に倚凭つた。

『また其樣なことを――』と看護婦が叱るやうに言つた。

『しかし、病院へ燕が來るなんて、めづらしいんですよ。』

斯う附添の女は家内の方を見て、訛のある言葉で言つて聞かせた。

其日、お房の髮は中央から後方へかけて切捨てられた。あまり毛が厚すぎて、頭を冷すに不便であつたからで。お房は口も自由に利けなかつたが、まだそれでも枕頭に積重ねてある毛絲のことを忘れないで、『かいとオ、かいとオ』と言つて居た。時々痰の咽喉に掛かる音もした。看護婦はガアゼで子供の口を拭つて、藥は筆で飮ませた。最早口から飮食することもムッカしかつた。鷄卵に牛乳を混ぜて、滋養浣腸といふをした。

皆川醫學士を始め、醫局に居る學士達はかはる〴〵回診に來た。時には、學生らしい人も一緒に隨いて來た。看護婦だの、身内のものだのが取圍いて居る寢臺の側に立つて、皆川醫學士はその學生らしい人にお房の病狀を說明して聞かせた。そして、子供の足を撫でたり、腹部を指して見せたりした。學生

らしい人は又、經驗して置かうといふ風で、學士の說明に耳を傾けて居た。學士達の中には、まだ年も若く、こゝへ來たばかりて、冷靜に成らう／＼と勉めて居るやうな人もあつた。

病院へ來て二週間目にあたるといふ晩には、お房は最早耳もよく聽えなかつた。唯、物を言ひたさうにする口――下唇を突出すやうにして、息づかひをする口だけ殘つた。過度の疲勞と、睡眠の不足とて、私達は半分眠りながら看護した。夜の二時半頃、私は交代で起きて、附添の女や家內を休ませたが、二人は橫に成つたかと思ふと直に死んだやうに成つて了つた。どうかすると、私も病人の寢臺に身體を持たせ掛けたまゝ、まるで無感覺の狀態に居ることもあつた。

翌朝に成つて、附添の女は私達の爲に賄の膳を運んで來た。

「オイ、その膳をこゝへ持つて來て吳れ。」と私は家內に言付けた。「子供が死んで、親ばかり殘るんでは、なんだか勿體ない――今朝はこゝて食はう。」

膳には、麩の露、香の物などが付いた。私達は窗に近い板敷の上に直に坐つて、そこて朝飯の膳に就いた。

其時の私は最早「子供なぞは奈何でも可い」と言へなかつた。私は、眼前に、朽ち行く自分を見るやうな氣がした。

「お房も自分だ――すくなくも自分の一部だ。」

と思つた。

回診は十時頃にあつた。醫學士達は看護婦を連れて、多勢で病人の樣子を見に來た。終焉も遠くはあるまいとのことであつた。午後迄も保つまいと言はれた。前の日まで、お房が顏の半面は痙攣の爲に引釣つたやうに成つて居たが、それも元のまゝに復り、口元も平素の通りに成り、黑い髮は耳のあたりを掩ふて居た。湯に浸したガアゼで、家内が顏を拭つてやると、急に血色が頰へ上つて、黃ばんだうちにも紅味を帶びた。瘠せ衰へたお房の容貌は眠るやうで子供らしかつた。

よく覺えて置かうと思つて、私は子供の傍へ寄つた。家内はお房の髮を濕して、それを櫛てといてやつた。それから、山を下りる時に着せて連れて來たお房の好きな袷に着更へさせた。周圍には『姉さん達』も集つて來て居た。死は次第にお房の身に上るやうに見えた。

斯うなると、用意しなければならないことも多かつたので、それから夕方まで私は子供の傍に居なかつた。やがて最早息を引取つたらうか、そんなことを思ひながら、病院の方へ急いで見ると、まだお房は靜かに眠る狀態である。小鳥も塒に歸る頃で、幾羽となく椎の樹の方へ飛んで來た。窓のところから眺めると、白い服を着た看護婦だの、癒りかけた患者だのが、彼方是方と庭の內を散步して居る。學士達が消毒衣のまゝで、綠蔭にテニスするさまも見える。こゝへお房が入院したばかりの時は、よく私も勸められてテニスの仲間入をしたものだが、最早ラッケットを握る氣にも成れなかつた。

お房の眼の上には、眸が疲れると言つて、硼散に浸した白い布が覆せてあつた。時々痙攣の起る度に、呼吸は烈しく、胸は波うつやうに成つた。頭も震へた。もはや終焉か——と思つて、一同子供の周圍に

集つて見ると、復たいくらか收つて、眠つた。

夕日は室の内に滿ちた。庭に出て遊ぶ人も何時の間にか散つて了つた。不忍の池の方では、ちら〳〵灯が點く。私達は、半分死んで居る子供の傍で、斯の靜かな夕方を送つた。

お房は眠りつゞけた。看護の人々も疲れて横に成るものが多かつた。夜の九時頃には、私は獨り電燈の下に椅子に腰掛けて、お房の烈しい呼吸の音を聞いて居た。堪えがたき疲勞、心痛、悲哀などとの混り合つた空氣は、斯のゴロ〳〵人の寢て居る病室の内に滿ち溢れた。隣の室の方からは子供の泣聲も聞えて居た。時々お房の傍へ寄つて、眼の上の白い布を取除いて見ると、子供の顏は汗をかいて紅く成つて居る。胸も高く蹶つて居る。

上野の鐘は暗い窓に響いた。

「我もまた、何時までかあるべき……」

斯う私は繰返して見た。

分ち與へた髮、瞳、口唇――さういふものは最早二度と見ることが出來ないかと思はれた。無際無限の斯の宇宙の間に私は唯茫然自失する人であつた。

看護婦が入つて來た。體溫をはかつて見て、急いで表を携へて出て行つた。何時の間にか家内は寢臺の向側に跪いて居た。私はお房の細い手を握つて、脈を搜らうとした。火のやうに熱かつた。

「脈は有りません。」

「むゝ、有るには有るが、亂調子だ。」

斯様な話をして、私達は耳を澄ましながら、子供の呼吸を聞いて見た。

急に皆川醫學士が看護婦を随へて入つて來た。學士は洋服の隠袖から反射機を取出して、それでお房の目を照らして見た。何を見るともなしに、その目はグル〳〵廻つて、そして血走つた苦痛の色を帶びて居た。學士は深い溜息を吐いて、やがて出て行つて了つた。

夢のやうに窓が白んだ。猛烈な呼吸と呻聲とが私達の耳を打つた。附添の女は走つて氷を探しに行つた。お房の氣息は引いて行く『生』の潮のやうに聞えた。最早聲らしい聲も出なかつたから、せめて最後に聞くかと思へば、呻聲でも私達には嬉しかつた。死は一刻一刻に迫つた。私達の眼前にあつたものは、半ば閉ぢた眼――尖つた鼻――力のない口――蒼ざめて石のやうに冷くなつた頬――呻聲も呼吸も終に聞えなかつた。

數時間經つて、お房が院中世話に成つた禮を述べ、又、別れをも告げやうと思つて、私は醫局へ行つた。其時、大きなテエブルを取圍いた學士達から手厚い弔辭を受けた。濃情な皆川醫學士は、お房のために和歌を一首作つたと言つて、壁に懸けてある黒板の方を指して見せた。猶、埋葬の日を知らせよなどゝ言つて呉れた。

看護婦や附添の女にも別れて、私はショウルに包んだお房の死體を抱きながら、車に乗つた。他のものも車で、後になり前にして出掛けた。本郷から大久保まで乗る長い道の間、私達は皆な疲勞が出て、車の

上て居眠を仕續けて行つた。

お菊と違つて、姉の方は友達が多かつた。私達が大久保へ入つた頃は、到る處に咲いて居る百日紅のかげなぞて、お房と同年位の、短い着物を着た、よく一緒に遊んだ娘達に逢つた。ガッカリして私達は自分の家に歸つた。

「貴方は男だから可う御座んすが、こちらの叔母さんが可愛さうです。」

弔ひに來る人も、來る人も、皆な同じやうなことを言つた。

留守を頼んで置いた甥はまた私の顏を眺めて、

「私も、家のやつに子供でも有つたら、よく其樣なことを考へますが、しかし叔父さんや叔母さんの苦しいところを見ると、無い方が可いかとも思ひますね。」

と力を入れて言つて居た。

斯うして復た私の家では葬式を出すことに成つた。お房のためには、長光寺の墓地の都合て、二人の妹と僅か離れたところを擇んだ。子供等の墓は間を置いて三つ並んだ。境内は樹木も多く、娘達のことを思出しに行くに好いやうな場處であつた。葬式の後、家内は姪を連れてそこへ通ふのをせめてもの心やりとした。

子供の亡くなつたことに就いて、私は方々から手紙を貰つた。殊に同じ經驗があると言つて、長く長く書いて寄して呉れた雜誌記者があつた。君とは久しく往來も絶えて了つたが、その手紙を讀んで、何

故に君が今の住居の不便をも忍ぶか、といふことを知つた。君は子供の墓地に近く住むことを唯一の慰藉として居る。

不思議にも、私の足は娘達の墓の方へ向かなく成つた。お繁の亡くなつた頃は、私もよく行き〳〵して、墓畔に詩趣をさへ見つけたものだが、一人死に二人死にするうちに、妙に私は墓參りが苦しく成つて來た。

「父さんは薄情だ――子供の墓へお參りもしないて」

よく家のものはそれを言つた。

私も行く氣が無いてはなかつた。幾度も長光寺の傍まて行きかけては見るが、何時ても途中て止して戻つて來た。

寄ると觸ると、私の家ては娘達の話が出た。最早お繁の肉體は腐つて了つたらうか、そんな話が出る度に、私は言ふに言はれぬ變な氣がした。

家内は姪をつかまへて、

「房ちやんや菊ちやんの二人とも達者て居る時分には、よく繁ちやんのお墓へ連れてつて、桑の實を摘つてやりましたッけ。繁ちやんの桑の實だからッて、敎へて置いたもんですから、行くと、繁ちやん桑の實頂戴ッて斷るんですよ。さうしちやあ、二人て頂くんです……あのお墓の後方にある桑の樹は、背が高いてせう。だもんてすから、母さん摘つて下さいッて言いちやあ……」

種夫に乳を吞ませながら、斯様な話を私の傍てする。姪はまた姪て、お房やお菊のよく歌つた『紫に

ほふ菫の花よ』といふ唱歌を歌ひ出す。

『オイ、止して呉れ、止して呉れ。』

斯う言つて、私は子供の話が出ると、他の話にして貰つた。

山から持つて來た私の仕事が意外な反響を世間に傳へる頃、私の家では最も慘怛たる日を送つた。ある朝、私は新聞を懐にして、界隈へ散歩に出掛けた。丁度日曜附錄の附く日で、ぶら〳〵それを讀みながら歩いて行くと、中に麹町の方に居る友達の寄稿したものがあつた。メレヂコウスキイが『トルストイ論』の中から、あの露西亞人の面白い話が引いてあつた。それは、芽生を摘んだら、親木が餘計成長するだらうと思つて、芽生を摘み〳〵するうちに、親木が枯れて來たといふ話で、妙に私は身にツマされた。ドシ〳〵新しい家屋の建つて行く郊外の光景は私の眼前に展けて居た。私は、何の爲に、山から妻子を連れて、斯の新開地へ引移つて來たか、と思つて見た。つく〳〵私は、努力の爲すなく、事業の空しきを感じた。

『芽生は枯れた、親木も一緒に枯れかゝつて來た……』

と繰返しながら、私は家の方へ歸つて行つた。

其晩、私は急に旅行を思ひ立つた。磯部の三景樓といふは、碓氷川の水聲を聞くことも出來て、信州に居る時分よく遊びに行つた溫泉宿だ。あそこは山の下だ。あそこまで行けば、山へ歸つたも同じやうなものだ。斯う思つて、そこ〳〵に旅の仕度を始めた。

『なんだか俺は氣でも狂ひさうに成つて來た。一寸磯部まで行つて來る。』

斯う家のものに言つた。翌朝早く私は新宿の停車場を發つた。

（をはり）



歸朝者の日記

永井荷風

十一月廿八日――あゝ丁度半年目だ。月日のたつのは早い。日本に歸つてからもう半年たつた。また今日も風か。何といふ寒い風だらう。十一月、悲しき十一月。冬が來ると世界中何處へ行つても寒い。亞米利加から歐羅巴、地中海から印度洋を旅して來た經驗から考へても、要するに神の作つた地球上の天候は至る處人類の生活に適して居ない事が分る。暑くもなく寒くもなく、人間をして他の動物と同じやう、青草の上に横はつて心持よく、青空を眺めさせるやうな時節は、春の末から夏の初めにかけて、ほんの一箇月ばかりし

かない。火を焚いたり衣服を着たりして、永生自然の迫害と戰つてゐる人間に向つて、神に謝せよ。神の光榮を歌へなぞと、西洋人は實に妙な宗教を信じたものだ。

鐵と石ばかりの紐育に居た時分、炎暑の爲めには幾人も人死にのあるやうな恐しい日には、自分はよく青々した日本の海邊を思出したが、いざ日本に歸つて此樣寒い風に吹かれると、又反對に、日夜絶さず蒸氣で暖めた外國の居室の心持を思ひ返さずには居られない。衣服改良、家屋改良、何でも改良呼はりの空しい聲も、もう久しいものだ。事實に於いて、日本人は何時まで、此の不完全な住居を永續させるつもりであらう。外を吹く寒風は疊のすき間、障子の隙間、到る處から這入つて來る。其れをば、火鉢の炭火一ッで凌がうと云ふ。讀書も思索も快樂も、又事業の活動も出來たものぢやない。椰子の葉陰の庵室に、裸體のまゝで胡坐してゐた印度の僧を今もつて忘れない。彼の僧は春が來れば茫然として、開いて散る花を眺め、夏が來れば烈しい日光に眼を閉ぢ、冬が來れば煖爐の傍から暗い日の過ぎ行くのを悲し氣に見送るのであらう。此れが固有なる東洋的生活の本質であつたのだ。いや、自分が日本に歸つて來て新しく感ずるのは、この東洋的と云ふ目に見えない空氣ばかりである。宇宙百般の現象は果して偶發したものか否かは暫く論じまい。よし偶發したものにもせよ。其れが發展永續する狀態を考へると、必ず此處に何かの理由がなくてはならぬ。日本は賢明なる維新の改革者の志に基き、日一日と歐洲に見る如き近代的の生活を營まうとして居る。然し諸行無常の鐘の音が今もつて聞える東洋の土上に、それは果して最後の勝利を占むべき性質を有して居るであらうか。サハラの沙漠に米の畠を作らうと企

てたものは一人もない。自分は日比谷に立つて居る帝國議會を目に見ても、日本の社會が、革命の血を流した西洋の通りになつたとはどうしても思ふ事が出來ない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

十一月二十九日――父はもう悉皆健康になつた。相模灣の暖い日和に葉山の別莊から長者岬近くまで散歩した位だと手紙にも書いてある。こんなに早く健康を回復する位なら、自分はあんなに周章て日本に歸つて來ないでもよかつたのだ。然し考へると海外に遊んで居たのも八年の長きに及んだ。直接の父母よりも親類のものなぞが却て心配したに違ひない。それであんな電報を寄越したのであらう。自分は西洋の女と結婚してゐる。結婚しないまでも何か女があつて、其の爲めに歸つて來ないのだと大變心配して居たさうだ。無理はない。普通の日本人から考へたら、さう長く外國に居るものもなし、居られもしないから。然し自分が此くまで長く外國に居て、猶且つ故郷を思はなかつたのは、決して女の爲めのみぢやない。外國と云ふ空氣全體を愛して居たからで。外國と云ふ空氣全體が自分を醉はして居たからである。

多く論ずる必要はあるまい。昔から生れた郷土の迫害を憤つたもの〻心に、「外國」と云ふ一語は何れだけ強い慰藉であつたらうか、亡命者放浪者の傳記を讀めば想像するに難くはあるまい。詩人 Byron は何故に故國の山河を罵つて、遠く希臘の陣中に病歿したか。小說家 Stendhal はナポレオンに從つて、共に魯西亞の都から退却した佛蘭西人である。彼は伊太利を愛して、己れの墳墓にミランの人某と刻せし

めた。現實を重じた彼の孔子すら、道行れずは舟に乗つて去らうと云つたでは無いか。自國に於てすら道を行はしめる事が出來ないなら、同じ人間の住む何處に道を行はしめる國があらう。冷靜殘酷な條理を以て論ずべき問題ではない。不條理であり矛盾であるが故に、熱もあり涙もあるのだ。

自分は父に對する返事を書かなければならぬ。自分にはいつも此れが一通りならぬ努力を要せしめる。維新前の敎育を受けた父の書體、趙子昂の書體を味つた草行の名筆は、全文の意味を推測する以外に、自分には殆ど讀み得ない。輸入煙草の箱に書いてあるアラビヤ文字を見るやうな心持がする。よし又讀み得たにした處が、幾個も返り點を施さねばならぬ極めて古典的な文體が、少しも自分の感情に伴はないので、親子の情愛どころか、同じ時代に生きてゐる人の心持さへしない事がある。

自分はこれに對して返書を認めるに當つては、先づ第一に自分の漢字を書くことの拙さに閉口し、次には綴り馴れぬ文體に苦しまなければならぬ。て、卷紙に和筆を以て書くよりも、比較的その拙劣を目立たせない爲めに、自分は歸朝以後も、父に對しては必ず西洋の書翰用紙にペンを以て、文法の筆記でも書くやうに返事を書いてゐる。時代の變遷を此くまで激しく感じる處は、世界中日本を除いては何處にもあるまい。自分を生んだ父は「拜啓陳者」に初まつて、「早々頓首」に終るのが、古今を通じて動すべからざる書簡文の定形だと信じてゐる。然るに自分は、英語の My dear father を取つて直ちに、親愛なる父よ、と呼びかけ、Your affectionate son なん身の愛する子よりと結びたい。それが親子の感情を發表する最も自然な書き方であると信ずる。何たる相違であらう、寧ろ滑稽と云ふべきだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

十二月二日――苦學生補助會の慈善音樂會はいよ〳〵明日の午後青年會館で開かれる。自分はピアノの演奏を依賴されて居るので、午前中は其の練習に餘念もなかつた。演ずべき曲は第一部と第二部と共に Chopin の作で、『小夜曲』と Sonate(op 35)の第三節『埋葬曲』とを出す事にしてある。『小夜曲』の方は何れかと云へば彈じ易い。夢想的な『夜』と云ふ全體の心持を傳へればよいのだが、『埋 葬 曲』は洋琴作曲家として何人も企て及ばざる chopin が藝術の極致を示したもので、波蘭土革命の騷亂に殉死した一青年の埋葬に、戀する許嫁の少女が、會葬の人々の立去つた後、夜の來るのも知らず戀人の墳墓に泣倒れると云ふ、劇的な叙景音樂である。自分は各國の名家の演奏も幾度となく聽いた上に、久しい間練習しては居るが、初めの進行曲だけは何うやら無難に行きながら、いざ最後に夜となつて秋の木の葉が墳墓に散りかゝる處になると、全く絶望しなければならぬ。日本の座敷に据付けた古物のピアノの、恐しく音色の惡いばかりでない。自分の手腕の未熟なばかりでない。日本の居室全體の心持が斯る種類の音樂にはどうしても一致しない。天井、壁、柱、襖、障子、疊、各自異なる不快な汚れた色を露出にして居る日本の居室には、色彩の統一がないと同時に、又内部と外部との限界も立つて居ない。戸外の物音は車の響人の聲から木の葉のそよぎまでが自由に傳つて來るし、家人は何時でも勝手に、何の會釋もなく襖を引開ける。光線は何等屈折の妙味もなく、正面の障子から這入つて來て、室内の空氣、家具の輪廓を單調平坦にしてしまふ。敢えて音樂のみでない、日本の居室は凡て沈思冥想恍惚等の情緒生活に

適しない。黄昏の窓に近く幽明の境に椅子を並べて、しんみりした會話を夢心地に取交すなぞ云ふあの云ひ難い情味は、日本の居室では到底感じ得られべき事でない。

自分はもうピアノを見るさへ厭な心持がする。兩足を折敷いて坐る事は我慢にも苦しくて堪らぬ處から、椅子、机、長椅子など西洋の家具を据並べてあるが、日本座敷の天井や襖を見ると、ピアノの嚴めしく重い形とはどうしても調和しない。殊に其の黒く塗つた漆の面に、袖のある和服を着た自分の姿の映つてゐるのを眺めると、自分は泣きたいやうな情無さと、同時に思はず吹出したくなる程な滑稽を感じる。此の服裝、此の居室、而して此の遠い遠い東洋のはづれまで來て、あの悲しい北歐の音樂を彈じやうと云ふ、あゝ何たる無謀の企てゞあらう。自分は氣を變るためにピアノを離れて、取寄せた外國の雜誌を開いたが、挿繪の景色や流行服の廣告畫など見ると、徒らに堪え難い當時の追想に沈められるばかりで、增々現在の自分が情けなくなる。散歩に行きたい、と思つたところで、何處へも行くべき場所がない。腰掛の少い公園の、冬中は休茶屋も見當るまい。往來は電柱の森林、電車は昇降の秩序もない雜沓……。

こんな午後に折よくも、巴里で懇意になつた高佐文學士が來訪された。自分よりは一箇月ばかり後れて歸朝した大學の助教授である。自分は恰も姑の不平を訴へる若い嫁のやうに、來訪者の顏を見るや否や、既に此れまで幾度となく聞かした歸朝後の不平、日本の生活の不便を繰返して話した。すると高佐君は、獨逸式の口髯ばかり嚴めしいが、愛嬌ある目の圓顏に微笑を浮べて穩に、

「まア君、そんなに悲觀しないでもいゝでせう。日本も最う直き西洋の通りになつちまひます、丸の内に國立劇場が出來るぢやありませんか。」と云つた。

自分はいつも、高佐君が深刻な諷刺を喜ぶ人である事を知つて居るので、其れに對して眞面目に答へた。

「劇場は石と材木さへあれば何時でも出來ます。然し日本の國民が一體に演劇、演劇に限らず凡ての藝術を民族の眞正の聲であると思ふやうな時代は、今日の敎育政治の方針で進んで行つたら何百年たつても來るべき望みはないだらうと思ふのです。日本人が今日新しい劇場を建てやうと云ふのは、僕の考へぢや、丁度二十年前に帝國議會を興したのも同樣で、つまり國民一般が内心から政治的自由を要求した結果からではなくて、一部の爲政者が國際上外國に對する淺薄な虛榮心、無智な模倣から作つたものだ。だから政府は今もつて、言論集會の自由を妨げ學問藝術の獨立を喜ばないぢや有りませんか。つまり明治の文明全體は虛榮心の上に體裁よく建設されたもので、若し國民が個々に自覺して社會の根本思想を改革しない限りには、百の議會、百の劇場も、會堂も學校も、其れ等は要するに新形輸入の西洋小間物に過ぎない。直ぐと色のさめる贋物同樣でせう。あなたの、大學の方にだつて隨分不平の學者があるでせうね。」

「ありますとも。滿足して居るものは一人もないでせう。」高佐君は再び例の微笑を浮べて、「然し日本の學者は西洋と違つて皆な貧乏ですから、生活問題と云ふ事が微妙な力で其の邊の處を調和させて行くの

です。」

「いつの世にも殉教者の氣慨がなけりやァ駄目です。」自分は的もなく書生の慨嘆を漏すと、高佐君は突然首を傾げて、

「あの彫刻はたしか Luxambourg の美術館でしたつけね。「殉教者」と云ふ木彫の像のあつたのは。」

自分は餘りに唐突な話題の變轉に唯だ首を頷付せたまゝ高佐君の顏を見た。

「あの彫刻は痩せた爺さんの殉教したと云ふ點から見て、石材を使はずに黒ずんだ木材を用ひた處に非常な價値がある。日本の彫刻は昔から木材に限つたものだけれど、到底あゝ云ふ風に作品の内容と外形の材料とを深刻に一致させたものはない。」

「要するに日本人には頭が無いんでせう。」

「私は日本人には藝術家として、空想と情熱が乏しいのぢや無いかと思ふ。」

「空想と情熱‥‥さうかも知れませんね。此間日本歴史を讀返して見たですが、實に厭な淋しい氣になりますね。日本人は一度だつて空想に惱まされた事はないんですね。眼に見える敵とか或は復讐の觀念からばかり戰爭して居て、眼に見えない空想や迷信から騷ぎ出した事は一度もない。つまり日本人は饑饉で苦んだ事はあるが、精神の不安から動搖した事はない。」

「はゝゝ。思切つた酷評を下したもんですね。はゝゝは。」さも可笑しさうに笑ひ續けたが、軈て靜に葉卷の煙を吹きながら、「其れだから要するに日本人は幸福なユートピアの民なんですよ。自覺させると

云ふ事も惡くはないてすがね、私は一方から考へて、平和な幸福な堯舜のやうな人民に、文明々々と怒鳴つて、自由だの權利だのを數へて煩悶の種を造らせるのはどうかと思ふ。何だか戰慄すべき罪惡のやうな氣もする。支那人も書を知るは憂の始めと云つた通り、無智ほど完全な幸福はないのですからね。あなたも御覽てしたらう。Port-Said を通つた時、眞赤な合歡花の咲いて居る沙漠の水際に、埃及人が何時覺めるとも知らず、ごろ／＼晝寐をして居るのを見て、私は回々教と云ふものは基督教より遙に悟つたものだ。少くとも審美的に見て高雅なものだと感じたです。此の頃に學校の講坐て、歐洲近代藝術の Exothisme について論じて見やうと思つて居るのです。」

高佐君は調子づいて、Exothism の類例として Fromentin や Gérome や Cavanel の繪畫だの、Gauthier や Baudelaire や Loti の文學なぞを論じ出す。自分は最初、無智乃ち幸福と斷言した其の人が餘りに專門的な議論の矛盾に對して、冗談半分の駁撃を試みやうと思つて居たが、聞いて居る中に自然と愛好する藝術の問題に引き入れられて、自分も音樂上の熱帶趣味の類例として、Verdi の Aida, Saint Saën の Fantaisie, Lafrique 其れから Massenet の L'Algérienne なぞを論じた。

實に愉快な半日てあつた。

* * * * * * *

十二月三日――音樂會は思つたより滿足に濟んだ。自分は歸國して以來、西洋音樂の演奏會に赴く度々、いつも其處に少からぬ聽衆の集つて居るのを見て感ずるのは、「西洋」と云ふ一語がいかに強く、或

る一部の若い日本人の心を魅してゐるかと云ふ事である。自分も嘗ては同じ日本の學生であつた。其の過去の經驗から推測して誤らずんば、重に學生からなる聽衆の大部分は、今日とても同じく、演奏される西洋音樂の意義をば滿足に了解しては居まい。彼等にはもつと了解し易い詩吟もあり、薩摩琵琶歌もありながら、彼等は單純に、西洋音樂は日本音樂よりも高尚である、深遠であると云ふ盲目的判斷、寧ろ迷信に支配されて馳せ集るのだ。あゝ『西洋。』何たる不思議の聲であらう。自分は忘れない。まだ無邪氣な小學生の時分から、ペンでもインキでも書物でも、何に限らず舶來の器物は、日本のものより上等であると信じて居た。『和製』と云ふ言葉は直ちに粗惡劣等を意味するものであつた。西洋造りの家屋には偉い人しか住んでゐないやうに思つて居た。中學校に進んでも、自分の頭脳には猶ほ、英語の教師が國語漢文の教師より偉い人であるやうな判斷がどうしても失せ無かつた。少くも英語の教師は國語漢文の教師より品格風采もよく、教官としての等級も上である事は事實であつたし、高等學校に入學試驗の結果が、國語漢文より外國語の成績の如何によつて定められた事も、これ亦爭はれぬ事實であつた。日本人が日本を知る必要は少しもない。明治の現代に高い地位名望を得やうとしたなら、自國の凡てを捨てゝも西洋の知識に學ばねばならぬ。てにをはを知らざるもＡＢＣを知らねばならぬ。歐米を旅行して自分は、歐文を綴り得るだけの才能に止り、日本の手紙すら滿足には書き得ない知名の外交官に幾人邂逅したであらう。後代の歷史家は此の奇妙な現象をどう研究するであらうか。

* * * * * * *

十二月十日――また香風會から出席の催促が來た。自分はもう人中に顏を出したくない。「西洋はどうです。」「何を御研究です。」「日本は駄目でせうな。」何時もきまつた無意味な質問にはもう自分は疲れきつて居る。世間の人はどうして那樣に、何の用意もなく無意味無目的な質問を亂發するのだらう。彼等は洋行した人とさへ云へば、希臘の太古から幾千年たつた今日までの何から何までを、僅か數年間にして知り盡してしまつたやうに問ひかける。そして若しか自分が、知識の交換を重んじて其の知る處を秩序立てゝ辯じやうとすれば、忽ち飽きて直ぐ又他の事を問ひかける。自分は世間並みの挨拶質問には實際もう閉口しきつて居る。香風會は其等世間並の會合とは違つて、親睦を主とする舊學友の懇談會てあるけれど、あゝ然し自分は矢張り、どう云ふものか氣が進まないのである。

香風會と云へば其の起原は十年もつと以上になるであらう。其の頃自分等は高等學校の學生で、每日曜日に不忍池の貸席に會合して蕪村派の俳句會を樂んだ、其の會合を名付けて香風會と云つて居たが、やがて自分が外國へ行く頃から一同は大學に進み、次第々々に出席者がなくなつて遂に消滅して了つたと幹事からの手紙にも書いてある。それから幾年かたつて一同が大學を卒業し、其れ〴〵社會上の地位を得るやうになると、何々クラブとか何々會議所とかで再び顏を見合す舊友連が、誰れ云出すともなく昔の香風會再興の說を起して、第一回をこの夏の初め向島の料理屋で催した處が非常の好結果を得た。そこで第二回は丁度舊會員の自分が久振の歸朝もあり、且つ早手廻しの忘年會をも兼ねて、思切つて箱根塔の澤で一泊の宴會を開くと云ふ次第である。

あゝ幸福なるは彼等だ。彼等の學生時代は其の生涯の最も幸福なる記念の一ツであらう。あゝ然し、自分に取つては全く反對で、過去の回想は無限の痛苦と憤怒しか呼び戻さない。自分は大學へ進むべき其の年に、教師と衝突して退校を命ぜられた、それが外國に赴くべき直接の原因である。自分の生涯は米國大陸の地を踏んだ其の日から始つたものゝやうに、自分は全く夢の如くに日本に於ける過去の記念を忘却したいと願つて居る。舊友の顔が懐かしく思はれるだけ、其れを見るのが如何にも辛い氣がする、自分は丁寧なる案内狀に對して已に二度まで斷りの手紙を書いた。それだのに、あゝ又しても勸誘の返事である……

* * * * * * * *

十二月十四日――室の障子に冬の日が差込んで來た。置時計が優しい小さな音でもう三時を打つた。午後の冬の日は黄い色していかにも軟く穩に輝いてゐる。十二月の半ばと云へば、彼の國ではもうクリスマス前の雪や風や霧ばかり、終日室内には瓦斯燈を點ずる暗い日は續くのに、自分はこの長閑な日本の冬の日光を見ると、靜な公園の橡の葉が眞白な石像の肩に散りかゝる、巴里の十一月。咽び泣く噴水のほとりの冷い腰掛けに、悲しい顔した詩人が眺める晩秋の日光を思ひ出さずには居られない。

幾日と障子襖を閉切つたまゝ、炭の火で無暗と暖める爲めであらう。室内の空氣は多量の炭酸瓦斯を含んで重く沈滯してゐる。輕い頭痛を促す氣分の不快が、今では却て身動きするのも懶いやうな不健全の快感に人を陷入れる。香風會の箱根行は三時半新橋停車場に會合の筈であるが、自分は已に洋服の仕

度ますしながら、唯だぼんやり時計を眺めるばかりて、いざ出掛ける勇氣がどうしても起らない。起らないばかりか、此れから今日の一夜を箱根なぞて費すのが餘りに馬鹿〻〻しく思はれる。日本人の亂雜無禮な宴會のさまが堪えられぬ程不愉快に目に浮ぶ。美しい女、美しい寶石、明い燈火、愉快な音樂、西洋の夜會は見事なものだ。さう云ふ風習を有する國民が羨しい。あの箱根が瑞西の山間か湖の畔てあつたなら、どんなに自分の心は勇立つてあらう。自分は一層の事行くまい、と決心して、氣をまぎらす爲めに、ピアノの前に坐つて、よく暗記してゐるオペラ Rigoretto の處々を何といふ事もなく彈きつゞけた。

彈いて居る中だけは全く忘れて居たが、彈き終ると又直ぐ、箱根の事が思返されて來る。何ぼ厭でも此の儘無斷て行かないのは好くない。友達はさぞ新橋で今頃は自分を待つてゐる事であらう……あゝ到底もう間に合はぬ。三時半はとうに過ぎてしまつた。一同先へ出發して呉れたか知ら、もし空しく待つて居るやうな事があつては其れこそ申譯がない。とにかく新橋の停車場まて行つて見るつもりて、自分は命じた車に乘つて急いて家を出た。

幸ひ入口の階段にも待合室にも、嘗て自分の歸朝を新橋に迎へて呉れた見覺えのある友人の顏は一人も見えなかつた。安心して家へ戻らうかと思つたが其の時、丁度驛夫が鐘を鳴らして國府津行の出る由を呼廻つて居たので、つい又其の氣になつて、自分は切符を買ふなり直ぐ列車に乘つてしまつた。

品川に着くか着かない中、列車が出ると直樣自分は止せばよかつたと後悔した。丁度夕陽の悲しく照

す品川の入海、水田の間々に冬枯れした雜木の林をば、自分は遣瀬のない心持で眺め遣つた。然し其の心持は、嘗て北米の冬の荒原を汽車から眺めた時とは全く味ひを異にして居る。北米の荒原は偉大なる悲哀寂寞の中に自分を恍惚たらしめた、哲理的冥想に沈ましめた。其れが同じ冬でありながら、祖國の自然は、敢て其の規模の大小に原因するばかりては無い、自分に對して殆ど何等情緒の變動をも與へない。人家は人家、樹木は唯だ樹木として眼に映ずるばかりだ。形ばかりで心持は少しもない。あゝ何故であらう。

車中には二三人の乘客が混雜しない腰掛を幸に早くも股引や毛脛を露出したまゝ横になつて居る。二等列車の事て風采だけは其れ相當にして居るが、私生涯と公生涯との差別を知らない國民の常として、中にはもう大きな鼾を遠慮なく轟かせるものがある。自分は其の樣子を見ると同時に、二三日前に議論した尚佐助教授の云つた事を思出さずには居られなかつた。日本人はユートピアの國民だ。新しい思想の煩悶を敎へるのは罪惡だ。全く其れに違ひない。自分がこれまで新しい日本に新しい國民音樂を興さうなぞと思つて居たのは、全く無用な笑ふべき夢であらう。今日前の腰掛けにいぎたなく寐て居る國民の顔をば暗澹たる車中の燈火に照して眺めながら、Wagner が大なる藝術を創作するものは一般の民衆であつて、藝術家の唯一の任務は民衆が無意識に創作したものを摘み集めて發表する事であると云つた語なぞを思合せたなら、如何なる感慨に打たれるてあらうか。

丁度日が暮れて暗い夜と共に、車の窓の隙間から寒い風が襟元に吹き込む。自分は僅か三四時間の道

を寃ら端のない絶望の國へ流されて行くやうな心持で、漸く國府津の停車場につき、其れからは又極めて運行の遲い電氣鐵道に乘つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

塔之澤の福住に着いて女中に案内されるまゝ、座敷へ這入ると、丁度浴衣に着換へて宴席を開きかけた會員の一同は、後れ走せに思ひも掛けない自分の姿を見て、殆ど總立ちになつて歡迎してくれた。十年以前、自分が高等學校を退校される時分には白筋の制帽に衣服袴の汚れたのを殊更自慢に着けて居た書生が、今では一人として頭髮を分け八字髯を生して居ないものはない。お互ひに其の跡方ないまでに變つてしまつた顏立眼付の中に、幾分か殘つてゐる遠い昔の記念を搜出す心持、自分はさすがに暖い懷しい感動に胸を打たれた。

會員中には政府や會社から派遣されて、已に外國で自分と出會つたものも二三人は交つてゐる。其れ等の人達が自分を相手に、巴里の料理屋では贋金を掴ませられたとか、獨逸では汽車を乘り違へたとか云ふ、いつでも極つた歸朝者の得意滿々たる失敗談が始まつたが、然しその一通り濟むのを待つもの〻如く、一座の談話は忽ち、自分の高等學校退校事件の昔に遡つた。

「あの當時は少しも事情が分らなかつたけれど、一體どう云ふ譯で、あんな亂暴な事をしたんだ。」ときくものがある。

「つまり少年の血氣盛りの無分別からさ。どう云ふ事情だつたか、もうよく覺えて居らん。」

自分は輕く笑ひに紛らしたけれど、然し内心では今だに自分の暴行を悔ゆる氣は少しもない。自分は校友會の雜誌に、學士の肩書を得んとする事ばかりが吾々の目的の全部ではないと云ふ事を論じた、其れが學生の議論として穩てないと云ふ事から敎師と衝突し激論のあまり遂に腕力に訴へた。自分は已に尋常中學の頃から何となしに、當時の敎育者が生徒をして心服敬慕せしめる丈けの德望もない癖に、職業的に校則のみを云々する態度に深い嫌惡憤懣の情を抱いて居たので、其等の反感が一時に機會を得て爆發したまでの事である。

「君に撲られたあの敎師は其の後地方の高等學校長に轉任してから收賄事件でやられたよ。今ぢや滿洲で何かやつとるさうぢや。」

「さうか。」自分は返事をしたなり默つて居たが、何か重大な問題を提出されたやうに安からぬ心持がした。

一同は其れから自分に向つて、西洋の大學、學生の生活や又自分の硏究した音樂などについて質問した。自分は西洋の事とさへ云へば、一般に日本現在の狀態に比較して自然と彼方を賞美し此方を譏るやうな傾きになる。從つてつまらぬ誤解を招ぎ易いと思ふので、なりたけ話の深入せぬやう、其の事ばかりに心を勞した。自分の西洋崇拜は眼に見える市街の繁華とか工場の壯大とか、凡て物質文明の狀態からではない、個人の胸底に流れて居る根本の思想に對してゞある。宴席や會合の坐談として論ずるには餘りに深過る、餘りに複雜すぎる。口を噤んで居るに如くはあるまい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

十二月十四日夜――知らず〳〵呑んだ酒の爲めか、寢床の變つた爲めか、入浴した後のつかれにも係らず、精神が昂奮してどうしても眠る事が出來ない。多數の會員の事で各自二三人づゝ座敷を分けて寢床を取る事にしたが、自分の座敷は殊更谷川に近いかして夜の更けると共に水の音がます〳〵耳につく。自分は座敷中を隈なく照す天井の電燈を夜具の中から眺めて、高等學校を退校された當時の事、其れから引續いて自分の親しく見た外國の學校とを比較するともなく比較べて、しげ〳〵自分の過去を思返した。巴里の大學では往々にして學生と敎師との間に學理の爭論が起つて其れを賛否する書生の黨派が示威運動の行列をする。時には警察官が鎭撫に出張する事もある位だ。米國の大學では學年試驗の答案を草する最中にも生徒は隨時に筆を休めて敎室外に散歩する事を許されてある。其れに對して生徒は一人として日本の學生のするやうな狡猾手段を取らない。自由自治獨立の美德は學校内に殆ど何等の規則をも設けさせない。無規則無條件は懲罰の網目を免るゝ隙なく張りつめたよりも却て一人の破壞者を出ださない。西洋の大學の腰掛は冷い木ながらに天鵞絨の蒲團を敷いたよりも温い氣がする。其れに反して日本の學校では腰掛ばかりか四方の壁からも身動きの出來ないやうに恐しい釘が出て居る。同じ人間と生れて敎育されるなら、温い自然の性情を傷付けられないやうに、自分は如何なる不幸の家にでもよい、西洋に生れたかつた。辨慶のやうな强い國の人たるよりは、自分は頭を打たれたら、打たれた痛さだけ遠慮なく泣ける樣な國に生れたかつた。自分は決して自分の生れた國を譏るのではない。自分は

唯だ人の心の常として、美しいもの麗しいものを敬慕するに止まる。國民の義務は祖國の萬事を絶對無上に讃美する事ばかりならば、善男善女は最上の愛國者である。判斷比較の知識を與へる教育は恐るべき罪惡の教唆であらう。

眠られぬ苦しさに自分は幾度か寐返りした末、仰向になると、丁度自分の頭の上の鴨居に、大きな字で「青山白雲」と書いた額がかゝつて居て、夜更けと共にます／＼明くなるやうに思はれる電燈の光で題書家の氏名と落款までが餘す處なく讀まれる。誰あらう、維新改革者の一人たる元老の名である。其れを見ると自分はます／＼激昂して到底もう眠られるものではない。あんな人間の書いた字の下で一夜を明す事は無限の屈辱であるやうな感じさへする。自分は幼い小供の時分から、何時とはなく維新の元老の社會的地位名聲と、日々の新聞紙が傳へる其の私行上の相違から、斯う云ふ人達ほど憎むべき僞善者はないと思つて居たので、今だに偉大なる政治家としての人物を思ふ時には、眞率なる崇拜の念は、自國を去つて直ちに、Hugo や Gladstone や誰れに限らず泰西の偉人物の上に濺がれるのである。自分は巴里の Panthéon を見物に行つた時、一人の老人が孫かと思ふ小兒の手を引き、ユーゴーが遺骨の收めた石の柩を指しつゝ物語つて居たのを見て、如何に切ない羨望の情に迫せられたであらう。幸福なるは佛蘭西の國民である。彼等は己れの子孫に向つて、君子として詩人として政治家として愛國者として、凡そ人間の最も完全なる模範を示すべき人物を、己れと同じ國民の中に幾人となく揚げ數へる事が出來る。然るに明治の國民、自分は其の子孫に對する誇りとするには極めて拙惡なる九段坂上の銅像より外

に何物をも持たない。モルモン宗の牧師のやうな憲法の起草者より外には、語るべき人物を一人も見出し得ない……

堪へられずして自分は、又もや寝返りを打つたばかりでなく、夜具の上に坐り直つて見た。丁度その時、自分の隣に寝て居た一人が、ふと眼を覺して掌で瞼をこすりながら、枕元の時計を引寄せる折に、始めて自分の起き直つてゐる様子に氣付いて、

「君、どうしたです。」と頗る驚いたらしい。

「何時です。」

「二時半。」と答へて彼は卷煙草に火をつけ、「ひどい水の音だ。まるで雨のやうですね。」

「句になりませんか。」何心なく云ふと彼は己れを嘲けるやうに唯だ「はゝゝ」とのみ笑つた。

自分は今夜席上の會話で、昔の香風會以來今日まで俳句を捨てないものは、宇田流水此の人一人であることを知つた。流水は國文科出身の學士で德川文學に關する著述を尠らず公にし、絶えず新聞に小説の筆を取つて居る事を知つて居たので、眠られぬまゝに日本の文學界の事など質問した。すると流水は筆をもつて衣食して居るとは云へ、現代の日本文學の新傾向とは全く無關係であると答へた。純粋の日本人から生れた純粋の日本文學は明治三十年頃までに全く滅びて了つた。其の以後の文學は日本の文學ではない。形式だけ日本語によつて書かれた西洋文學である。其の西洋文學も十八世紀の貴族的な端麗典雅なものではなくて、所謂若い書生によつて稱道される自然主義の文藝の如きは、到底吾々の了解

し得られぬものである。彼等は美辭麗句を連ねて微妙の思想を現はす事を虚僞だとか遊戲だとか云つて此れを卑むらしく思はれるが、文學の眞髓はつまる處虚僞と遊戲との二つより外にはない。其れを卑むならば、寧ろ文學に關與さはらぬ方がよいのである。若し眞實の世相が觀たいと思ふならば小説を讀むより己れ自ら世相を觀るに如くはない。人間の作つた言語文字が完全に眞實を傳へ得ると思ふのが大なる誤謬である。文學の興味は人間の知識が凡そ不完全な言語をもつて、虚僞と不眞實を何れ程眞實らしく語り得るかと云ふ其の手腕を見るのにある。この滑稽な遊戲が乃ち文學と稱するものだ。

「だから私は支那の「西遊記」のやうなものを文學の最上なるものだと思ふのです。」

「はゝア、君は近代文藝の科學主義に反抗してネオロマンチズムを稱道するんですね。文藝全體から見て然う云ふ傾向も無論なくてはならん。兎に角自分の信ずる處を遠慮なく發揮されるがいゝです。」

流水は領付いたのみで別に答へはせず更に新しい卷煙草に火をつけて居た。自分は其の儘眠りたいと思つて横になつたまゝ暫く眼を閉ぢて見たが、矢張り眠る氣になれない。流水も煙草を呑み終つた後、頻と寢返りばかり打つて居るので、何れが話しかけるともなく自分等二人は再び話し出した。

「君はまだ獨身ですか。」と流水が云ふ。

「えゝ。まだどうして。」と答へて、「君は？」

「御同樣です。ぢや、昔の友達で獨身なのは君と僕二人だけだ。君も御存じでせう、あの山口などは、尤も大學に這入る以前から結婚して居たんだが、令嬢がもう二三年中には嫁の口でも搜す時分だと云つ

て居る。」

「結婚なぞは急がないでもいゝ。日本人は三十の聲を聞くと青春の時期が過ぎて了つたやうに云ふけれども、熱情さへあれば人間は一生涯青春で居られる。熱情がなければ二十歳で結婚したつて仕樣がないです。」

「さう、全くですね。僕は外國の事は知らないが、日本の結婚ほど不愉快なものはない。僕の友達で新聞社に居た男だが、高等文官試驗に及第して官吏になつた。すると財産まで持つて嫁に來やうと云ふ相當な容貌のものが澤山出來たさうだ。其の友達と云ふのは色の眞黑な眇視の又とない不男なので、自分ながらも無職同樣の記者時代に水轉藝者にまで振り飛ばされた經驗を省み、流石に實利主義な世の中には呆れ返つたと云つて居るです。今時の日本の女には八百屋お七見たやうに男の容貌に恍惚して身を過つやうな優しい情愛と云ふものは微塵もない。自分で自分を滿足させると云ふ望みは少しもない。何も彼も世間體で、愛國婦人會の徽章でも下げる事ばかり考へて居る……。」

流水の憤慨に對して自分はさう云ふ惡風の起つて來た根本は明治の僞善的文明の致す處であらうと論じた。敢て日本ばかりぢやない。生活の困難な西洋ではさう云ふ利害の結婚 Mariage de raison は數へられぬ程ある。七十八十の老人に結婚して其の死ぬのを待つて財産だけ取らうと思つて居る若い細君なぞは、ちつとも珍しくない。然し其れと同時に愛情の爲めに一生を賭して社會の習慣と戰つた少女の話も、到る處で聞きもするし、目にも見る。つまり西洋人は善惡にかゝはらず、自分の信ずる處を飽くま

て抑通さうとする熱情がある。僕はこの熱情をうれしく思ふので、日本人は此れに反して何かと云ふと、直ぐ世間を憚つたり自分を反省したりする。常識に富んで居る點から云へば結構な事だが、深く考へて行くと、常識の日本人はいつも現實の利害ばかりに汲々として、とても理想的の大きい國民になれやう筈がないと思ふ。歴史を見ると日本人は唯だ狡猾だと云ふ事ばかりが能く分る。天に昇らうと思つてBabel の塔を立てたり、又は支那人が不老不死の藥を得たいと煩悶したやうな、そんな馬鹿々々しい事を日本人は一度も企てた事がない。人間としても國民としても、目前の利害を離れて物にあこがれると云ふ事が無くてはならぬと思ふ。然し日本人はさう云ふ架空な事をば、月の影を摑まうとして水に落ちた猿に例へて居るではないか。僕は日本の根本思想に慊らないのだ。洋行した日本人は工業でも政治でも何に限らず、唯だ其の外形の方法ばかりを應用すれば、立派な文明は出來るものだと思つて居るから困る。形ばかり持つて來ても内容がなければ何にもならない。これが日本の今日の文明だ。眞の文明の内容を見ないから、解しないから、感じないから、日本の歐洲文明の輸入は實に醜惡を極めたものになつたのだ。一番近い例は東京の電車であらう。電車は電氣の學問を學んだ日本人が立派にあの通りの經營をした。然し其れを實用する人間が社會的共同生活の意義を知らないから、あの通りの亂雜、醜態を極める事になる。僕は日本人が文明の内容に省みない以上は、どんな美しい外形を粧つても何の益にも立たないと思ふ……

「革新されないか知ら、君のやうな人物が叫んだら。」と流水はお義理らしく答へた。

「然し僕は政治家でないから。」と自分は其れとなく適任者でない事を暗示して云紛したが、内心では一種の痛苦を感じた。何故と云つて自分は直接日本を改革しやうと云ふ目的を以て論じたのでもなければ又自ら立つて改革しやうと云ふ程の勇氣もない。唯だ今日まで、少年時代を頑固な漢學塾で苦しめられ青年時代を學校の規則で束縛された憤慨のあまり、漫然として東洋の思想習慣の凡てに反抗して居るばかりである。此の反抗が殆ど何等の理由なく外國の生活を理想的に美しく見せると同時に、丁度過渡期の亂雜な日本の狀態を堪えられぬ程醜惡不潔に感じさせ、其の結果は寧ろ此の儘祖國の生活の改善されぬ方がよいとまで思はせる事がある。自分は自由な米國の小兒の如く育てられたなら、此樣ひねくれた思想の畸形兒になりはしなかつたらうと、反感を抱く度び々々深刻な悲痛に沈められる。あゝ、自分はどうして昔の奴隷の如く柔順に盲目的に生きる事が出來ないのであらう。反感を抱くだけの力のないほど幸福な事はない‥‥自分が其れ等の感慨の一端を漏すと、流水も非常に感動したらしい調子になつて、

「僕の生涯なども全く反抗の一語で蔽はれて居る。そも〳〵小說など書き初めたのが、冷靜な他の學問に對する反抗からで、其れからは兩親と衝突して其の望むやうな正業を求めず、今日も猶獨身で放蕩して居るのも矢張反抗に過ぎない。到頭自分の研究して居る文學にまで反抗し出した。文學が活きた人生に接觸しなければ眞の價値のない事を感じるだけ、其れが何となく癪に觸つてならない。人生其のものに同情も興味もなければ、つまり文學も何も成立つものぢやない。最後はどうなるんだか、僕は自分の行末までが分らない。反抗ほど恐しい幸福の破壞者はあるまい。」

「然し、反抗は同時に進歩の源泉にもなる。自由と云ふ近世の福音は反抗から生れたのだ。」

自分は流水に對して自然と同氣相求むる親愛を感じて互に其の宿所などを語り合つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

十二月十五日――　香風會の會合はその翌日の午飯と共に散會する事となつた。會員の中の二三人は出掛けついでにもう一晩ゆつくり骨休めをしやうと云ふものもあり、同じ歸りの列車に乘つた連中も或者は大磯や茅ケ崎邊を通りがけに局長とか社長とかの別莊を訪問しやうとて下車したものも多かつた。自分も大船で乘換へて逗子の別莊に兩親を訪ねやうかとも思つたが、たつた一晩外泊したばかりなのに今朝方から何と云ふ譯もなく自分の書齋が戀しくなつて堪らない氣がしだした。歐米の各地で其の時々に買集め、其の時々の感慨を託した書籍が、美しい背皮と金文字とを並べ輝した樣子や、又床の間襖などに掛けた風景畫、古名畫の寫眞。机の上に置いた Baccante の艶しい裸體の石像。ランプの光で鏡のやうにひかるピアノの塗色などを思浮べると、其等のものが何れも聲を出して自分の歸りを呼んで居るやうな氣がする。殊に通過ぎる列車の窓から、無慘な冬の日光に照された冬枯の畠や雜木の岡の景色を眺めて居ると、自分はピアノの上に置いた櫻草の柔い綠の葉と、室咲きにした優しい桃色の花や、椽側に釣した鸚鵡の眞白い羽の色などが一瞬間も早く見たくなつて、列車の進行をば寒さと暗さに苦しめられた昨夜の旅よりも更にもどかしく思つた。て、新橋へ下りると、前夜を語り明した宇田流水が何處かて晩餐を共にしたいと勸めたにも係らず、自分は再會を約して、急いで車を命じた。

一番町の屋敷へ歸つて來ると、冬の日が丁度暮れ果てたところて、女中が桃色の花笠をつけた大きなランプと座敷の隅の石油ストーブに火をともした。

「花。林檎かオレンジはなかつたか。」

「もう、みんなになりました。」

「さうか。ぢや急いて咖啡を入れてくれ。非常に強くして。」と自分は命じた。實は昨夜から唯つた一日一晩、溫泉場の日本食に、今日午過ぎの列車の中ても、咽喉が乾いて來ると、殆ど我慢の出來ぬ程、匂のいゝ甘い果物が味ひたくて堪らなく思はれたのだ。自分は小供の時分から、味噌汁や澤庵なぞを好まず、西洋料理を無上の美味として喜んて居たのてはあるが、然し今日となつては、唯だの一日すらも、日本在來の食物に滿足する事が出來なくなつたのかと思ふと、全く反抗から離れて理由なく淋しい悲愁を感ぜずには居られない。世界に類例のない「茶の湯」の技藝を起した日本人、魚の腸の鹽漬を賞美する日本人とは、自分は如何に思想上のみてはなく肉體の組織からしても異つて了つたのてあらう。パンと葡萄酒をばキリストの肉キリストの血と云ふ語を思出せば、其れ程深い信仰がなくても、其處に云ひ難い神秘が生じる。然し神主が拍手を打つて祖先の祭典に捧げる御酒德利は、自分の眼にはもう全く無意義てある。

　女中の花が咖啡を持つて來た。自分は咖啡の中に強いアルコール性のコニャックを注いて、立上る湯氣と共に其の薰りを深く吸ひ込んだ。一時の悲愁は忽ち消えて心がうつとりした。ランプの靜な光が、

戀しくて堪らなかつた書齋のさまを、いかにも意味深く照らす。日本に歸つて以來、絶えず外から犯されやうとする自分が感想の唯一の避難所は、漫遊の紀念品に飾られた此の書齋ばかりである。自分は安樂椅子に片肱をついてぢつと眺めた。

机の上には快樂の女神バツカントの小さな石像が、牧場のやうな綠の敷布の上に眞白く立つて居る。直ぐ傍に置いたランプの笠の影になつて、髮を亂した顏は暗いけれど、兩手を上げて後頭部をさゝえた脇の下から兩乳のふくらみが、燈の光を正面に受けて、柔い線をば浮立つばかり鮮かにさせて居る。其の足元には積上げた五六冊の愛讀書が、色さま〴〵な柔革の背の上に金文字で、詩人の詩集や音樂家の傳記の名をば、ぴか〳〵光らしてゐる。自分は片手を伸して、書物の小口の不揃ひになつたのや、上下の倒さに置かれたのを揃へ直して、差覗くやうに身をかゞめて表題の文字を讀んだ。自分には此れ等の書物が殊に日本へ歸つて來てからは、生きた友達のやうに懷しく思はれる事がある。日本の政府がさまざまな抑壓を加へて禁止しやうとしても、世界の新思潮は丁度何處からとも知らず牢獄の中に漏れる日光のやうに、若い吾々の頭に浸込んで來るのだ。振向くと床の間の壁には石版畫の彩色した大きな田園の風景畫が掛けてある。Normandie州あたりの麥畠を描いた佛國の景色である。八月頃の晝過ぎと思はれて見渡す限り廣がつた麥畠の麥は、驚く程强い光澤を含んだ黄色に塗られて、其の上には大空が一面思ふさま靑く輝き、地平線の界には眞白な雲の列と、綠色の白楊樹が二三本離れ〳〵に突立つて居るばかり。極めて單純な畫面は、唯だ夏の烈しい日光の印象を味はせるつもりと見えて、眺望が如何にも廣く

色彩がいかにも强烈に感じられる。あゝ佛蘭西の夏はこの繪の通りだと、自分は深い追想に打たれてぢッと見詰めて居たが、すると思ふともなく比較するのは、今日の午後、箱根から歸り道に見た相模灘、酒匂川、馬入川、箱根の連山、其の上に聳えた富士の山の景色であつた。自分は神戸に上陸して其の夜の汽車で東京に歸つて來たなり、今日まで一度も東京を離れた事がなかつたので、冬の日光に見た道中の景色は珍しくもあり、美しくもあつたけれど、其の小く狹苦しい事は、驚かれるよりも悲しい心地のするほどであつた。北米の原野に雜草を頂いたばかり木も石もない土地の起伏は、縮緬の皺を見るやうな刺々しい箱根の山脈より、どれほどのびのびして居たてあらう。人もさう思へば、自分も亦傳說から神聖視して居た富士の靈山は、丁度巴里の大道から其の端れに望む Madelaine の寺院の、三角形なす屋根位にしか高く見えなかつた。自分は其の瞬間の感想を同じ車中の流水に吐露しやうと思ひながら、何となく語りにくい氣がして默つてゐた。日本人に生れたからには、も一度あの富士山を小供の時のやうに神々しく打仰いて見たい、それが最う不可能になつてしまつたのかと思ふと情ない氣がしてならなかつたのである。

小間使の花が靜かに襖を明けて、いつも云付けてある通り、竹細工の食卓に白い布を敷き、其の上に洋食の皿、食器、葡萄酒、パンまでを一ッ々々並べて居る。其の物音に自分は沈思の中から振向いて眺めると、机の上のランプの光が斜めに流れて、折り屈んで働いて居る小間使花の横顏を照す。庇髮に赤いリボンをさし、荒い矢絣の衣服を着た其の影が長くピアノの上から後の壁に映つて居る。自分は斯う

して獨り淋しく食事する度、談話の賑かな外國の食卓の事が思返されて、誰れと相手選ばず話がして見たい。

「花、お前、家は東京かね。」

「はい。」と花は正しく答へた。

「いくつになる。」

「十九で御在ます。」

「日本では厄年と云ふんだね。」

花は何故か顏を眞赤にして俯向いたまゝ立去つた。自分は椅子を移して、其の邊に捨てゝあつた新聞を拾取り、讀むでもなく目をそゝぎながら一人食事しはじめたが、日本の女は氣の毒なものだ、と何がなしに思つた。その思ひの底には、自分も花のやうな女をいづれは妻にすべく家系を重ずる周圍の人から強ひられるであらうと、他人によりは寧ろ自身に對する憐憫の情を感じたのだ。花はスープの皿を片付けて直樣煮た肉の皿を持つて來て呉れる。襖の明け閉てから、前かゞまりの歩きつきが、斜に照らされるランプの光で、いかにも物靜におとなしやかに、服從と云ふ事より外には何にも知らない人形のやうに思はれる。勞働と賃銀の問題をば自然とよく解釋して、いつも自個の權利の主張を誤らない米國の召使の事なぞが、其れとなく比較されて、かうした日本の女はどうして其の一生涯を送るのだらうかと、不思議な心持もして、自分は遠慮なく尋ねて見た。

「花、お前はいつ頃まで家に居るつもりなんだね。」
花は何年でもお使ひ下されば、お暇の出るまで居たいと答へた。
「何年でもと云つて、お前も最うぢき結婚する年頃ぢやないか。」
花は再び顏を赤くして俯向いてしまつた。
「獨身主義かね。」自分は笑ひかけたが花の樣子が餘りに氣の毒に見えたので、「もう好い。片付けて呉れ。其れから直ぐ彼方へ寢床を取つて置いて呉れ。」

一人になると自分はピアノの前に坐つて、樂器の蓋を明けたけれど、何か知ら思ひが胸の底に蟠つてゐるやうで、大方昨夜眠られなかつた箱根のつかれでもあらう。何を彈いて見たいのか、彈くべき曲が指先にも頭にも浮んで來なかつた。

寂とした夜を遠く門外の往來をば、最初に義太夫の流しが「柳」の合手を彈いて通ると、其の次には、何時頃から流行り出したのか、俗惡な流行歌を歌つて行く男がある。暫く寂とすると、今度は書生の詩吟が聞えて、寺の時の鐘が長く尾を曳く中に、九段坂上の兵營のラッパが交つて響いた。

冬の夜の悲しい此れ等の物音人聲は、整頓した德川時代の文明が破壞されて、新しい明治の文明の未た起らざる混沌亂雜な現代の內容を目に見るやうに、あり〳〵と思浮ばせる。日本歷史の誇とする元祿の文明が戰國時代の後百年ならずして起つたやうに、明治の時代はいつになつたら獨特の文明を發揮するのであらう。今から絕望するには早過るかも知れぬ。然し明治は已に半世紀に近い時間を過した。其

れにも係らず歐洲文明の完全な模倣すら爲し得ない。明治は政治教育美術凡ての方面に歐洲文明の外形ばかりを極めて粗惡にして國民に紹介しただばかりである。自分は理由もなく深い吐息をついて再び室中を見廻はした。

* * * * * * * * *

十二月十六日――前日の疲れて九時近くまで寢て居た處を、自分は私立洋樂院の經營者黒川誠也氏の來訪に驚かされた。朝飯の咖啡もそこ〳〵に啜り終つて書齋の襖をあけると、ぼんやり天井を眺めて卷煙草を遠慮なしに吹して居た黒川は椅子から立ち、

「早朝から伺ひまして。先達は又お手紙を頂戴いたしまして有難う御坐いました。」

「まアお掛け下さい。」と自分は先に腰をかけ、長たらしく挨拶されるのが辛いので早速に、

「御用向は學校の事ですか。」

「はア。」とフロックコートを着た黒川は重々しい調子で、ぢゝむさい頰髯を撫でながら、「是非御盡力を願ひたいと思つて居ります。」

「あなたは官立の音樂學校にお居てぢや無かつたてすか。」

「居りました。然し感ずる處がありまして今では斷然關係を斷つて居るてす。どうも獨力て學校を起さんければは思ふやうに行かないと感じましてな。

「さうてせう。學校に限らず何事でも政府に依賴して居ちや駄目てす。して、あなたの學校はどう云ふ

方針です。兎に角、實利的な現社會には音樂學校の經營などはなか〳〵困難でせうが。」

すると黒川は自分の質問を待構へて居たと云ふ風で、聞いて居ても肩の張るやうな例の調子で終局なく語り出した。

「いや、一通りの苦心ぢやないです。他の女學校などとは違つて、第一必要な樂器の設置にも非常な費用を要するのです。どうしてもピアノ一臺が四五百圓、其れも少くて二三臺は無ければなりませんし、其れから教員ですが、これが又誠に適當な人物がないので實に困難するのです。信用するに足りるやうな人物は重に文部省の學校に奉職して居るものですし、さもなければ給料の點が目下經營したばかりの私の學校ではちと支辨しかねるやうな譯で。と云つて、若い人の中には技藝も却つて優れて居るものもあるですが、私の學校は女の生徒が重なので、萬一の事があつては其れこそ取返しの付かん次第ですから、今では止むを得ず、私と他に女の助手を二名置きまして、何も彼もそれだけで切廻して居るのです。」

黒川は暫く息をついて、「さう云ふ次第ですから、あなたに一ッ御助力を願へれば私の學校の名譽ばかりではない、日本の音樂界の爲めにも實に喜ばしい事だと思ふのです。」

自分は默つて領付いてゐた。すると黒川は猶も疲れずに、「さう云ふ次第ですから御報酬の點は甚だどうも……ほんのお車代位しか差上げられんでせうが、日本の音樂界に對する博愛慈善のお心で、是非一ッ御教授を願ひたいと思つて居るのです。」

黒川は煙草を一吹して其の煙の中から返事を促すらしく自分の顔を見詰める。

「報酬なぞはまア別問題として、一體どんな事を教授すればよいのてす。音樂の理論てすか、其れとも技藝の方面てすか。」

「願へるなら兩方やつて頂きたいてすな。何分にもその……適任者が見當らんのて。」

「理論の方なら少しは本も讀みましたし、又古來の有名な管絃樂や歌劇なぞも實例だけは聽いて居ましたから、少しは纏まつたお話が出來るかと思ふてすが、技藝の方なら全く私は不適任てすよ。まだ人に教へる程とても上達して居ないんてすから。」

「いや、其樣事はないてす。先達も青年會館てお彈きになつたショーパンを拜聽したてすが、實に驚嘆しました。學校の生徒なぞには却て勿體ない位の御手腕てす。」

自分は又默つた。相手は着々歩を進めて、

「あなたのお名前を掲示しただけても何れ程學校の信用を强めるか知れないてす。子爵と云ふお名前だけても……。」

自分は覺えず聲を强めて遮つた。「黒川さん。私はまだ子爵ぢやない。父がまだ生きて居る。」

「それては。」と黒川は驚くほど惡びれず、「それては新歸朝者と云ふお名前だけても…… それても非常な信用になるてす。實は二三日中に生徒募集の廣告を新聞に出しますから、是非お名前を拜借したいのて、如何てせう、御承諾下さいますまいか。」

「さうてすね。もう暫く考へさせて頂きたい。いづれ私の方から御返事しますから。」

「實は教授と云ふお名前だけて、若し御面倒のやうてしたら、實地の御教授は別の事として、唯だお名前だけ廣告に出して置きたいのてす。」

然し自分は飽くまで辭退した。單に黒川の音樂學校ばかりてはなく、日本人の經營する事業には何に限らず關係したくないと云ふ考へが談話して居る最中に動し難く定められた。黒川は「日本帝國音樂界の爲め」と云ふやうな誇大な壯語を繰返して、椅子を立ち際には、室内の書額やピアノや石像などを義務的に口輕く、さも珍らし氣に賞讃して歸つた。自分は玄關まで送出して門外に消去る來訪者の後姿を見了ると、知らず／＼胸一杯に滿渡る嫌惡の情が、覺えず玄關前の砂利の上に唾を吐かせた。其の物音に驚いて二三羽の雀が地の上から植込の陰に飛び立つ。今日も又柔い冬の日光が穩かに輝いて居る。木の葉は動かない。植込の向うの井戸端で他愛もなく下女供の笑ひ騒ぐ聲が聞える。自分は身を支える元氣も失せたやうな絶望を感じて、部屋に戻るが否やどつさりピアノの前に腰を落した。左から右へと眞白な鍵の上に二三度も繰返して指先を走したが、心は上の空て、樂器の響は耳に入らず、來訪者に對する鬱憤の情がます／＼烈しく煮返つて來る。自分の心には、黒川誠也は單純なる黒川一個人てはなく、明治的人物の代表者として映じたのだ。彼の洋樂院經營は音樂敎育の普及を名として私利を營むに過ぎない。自分の父が嘗て世の所謂伴食大臣となつて爵位を得て居るのを幸ひ、それをば賣藥的廣告の道具に使はうと思つて居る。眞率誠實は全く明治時代から逃去つて仕舞つた。眞率誠實は明治と調和しないものらしく思はれる。歐米の社會は或點に於ては日本よりも甚しく墮落して居るのは明てあるが、猶勵

し難いトラヂシオンがあつて、安心して信頼するに足るべき點が少くない。日本は一般の公共事業から些細な商品に至るまで、羊頭をかゝげて狗肉を賣るものではないかとの不安を感じさせないものは殆ど無い。この不安に對する彌縫策として日本人の慣用する手段は改良々々と云ふ空虚な呼聲ばかりである。政府は嘗て拓殖務省を設けるが早いか忽ちに之を廢止となし、大學の名稱を創立以來幾度となく變更させ、郵便切手の色模樣を三年毎に變化させる。新聞紙や雜誌は毎年の正月毎に大進步大刷新を呼號して、挿繪を入れたり廢したり、振假名を付けたり取つたりして居る。市街の道路はいつも〳〵砂利を敷いては掘り返される。日本人は何故に今日まで皮膚と眼の色の改革を叫ばなかつたであらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

一月一日——年は新しくなつたが、單調な自分の生涯には何等の新しい生活の興味をも呼び起しては呉れない。一時病氣の危篤であつた自分の父は今もつて東京の本邸に居ない事を、世間の人も既に知つて居ると見えて年賀の名刺をくばりに來るものも至つて少く、表門の潜戸ばかりを開けた家中は空屋敷のやうに寂として居る。自分は日頃から腹案して居る歌劇の脚本の第一頁に筆を下して見た。其れは「隅田川」と題して梅若丸の事績を仕組まうとするので、水の流れ、落葉の響、葦のそよぐ音などに秋の黄昏の寂寞悲哀を示す短い前奏を聞かせた後は、伊太利近代の歌劇作家 Mascagni の Cavaleria Rusticana にならつて、幕を引上げない以前に、濁つた流れに終日絲を垂れて居ても魚はつれないと云ふ貧しい漁夫の歌を獨唱させるつもりである。然し自分には書き馴れない韻文の事で、歌ふべきメロデー

だけは既に頭の中に出來て居ながら、午前中にたつた二三行しか書き得なかつた。其れでも自分は新しい年の朝に新しい仕事の幾分かに着手し得たと云ふ事だけて、何よりも嬉しく何よりも幸福てあつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

一月二日――去年箱根て胸中を談じた宇田流水が長い手紙を寄越した。恭賀新年の語を聞く毎に堪えざる寂寞を感じ候と云ふ書出して、年の進み改まる毎に明治の生活は淺薄俗惡になつて行く。年の進み改まる毎に彼は其の避難所なる江戸時代に向つて退隱して行くと云ふやうな文字が痛切に讀まれた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

一月十日――伊太利大使夫人の應接日てある。歸朝の折同船して來た同國の書記官ガル・ピアニ氏の紹介て、自分も二三度「午後五時」の茶會に呼ばれた事がある。西洋人の眼には定めし、自分も立派な家柄の貴族に見えたのてあらう。成程自分の父は維新の際に功勞があつたとかて早く男爵に敍せられ、其の後は世の所謂伴食大臣になつて居た爲めに、當時の內閣大臣一同の敍爵につれて子爵に昇つたのは事實てある。然し自分は西洋人の口から若き子爵閣下よなぞと呼びかけられると、其度に何と云ふ理由もなく冷汗の出るやうな氣がしてならない。貴族などゝ云つても日本人はあなたの國の靴師よりも貧乏な位だ。大臣は政府から特別の手當を貰はなければ馬車にも乘れないのだと、正直に種を割つて說明してやりたい位、心の中に國家全體の假面に對して一種の痛苦を感ずる事がある。同時に又、自分は祖國の社會狀態の亂雜不整頓を目擊しつゝ、外國人から日本の時事問題なぞを質問されると、何とも返事の出來

ない迷惑を感じるので、敢て其れ等が直接の原因と云ふてもないが、自分は二月三月とたつ中に折角紹介された大使館へも自然と足を入れぬやうになつて居たのである。

二三日前ガルビアニ氏は佛蘭西文の手紙を寄越して、漫遊のある音樂者が大使館でヴィオロンを演奏する旨を傳へて來た。自分も音樂を專門に研究する身の直ちに返書を送つて其の日の來るのを待つて居た。から云ふ事には何時も無頓着な日本の新聞紙はまだ何等の報道をもしないらしい。

自分はフロックコートに久振りのシルクハットを冠り、車を霞ヶ關に走した。平日は午過の晴れた日にても、門内に敷詰めた小砂利の上に馬蹄や車輪の跡もなく、鳥の聲ばかり聞える靜な大使館の玄關前には、已に二三臺の馬車の待つてゐるのを見た。呼鈴の音と共に現れる日本人の Valet に案内されて直樣廣い客間に這入ると、高い天井、眞直な壁、平な敷物、重々しく垂下る窓の窓掛に、室內一體の沈靜した明い空氣の感覺が、日本の邸宅では決して味はれない靜肅整頓の快感を呼起す。この道具立に取巻かれて、華美な帽子を冠り、繻子や天鵞絨の裾を引く外國の婦人が、各自異る自然の姿態を作つて、或は椅子に或は長椅子に席を占めて居ると、一樣に眞黒な服裝の男子は、隨意彼方此方に直立して、何れも純化された技巧的の中音で勝手に雜談して居る。其の人聲の中には少しの遠慮もない甲高な女の笑聲も聞えて、いかにも自由に、樂しく、心置きなく見えながら、其れて居て些かの喧しい亂雜をも來さない。自分はいつも微妙な調和の美を保つ外國人の會合に赴くと、社交と云ふ共同生活は、個人的私生涯から離れた技巧的生活の舞臺面である事が能く了解されて、自然と自分も、かゝる舞臺に出る以上には、少

くとも人に不快を與へない任務を帶びて居る俳優であるやうな心持になる。

主人の大使と大使夫人は來客の婦人連に對する應接に急しい最中、自分は傍に居たフランスの海軍士官と最初に會話を交へた。其處へ今日の席上では一番懇意な書記官のガルピアニ氏が加はる。やがて大使の夫人に挨拶の機會を待つて自分は同時に二三の婦人と話しかけたが、其の時には已に再會の握手をして席を立つものもあつた。其の人達を客間の戶口まで主人の大使が送り出して居た時に、自分は意外にも裾模樣の三枚重を着た令孃らしい日本の婦人が、誰の眼にも米國人と知られる髯のない老人と其の妻らしい婦人に連立つて這入つて來るのを見た。令孃は少しも惡びれる樣子なく、而も自由な佛蘭西語で大使の夫人と挨拶する。自分は猶更驚いて思はず其の顏を打目戍つたが、折好くも身近に立つて居た其の場の機會で、自分は大使の夫人から、「此の方もあなたと同じやうに半分歐羅巴人になつた方です。」と紹介された。

手紙に書いてあつた來遊の音樂者が、此時來客との應答を辭して室の片偶に据えられたピアノの上からヴィオロンを取上げた。伴奏のピアノに着いたのはガルピアニ氏自身で、呟く如き短い前奏につゞいて、ヴィオロンは直樣泉の流るゝ如くに響き出す。

「何と云ふ曲で御在ます。」聞き澄しながら令孃は窃と自分の耳に囁いた。自分は、

「Schumann の Humoresque」

默つて輕く禮をした後、令孃はぱつちりした眼を充分に睜つて遠い處の見えない物の影を見詰めるや

うに瞬きもせぬ。音樂に惱ませられる若い女の眼の輝きほど美しいものはない。自分は歸朝して以來初めて日本の婦人に對して外國の女詩人の畫像などに對すると同樣の感動を覺えた。つまり外形容貌の美に打れると共に、直ちに何の理由もなく其の人の思想知識、凡ての人格に對して深い敬慕の念に迫められるので、自分は音樂がすむと其れに對する賞賛の會話、其の他の機會を逃さず、何や彼やと心の行くかぎり令孃と話をして見た。て、自分は先方に對して自個の地位思想の幾分を傳へ得たと同時に、令孃の身分と云ものは現代富豪の一二に數へられる某銀行の頭取の長女で、幼い時分から天主教の女學校で教育されたる事をも知り得た。其れのみならず自分はやがて、來賓の一同が大使館を辭し去る折には、今日令孃と同道して來た米國人フォート氏の邸宅で、此の次の火曜日に再び面會しやうと云ふ約束までした。

* * * * * * *

一月十五日――男と女とが偶然に出會つて、其の後男の心の中から其の女の事が不思議と消え去らずに居る、此の精神の狀態を戀の第一歩とするならば、自分は已にかの令孃を戀して居たと云はねばならない。自分は實際待ち焦れるやうにして今日と云ふ約束の火曜日を待つて、築地なる米人フォート氏の邸宅に赴いた。フォート氏夫妻は五年程も日本に居留して佛像の研究にまださして老いもせぬ半生を樂しんて居る。其處へかの令孃は天主教の佛蘭西女學校を出た後英語の會話を學びたい目的で半年ほども寄寓して居るとの事である。自分は家へ歸つて來てからも他愛なく其の日の事を思返したが、同時にフォート

氏夫人の弟だと云ふ二十三四の若い青年がまるで兄妹のやうに親しく令嬢と話して居る樣子をば、殆ど何の理由もなしに羨しく思つた。自分は戀しないまでも、毎日同じ食事のテーブルでかの青年の樣に令嬢と會話して居たい。現在の自分の生涯は餘りに退屈である。餘りに淋しさを感じ過る。あまりに周圍の空氣が不快でならない。あゝ此れに對する慰藉として自分は今、日本中にかの令嬢より外には何物をも見出し得ないやうな氣がする。語學の練習法としてお互の文通は英吉利文か佛蘭西文にのみ限ると約束したのを幸ひに、自分は明日と云はず其の夜早速に手紙を認めた。春子と云ふ令嬢の名までを、Mademoiselle Printemps と飜譯して、

日本に歸りて以來小生の最も幸福なりし一日は貴孃と語り興じたる今日の午後に有之候。最初伊太利亞大使館にてお目にかゝりし時、貴孃の如くに半ば歐洲化したる人として小生を紹介されし同國大使令夫人の言は如何に嬉しく我が心に響き候ひし。然り、若き我等は血液に於いてのみ純然たる日本人に候へ共、思想に於ては最早や古來の因襲の何物にも捉へられざる輩に御坐候。小生は小生と同一の人種中に貴孃一人を見出し得たる事を以て、小生が生涯の最大幸福、最大光榮と信じ候。今日貴孃の語られたる談片中には小生の永久忘れ得ざる處のもの多く御坐候。貴孃は何が故とも知らされど春の花と云へば、我等の祖先が讚美したる朝日に匂ふ櫻の花よりも、外國の詩集にてのみ知る Lila の薫をなつかしく思ひ、鳥の囀りと云へば梅の木に鳴く鶯よりも、南歐の五月の夜に聞くと云はるゝ駒鳥にあこがるゝと申され候お言葉は、小生に取りて如何に意味深く、如何に悲しく聞

え候ふか――

自分は此の邊で長たらしく日本の樹木と西洋の樹木の姿を論じ出した。丈が低くて枝が刺々して幹が捻曲れて居る日本の樹木よりも、セーヌの河畔に立つ白楊樹は Corot の名畫にも描かれた通り如何に優美溫和に見えるであらう。日本人が昔から不朽なる光榮の表象とした「松の老木」よりも、唯だ一語 Linden(菩提樹)と云ふ獨逸語は、何程無限の感想を呼起すかと云ふやうな事から、古來からの東洋思想の壓迫に堪え得なかつた吾々には、自國の歷史傳説などは殆んど其の權威を失つて仕舞つたことを附足した。

……武藏坊辨慶とは如何なる英雄なりしか。楠正成とは如何なる將軍なりしか。吾々は其等自國の歷史的人物に對しては全く其の字義通りに唯だ「隔世」の感あるのみに御坐候。今日の吾々が愛國武勇の熱情に感動するは、餘りに傳奇的に、餘りに敎訓的に、神聖視せられ、理想化せられ、偶像視せられたる日本歷史中の人物の感化にあらず、彼等に比較すれば甚だ卑俗なる、甚だ女々しき、要するに甚だ人間らしき Washington や Hugo の傳記に打れたる結果に御坐候。

最後に再び令孃に對する讃辭を數限りなく書き連ねて、自分が及ばずながら將來の國民音樂を起さうとする過渡時代の犧牲にならうと云ふ、其の覺悟を眞底から了解し同情して呉れる日本人は、誤れる方向に指導せられやうとして居る現代に於て、令孃唯一人であらう。其て自分は心から滿足して居ると云ふ事を以て全文の結尾となし、猶最後には貴孃の手に接吻すとまで書き添へた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

一月十七日――令嬢春子からの返書を得た。實は一昨夜手紙を書終つた時には、一瞬間も早く返書に接したい爲めに讀返す暇さへ急いで其れなり郵送して仕舞つたが、後になつて考へて見ると、一時の感激に任して、婦人に送る最初の手紙としては餘りに「わが愛する君よ」と云ふやうな文字が多過ぎたやうで、少からず不安の情に苦しめられた。然し苦められただけに自分は、封筒の上書きだけ日本字で書かれた令嬢の返書に接した瞬間の喜びは、全く言葉に現せない位であつた。自分は洋劇の舞臺で見る戀人が愛するものゝたよりを讀む時のやうに、室の中央に立つたまゝ二折りにした少い紙片を兩手に持つて、滿腔の感激を出來る限り優しい作り聲の中に沈壓させて、Tsukiji, le 16 janvier—Cher Monsieur と日付まで落さずに朗讀した。

うるはしき佛蘭西語もて綴られたるお手紙はいたくもわが心を動し候。拙きわが文御覽に入れ候は誠にお恥しき次第に御坐候。されど我が身には萬葉ぶりの大和言葉より使ひ馴れぬ外國語が何となく、わが心のさまを偽らず飾らず又意味深く強く云ひ現し與るゝやう思はれ候。もし語格上の誤りも候はゞ御教示のほどお願ひ申上候。まこと貴兄の云はるゝ通りわれ等は哀むべき思想上の追放者に御坐候。言語文字まで自國のものより外國のものを愛すると云ふ國民は世界中何處にも無かるべくと存じ候。

令嬢はフォート氏夫妻が何故にかくまで日本の骨董品を愛玩するか其の理由が分らない。我々は西洋

にあこがれる。西洋人は日本をば此の上もない美しい夢の國だと獨斷して居る。人間は自分より遠かつたものを愛する自然の性情の至す處であらうかと論じて、

わが身は昔の人の云囃せし日本の三景、松島、嚴島、天の橋立を見ずとも、左程殘念に存せず候へども、人と生れし上にはいかにもして一度は折を得て、アルプの山と地中海の水の色を見たく存じ候。それ等のお話うけたまはるだけにても、此の上なき樂しみに御坐候へば、いつにても午後に御出て下され度く、フォート氏も日本の事情につきて、いろ／＼お伺ひ致し度き事も有之候由、是非にもお出てのほどお願ひ申候。

自分は其の日の午後再び令嬢を訪問した。

* * * * * * * * * * *

一月二十日――Richard Strauss の新作オペラ Elektra の樂譜と、彼の地に居る時から讀まうと思つてまだ讀まずに居た Bazaillas の著述「音樂と沒我」其の他二三の書物を注文する爲めに丸善書店に出掛けた歸り道、日本橋通りは電柱の行列と道普請と兩側の粗惡な建築物とて想像以外の醜惡な光景に、自分は呆然として却て物珍らしく彼方此方を眺めながら歩いて行くと、偶然にも向うから來掛る宇田流水に出會つた。流水は自分の顏を見ると、胸一杯に蟠つた不快の情を訴ふべき好い相手を見出したと云ふ風て、

「世界中何處へ行つても此樣景色は見られないてせうな。」

「さすがは東洋第一の大都會ですね。」と自分も口輕く冷笑つた。
流水は築地の自宅へ歸る處だからと云つて自分と連立つて一緒に話しながら歩く。取廣げられた往來の石塊や瓦の破片に躓いたり、水溜りに驚いたり、捨てゝある銅線に足を取られたり、亂雜に歩いて來る通行人を避けそくなつたりする度び毎に、自分は歐米の市街の美麗を說くと、流水は文明化されなかつた江戶時代の整頓に對する追慕の聲を放つて、最後には二人一緒に、「現代の日本人は何と思つて居るのだらう。これて立派に世界の一等國になつたつもりて、得意になつて居るのか知ら。改良でも進歩でも建設でもない、明治は破壞だ。舊態の美を破壞して一夜造りの亂雜粗惡を以て此れに代へた丈けの事だ。此れ位の事なら電車にまで通行稅をかけて人民の膏血を絞らないてもよささうなものだ。」と云つた。

然し事實自分等は新時代の市街に對して嫌惡ばかりてなく、同時に多大なる興味をも感ずるのである。新時代の商店の正面だけはどうやら體裁をつくろひながら、歩いて行く中には直ぐ其の側面からは壁の薄さと石材の粗惡が何の心配もなく曝け出してあるので、丁度化け損なつた狐の繪を見るやう、覺えず自分等をして、「明治は誠に無邪氣な滑稽な欺僞時代だ。」と一笑せしめる。此の興味に引かれて銀座通を新橋邊までも歩いて行かうと思つたが、京橋の河岸通から吹いて來る折からの風と共に目も開けない砂烟を喰つて、自分等二人は休むともなく其の邊のビーヤホールに這入つた。客は一人も居ない。命じたビール二杯をば眠むさうな顏した女中が、恐しく手間取つた後やうやうに草履を引摺りながら持つて來

る。二人とも默つて、しみだらけの鼠色になつたテーブルクロースに肱をついて、ペンキの剝げた窓の曇つた硝子戶から、電車の通る每に地面一體がぶる〳〵震へる街の混雜を見下して居たが、流水は何か深く決心した處があるやうに自分の顏を見て、

「日本人て今日の時代に心底から滿足して居るものがあるだらうか。」と質問した。

「それは有るだらう。吾々が堪へられない程不快に感ずるだけ、此の機會に乘じやうと急り狂つて居るものが無くてはならない筈だ。社會の現象、時代の傾向は國民大多數の心理を示すものだから、つまり斯う云ふ風な表面の體裁ばかり扮つて居る市街の外觀は、一個人の生涯とすれば恐しい道德の廢頹だと思はなければならない。」

「君は明治の國民として一生涯をどう云ふ風に送つて行くつもりで居られる。」

「極端に云へばもう疾うに憤死して居なければならないのさ。それが何の彼のと不快ながらに斯うして生きて居られるだけ、自分も惡時代に生れた感化を受けて居るのだと思ふ。僕は强ひても然う云ふ事は考へまいとして居る。Prosper Mérimée と云ふ文學者は決して人道其のものを厭み輕んずるのではないが、然し自分だけは苦しみ惱む人から隔離して居られるだけ富裕でありたいと云つたし、Ibsen の劇の Hedda はあらゆる醜いものを我より遠ざけよ。と云つて居る。一般に對して絕望した一個人の取るべき道は「超然」と云ふ事のみだ。高く淋しい冷かな貴族的態度を取るより外に方法はない。」

「伯夷叔齊を夢みるのだね。」

「さうさ。國家と云ふ團體は國民多數の赴く儘にして置くより仕樣がない。法律は寛大なものだから、一個人が國家の現在將來を憂うる赤心の有無については干渉しない。君は現代を離れて過去の文明に遊ぶし、僕は海を隔てた他國の藝術にあこがれて居れば、國家は安心して、直接にかの熱烈な反抗の赤旗を立てゝ騷ぐ人達に對するほど迫害はしないさ。」

食卓を二三度續けざまに音高く叩いて女中を呼ぶと、暫くしてから階下の方で「お二階のお客樣だよ。」と云ふ亭主らしい聲がして、漸くの事で女中が來た。一圓紙幣を渡して勘定をして貰ふと、これが又驚くほど手間取つて剩錢を持つて來た。冬の日は早くも暮れて見渡す街の上には電車の柱につけた小さい電燈やら、道端の瓦斯燈やら、さま〴〵な燈火が高く低く入亂れて引續くのと、鋭い冬の星が寒さうな光を放つ夜の空に不揃ひな屋根の影、恐しく太い電信柱の影が突立つて居るのとで、差詰め Grand Boulvard とも云ふべき都會の大道が、自分の眼には倉庫の暗い陰に荷汽車が亂雜に置いてある停車場の裏手のやうに見えた。然し流水は京橋を渡りかけた時、荷船の灯が見える靜な堀割の水を眺めて、

「僕は堀割の景色が大好だ。東京も此れあるが爲めにやつと市街の美を保つて居る。堀割ばかりではない。要するに東京の市街が今日一國の首府らしい美麗と威嚴を保つて居るところは、宮城を初めとして皆江戸人の建設によつたものばかりだ。僕は時々、眞誠の野蠻と云ふ事は明治のやうな時代を云ふのぢや無いかと思ふ。西洋でも電氣や汽車を發明した近代と云ふものは皆明治のやうなものか知ら。君はどう感じて來られた。」

「其ア近代と云ふ事と美麗と云ふ事とは、どうしても一致しにくい處はある。然し僕の見た處では西洋と云ふものは何處から何處まで盡く近代的ではない。近代的がどんな事をしても冒す事の出來ない部分が如何なるものにもチヤンと殘つて居る。つまり西洋と云ふ處は非常に昔臭い國だ。歷史臭い國だ。巴里は新しく地下鐵道や空中飛行船を作つたばかりでない。Sacri Coeur のやうな大寺院をも造り上げやうとして居る。一方で製造所を作れば同時に一方では千載に殘すべき實利以外の永遠な事業を企てゝゐる。紐育にてさへ竣工無期限と云ふ寺院の足場がコロンビヤ大學の傍に立つて居る位だ。金がないと云ふ事を日本人は唯一の辨解にするけれど、よし金があつたにした處で、日本人には、到底馬鹿々々しくつて、そんな實利以外の考へは起りはしまい。」

「猶太人以上なんだね。」

「猶太人は金が好きだから金を儲る丈けだ。日本人見たやうに、いやにひねくれて、己れを欺いて居る卑屈な國民とは段が違ふ。」

「はゝゝゝは。」

とうとう尾張町まで歩いて、銀座通を左右に流水と別れ、自分は電車の來るのを待つた。電車はなかなか來ない。路傍に待つてゐる多數の男女は夜の寒さに身を顫しながら、動いて來る車の灯を見る事もやと眞直な往來のかなたを伸び上るやうにして眺めてゐたので、一度び巳に乘客を滿載した車が四辻の線路の上をばかたばかた搖れながら進んで來ると、待ちあぐんだ群集は乘り得ない事のよく知れてゐるに

も係らず、無理にも乘らうと爭ふ。まるで絶海の孤島に流された囚人がこの船一艘逃しては一生涯本國へ歸る望みがないと必死に先を爭ふも同樣な有樣である。自分は程なく人のすいた電車の來る事と別に驚きもせず、取殘された人達と猶も路傍に立つて居たが、いや今度こそは眞個に來る樣子がない。「停電だ。」と云ふ絶望の聲が人々の口から寒い風の中に傳へられた。成程來たもの勝負に先を爭ふのも無理はないと自分は初めて感じた。信用の出來ない不完全な凡ての設備に馴らされた日本人は自然と其れに對する方法をよく會得して居たのだ。自分は人力車を雇はうかとも思つたが、又觀察の興味を思返して、小半時間も待つた後遂に一輛の電車に乘り得た。壯士見たやうな風采の醉つた男が一人でぶつ〳〵小言を云つてゐる。其の足元には「へど」が吐き捨てゝある。其れでも乘客は平然として中には心地よく居眠つてゐるものさへあつた。日比谷の乘換場で車掌が田舍ものゝ老婆を捕へて、切符に指定された場所以外で乘換する事は出來ないと云立てゝ、規則を無慘に勵行して居たが、半藏門へ來ると二重廻しを來た薄髯の紳士が、三宅坂で下りべき處を下りそこなつたから、乘戾しの切符を出せと云ふ事から、車掌と爭論を開き、遂に其の姓名を手帳に書き留めて去つた。自分は日本人の性情中には好んで人の缺點を指摘しやうとする恐しい特徵のある事を發見したやうに思つた。正義を名として人の私行のみを曝く日本の新聞紙の態度は社會道德の墮落した結果からではなくて、必然此の如くならねばならぬ一般の國民性に基したのに相違ない……つい此樣事を考へて、自分は危く五番町の停留場を通過ぎやうとして急いで電車を下りた。

* * * * * * * * * * *

一月二十五日――まだ充分に彫琢せねばならないのであるが、兎に角腹案の樂劇「すみだ川」の歌謠だけを書き終つた。朗讀して聞かした上令孃春子の意見も聞いて見たいと、さう云ふ意味の手紙を書きかけた處へ、思ひがけず築地のフォート夫人からの手紙が届いた。寢耳に水の何と云ふ驚くべき事件であらう、春子はフォート夫人の弟なる若いジェームスと相愛してゐて遂に婚約の意志を發表した。其の爲め春子の兩親はフォート夫人の監督の行き屆かない事を攻めて春子を早速實家に引取つてしまつた。其の場の所置が米國婦人の心には非常に不愉快に感じられたので一家は遠からず愛する日本を去りたいとの文言である。自分は夢中で車を走らした。フォート夫人は事情を語る――夫人は單に弟の依賴を受けて姉と云ふ義務と責任を帶びて、春子の兩親に春子が將來外國人に結婚する事を許される意志があるか否かを質問したばかりである。其れをば春子の兩親は已にジェームスと春子の間に何等か卑しい關係の結ばれてゐたやうに、奪ふが如く其の娘を連れて去つた。夫人は日本人の性情の或る部分をどうしても解釋する事が出來ないと云ふ。

自分は出來る事なら日本を辯護したいと思つた。少くとも來遊の外人をして不快な印象を以て日本を去らしめたくないと思つた。然し自分は自分の感情を欺く道がない。日本と云ふ處は曾て高等學校に於て一般の學生が兄と妹との並んで散歩するのをさへ曲解して鐵拳制裁を加へた程の野蠻國である。春子の兩親も日本の國民たる以上には戀愛の純美を肉情以外に認めることの出來なかつたのは蓋し當然の事

實であらう。

「私は國民としては日本の勢力の國外に發展する事を無論喜んでゐる。然し單純な人間としては人間自然の美性を瑕ける危險な東洋的道德思想が國民の政治的勢力と共に他國の人種を犯すやうなことがあつてはならぬと思ふので、米國が California から東洋人を排斥したのは米國人の處置として甚だ正當であると私は信ずるのである。日本は飽くまで日本人の日本たらしむると共に、米國は米國人の米國たらしめたい。」

自分は然う云ふ結論を殘してフォート夫人と別れた。自分は車の道すがら春子の事を思つた。ジェームスとの關係を想像した。然し最初感じたやうなジェームスに對する羨望の情は、自分ながら怪しむほど消滅してしまつて、今では二人の絕望に對する同情の淚に迫められるばかりである。自分が今日まで春子に對して感じて居た熱情は、單に個人的幸福を夢みる兩性間の戀愛とは全く別樣のものである事を始めて悟つた。春子は佛蘭西語と英吉利語とを語り得る異樣なる變り花として自分の眼を射たのだ。自分は春子が外國人を其の戀人に撰んだと云ふ事實を、唯だ々々嬉しく思ふ。賴もしく思ふ。日本にも然う云ふ女性が現れて來たかと云ふ事が、何物にも換へがたい勝利の念を起させる。あゝ春子は遂に日本に滿足しなかつたのだ。虐げられ辱しめられたる日本の妻たり母たる事を喜ばなかつたのだ。自分は全力をあげて此の結婚を成立せしめたいと思つた。それに付いてはどうかして今一度春子に出會つて、春子が飽くまで其の思ふ處を斷行する決心があるか否かを確めて見たい。自分は何れほど熱心に春子の希

望を讃美して居るかを知らしめたいと思つた。然し今日では春子に面會するには其の實家をたづねるより外に道がない。其の子弟に對する猜疑と憶斷に滿たされた日本の家庭に春子を訪問するのは此の場合どうであらうかと躊躇もされる。自分は止むを得ない處から、一先づ手紙を送つて見る事にした。

* * * * * * * *

一月三十日――五日間は空しく過ぎた。春子からの返書は遂に來ない。どうしたのであらう。兩親か監督者のやうなものが自分の手紙を遮つた爲めではないかと思ふと、自分はもう腹の中が煮返るやうだ。日本の青年は信書の自由すら與へられないのであらうか。封建時代の專制主義を取るなら取るで其も決して惡くはない。自分は何も近代の個人主義のみを謳歌するのではない。自分は唯だ日本人が外國に對してはいやに體裁よく近代的文明を見せびらかして、例へば日露戰爭の同情を引く爲めには外國に向つて、妙に取り立てゝ日本の軍人中にもクリスト信者の多い事を申譯らしく廣告しながら、外に見えない處では依然として舊弊を固持しやうとして居る、其の僞善的態度を自分は憎むのだ。若し止むを得ない方便として假面を冠る必要があるならばもう少し上手に冠つて貰ひたい。直ぐに奥の見えすく山師の玄關は閉口である。野蠻なら野蠻、文明なら文明と、何れにとも心持よく片をつけて貰ひたいのだ。

勉强しやうと思つても精神が昂奮してゐて靜に坐つてゐる事が出來ない。曇つた冬の日は薄暗く、風はないと見えて、障子や戸をゆする例の不愉快な音は幸ひに絕えてゐるが、庭先の樹に集る鴉の聲が殆ど人を狂氣させる程に騷しく、垣根を越した隣の家では――他分此頃に引越して來たものであらう――

以前は絶えて聞いた事のない子供の泣聲が又しても火のつく様に叫び立てる、其れをば泣き止ませる爲めか、又は叱りつける爲めか、何にしても鋭い女親の聲、ぴしやりと手で打つ音、其の度び度びに子供の泣聲は一段激しく高まる。自分はとても居たゝまらず往來へ飛出した。と云つて散歩すべき處もない。堀端を眞直に歩いて行けば、あの不愉快な銅像の立つてゐる九段坂へ出なければならぬと氣がついて、其れを避けるために、自分は急に半藏門の方へ踵を回した。何の氣なしに電車に乘つてから築地に居る宇田流水の事を思出して、在宅か否かは知らぬが兎に角無聊を慰める爲めに彼を訪問した。

すると丁度何處へか出掛ける處で、河岸の狭い借家の潛門で、「珍らしいぢやないですか。別に用事ぢやない。まア上つて下さい。」

「散歩しませう。何方の方へお出てゝす。」

流水は少時躊躇つた後自分から笑出して、「實は飲みに行かうと思つた。」

「一人で……。」

「えゝ。」と頷付いて、「僕は時々一人で飲みに行くです。時々妙に淋しくなつて仕様がないですからね。」

「僕も今日は不愉快で仕方がないから、酒でも飲まうかと思つて居たんですよ。」

「其ア好機會だ。ぢやア一ツ柳橋邊まで出ませうか。」

「この近邊……新橋邊にはいゝ家はないんですか。」

「いくらも有るが、所謂明治的で到底僕等の足を踏入れべき處でない。」

「ぢや、柳橋は餘程保守的なんですね。」

「たいして然う云ふ譯でもないが、然し僕には柳橋と云ふ聲が優美な歷史を思出させるから……。」

「成程トラヂションの如何に因るのだね。亞米利加と英吉利の詩壇と云つたやうな風に……。」自分は高く笑つた後、「君は日本の藝者といふものを能く知つてゐるだらうね。」

「十年も遊んで居るから、まア知つて居る方だらう。」

「そんなに藝者といふものは人をチャームするものかね。」

「どうだか。僕にはもう馴れッこになつて居るから、大して美しいとも思はれない。」

「其れぢやアどうして、君は其樣に放蕩したんだ。」

「僕は花柳界と云ふ一種の社會全體の空氣が好きだから。好きと云ふよりか、尊敬してゐるると云つた方がいゝかも知れん。」

丁度日暮前の電車は何れも滿員で乘れない處から、流水は步きながら自分に語つた。彼が何故に日本の花柳界を愛するかと云へば、最初は無論、單純に女と云ふ事からてあつたが、今日では江戶文明の保護者たるが爲めてある。今日の藝者は云ふまでもなく明治に生れた人間であるけれど、盡く舊時代の迷信惡弊の中に生息して居るもので、其れはつまる處、明治の威光が彼等を感化する事の出來ない事をば氣味よく世間に發表してゐるも同樣てある。彼等は明治の法律では不良の醜業婦であるが、然し一方では今日も猶都會の裝飾として殘つて居る神社や佛寺に對して種々の寄贈品を試みて其の美觀を助ける、同

時に引幕や幟を作つて日本の演劇を奬勵した。一時歐化主義の盛な時代に花柳界がなかつたなら、江戸の音樂演劇は全く絶滅してしまつたであらう。此の點に於て吾々は永久彼等に向つて感謝の意を表しなければならない。

「日本といふ處は實に不思議な國だ。」と自分は流水の話について獨言のやうに呟いた。

「君の議論によると日本文明の精華は社會の不正等な方面から維持されて居たといふ事になる。」

「さうだとも。歴史が證明して居るから間違ひはない。今日から見ても價値のある歌舞伎劇でも振事劇でも三絃本位の音樂でも、さういふものは皆醜業婦を中心とした江戸の下層社會から生れたものだ。そも〳〵の根本がさう云ふ次第なんだから、僕は明治の今日になつても文藝が政府から社會不良の分子として取扱はれるの無論當然の事で、又其れが日本文藝界の特徴だらうと思ふ。この頃の文學者は西洋にかぶれて文藝を高い品位のあるものにしやうとして居るが、僕は全く無益な事だと思ふね。」

「どうして。」

「どうしてと云つて、出來ない事を出來るやうに思つたつて始まらない話だから。平民は平民、貴族は貴族と物事は萬事生れによるものだ。最初の生れが惡いものは中年になつて體裁をつくろッた處で、何處にか昔の生地が出るものだ。」

流水はそれなり默つて卷煙草に火をつけながら、人のすいた電車でも見る爲めか後の方を振向いた。

低い人家の軒にはもう灯がつき初めて、曇つたまゝに暮れて行く冬の空は、西の端ればかりが黒い瓦屋

襟の上に色もなく光つて居る。自分は口に出しては云はなかつたが、眞正の藝術の意義は流水の絶望してゐるが如く日本の國土には遂に解釋せられずに終るのかも知れない。自分は歸朝の途中にアラビヤの沙漠を眺めた時、開拓好きの英吉利人、機械の萬能を信ずる米國人、彼等は何故にこの廣々した空地に果樹園を作らないのだらう。雨がないなら機械で雨を送ればよいぢやないか。日光が餘りに强ければ無邊の天幕を作ればよいぢやないか。土地が惡るければ他國から沃土を運搬して來ればよいぢやないか。然らば此處に青々した樂土を作る事が出來るだらうと思つた。日本から眞正の詩人を出さうと云ふのは、つまり此れ等と同樣の難事ではあるまいか。國民の性情や社會の狀態に乖り乖つた上句の果てに無理やりに作出さねばならぬ不自然の大事業であるまいか。成程勞して功なきもので有るかも知れない……

「大分くたぶれた。車に乘りませう。」流水は堀割にかゝつた質粗な鐵橋の手前で再び立止つた。直樣人力車を呼んで、流水は先きに車を走らせる。其の後から自分は獨りて猶も思ひつゞけた。

自分は西洋の藝術が日本の國土に移し植ゑられたにした處で、果して其れが爛漫たる花を開き得べきものか否かを考へた。これは久しい以前から自分の心中に往來して居る問題で、今に始つた事ではない。巴里に居た時留學して居る畫家某氏の云つた議論が今だに思出される。氏は日本人の女の顏ばかりは到底表情深く描く事が出來ない。もし表情のない寫生其まゝを見せれば、寫生としてだけの價値は保てやうけれど、例へば諸君が Giaconda の畫像に對する時の如き神秘高雅の空想に打たれるは全く不可能である。いくら我々は洋畫を研究しても一度び歐洲の地を去れば、忽ち描くべきモデルを見出す事が出來

なくなる。我々日本の洋畫家が島田や銀杏返の女の裸體畫に成功しない限り、洋畫は日本の生活とは一致しないものだと云ふやうな事であつた。

自分は三絃とピアノと其の何れが果して日本人の情緒を最も適切に描し得べきを疑つてゐる。今夜流水が招いて呉れる藝者の音樂を、自分は熱心に聞かねばならぬと思つた。

* * * * *

二月五日――葉山の別邸に父を訪ねた。玄關からは上らずに柴折戸を潛つて庭へ這入ると、鼈甲の大きな老眼鏡をかけた父は白髯を撫でながら、椽側の日當りに腰をかけて唐本を讀んで居られたが、自分の姿を見ると、何より先きに、去年來た時よりも庭の石に大分苔がついたであらうがと云はれた。庭はさして廣いと云ふではないが、歩むだけの小徑を殘して、一面に竹を植ゑ、彼方此方に大きな海岸の巖石を据ゑ立てゝ、其の傍には陶器の腰掛を並べた。振向くと十疊の坐敷は新しい疊の表ばかりが妙に廣々として白く光つて、其の片隅の床の間には、何處かの古碑から寫したらしい石摺の掛物がかゝつて居る。盆栽の梅が置いてあつて、其の傍には唐本の套が二ツばかり重ねてある。明け放した襖越しに見える次の間の書齋には、敷き延べた毛氈の上に唐紙の卷いたのが載せてあつた。椽側近くに置いた古銅の手あぶりから盛に香の薫りが流れて來る。

「東京はまだ寒いか。」と父は唐本の間に眼鏡をはさんで下に置いた。蟲の喰つた表紙に杜詩全集と書いたのが僅に讀まれた。

「風が吹くと夜なぞは随分寒いです。」

「梅はまだ咲かないか。百花園なぞへは行つて見んか。」

「向島てすか。行きません。」

「日比谷の公園なぞへは大分若い人が行くやうだな。世の中は代つたものだ。昔は詩佛老人が東西南北客爭來といふ聯を書いた百花園も、どうやら維持が出來んて寶物になつとるさうだな。」

「日本の名所古跡は皆な破壞されて電車道になるんてせう。情けない國です。」

自分はさう云つて白髯の父を見た。百花園の問題は自分には別に何等の感動も與へないのてあるが、自分は父に向つて日本の現在に滿足しない事を知らしめ、合點せしめて、其れから段々話を進ませて自分はいかにもして再度の外遊を企てたいと思つて居る、其の計畫に贊成の意を表はして貰ふ下心てあつたのだ。一年ても二年ても、若し滯在費の支出を仰ぐ事が出來ないなら、一般の苦學生が取る樣な方法を敢てするも苦しくはない。自分は唯だ一言、老父を殘して外國に去つてもよいと云ふ承諾を得たいのてある。然し父の話は一向に自分の思ふやうな壺に嵌つて來ない。父は其の心の根底に、功成り名遂げて身退くと云つたやうな大きい滿足を感じてゐると同時に、退いた後の世間に對しては、乃ち白眼を以て此れを看る、極めて冷靜な唯我主義の態度を取つて居る人だ。自分はいくら熱烈な雄辯を振つて、墳墓の地に住む事の不平を訴へた處て、相手の心を動す事は出來まいし、と云つて、此の儘無爲無能に父の財產を坐食して居た處て、自分の父は世間の親のやうに報恩と云ふ收穫をば急いて其の子から得やうと

急りはしない。

「もう二三年行つて來たいですな。」

自分はどう云ふ返事を聞くかと思つて、突然に切り出して見た。父は更に驚く樣子もなく、椽側に置いた杜詩全集を再び膝の上に取上げたが別に讀むでもなく、

「西洋はそんなに面白い處かね。」

「面白いです。」力を入れて云つたものゝ、自分は其のまゝ二の句がつげなかつた。燃え切つてしまふ前に火鉢の香は青い煙をなびかして一段高く薫り渡つた。

其の時庭の柴折戸を開けて、父よりはもつと年取つて居るらしい老人が、質素な綿服に夏中海水浴で冠る麥藁の帽子を冠つて、弓の折れを杖にしながら這入つて來る。來るが否や、「いゝ薫りです。」と云つて心安く椽に腰をかけて香の話をし出した。

「倅が上海に行つて居りますので、いつも取寄せて貰ひますがな、香にしろ、筆墨にしろ、何に限らず日本のものはどうも雅てありません。」

老人は父の讀んで居た唐本を覗いて見て、此の頃盛んに朝鮮から賣物になつて來る古本の話をつゞけた。

「詩集ばかりはどうして唐本でないと讀む氣になれない。妙なものです。はゝゝゝは。」と父は答へて笑つた。

其客の老人は近頃愈曲園の題書を手に入れたが日本の表具師に頼むと何となく俗にして了ふから困ると云ふ事を語る。自分は席を辭したまゝ、海邊の冬の日の暖かさに家へは上らず、獨りて海の方へと歩いて行つた。

靜かな砂道の兩側に、四五軒づゝ並んだ漁師の家の草屋根の上に軟い日光は何とも云へぬ平和な光を投げてゐる。人は一人も通らない。松の林の彼方に幽な波の音がして、眞青な海は間もなく曲つた木の幹の間から見え初めた。處々に大きな岩が立つてゐる。自分は直ぐと地中海を思出した。今目の當り見る景色が其れに似て居ると云ふのでは決してない。明い日光、青い海、赤い岩……と自分が勝手に考へ出した名詞其のものが、南歐の風景を想像せしめたからである。自分は最早や何事に限らず、一度び外國語によつて外國の藝術を通して見た後でなくては、自國の風物人情の凡べてに感動する事が出來ないのだ。Banlieu と云ふ外國語を發音すると、千住や新宿や、凡て街はづれの景色が何となく床しく思はれ、inn とか auberge とか云ふと田舍の宿屋も惡くないと云ふ氣になる。「散歩」「晩餐」「晝過ぎ」「五月」「暖爐」「夕の鐘」など云ふ日本語が、若し一部の若い日本人の心に何か知ら訴ふる處があるとするならば、其れは日本語の發音が有する力からではない。

自分は今喜んで松の木陰に腰を下して海を眺めた。然し斷つて置く。自分は謠曲の「風早や……」と歌ふ文句を思出した爲めではない。Massenet の音樂に「松の木陰」と云ふ短い Poéme symphonique を聞いて感じた事があるからだ。

自分は實に自分を疑ふ。日本の種屬全體の運命を危む。老いたる自分の父は、老いたる來客と共に、冬の日光の下て、漢學から得た支那趣味の閑談淸話に耽つてゐる。自分はいかに外國の藝術に迷つてゐる

ても、猶古今集の幾首かを暗記してゐるが、維新の改革に勳功のあつた者の中には漢字以外に何物も知らない人が尠くなかつた。漢字趣味は廢れて西歐趣味が此れに代つて勢力を得たが、何人も今だに「日本」と云ふ Originalité を求めやうとするものは無い。求めても日本には Originalité がなかつたやうな氣がしてならぬ事すらある。

自分は松林を出てから歸り道に、この頃に讀んで見た D'Annunzio の小說 Il Fuoco の事を思ひ出した。主人公の詩人 Stelio Effrena は自分より異つた人種のものは悉く野蠻人てあると云つて、Wagner の音樂を罵り、大に Latin 魂の向上を絶叫したてはないか。Alphonse Daudet は自分の生れた南方 Midi と云ふ語に無限の强い自信をもたせた人て、同じ南方人と云ふ意味ばかりてナポレオン大帝の凡ての人格を判斷しやうとしたと云はれてある。近世の音樂を見れば殊更に、獨逸の Wagner でもスカンヂナビヤの Grieg ても、音樂としての價値生命の如何は全く民族的てあると云ふ一語に盡きて居る。音樂にしろ、建築にしろ、繪畫にしろ、文字にしろ、自分は若し日本の藝術にして飽くまて民族的なるものを求めやうとしたら、果して如何なるものを得るてあらう……

再び庭の柴折戸から別莊に歸つた。見れば白髯の父老は大きな鼈甲の眼鏡をかけて、次の間の書齋一面に廣げた唐紙の上に、太い筆て大きな象形文字を書いて居られた。村の富豪から依賴されたのだと云ふ事てある。

* * * * * * *

二月十五日——何の氣なしに新聞を見ると高佐君の著書の廣告が大きく出て居る。『市街美論』としてある。巴里にゐた頃高佐君は自分に向つて、日本人の歐米旅行記、觀察記、漫遊記のやうなものも此れ

までに隨分澤山出て居るから、自分の洋行土產としては純然たる審美學者の立脚地から世界都市の外觀美を論じて見たいと語られた事がある。この書は乃ちそれに違ひない。自分は急に當時の事を思ひ出して、高佐君の顏が見たくなつた。サンゼュルマンやヴェルサイユの庭を二人して步いた時の話がして見たくなつた。午後になるのを待つて、西片町何番地何號へ車を命じた。

自分は坂を上つて本郷と云ふ一區域の空氣をかぐと、必ず一種の反抗を感ずる。元氣のない顏をした書生が、迷つた羊のやうにぞろ／＼步いて居る。髮の毛をぼう／＼させた女學生が、後から物に追はれてもする樣に、おど／＼した眼付で人家の軒下や溝際を俯向きながら步いて行く。これが新しい時代を作るべき新しい國民かと思ふと自分は實に厭な氣がしてならない。高等文官試驗を生涯の唯一の大事件と心得て居る男の學生、三面記事の犧牲になりはせぬかと人の評判ばかり苦に病んでゐる女生徒、何れにしても「自己」のない影のやうな幽靈である。車が大學の門前を過ぎると、自分はもう一度十年前の憤慨の歷史を追想した。よく世間に傳へられる陋劣な敎授連の內訌を想像した。そして自分は高佐君と云ふ人はどうして此の腐敗した空氣の中に、かくも平然と不平なしにやつて行くのかと不思議に感じた、尤も高佐君は西洋にゐる時に、世間のつまらぬ不平や不愉快を忘れるには學問に遊ぶのが第一の方法であると云はれた事がある。留學中の生活を見ても、高佐君はいつも自分と云ふものすらを客觀的に眺めて居て、凡ての矛盾を心配なしに味はつたり解剖したりして行く人であつた。巴里の七月塔の下では、Révolution と云ふ語は其の發音が音樂的刺戟を人に與へると論じながら、ヴェルサイユの蕭然たる庭苑を眺めると忽ち王政は美しいと叫んだ。彼の國の大學に呈出する爲めに、宗敎的悲哀美を論じて人生最高の理想的生活は寂寞たる放浪漂泊の生涯であると云ふやうな草稿を書いて居た時にも、實際の生活で

は、晩餐を食ふ時には妻君が居ないと寂しだものとい嘆じて居られた。

いつも尋ねにくい西片町の番地を尋ね當ると、椽側で七八ツの愛らしい令嬢を相手に遊んで居た高佐君は、優しい微笑を以つて自分を迎へて呉れた。自分は早速新刊の書物『市街美論』の事を話すと、「つい、お送りしませんてした。こんなものです。」と云つて、氏は次の間からクロース製の一部を持つて來た。

「いつか佛國でお話した時とは大分全體の調子を變へて通俗にしてしまひましたよ。序文だけは然し振つたものです。」

自分は書物を手に取つて小聲で讀み出した——日本の首府も電燈や電車や銅像や煉瓦造りや鐵橋などに飾られて、歐米第一の都會と同一の壯觀を呈するのも一二年の中であらう。されば自分が今回歐米の各市を巡覽して、其の市街美の比較研究を試みんとするのも全く世間に無用の事ではあるまい。文明の都會は單に人の住む處車の通ずる處と云ふ意味ばかりではない。一國の歴史的光榮と國民の過去將來に對する抱負氣慨の凡てを最も有力に發揮するものである。佛蘭西にとつてはゴチックの寺院の塔が永久に高く市街の上に聳えて居なければならぬものとすれば、日本の都市は到る處、寺院の屋根より高く電柱の丸太を聳かし、電線の網を以て張り詰められねばならぬ。此れは乃ち、日本帝國が文明の爲めに過去三千年の特有なる歴史に告別した悲慘なる苦痛の記念である。黑幕に蔽はれたコンコルトの石像よりも猶ほ悲慘なる記念碑であるから……

「もつと先の方を讀んで御覽なさい。」と高佐君は笑ひながら云つた。

「……雜然たる東京の市街の外觀は云ふまでもなく國民一般の思想の混惑を示すものであるが然し自分

は世人の屢〻論ずる如くに悲觀してはゐない。寧ろ感謝する處が多いのである。何故と云つて、もしこれが西洋であるならば少くも一世紀二世紀を要すべき思想の變化をば自分は僅か五年十年の短時間に見る事が出來るのみならず、全然一致されない幾多の思想を同時に味ふ事さへ出來る。人間の最大幸福は短い一生の間に最も多くの變化と、最も珍奇なものを見る事であるならば、此の點に於て自分は返すゞゞ頑堅保守の英國に生れなかつた事を神に謝する。」

讀み終るのを待つて、『どうです。』と高左君は再び笑つた。

「あなたは實に功妙な諷刺家ですね。」

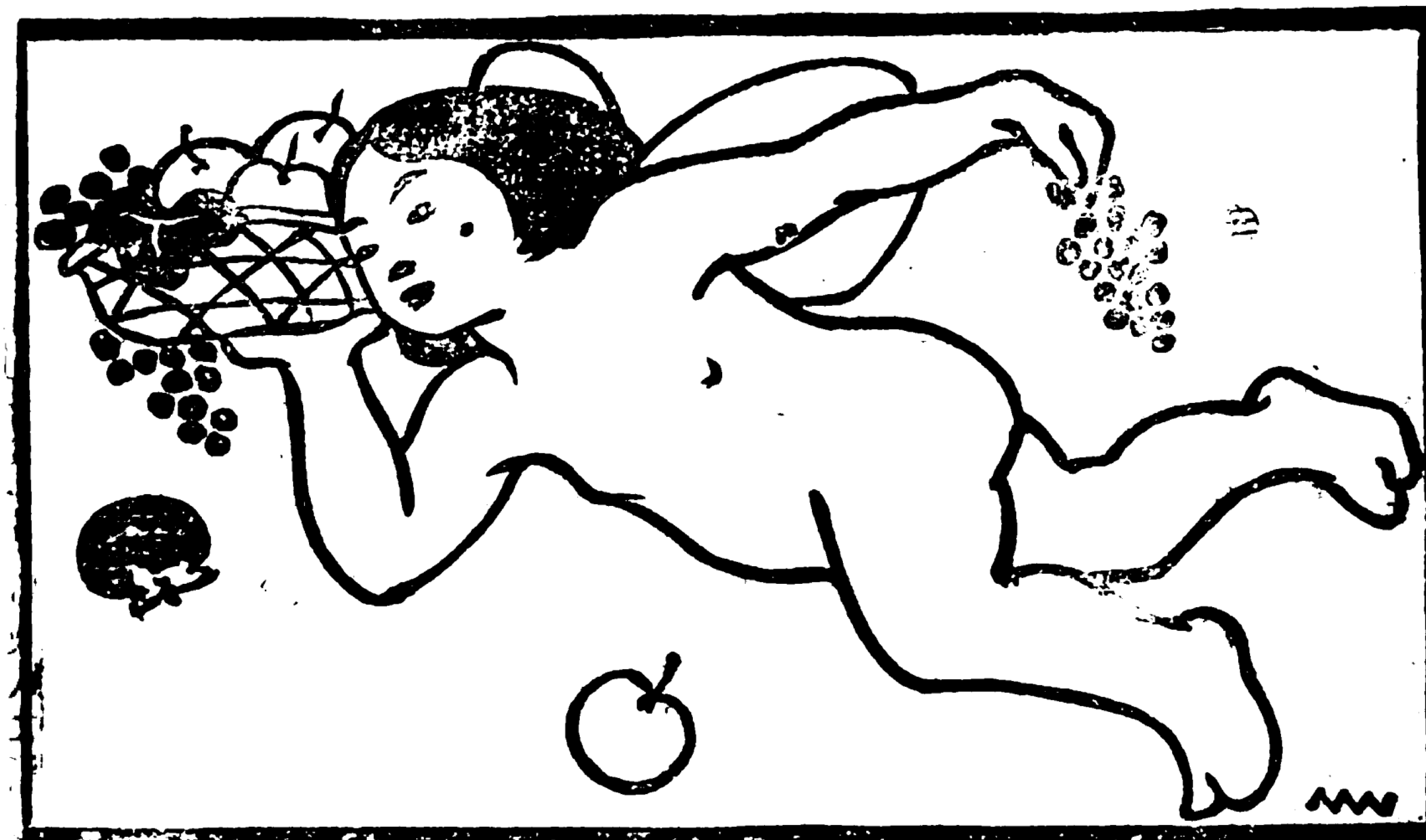
「文部省ぢや大學の教授が書物を出版するのさへ喜ばないんですからね……然しこれなら大丈夫でせう。日本には昔から落首(らくしゆ)だの狂句だのと、比較的に諷刺文學が發達したわけですよ。」

諷刺と云ふ事から Anatole France の事が話題になつて、「人生を觀ずれば觀ずる程、自分は人生に對して諷刺と同情とを證人と裁判官にする必要を感ずる。諷刺と同情とは惡氣(わるぎ)のない相談相手(あひて)で、一ツは微笑して人生を愛らしくさせるし、一ツは涙て人生を神聖にする。」と云つた有名な格言をば、二人は云合はしたやうに感嘆して繰返した。

* * * * * * *

二月十七日――フォート氏の一家はいよ〳〵日本を去るべき由を手紙で知らして來た。先づ印度に赴いて其れから埃及と希臘を巡遊して歸國すると云ふ事である。春子はどうしたのであらう。遂に音信がない……。

（完）



罠（わな）

田山花袋

一

何處の家にも醜惡なるものが必ず一つある。それは寢室だ。モウパッサンの作にもThe Bedといふのがあつて、人生とベットとの關係がいろいろな風に書いてあつたのを覺えて居る。人間はベットで生れてベットで死ぬといふことが書いてあつた。

家庭改良論者も寢室に就いて一考することがあるだらうが、一體何んな風に考へて居るか、それを聞き度いと思ふ。さう言つたら其人達は『串戯を言つては困る』などと笑ふかも知れないが、決して串戯ではない、笑ひ事ではない。

僕は此間それをある友人に話した。するとその友人は變な眼色をして僕の顔を見て――丁度それは僕が何うかしたのぢやないかと怪しむやうな風て、「困るねえ、そんな風に考へては、……體が少し何うかしてるんぢやないか。少し醫師にでもかゝつて見て貰つたら何うだ」と言つてまた僕の顔を見た。

『だッて仕方がないさ、僕はさう感ずるんだから』

かう言つて僕はいろいろなことを饒舌つた。一體本能といふ奴が癪に觸るといふことから始めて、それに服從して平氣で居る人間や、それと妥協して表面で綺麗なことを言つて裏面で汚い業をして居る輩や、わざとすまして悟つたやうな顔をしてゐる意氣地のない人達のことなどを話した。

『結婚の式に床盃といふことがあるが、あれは親が子女の性慾の一種の保證と言ふやうなものだ。あれ位不思議な醜惡な不自然なものはない』

こんなことも言つた。

けれど寢室がなければ人生もないのだ。寢室を撲滅すれば家庭も撲滅しなければならんのだ。情ないが仕方がない。

しかし醜惡なるものは矢張醜惡に眼にも映るし、心にも映る。單に仕方がないて濟ましては居られない。そこで矛盾が起つたり衝突が起つたり動搖が始まつたりする。

夫の床が敷かれる。妻の床が敷かれる。子供の床が敷かれる。これて六疊の間が一杯になる。赤兒ても居れば、それこそみじめだ。何のことはない、悲慘なる人生の縮圖だ。

けれど一體夫妻の關係からして旣にさう出來てゐるんだ。

「妻はあの人でなくては厭！」

「戀しき戀しきわが天使！」

始めはこんなことをお互ひに言合つて、美しい夢を見てゐる。その爲めには世間の義理どころか、十餘年來養育して貰つた親をも弊履のごとく捨てゝ顧みない。その癖、男も女もある滿足を得さへすれば、それでもうさめ心地になるのはちやんときまつてゐる。少し注意して居さへすれば、何日の何時に、かれ等は其の慾の滿足を得たかといふことが歷然として解る位である。『あんな女を戀人にしたのかなア』と言つた風な言葉を乾度男は其時に利くものである。

そして其時から男女の間の悲慘なる關係が續く。離れた心を合せやうとする努力、弱點を押へて平和な美しい家庭をつくらうとする努力、昔の美しい夢を再びくり返さうとする努力――それが皆な空しい努力だ。

けれどこの努力が空しい努力であるといふことが、却つて生殖とか本能とかいふものゝ目的には適つて居るのだ。

僕も妻を持つた二三年は、これでも隨分努力を遣つたものだ。愛情を繋ぐ爲めに心にもない御世辭を言つて見たり、錢も無いのに帶の一筋も買つて遣つたり、緣日に連れて行つて寄席の御つきあひをしたり、食ひたくもないお汁粉を一緒に食べたり、時には社からの歸りに菓子屋に寄つて妻の好きな餅菓子

を買つて來て遣つたりしたものだ。それに初めての子の生れた時には、一廉お父さんになつた氣で、此子が生長くなつたら何うしやうの、海老茶の袴を穿かせて、リボンをかけさせて、天晴小さな女學生に仕立てゝ、一緒に伴れて歩いたら、さぞ好からうの何のとつまらぬ空想に耽つたものだ。それが何うだ。今では、其娘の兒が十歳になるが、その空想の一端でも實行が出來たことか、無類のわからずやのわるあがきをする惡戯ものになつて、女でありながら、男の兒を酷めて泣かせたり、お錢をねだつて外で立食を遣らかしたり、それは見られた態ではないといふ始末だ。

妻だッて矢張其通りだ。子供を産んでから、狀態はすつかり變つて了つた。お互に空想のある中には努力もすれば反省もする。時には恥しいなどといふ若々しい顏色も見せることがあるが、子を產んで、これて一家の主婦といふ地位が定ると、すつかりその樣子が變つて、我儘といふ地金がドシドシ出て來る。つまり女は子を產んで初めて現實に觸れて來るのだ。

その現實に觸れる狀態が女のは一層烈しいやうに考へられる。今まで矯めて押へて居ただけそれだけその反動が強く來るといふ譯なのかも知れない。

社會と自分との關係、自分と夫との關係、自分と子との關係、それが意識されないまでにも、分明と解つて來る。肉慾の上にも覺めて來る。

けれど總て『覺める』とか『自覺する』とか言ふ形は、本能の上から言つて餘り好ましいことではないと見える。『全く覺める』といふことが生存上出來ないのを見てもその間の消息は略々解る。覺めない中に

は、精神がそれを助けるが、覺めて來ると、今度は肉體がそれを助ける。

子が生れると、夫妻の關係は益々肉體的になる。

肉體と肉體――自我と自我、其處に猛烈な悲慘な蠶食狀態が始まる。

子が生れると、夫に對する妻の愛情が游らいでそれに集る。夫などは何うでも好いといふ形になる。尤も女に言はせると、さうぢやないさうだ。子を育てるのに忙しいから、ついさういふ風になつて行くのださうだ。然し、證據がチャンとあるから駄目だ。第一、乳といふものがある。これはまだ子が世の中に出ない中から、十箇月といふもの既に完全な哺乳作用をつゞけて居る。

女には子が腹に居る中から、『自分の子』といふ愛情が知らず知らずの間に成り立つて居る。子は男のものでなくて女のものであるといふ運命はその最初から明かにきまつて居る。

第二に、其子のまことの父親は誰であるかといふことは、女より他に知るものがない。男に取つては、隨分大きな苦痛にもなり煩悶にもなる秘密の鍵をちやんと女に握られて居る。

見給へ、母親が其幼い兒を膝に抱いて、暖かい白い頰を胸に當てゝ、張つて來た乳房を含ませてゐるさまの心地よささうなうれしさうな狀態を。男が保留された本能作用を自由に家庭以外に縱にするのも止むを得ないぢやないか。

二

平凡と單調!

實に平凡だ、單調だ。世の中に何がある。何んな色彩がある。何んな興味がある。餓渴と飽滿、不平と得意、それが本能の力に飜弄されて、人生の表面にさゞ波を立てゝ居るばかりだ。

今日、軍人の弟から久し振で便があつた。

――田舍にかくれて、新兵共の相手をして、練兵場の埃に眞黑になつて暮し居り候――

こんなことが書いてあつた。それを妻が見て、「旨いことを言つて居なさる。もう澤山貯金が出來たでせう」などと言つた。練兵場の埃に汗みどりになつて、號令をかけて一生を暮す軍人も軍人だが、かうした手紙を見てさへ、すぐ金のことを思ひ出す女も女だ。

默つてふいと立つた。

長火鉢のさし向ひもつまらないし、子供をからかつて見たところで、おあづけをしたりチンチンをしたりする犬以上の面白味は得られない。仕方なく座敷に入つて見る。床には依然として布袋の幅が懸つて居て、違ひ棚には鉢の蘇鐵の葉が埃に塗れて白くなつて居る。長押の油繪、水彩畫、どれもこれも皆な同じ見飽きたものばかりで、眼に映るが早いか、頭腦はすぐそれを反撥して了ふ。

「こんなものは無い方が好い。いつそ外して物置にでも藏つて了はうか」

かう思ふが、しかしそれを實行するほどの熱心もない。緣側にある籐椅子に横になつて見詰めて居ると、不思議にもそれが皆な壁と同じものになつて了ふ――壁以上の感覺は起きなくなつて了ふ。そしてその灰色の壁が空の灰色と無窮に續いて居るかのやうに思はれて來る。自分の心も頭も矢張それと續い

てゐる。

頭を石に打付けて了ひたいやうな不思議なイライラする氣になつた。

籐椅子にも安んじて横はつて居られない。

書齋に入らうとしたが、何だか其處に入るのも厭な氣がする。其處にはイブセンやツルゲネブやモウパッサンの幽靈が居やうに思はれる。空の上を飛んでホンチニの沼の臭氣を嗅いだ話や、椅子や家具がグングン鳴つて空を飛んだ話などが思出される。

それに、書箱の中の書が、いつも同じなのが癪に觸つた。イブセンの隣には屹度ダヌンチオがゐる。ゾラと並んでは屹度ドオデエが居る。それが大抵は讀んで知つて居る。何んなことが書いてあるかといふことがすぐ思ひ浮べられる。かれ等が一生かゝつて、小さい眼で世の中を見て、かうして遠い東洋の日本の果ての書齋の中にまで『生きた墓』を築いて居るかと思ふと、情けなくなる。唯の墓でさへ厭だ。青山の共同墓地の割棟長屋を見ると、ゾッとする。それなのに、其の無限の『生きた墓の割棟長屋』を狹い書箱の中につくられるのはヤリ切れないことだと思つた。

死んだら、遺言をして、葬式などはせずに燒場に持つて行つて、骨にして、それをこつそり何處かに埋めて貰ひたい。石碑などは忘れても建てゝ貰ひたくない。すぐ忘れて貰ひ度い。

いつか庭に下りて居た。

梧桐に山吹に芭蕉に沈丁花に椿に櫻——表庭に廻ると、要に糸檜に楓に寒山竹に高野槇にひよろ松——

―いつも同じだ。

敷石の數も矢張十八しかない。

それがまた癪に觸つた。何故いつも同じである！何故いつも同じである！。何故いつも同じである！

長火鉢の傍でせつせと裁縫(しごと)をしてゐる妻に、

「いつも同じ顏(かほ)をして居るなア」

と言つて見た。妻は笑つて、

「また始まりましたね」。

「だッてさうだもの、お前の青い汚點(しみ)のある顏と、餓鬼共の洟を垂した顏と、お金(下婢)の肥つた橫に廣い顏と……あゝあゝもう倦きた！」

「變つた顏を少し見て入らつしやい」

それには頓着せずに、

「よく世の中の人は倦きないなア。同じ顏を每日每日見て、同じことを每日每日言つて、三度の食事も大抵型に入つたものを食つて、よくそれて生きて居られるなア」

かう言ふと、

「だッて、それは無理ですもの、誰れだッて皆なさうして生きて居るんですもの、」

「おやお前などは、さういふ感じは起らんかねえ？」

『起したッて仕方がないぢやありませんか』
『仕方ないだけて、起さないて居られるんだね、』
『え、さうてすとも』
明瞭なる答である。かういふ明瞭なる答を爲し得られる人は幸福だ。罠の中に入つて居ても罠と知らずにはまつて行く人間が羨ましい。
本能萬歳！

三

屋敷町――
垣と門とて家々が出來て居る。其間を大きな通や小さな路が縱横について居る。朝に夕に豆腐屋のラッパの聲が聞える。流行のバンバンバンも聞える。
大小の別はあつても、門に玄關に居間に座敷に書齋に臺所に厠。座敷には額や幅物が屹度懸つて居る。居間には屹度簞笥や服簞笥が置いてある。長火鉢も置いてある。其前には夫と妻とが坐つて、茶を飲んだり菓子を食つたりする。時には感情の衝突などをすることもある。
貸家を建てる時、大家は
『此の間と此間とは通れるやうにして置かなければ不自由だ。客が來ると第一困る。それに臺所と茶の間とを今少し接近させなければ具合が惡い。それに何處の家にも老人といふものが居るものだ。一つ離

れた間をこしらへて置かなければいけない」

こんなことを言つて、成たけ便利の好い借手の早くつきさうな家を建てる。

盗賊はたま物を盗む目的て、この家庭といふものを研究して居る。新築の家があると、夜、こつそりとそこの構造を見て歩く。

人間の種類から言へば、夫に妻に子に老人に下婢、室の構造から言へば、前にも言つた座敷に居間に勝手、ちやんと人間の家庭の型が出來上つて居て、其時間時間には、何處の家でも皆な同じやうなことをして居る。

かう考へて來ると、寢室と人生とがまた思出されずには居られない。

僕は家屋の中から庭に遁れる。庭から門外に遁れる。門外から野に遁れる。

野も矢張穹隆の型に入つて居る。

泣いたッて叫んだッて駄目だ。

四

毎日通ふ路に若夫婦の肴屋が住んで居た。

此家屋は四軒長屋て、向ふの隅がその肴屋の若夫婦、其隣が西洋洗濯、其隣が八百屋、また其隣が鷄を飼つて、『生立(うみたて)たまごあり』などといふ看板を出して居る。

此處は二三年前まで田だッた。今、髯の立派な軍人や、ハイカラな洋服を着けた會社員や、菫色の袴に

靴を穿いた女學生などの通る大通は、田と田の間の細い畔道であつた。小川に架けた橋も丸太を二本並べたきりで、夜など危なくつて通れなかつた。それが段々開けて來た。高臺が屋敷町になるにつれて向ふの高臺の屋敷町との連絡上から、その低い田が埋立てられて貸地になり、やがて繩が張られて貸家が建つた。

其貸家は久しく空いて居た。

人間の移住して來る狀態は、餌のある處に集つて來る蟲や鳥と同じことだ。高臺が開けなければ其田は埋め立られない。屋敷町が開けなければ其長屋は建てられない。魚類の必要があつて始めて其處に肴屋が移つて來た。

始めは氣にも留らなかつた。

「これでも肴屋かな、けちな肴屋もあつたもんだ」

こんなことを思つたきりだ。

處がある日其上さんが綺麗に丸髷に結つて居たのを見た。赤い手絡が秋の晴れた日の空氣に際立つて鮮かに見えた。年は十九か二十位であつた。

「あれでも初めて世の中に出て、立派にならうと思つて、一生懸命に働いて居るんだ。前途に色々な苦痛があるのも知らないで、春のやうな希望を抱いて遣つてるんだ。本能に騙されて居る中が羨しい」

かう思つてから、段々其若夫婦の生活に眼を附けるやうになつた。

時には亭主(と言つても二十四位)が一生懸命に板の間を洗つて居ることもあれば、細君一人で洗濯をして居ることもある。初めは小さい半ぎりを簡單に肩に載せて、見すぼらしい風をして肴を賣つて歩いたものだが、段々得意先が出來て、其中には金廻りもよくなつたと見えて、やがて新しい商賣道具を新調して、天秤で威勢よく得意廻をしてゐるのを見懸けるやうになつた。

六疊の一間に簞笥も見えた。

松魚の刺身をつくつて居ることなどもあつた。

矮鷄を二羽飼つた。

それに餌を撒いて居る赤い手絡の丸髷を非常によく似合ふと思つたこともあつた。

雨の後の朝日には、蛇の目傘と番傘とが干してあつた。

亭主は板きれを前の普請場に居た大工から貰つて、それを箱庭にして、其處に築山やら池やら橋やらをこしらへて、樂んで居る。陶器の小さい燈籠なども買つて來て其處に置いた。仕事を早く仕舞つた時には、餘念なくそれに水をやつたり何かして居るのを常に見懸けた。

亭主の留守に近所の若者が聲をかけて話して居ることもある。

上さんが髮を亂して、いつにも似ず蒼い顏をして居ると、

「餘りたしなみがわるいから、さういふ眼に逢ふんだ！」

と聲を立てゝ笑つた。

氣を附けて見ると、若い上さんは姑のやうな元氣がなくなつて、常に若い顏をして居た。それに引かへて、亭主は嚴疊な體格をして、肥つた脛を露はにせつせと働いて居た。

本能作用は此處にも完全に其力を發展して居るのを僕は見た。

僕は不愉快を感じた。

亭主は朝早く河岸に買出に出かける。それを送り出して、上さんは今一寐入遣ると見える。何うかすると、日がカンカン照つても雨戸も明けずに居ることがある。一度などは、亭主が魚をかついで歸つて來ても、まだ寐て居るので、お宮――とか何とか言つて戸を叩いて居るのを見たことがあつた。

一月(ひとつき)ばかりは、上さんは蒼い顏をして寐たり起きたりして居た。汚い蒲團から髮を蓬々とさせた女の頭が見えて居た。

やがて子供が生れた。

此頃では風車が天井から吊つてあつて、下に赤い小さい枕と月代(さかやき)の生えた兒の頭が見える。

騙されて、罠に入れられて、子供を一人育てなければならないはめに入つたのも知らずに、やれお七夜だ、やれお頭(かしら)つきだ、やれ赤飯だと騷いで居る人間の愚かさ加減が解らない。

五

子がまたあれて中々親をたらすことが上手だ。

生れ落ちるとから、ちやんと生存に必要なる力を持つて來る。滑かな暖かい肉や、柔かに乳を吸ふ力

や、些やかな可憐さうな泣聲や、是等が總て母親の同情を動かすやうに出來て居る。一刻も止む時のない不斷の要求をも甘じて滿して遣らうといふ氣を母親に起させる。

三十日も經つと、もう母親をちやんと見覺えて居て、其後姿を見送つたり何かする。間もなく笑つて見せたり何かする。

『可愛い子!』

母親はその柔かい頰に接吻する。

世間の人はこれを名づけて愛情といふ。神聖なる愛ともいふ。愛情の鎹などといふ字も出來て居る。實際さうだらうか、實際愛情の鎹だらうか。生存の必要の爲めに生じた利己の自家防衛ではないだらうか。

當然の自家防衛!

『かァーちやん』

『とウーちやん』

これは男が女の肉體を得るまで、『わが愛する君』とか『わが命を支配する君』とかいろいろな上手なことを言つて女をたらすのと同じてとだ。目的は女を得るにあると同じやうに、子も矢張獨立生存の出來るまで哺育して貰ふ爲めの必要のお世辭である。

弱い獨立の出來ないものには、その程度に從つて、やさしいとか可愛らしいとかいふ人の同情をひく

ものが附いて居る。

此處に二人の女がある。一人は意志が強く肉體も完全に發達してゐる。一人は感情ばかりて、意志が弱く、肉體も弱い。さういふ時には大抵は一人は人に可愛がられ、一人は人に憎まれるものてある。

しかし——さういふ理窟が解つて居て、神聖なる愛情ても何ても無いといふことが明かに解つて居て、それて猶其力に支配されるといふことが心外だ。

心外だが仕方がない。

一人前になつてから子は親に向つて何んなことを言ふと思ふ。

「自分は親の爲めに生きて居るんぢやない。自分は自分だけの滿足を買はなけりやならない。」

でなければ、

「何も、親に自由にされる義務はない。親には子を養ふ責任がある」

などといふ。

親となり子となつたのが既に悲慘てある。夫となり妻となつたのが既に既に悲慘てある。生れながらにして、夫妻親子となるべき罠に陷れられて居るのが第一の悲劇てある。

金縛りといふことがあるが、それよりも一層辛いのは肉縛てある。

肉縛！

考へて見給へ。此位情ないことがあるか。肉縛にされなければ生きて居られない世の中てある。爭闘

と煩悶と苦痛と矛盾と、それが一生涯續くのだ。

平凡と單調の中にこの肉縛！

ある友人は言つた。

「そんなにつまらない家庭なら、ドシドシ破壞したら好いぢやないか。そんなにつまらぬ世の中なら、ドシドシ辭職をした方が好いぢやないか」

破壞したり辭職したりすることが出來るやうな簡單な繩や罠なら、何にもさうヤキモキすることはないのだ。破壞せられざる辭職せられざる肉の繩でくゝられて居るから辛いのだ。

「ぢやそれに服從するさ、悟りなり何なり開くさ、また必要なら眼も閉いてしまふさ」

かう言つて平氣で居る。

平氣で居られる。

六

電車も倦きた。

同じ道を通つて、同じ町を曲つて、同じ社に出勤する。社にも同じ顔ばかりで、毎日毎日同じことを繰り返し卷き返し遣つて居る。風が吹くと木葉が動くやうに、この人間も矢張ある力にあやつられて動いて呼吸してゐる。

路の角にサハノツルと書いた看板がある。是れは言ふまでもなく酒の看板である。その看板が毎日毎

日二度づゝ僕の眼に映る。午後にはいつも夕日がまともに眩しいほど射してゐる。

それが何の反應をも呈さない。

鼻缺けの小使が毎朝バケツを階段の中ほどに置いて、雑巾を水に浸して、いかにも倦きたといふ風てだらしなく其處等を拭いてゐる。

矢張何等の反應もない。

室の中央に勤惰計があつて、自分の番號を推すと、カンと鳴る。そしてそれが卷きつけた細長い紙に出勤時刻を青く捺した。しかし矢張何等の反應もない。

反應がないのが辛い。淋しいのが辛い。人間と人間とは飽まで沒交渉で、何を言つた處て、何を爭つた處て、要するにそれは木の葉が風にさわぐやうなもので、何うにもならない。泥醉同士が互に寄り集つて、お互に解りもしないことを聲高く罵り合つて居るのと同じだ。

表面は賑かな活動の人生——しかも底は唯だ寂寞!

Indefference of Nature.

寂寞なる人生に本能の跳踉——沒交渉の人間に離れ難い肉の束縛。

本能の無限の跳踉は人生の底に横れる寂寞を得て、益々其力を逞うする。

本能から起る快樂に由つて、人はその寂寞を忘れやうとする。しかしそれは一歩々々深い係蹄の中に陥れられて行くのであるのを知るものはない。

ある日、社から歸つて來ると、姉が來て居た。

此姉には四年ぶり逢つたことがない。

四年前に、此姉は僕の家から斷りなしに亭主の家に逃げて戻つた。「もう決して二度と歸らない」と愛想をつかして出て來た亭主の家に歸つて行つた。

それが出るの入るのと苦情を言始めてから五度目であつた。

姉には子供が三人あつた。五人あつたのだが、二人はその貧しい夫婦喧嘩の中で死んだのだ。其總領の娘の子が十五になつて肺病で死んだ時のことを僕は覺えてゐる。淺草の汚い場末の棟割長屋からその葬式は出た。秋の日の午後の黄ばんだ光線を受けて、長屋や寺や小工場の煙筒や埋立てた田圃などの續いた間を花も導師もない棺が通つた。

煙筒からは煙が出て居た。

時々尖つたやうな汽笛が鳴つた。

僧侶は碌々御經を讀まなかつた。椿の葉の暗く繁つた陰に穴が掘つてあつて、それに小さな四角の棺を投り込んで土を懸けた。姉も亭主も泣いた。

死んだ兄が其時、

『父さんや母さんに仲直りをさ せやうと思つて、死んだのだ。お前が心配して死んだのに、父さんも

母さんも、今日から了簡を入れ替へて、もう決して子供に心配をかけるやうなことはしないさうだから、………」

言ひかけて聲は曇つた。此の娘の三歳の時から、姉はあんな薄情な亭主には添つて居られないと言つて喧嘩しては里に歸つて來た。此の娘は父と母と喧嘩するのを見て常に心を痛めて居た。姉が逃げて來てゐると、

『お母さんは來てますか』

と、まだ十歳位の幼ない娘が跡を慕つて遣つて來た。

『お前、子供を泣かせるのが可哀相なら、子供の爲に、身はないものと思つて、働いたら好いぢやないか』

母はいつも姉にさう言つた。

『子供の爲め――』

かう言つては、姉は幾度となく仲直をして歸つた。

しかしそれは單に子供の爲めでなかつたことは言ふまでもない。喧嘩しても矢張亭主が時々戀しくなつた。

『貞(姉の名)の夫婦喧嘩はくせ見たいなものだよ。懷姙(みもち)になりさへすると、屹度出るの入るのと言つて大騷ぎを始めるのだよ』

後には母も呆れてから言ふやうになつた。

成程喧嘩をする時には乾度身重になつて居た。その度毎に一人つゝ子供が産れた。次が産れる頃には一番下のが乾度乳離れをする位になつて居る。子供等は一人々々皆な母の跡を慕つて、里の家に遣つて來るやうな眼に逢つた。

『貞にも困るよ』

と言つた母も死んだ。

『本當かと思つて、一生懸命になつてると、すぐまた亭主心がついて、歸つて行つて了んだから馬鹿馬鹿しい。もう相手には決してなれない。一生懸命になつてわざとかつがれるやうなものだからな』

から言つて怒つた兄も死んだ。

この姉の一生を考へると、隨分いろ〳〵なことが眼に浮んで來る。悲慘なる夫妻蠶食のさまが歷々と

…………

十月の初め頃、山手の屋敷町の寺の門前に髯の蓬々と生えた三十六七の職人風の男が三歲位の女の兒を伴れて立つて居た。『お母が居ない――』と子供は泣いて泣いて仕方がなかつた。細い秋雨は蕭々と降つて居た。屋敷の庭からは木犀のにほひがした。

『母さん、もうこれから決してこんな不都合はしないから、今度だけと思つて了簡して、貞を歸して下さい』

母が行くと手を合はさぬばかりにして、其男は賴んだ。

『丸で芝居のやうだッた』

と母は其時言つた。

姉の逃げて來た跡を追つて、其亭主が里の家の周圍をつけねらつたのも一度や二度ではなかつた。家の周圍には畠があつて、玉蜀黍がガサガサと風に靡いた。朝早く顏洗ひに井戸端に行つた兄が、前の普請場に其の見すぼらしい風をした弟婿が後向になつて寐て居るのを發見したこともあつた。夕日のさし渡つた兄の書齋には其頃賴まれて仲裁に入つた男が幾人となく出たり入つたりした。

後には兄は頑として强硬の態度を取つた。『とても一緒に添はせて置いたッて駄目だ、斷乎として其間を裂く方が雙方の幸福だ。子供は子供で何うにでもなる』かういふ決心をした兄は容易に其仲裁に應ずるやうな氣色を見せなかつた。

『始めて中に入つて下すつた方には、私の言分が非常に不人情のやうに聞えませうけれど、とても一緒にして置いても駄目なんですから』

かう言つて拒絕した。

それにも拘らず、姉は矢張逃げた。それは日が暮れてからであつた。鳥渡の間に姉の姿が見えない。四邊をさがして見ても矢張見えない。下婢は、『さう思へばお姉さんは風呂敷をかゝへて、裏からこつそり出て行つた』といふ。

『馬鹿な奴だ！』

と兄は言つた。

『あゝして一生を暮すんだ』

と母もしみ／＼言つた。

今日其姉が來て居る。

汚いみすぼらしい風をして居る。

『何うしたねえ？』

姉は低頭いて居る。年は四十二、髪は半ば白くなつて居た。

矢張喧嘩をして出て來たといふ。四十二になつて矢張同じやうな喧嘩！

僕は言つた。

『一體何うしたんだ。不眞面目極るぢやないか。四十二にもなつて、夫婦喧嘩をして居るものは何處にある。世の中といふものを眞面目に考へて見ないから惡いんだ。喧嘩をしてつまらないとか、馬鹿々々しいとか、世間體が惡いとか、さういふことを考へさうなものぢやないか。』

又次のやうなことを言つた。

『お互に喧嘩を面白づくて遣つてゐるんぢやないか。喧嘩はつまらないが、喧嘩から仲直りをする時の心持は格別好いもんださうだ。』

七

『三十八九になると、男はそんな風になるんですねえ』かう妻が言つた。

『さうさ――』

『女は何うしたら好んでせう』

『何うしたらッて――子供さへ育てゝ居たら好いのさ』

『だッて、子供にも厭々した』

『うそを言へ』

『うそなものですか。毎日子供と喧嘩ばかりしてるぢやありませんか』

『それがうその證據だ。喧嘩でもする相手があるから女はまだ幸福だ――』

『まア、あんなことを……』

と妻は淋しく笑つて『男といふものは勝手なものですねえ』

『勝手はお互ひさ。……兎に角女は子供があるから幸福だ。亭主の家に居る時だけ、神妙に小さくなつてゐるが、亭主が出かけた跡では、子供を相手にぼた餅でも拵へて、暢氣に遊んで居るぢやないか。何しろ子供と笑つたり泣いたりして暮して居るのを見ると憎くなるよ。』

『ぢや、貴郎もさうして子供と遊べば好いぢやありませんか。』

『暢氣なことを言つてる。己は女ぢやない』

「だッて、子煩惱な男の人も世の中には隨分あるぢやありませんか。緣日に奥さんと一緒に子供をつれて出かける男の人はいくらもあるぢやありませんか」

「己にはそんなことはちつとも面白くないから駄目だ。……人が持つてるものに手を出して見たッて仕方がない」

「人が持つてるものとは？」

「お前の持つてる子供と言ふことだ」

「また、あんなことを言ふ……ぢや、子供を貴郎が育てれば好い」

「育てられないから言うんだ。子供は女でなくつては育てられないやうに出來て居るから情けないんだ。」

「それぢや、男は一家の主のやうに、妻に對してゝ子に對しても立派に嚴かに男らしくして居れば好い」

「立派に、嚴かに、男らしくとは何ういふことだ」

「………」

「働いて、金を澤山取つて、後の萬一のことを考へて、亭主が死んでも、樂に暮して行けるやうにして置いて遣れば、それて好いんだらう」

「また始まつた」

「また始つたぢやない、眞面目に言ふのだ。夫婦といふものは四十二になつてもお互に喧嘩しなければ

ならないやうな間柄に出來てるんだ。……厭だ、厭だ！」

互に默つた。暫くして、

「ぢや、何うすれば好いんです?」

「厭だ！　厭だ！」

と打附けたやうに言つた。

「お前は此間亭主孝行だッて言はれたね」

と言つて言葉を續いて、

「亭主孝行！　旨いことを言たもんだ。お前は何處かさう出來てるよ。さういふ風に見えるやうに出來てゐる。何處か從順なところがあるんだ。貞節らしい處があるんだ。」

「何も私が亭主孝行と言はれたッて、喜んで居る譯ぢやありません」

「誰も喜んで居ると言ひはせんよ。さういふ風にお目出度く出來てると言ふだけだよ。」

「たんと仰しやい、……たんとお酷めなさい?」

「厭だ！　厭だ！」

と立上つた。

かうした話はいつもした。時には眞面目な顏で、「その中、樂にして遣るさ。子供とお前と食ふだけの財產のある樂後家にしてやるサ。後家といふものは羨しさうなものだ」などゝ言ふこともあつた。妻は

又妻で、「死んだら、妾の保險が二百圓あるから、好きな女を貰ふ結婚の費用になさい」

こんなことも言つた。

八

夥しく醉つて居た。

ランプも黄ろく見えた。人の顏も黃く見えた。頭腦がぐらぐらした。

外には雨がザン〳〵降つて居る。

疑惑が盛に起つた。征服者だか敗北者だか解らなかつた。

傘がないので、びしよぬれにぬれた。路は暗い暗い林の中を通つて居る。此處を少し行くと、蘆荻の茂つた泥深い沼があつたのを覺えて居る。雨滴の大いのが頭の上に落ちるので氣がついて見ると、帽子を被つて居なかつた。帽子は床の間に置いた。床の間には萩と桔梗とが生けられてあつた。その鮮かな色が雨の降頻る暗い闇の中にはつきりと浮んだ。

「寺――さうだ、寺より外に逃れる處がない」

雨と泥濘の中をびしよ濡れにぬれながら歩いて來た。

九

夜だ。

汚い泥沼に面した茶席かゝつた小さな間で酒を飲んで居た。

榮えの後の衰へ、醉ひの後の醒めと言つたやうな厭な氣が四邊に充ち渡つた。闇の上に闇が蔽ひかぶさつて、何處が路だか、何處が森だか解らない。

「其處は水ですか」

と誰かがうつろのやうな聲で言つた。

マッチを投つて見た。幾度投つて見ても途中で消えた。闇は矢張闇だ。池だか水だか解らない。池だと知つて居ても矢張さうでないやうな氣がした。

闇の中に一ところぱッと明るいところがあつた。よく見ると、その灯はランプでも瓦斯でも電氣でもなく、裸蠟燭だ。燭臺に一本ぼつねんとして立つて居た。その影がチラ〱した。それで『成程其處は水だな、水に移つてるんだな』といふことが飲込めた。

其灯で室の中が見透かされた。其處には誰も居なかつた。簞笥のやうなものと鏡臺のやうなものと箕戸のやうなものとが朧ろげに眼に映つた。

蠟燭の火がいやに赤く黄い。この世ではないやうだ。

周圍には誰も居なかつた。茶湯臺にビールが二本明けられてあつた。丼には大根のあさ漬が二切入れられてあつた。

泥沼の臭が時々鼻を衝いた。夏の暑い日に腐つた臭だ。風は全く絶えて、ムッとした暑さが汗を誘つた。

家に添つた路が一二間ばかり微かに見える。軒の梧桐の葉が青く灯に照されてゐる。この路を時々白地を着た人達が闇から來て闇に出て行つた。大抵二人連であつた。艶かしいそゝるやうな聲も交つて聞えた。ハアモニカを吹いて行く青年の後には、庇髮に結つた肩揚のある娘が跟いた。

酒を飲んで居る人々の顏は蒼白かつた。肉の疲れ、心の疲れ、神經のつかれは歴々と見えた。

『本當に水だらうか』

かう思つて、またマッチをすッて投つて見た。矢張途中て消えた。

裸蠟燭がチラチラする……

本能の話をしたことを思ひ出す。

處女が始めて肉慾を知つた時に、悲しくなつて泣いたとある本の中に書いてあつたが、今の女には泣くやうなものはありはしない。

けれど泣かざるを得ないてはないか。苟くも一度歡樂を縱まにした上は、それが一生涯附いて廻るのだもの、歡樂の報酬は必ず來るのだもの、一度で濟して置くなどといふことは出來ないのだもの。男が勝利者であるか女が勝利者であるか何方だか解らないのだもの……。

離れたくたッて離れられない。

後の不愉快――それは矢張飽食の不愉快と同じだ。その不愉快の狀態は丁度泥沼の汚ないのに似て居る。それて居て、それがある期間を通過すれば、其力は更に前と同じやうな鮮かさと生々しさとを以て

追つて來る。

其力！

その力から此世界が生れて來て居るのだ。その力から此の人生が出來て居るのだ。その力からこの悲痛悲慘な狀態が生々とした色を着けて居るのだ。呪つて好いのか、崇拜して好いのか、平氣でそれに服從してゐれば好いのか。

男が逃げやうとすると女が追かける。女が逃げやうとすると男が追ひかける。「もう、どうせ外に嫁に行くことは出來ない體だ」「肉體も精神も皆な己の所有物だ」「親だッて何だッてもう何うすることも出來ない」

女の親と男との本能爭ひが起ると、親はいつも敗北する。敗北するやうに出來てると言つて好い。

力と力との爭鬪――

結んで解けない爭鬪、第三者が解かうとしても何うしても解けない爭鬪、一生喧嘩をしても何うすることも出來ない爭鬪、その爭鬪が時とすると、何の苦もなくすぐ解け去つて了ふことがある。力と力とが忽にして水平に歸し去つて了ふことがある。

「何故だらう？」

かう訊ねるものがある。

「解らない？」

『解らない』と空が反響した。

泥沼の向うの家には矢張人が居ない。裸蠟燭がチラチラする。

十

懐姙して蒼い顔をした女が、腹の處をじつと見て居た。

『そらまた動いた』

メリンスの帶の縞の模樣が動くのが見えるといふ。見える筈がないのだが確かに見えるといふ。其處にも人間が居るんだ。虚誕（うそ）をついたり、姦淫をしたり、罪惡を犯したり、人殺をしたりする人間が居るんだ。憎み、ひがみ嫉妬などといふ分子が其處で刻むやうに呼吸をついて居るのだ。淺間ましい！淺間ましいが仕方がない。蛇のやうに生れぬ前から人間に憎まれて居る動物でさへその種は數千年來積滅されずに繼續して來て居る。

犬殺しの持つてるやうな太い棒を提げて、片ッ端から人間を撲殺して歩き度い。少くとも人間にも眼に見えるさうした大きな動物があつて、ドシドシ迫害を加へて呉れゝば好いと思ふ。

駄目だ、駄目だ、駄目だ……

坐つて居たが、ふと見ると硝子戸を透して、梧桐の葉がガサガサ動いた。其處には庇が少し出て居て、下に小さな窓があつた。夜は其處から灯が葉を漉してチラチラ見えた。

庇の上に一疋の黒猫が居た。

眼をギヨロギヨロ光らせながら、頻りに四邊に氣を配つて居るらしかつた。しかし遠く離れて居るので、此處にかうして人が見て居るとは流石にかれも氣が附かなかつた。

僕はジツとそれを見てゐた。

猫の暗い心理――生存の爲めに、これから臺所に人の居らぬのを耳て聞き眼て見鼻て嗅いて、こつそりその小窓から入らうとするさま、それよりも、さうした暗い狀態をそのものに知られずにかうして見て居るといふことが僕の心を暗くした。

暗い力が自分と猫とに同じやうに流れてゐるのを發見した。

互に弱點を握るといふことがよく人の口に上る。

互に弱點を握る！つまり悲慘なる共食狀態だ。猫だから、何でもないが、もしこれが同じ人間て、かうした他人の暗い心理を攫んだのなら、つかまへられた奴も災難だが、攫んだ奴も災難だ。弱點を握つた以上、それを利用せずには居られぬのが人間である。

夫婦がそれてある。兄弟がそれてある。親子がそれてある。友人がそれてある。姉弟がそれてある。戀人同士が殊にそれてある。敢て敵に握られるのを恐るゝ勿れ、敵よりも味方に握られるのが一層恐ろしい。

猫はまだじつとして居る。

小窓の中では、膳や皿をガチャガチャさせて居る音が聞える。下婢の晴れやかに笑ふ聲も聞える。

僕はそッと立つて行つた。

餘程近くに行つても、まだ危難の其身に迫りつゝあるのを知らない。依然として耳を立てゝ物音を聞きすましてゐる。

大きな石を拾つて投げた。

旨く腹に中つた。

猫は慌てゝ飛下りたが、忽ち椽の下に逃げて了つた。

翌日見ると、矢張その黒猫は其處に居た。

危難よりも飢餓が恐ろしいのだ。矢張かれ等も係蹄の中に陷れられながら、それを係蹄と知らずに居る。

食ふことと、寢ることとと、罪惡を行ふことと……。それより他に何もない。我々も猫と同じやうに矢張庇に立つて、こつそり何か覗つて居るのだ。

十一

女の兒が枕を結付けに負つて、ねんねんようを遣つて居る。

「ねんねんよう！」

何も知らずに遣つて居る。

それがまた決して女の兒でなければさういふ眞似は遣らない。遺傳の力、本能の力、それがそんな無邪氣なものにも容赦なく働いてゐるのだ。

また、かういふことがある。母の腹に餘り近くあとが出來ると、幼兒は無意識に股くらかゞみといふことを遣つて『ねんね、ねんね』と片言交りを言ふ。

自己の占領して居る母親を他が占領し始めたのが本能的に解るのだ。

つまり幼兒が廻らぬ舌で第一に表白する嫉妬の聲だ。

て、五月位になると、母親の乳が細くなる。腹の中の兒と外の兒との競爭がいよ／＼始まる。すると外の兒は今迄とは變つたやうに氣難かしくなつて、肝癪は起す、腹は立てる、泣く、喚く。だましたッて何だッて言ふことを聞くものではない。

生存の爭ひ――淺間しい食の爭はもう其頃から始まつて居る。

そしてこれが戀の爭鬪、愛の爭鬪、蠶食の爭鬪、死の爭鬪となる。

けれど女の兒は矢張平氣で枕を背に絡りつけて、

『ねんねんよう、ねんねんよう』

と唄つてゐる。

其聲は時代から時代へと續く。撲滅したくッても撲滅されない。兎に角自分で遣つて見なければ承知が出來ないといふ風で、ドシドシ新しい發展を遂げて行く。

何と言つて聞かしたッて駄目だ。つまらない一生だの、悲慘な生涯だの、殘酷な世の中だのと言つて聞かせたッて何だッて駄目だ。

「兎に角、私はまださういふ經驗をしたことがない」

から言つて誰も彼も新規蒔直をやる。

三十八年……五十年……百年……千年……萬々年……萬々億々年……

考へれば考へるほど、頭が眩惑する。何處に行つても其力にぶつかる。パン、パンパンの叫び聲が耳を劈く。白い腕が其處にも此處にも見える。

自由！

自由とは何だ。自由とは何だ。そんなものが此の世の中にあるか。あり得るか。皆なその力の爲めに十重にも二十重にも縛られて、勝手に身動が出來なくなつて居るではないか。右も左も前も後も、皆なその暗い壁だ、本能の暗い壁だ。

（をはり）

此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

ホトヽギス

改卷號（十三卷一號）十月一日發行

●本號に限り定價五拾錢、郵稅三錢

本號は頁數平常の三倍以上に達し、左の大附錄を添附す。本文内容又た豐富なり。

▲小説

日記帳（長靴後篇）……文泉子

箸……伊藤左千夫

教師……長塚節

槍と釣針……野上臼川

林檎……野上彌生子

驢馬車とマドモゼール・シユザン……在佛 青楓生

▲評論

刺激に生きんとする文藝……小宮豐隆

文壇現在の思潮……片上天弦

佛塔……山崎樂堂

東京市麴町區富士見町四丁目八番地
（振替貯金東京二二〇五番）
ほとゝぎす發行所

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

德田秋聲著

長編小説

同胞三人

▲定價金壹圓　▲郵稅八錢
▲菊判美製箱入紙數三百頁

親なく家なく人世の波に押出され行く同胞三人の巡路及び性格は達觀せる思想と巧妙なる描寫を以て新文壇の覇たる秋聲先生が苦心の筆によりて殆んど人生の委曲を表示し盡されたり

田山花袋先生著

妻

定價金壹圓五拾錢
郵稅金拾貳錢
●菊版箱入美本紙數五百廿頁●

わが文壇『妻』あるを誇れ！

文壇翹望の『妻』は出でたり、『妻』は花袋先生の最近思想を忌憚なく流露せる未曾有の長篇にして著者自らも其描寫法に於て、飽まで印象的に且つ客觀的の手法を試みたるを誇とせり。思ふに本書は自然主義作品に最高位に位するものなるべし

わが文壇『妻』あるを誇れ！

東京日本橋區馬喰町三丁目
今古堂書店
振替口座東京四九〇七番
電話四六五九番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

●本號に限り特價金四拾五錢（郵税貳錢五厘）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢

以上郵税共

▼但し特價號は規定以外別に代金を申受くべし▲

送金注意

一 郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一 弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一 郵券代用は必ず壹割増の事
一 前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一 領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十二年九月廿六日印刷
明治四十二年十月一日發行
（禁轉載）

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

